# 私が行く・異世界冒険譚

ちょめ介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

**注意事項**

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私が行く・異世界冒険譚

【Ｎコード】
Ｎ１１６１Ｔ

【作者名】
ちょめ介

【あらすじ】
一人の、見た目は少女な、女性の異世界での活躍を綴る物語

神様の部下の悪事の罪滅ぼしという名目で異世界に飛ばされた一人の少女

異世界には無い物を手に入れ、少女は世界で何をするのか…

「ゴクゴクゴクゴク」

「…」

「グビグビグビグビ」

「…」

「ぷはーっ！この為に生きて――――っていたっ！なにすんのよ！」

「お前は飲みすぎだ！どんだけ飲みゃ気が済むんだよ！」

「なによ！まだ27杯しか飲んでないわよ！」

「それが飲みすぎだってんだよ！もう茶っ葉もねえぞ！」

「な、なんですって…！？」

「ああ…イーナになんて言われるか…」

※以上のセリフは、小説の内容とはあんまり関係ありません。

## 第一話・テンプレって怖くないですか？（前書き）

はい、他にも投稿している小説がありますが、電波がピッピッピッピッと飛んできたのでメールは届けずに小説にしてみました。
…ネタ解りますかね？

それはさておき、転生物は初めて自分で書くんですがね、色々と酷いことになりそうな予感です。

それでも見捨てずに読み進めていただくことを願います。

# 第一話・テンプレって怖くないですか？

さて、今私が陥っている状況を説明しなければなるまい。

とりあえず余計な説明を一切合切省くと…

「本当に申し訳ありませんでした！」

はい、土下座されています。

それも私よりもかなりの年上の顎鬚が立派なお爺さんにだ。

あなたは見知らぬ人にいきなり土下座をされてどういった心境になるだろうか？

ほとんどの人は、ポカーンとするだろう。

そのあとに自分が何かしたのか考えたり、落ち度がなかったかを確かめるだろう。

閑話休題（それはさておき）

私は日本人なのでいきなりこういった状況に置かれても咄嗟に反応

することができないのだ。

だから…

「あの…私が何かしたでしょうか？」

こういった当たり障りのない答えでお茶を濁すのだ。

「すまんのう…突然土下座をされて混乱してるだろうに…」

まあ困惑はしていますが混乱はしていませんね。

お爺さんと会話が成立しちょっと落ち付いたのだろうか、周りを見渡す余裕も出てきた。

周りを見渡してみても何もない。

…いや、比喩でもなんでもなく本当に、なにも無いのだ。

ただ真っ白い世界がどこまでも広がっている。

「ところで、ここはどこでしょうか？いまいち思い出せなくて…」

家を出て、道を歩いて、猫が道の真ん中で寝てて、撫でていて、気付いたら突然ここに。

「ああ、それなんじゃがな…」

お爺さんは冷や汗を流しながら

「お主…殺しちった」

とんでもないことを言った。

## 第一話・テンプレって怖くないですか？（後書き）

はいはい、テンプレ乙です。
まだ主人公の名前も出てきてませんね。
次回では出したいと思います。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第二話・Ｆｅｌｌｏｗを直訳しても相棒にはなりませんよ？（前書き）

第二話投稿しました。

ここでは会話がメインです。

ちょっと重い話になるかも？

# 第二話・Ｆｅｌｌｏｗを直訳しても相棒にはなりませんよ？

さてと、状況を整理しましょうか。

私の名前は伊那楓（いなかえで）

家族構成は父、母、私、そして妹か弟。

妹か弟、おかしいと思うが、何もおかしくはない。

何故ならまだ母親のお腹の中に入っているからだ。

…いい年して何してるんだか、あの両親は。

ちょっと話がそれてしまったが続けよう。

今年で学業からも卒業し、就職も決まり、親に就職記念パーティーを開いてもらって、そのパーティーも終盤になった時に、特大の爆弾を落としていった。

…また話がそれてしまった。でも一言だけ言わせてほしい。

なにをしているんだ、あの両親は！

ちょうど三ヶ月とも言っていたし、三ヶ月前と言えば私が就職がなかなか決まらずに苦しんでいた時期じゃないか！

あの両親は、本当に…

…すまない、話がそれすぎた。

身長の事は気にしないでほしい、自分でも気にしているから…

分かるか！？同級生に頭を撫でられる屈辱感が！両親は平均的なのになぜ私だけ…

体重？…見かけ通りとだけ言っておこう。

これで私の事は大体確認はできたかな？

次に目の前の状況についてだ。

目の前に顎鬚が立派なお爺さんが立っている。

以上

…いや、本当に誰だ？このお爺さんは…

私の記憶力は悪い方でもないから、一度見た顔はまず忘れない。

それなのに覚えていないってことは、初対面のはずだ。

初対面の人に土下座をしながら、謝罪をされるというのは――――

「あ、ちなみに儂は神様じゃ」

――――なるほど

「お家はどこですか？送ってあげますので住所をお願いします。」

ボケが進んだお爺さんか…

「な、なぜそんなかわいそうな者を見る目で儂を見るのじゃ！？」

閑話休題（それはともかく）

「それで、本当に神様なんですね？」

「やっと信じてくれたか…」

あの後色々あってようやく目の前にいるお爺さんをボケの進んだお爺さんから神様？に私の中で格付けが上昇しました。

え？色々の内容ですか？

…それを言葉にすると刑事ドラマをワンシーズン分と映画版、スピンオフ作品やらを全て観賞してもまだ足りずに、シーズン９まで見ないといけない位時間が掛かるので省きます。

「それで、さっき言っていた、『お主…殺しちった』とはどういうことでしょうか？」

「ああ、それなんじゃがな…」

神様？が深々と頭を下げました。

「本当にすまなかった。いくら詫びても許されないのは分かっておる。それでも本当にすまなかった。」

声を聴く限り、ふざけた様子など微塵も見せずに誠心誠意謝っているようだった。

「もう謝るのは結構です。それより説明をお願いします。」

神様?はゆっくりと頭を上げた。

「ああ、お嬢ちゃんは…今死んでいる」

「死んでいる?」

「儂の部下――今はもう消したからここにはおらんが――そいつが…【魂の蝋燭】って知っておるかの?」

「人間の寿命を表す蝋燭の事ですか?」

「そう、それじゃ。それをの、自分が好意を抱いた人間の女の寿命を延ばすために使ったんじゃ。」

「それで…」

「結果的にはその女は今も生きておる。お嬢ちゃんの【魂の蝋燭】と取り替えたおかげで病気も快方に向かっておる。」

「…そうですか」

「しかし、神の部下として人の魂に干渉して良い訳があるはずもない。当然部下は消滅させた。しかし、お嬢ちゃんの【魂の蝋燭】は既にその女の【魂の蝋燭】の燭台に立っておっての、神は魂に干渉してはいけないというルールがあっての、儂じゃあどうにもならんのじゃ。」

そう言って神様？は火の点いた蝋燭が立った燭台と何も立っていない燭台をどこからか取り出した。

「これが【魂の蝋燭】じゃ」

「これがですか…」

「燭台がその人間を、【魂の蝋燭】の長さが寿命の長さを表す。」

「…」

「お嬢ちゃんが望めば――――自分でやることになるが――――【魂の蝋燭】を移し替えることができる。そのためにこの【神様世界】にお嬢ちゃんを来れるようにしたんじゃよ。」

…【神様世界】って

「安直ですね」

「う、うるさいわい！分かりやすくていいじゃろが！」

神様？も気にしていたようだ。顔が赤くなっている。

「やるなら自分で…ですか。なかなかに鬼畜ですね。」

「ああ、それも理解しておる。しかし神は人の魂に干渉してはいけない。じゃからお嬢ちゃんに任すのじゃ。」

「ちなみに移し替えたらどうなります？」

「もちろん、お嬢ちゃんは生き返り、女は死ぬ。しかしそれが元々の【運命】であってお嬢ちゃんが気にすることでもない。」

「…三つほど聞いてもいいですか？」

「ああ、答えられる範囲なら話そう」

「その女性の年齢と家族構成、完治した時の様子を教えてくれませんか？」

「？不思議なことを訊くのう。ちょっと待っておれ。」

神様？はどこからか机とパソコンを取り出して何かを調べているようだ。

――――数分後――――

「わかったぞ。年齢は１５歳、家族構成は父と母、弟と妹がおるようじゃな。数年前から病気で外にも出歩けずに病室で寝たきりの状態じゃ。あと数日で死ぬ、というところで部下が【魂の蝋燭】を移

し替えて病気が快方に向かっている。」

「…それでその時の様子は？」

「父母は涙を流して喜んで、弟妹はまた遊べると無邪気に喜んでおる。」

「…それで本人は？」

「涙を流して喜んでおったよ。まあ、医師からも治癒の可能性はほぼ無いと言われておったからの。当然と言えば当然じゃの。」

「…」

「さて、これで一応終わりかの。さて、お嬢ちゃんどうす――」

「まったく、神様？も人が悪いですね。」

「いや、儂、人じゃないしのう。それとその疑問形は止めてくれんかの。」

「さてと今から少し独り言を言いますけど、聞き流してくださいね。」

「いやいや、この頃少し耳が遠くての、よく聞こえないかもしれん。」

「…私が三つの事を訊いた理由はですね。その女性のためでもあるんですよ。もしも年を取っていて家族に煙たがられていても【魂の蝋燭】を移し替えるつもりでした。長く生きていても辛いことが多

いでしょうし。もしも家族もおらずに一人で寂しく病気になっていても、【魂の蝋燭】を移し替えるつもりでした。一人で生きていてもつまらないことばかりですし。女性がただ治ったことを受け入れても【魂の蝋燭】を移し替えるつもりでした。自分の命が助かったことを当然のように受け入れても、それを喜ばない限りそれから先の人生に希望は望めません。神様?の話を聞いて解りました。その少女は家族に愛されていて、自分の人生に希望を持っています。一生懸命に病気と闘って、最後まで諦めていなければ涙を流すことなんてできません。」

私はそれで話を終えた。

「…ありがとうございます。」

「いやいや、耳が遠くてほとんど聞こえなかったのう。それにしても…優しいお嬢ちゃんじゃ。」

「…ただ甘いだけですよ。」

「さて、お嬢ちゃんの意志のままじゃ。初志貫徹、一度決めたら変えることはできんぞ!」

「はい、私は、【魂の蝋燭】を移し替えるつもりはありません。」

一切の迷い無く、私自身の意志でそう決めた。

「…それでお嬢ちゃんが死んでもかの?」

「両親には悪いと思います。でも私が決めたことです。文句は言わせませんよ。それに初志貫徹、自分の意志を貫きます。」

「なるほど、わかった。お嬢ちゃんの意志を尊重しよう。」

そう言って二つの燭台と机とパソコンをどこかにしまった。

## 第二話・Ｆｅｌｌｏｗを直訳しても相棒にはなりませんよ？（後書き）

話長かったですかね？

しかし彼女の優しさ、考え方などが伝わったらうれしいです。

次話では能力をできたらいいなあと思います。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

# 第三話・福引に一等って入ってないんじゃないでしょうか？（前書き）

はい、第三話目です。

今回で能力を…と行きたいところですがね。

下書きなしではさすがに辛いですね。

それはともかく第三話始まり始まり…

# 第三話・福引に一等って入ってないんじゃないでしょうか？

はい、伊那楓です。

前回では死ぬか生き返るかという、そうそうする事が無い決断をしました。

…彼女には精一杯人生を生き抜いてほしいですね。

「さて、お嬢ちゃんはどうする？」

「どうすると言われても…どうしましょうか」

やっぱり死んでいるんですから、このまま生まれ変わるとか？

「お嬢ちゃんさえよければなんじゃが…異世界に生まれ変わる、という事も不可能ではないが。」

「異世界…ですか？」

「お嬢ちゃんならば異世界に行っても生き抜いていけると思っての。まあ、その異世界は魔法が有ったり、魔物がいたりと物騒じゃからな。必要な力は与えるつもりじゃ…くじ引きで！」

「ありがとうございます。」

「…くじ引きの部分に突っ込んでほしかったわい」

「まあ、このまま普通の世界に生まれ変わってもいいんですけどね。

魔法とかが有るのならそっちの方が楽しそうですし。ところで記憶って持ち越せますかね？」

「…まあいいわい、生まれ変わるといってもお嬢ちゃんの今のその姿をそのまま向こうに送るという形になるんじゃが。よければ容姿やその他諸々も変えれるが？」

「いえ、それはいいです。親から貰ったものですから、変えたくありません。必要なのは言語や知識ですね。」

「まあいいじゃろ。それじゃあ、肝心の能力じゃが…」

神様？が指をさすと地面から机がせりあがってきた

机の上には大きいサイコロが乗っている。

お昼にやっている大きいライオンが出ている番組で使っているものに似ている。

「サイコロ…ですか？」

「うむ、まずそれで与える能力のジャンルを決める。」

ジャンルですか…

サイコロを見てみると、マンガ、小説、映画、アニメ、ゲーム、オリジナルと書いてある。

「これを振るんですか？」

「そうじゃ、問答無用、女は度胸、さあ、さあ！」

神様?の暑苦しい態度に負けてさっさとサイコロを投げた。

「ふむ、出た目はゲームか。」

ゲームか…

「ゲームと言ってもほとんどやらないので分かりません」

「その点は大丈夫じゃ。異世界に行った時点でそのゲームに関する知識を与えるからの。」

そう言ってサイコロを消してカードを取り出した。

「さて次は、ゲームタイトルを決めるぞ。まあ、これとこれとこれなんかいいじゃろ。」

そう言って五枚のカードを机に並べた。

「さあ、この中から選ぶんじゃ。ああ、安心するんじゃ、どれを取っても当たり外れはない。使い方次第じゃ。」

「…まあいいです。貰えるものは貰っときますよ。」

そう言い直感で一番左のカードを取った。

それには丁寧なゴシック体で二文字、アルファベットの最初と三番目でこう書かれていた。

「ＡＣ？」

「ほう、それを取ったか。まあまあじゃな。」

それだけ言うとカードは消えてしまった。

「ところでＡＣってなんですか？」

「まあそれは異世界に行ったら分かるわい。次にこれじゃ。」

そう言ったと思ったらよく街で見かける福引機、正式名称・新井式回転抽選器が現れた。

「中には…まあ色々入っとるから引けばわかる。」

そう言われてガラガラ回した。

余談になるが私はこの手の福引でポケットティッシュ以外を貰ったためしが無い。

嫌な事を思い出していると乾いた音が聞こえてきた。

「さて、どれどれ。」

神様？が出た玉を見ると

「なるほどの、この作品か…」

それを横から覗き込んでみると、小さく４系と書かれていた。

「さて、決定じゃ。ジャンルはゲーム、タイトルはＡＣ、ナンバリングは４系じゃな。」

「まあ、よく分からないのでなんでもいいですけど。」

「与える能力も決まったことじゃし、次は生まれ変わる世界の説明じゃな。」

「ああ、お願いします。」

「お嬢ちゃんが生まれ変わる世界は【ケミスト】と呼ばれておる。科学や機械よりも【魔法】の方が発達している。お嬢ちゃんがいた世界とはまるで正反対じゃな。【ケミスト】の中でも国が５つに分かれておる。東に【オーガニー】西に【アナリティカ】南に【アプライド】北に【フィジカ】そして中央に【アンヴィーラ】が存在しておる。まあそれぞれの国の特色とかは向こうに行ってから自分で確かめてほしい。次に【魔法】の事じゃが…ハッキリ言ってお嬢ちゃんに【魔法】は使えんからの説明するだけ無駄じゃ。」

「え？どうしてですか？」

「詳しく説明すると難しくなるんじゃが…簡単に説明すると【魔法】を使うには【魔力】という物が必要なんじゃよ。その【魔力】は【魂】から湧き出るものなんじゃがの、お嬢ちゃんの【魂】は【地球】の物じゃからな、【魔力】が湧き出るようになるには【ケミスト】の【魂】に近づけないといけないんじゃよ。しかし、そうしてしまうとお嬢ちゃんの外見まで変わってしまうからの【魔法】は使えん。」

「ああ、それなら【魔法】は使えなくてもいいです。」

「しかし、安心してよいぞ。お嬢ちゃんの世界には【魔力】とよく似た【霊力】があったからの、それを使えるようにしておく。お嬢ちゃんには【霊力】を使う素質があったからの、それの総量も増やしておく。」

「まさに至れり尽くせりですね。」

「まあ、罪滅ぼしの為でもあるんじゃが。さっき決まったゲームの特性上多いに越したことはないからの、生き延びるためじゃ。【魔法】に関しても自分で対策を考えてくれ。」

「分かりました。」

「まあ、これで大体の説明は終わりかの？これから【ケミスト】に送ることにするが…何か要望とかあるかの？」

「まあ、向こうの世界でも言葉が通じて文字さえ読めれば困ることは特には…そういえばそのゲームの説明はどうしたんでしょうか？」

「それなら向こうに着いた時に頭に入っておくようにするから大丈夫じゃ。」

「それじゃ…そういえば【地球】の私はどうなってます？」

「ああ、まだ誰にも見つからずに道の真ん中で倒れておるよ。」

「見つかったら両親が悲しむでしょうね。」

「そりゃそうじゃよ。子どもが死んで悲しくない親なんていないじ

ゃろう。」

「それじゃ、最後に一つだけ…【地球】にいた私の痕跡を消しておいてください。」

「まあ、出来なくもないが…」

「神様?も言ったでしょう。子どもが死んで悲しくない親なんていないって。私は両親の悲しむ顔が視たくないだけですよ。」

「…わかった、お嬢ちゃんが生まれてから死ぬまでの痕跡全てを消しておこう。」

「ありがとうございます。これで心残りが無くなりました。」

「それじゃ、送るぞ。最終確認じゃが生まれ変わる異世界は【ケミカル】元の世界【地球】とは違って【魔法】が発達した世界じゃ。お嬢ちゃんはそこにゲームの能力を持って生まれ変わることになるじゃな。」

「そうですね。不安なことも多いですが精一杯生きたいと思いますよ。」

「その意気じゃ。まあ、体は元のままじゃから死ぬときは死ぬがその時にまた会えるじゃろ。」

「ええ、その時にまた会いましょう。」

そう言葉を交わした後、だんだんと神様?の姿が薄れていく。

「ありがとうございました。それではまた死んだ後に…」

「ああ、またなじゃ、お嬢ちゃん」

「そういえば私のことお嬢ちゃんって呼んでますけど、私これでも成人式終えてますよ？」

「何！？見かけは小学生じゃぞ！？」

「気付いてなかったんですか？」

「やけに落ち着いてると思ったら…なるほど、人間の神秘じゃな。」

「…まあいいです。それじゃ、ありがとうございました。神様。」

それを最後に何も感じなくなった。

## 第三話・福引に一等って入ってないんじゃないでしょうか？（後書き）

長かったですね。

ようやく異世界に生まれ変わりですよ。

さて、学業優先になってしまうので更新不定期になったりしてしまいますが、見捨てずにいてくれれば幸いです。

感想、意見、その他諸々。お待ちしております。

## 第四話・木を隠すなら森の中、では人を隠すのは？（前書き）

はい、第四話投稿しました。

今回は説明が長くなってしまいましたが結構重要なので、飛ばさず読んでいただけるとありがたいです。

では第四話、始まり始まり…

# 第四話・木を隠すなら森の中、では人を隠すのは？

さてさて、顎鬚が立派な神様にＡＣの４系とかいうゲームの能力を与えられて、異世界に送られることになりました。

伊那楓です。

神様の居た【神様世界】とやらから送り出されて、気づいた時にはこの場所に居ました。

え？この場所ってどこだって？

…すみません。現実逃避をしてしまいましたね。

でも分かる人には分かるんじゃないでしょうか。

ええ、あの神様もなかなか乙な事をしてくれますね。

だってそうでしょう？町の中にいきなり人が現れても騒ぎになるでしょうし。

…そろそろ私がどこにいるのか言いましょうか。

森です。

もう一度言います。

森です。

木の中でも林の中でもなく、森の中にいます。

しかし私は日本人、もちろん森での生活などしたことなどなく、一刻も早く近くの村か町にでも行きませんと人間生活を歩めません。

…まあ、お金が無いので、宿に泊まったりは出来ませんがね。

まあ、そんな事は後回しにして…

「ここが異世界ですか…さて、何をしましょうか」

幸いこの世界【ケミスト】の一般教養、その他諸々とＡＣの４系とやらの知識は頭の中に入っています。

神様には感謝しておきましょうか。

でも、今は場所が場所です。

現在地の確認を優先した方がいいですね。

「とりあえずは【霊力浮遊（ブースト）】で…」

知識にある通りに【霊力】を体の外に放出するイメージで力を込めると、体がふわふわと宙に浮かんで…って

「高い、高いです！」

忘れてました、私って高所恐怖症の気があったんですよ…

いや、理由なんてないんですけどね。

嫌な事に理由なんてありませんよ?

「【霊力浮遊】は諦めましょう。」

人間には諦めも肝心です。

でも【霊力浮遊】を使って空から周りに何があるのかを確認しないと…

「…とりあえず、森から出ましょうか。」

数時間経ちました
閑話休題

「あーもう」

歩き出してから数時間、いまだに森から出られません。

森が広すぎるのか、それとも私が方向音痴なのか。

…私は前者だと信じたいです。

仕方がないです。

「【レーダー】を使ってみますか…ってうわ!」

【レーダー】と口に出した途端、私の胸の辺りに半透明のスクリーンが表示されました。

どうやら【レーダー】と言うと表示されるようです。

「ふむふむ、緑の点が害意が無いもので、赤の点が害意が有るもの…って赤の点ありますし！？」

周囲の状況が半透明のスクリーンに多くの緑の点と少しの赤の点で表示されています。

この【レーダー】は自分を中心として生物の位置がリアルタイムで表示されているので、周りの様子は分かり易いですが、距離と目標の大きさはいまいち分かりません。

緑の点は森の小動物ってことは分かります。点が多いですし。

赤の点はなんでしょうか？オオカミとかクマ？それとも人間？

そんなことを考えている間に赤の点と緑の点が接触したと思ったら、あっという間に緑の点が消えてしまいました。

「うーん…確認が取れませんね…後で現場に向かってみましょう。」

赤の点はしばらくその場にとどまると、また動き出して【レーダー】の索敵圏内から出ていった。

「じゃあ、行ってみますか。」

私は【レーダー】を頼りに赤の点と接触しないように進んで行った。

## 閑話休題（十数分後）

何度も言うようですが、私は日本人であり、精肉工場に勤めたこともなければ鶏を絞める所を見たこともありません。

まあ、何を言いたいのかというと…

「うわ、これは…」

血だまりの中に鹿が倒れていました。

さすがに直視する事が出来ませんね。

「まあ、これが野生なんでしょうね…」

【地球】にいたころは森に入った事も少なく、こんな光景を見ることもありませんでした。

しかし、野生では弱肉強食、当然の摂理です。

大小、大きさはどうあれ、命を繋いでゆく為の必須行為。

自分が見ていないだけで、当然のように行われている光景。

飽食の時代と言われて、常に食べ物が溢れていましたが、ここでは

そんなことはない。

自分が獲物にならないようにと、心に決めました。

閑話休題（数分後）

野生の弱肉強食を目の当たりにし、決心を新たにしました。

「なるほど、これが神様の言っていた能力ですか。」

知識を引っ張り出して私に付与された能力を確認しました。

「なるほど…これは便利ですね。」

確認したところゲームの…ＡＣの４系でしたっけ？それに出てくるロボットに使われている技術が私に付与されているようです。

【霊力急進（クイックブースト）】ですが、【霊力】を消費して体を前後左右に急加速させるんですがね。

端的に言って吐きました…

だって体が急に３ｍも急加速して吹き飛ぶんですよ！？木に激突して打撲を負いました。

これは出力を調整して、移動距離を１ｍ程にしてゆっくりと加速す

るようにできました。

とは言っても、１２０ｋｍ／ｈのトラックに激突されたような勢いから、ジェットコースターの降下時の勢いに変わったくらいですが…

それでも加速時の勢いには慣れが必要ですね。

【霊力突進（オーバードブースト）】ですが、これも【霊力】を消費しながら高速度で移動するんですがね。

空気抵抗で息ができませんでした…

高速道路を走っている時に窓から顔を出したような感覚でしたよ…

それに加速が速すぎて、これも木に激突しました。

骨が折れていないところを見ると体が頑丈になっているらしいです。

これも出力を調整して自動車と同じくらいの速度を出すようにできました。

たぶん６０ｋｍ／ｈでしょうかね。

まあ、体感速度は速いんですが周りから見ればそうでもないですよ。

あ、ちなみに【霊力急進】と【霊力突進】を使用中は【霊力浮遊】が自動的に使われるので地面との抵抗はありませんよ？

地面から少し浮いている感じですね。

最後は【霊力障壁（プライマルアーマー）】ですね。

簡単に言えば耐物理、耐魔法障壁です。

自分を中心に球状に１ｍ程を【霊力】の膜が覆っています。

突破するのは簡単ですよ？

貫通力を上げる為に、速さと密度を上げた物を撃てば案外簡単に突破できます。

まあ、この世界にも似たような【魔力障壁】があるらしいですが。

私のは【魔力】ではなく【霊力】を使っているので似て非なるものですね。

ちなみに、私のものは【霊力】なので致命的な環境汚染はおきませんよ？

そして【霊力障壁】を攻撃に転用した【霊力爆発（アサルトアーマー）】です。

これは私を中心に半径３ｍ程を無差別に攻撃します。

これには【魔力】による攻撃を無効化する作用もあるようです。

しかし欠点として【霊力爆発】発動後、一定時間は【霊力障壁】を展開することができなくなります。

その時間はコンディションにも左右されるようですが…

私の能力はこんな所でしょうかね？

「でも、これはやりすぎですね…」

ＡＣはこれが無くては始まらないとありましたが…

幾分か小さくなっているようです。

それでも重いです。

これ、ゲームでの縮尺から考えて軽くなっているはずですがね。

え？何かって？

銃火器、武装の類ですよ。

ゲームには背部武装もあるらしいですが、私には重すぎて使えません。

ので、必然的に腕部武装だけになりますね。

色々、本当に色々ありましたよ。

なんか頭の中にＸＭＢが表示されて選択すると右腕と左腕それぞれに一丁ずつ現れるんですよ。

実弾兵器とＥＮ兵器があるんですが、ちょっと試し撃ちしてみたんですよ。

そしたらどうなったと思いますか？

マシンガンを撃ってみたら反動で射線はぶれるし、ショットガンを撃っても反動で腕が痛くなったし、グレネードやバズーカは重すぎてろくに携行できません。

しかし、軽いライフルは携行しながら撃てますし、スナイパーライフルなら動く必要が無いので撃てました。

マシンガン、ショットガン、グレネードは【魔力障壁】を減衰させやすく、ライフル、スナイパーライフル、バズーカは【魔力障壁】を突破させやすいらしいです。

ＥＮ兵器はまあ軽かったんですがね。

実弾兵器と比べて、ですが…

私の【霊力】を使って弾を発射してるみたいなんですがね…

どうやら持ってるだけで私の【霊力】を使うらしいんですよ。

ほら、テレビでも待機電力ってあるじゃないですか？

それと似たようなものですよ。

話がそれましたね…

ＥＮ兵器を使った時に消費する【霊力】なんですが、あまり気になる程でもありませんね。

ＥＮ兵器によっても消費する【霊力】の量も違いますが。

そりゃ【霊力突進】を使いながら【霊力浮遊】を使って更に【霊力急進】を使えば【霊力】はカラッポになりますよ？

【霊力】が少なくなってきたら、徐々に体が倦怠感に包まれますから、それを目安におおよその残量も分かります。

でもどうやら【霊力】の回復量が並じゃないらしくって十数秒もすれば倦怠感もなくなります。

まあ、ＥＮ兵器にも特徴があって、【魔力障壁】を突破しやすいレーザーライフル、【魔力障壁】を減衰させやすいプラズマライフルがあります。

あとＥＮ兵器の中にコジマ兵器ってのがあったんですよ、これは【霊力】をチャージして一気に撃ち出すものなんですが、その【霊力】は【霊力障壁】の方から回ってくるらしくて、最大までチャージする間は【霊力障壁】は減衰し続けます。

まあ、最大までチャージしたら【霊力障壁】は回復していくんですがね。

最大までチャージしたものを直撃させれば、相手の【魔力障壁】を貫通して【魔力】を限界まで削ります。

一撃必殺の兵器ですね。

重いうえに大きいのでまず当てられませんがね。

でもＥＮ兵器って体に傷を付けずに相手の【魔力】を削る効果が主

体みたいですね。

所謂、非殺傷用兵器ですね。

そしてＥＮ兵器の最後に有ったのがレーザーブレードです。

これは完全に近接戦闘用の武器ですね。

【霊力】を消費し、【霊力】で構成された刀身で相手を切りつける。

使用すると自動で【魔力急進】が発動して相手との距離を詰めるようですね。

【魔力障壁】を貫通しやすいうえに減衰もさせやすい。

そして【魔力】も大幅に削る。

まあ、接敵する性質上、こちらが被弾する可能性も上がりますが。

それとレーザーブレードに混じってたんですがね…

実体型のブレードがあったんですよ。

完全に杭打機ですね。

正式名称・射突型ブレード。

レーザーブレードにあるリーチがほとんど無いに等しく【魔力急進】も発動しない。

命中させるには相手が停止しているところを狙って一気に接敵するしかありませんね。

しかし、【魔力障壁】突破力及び、破壊力がすさまじく、まさに一撃必殺です。

でも実弾兵器ですから、生物に当てると相当スプラッタな光景が展開されると思います。

それにしても…

「色々と確認してたら大変なことに…」

地面は抉れ、木は数十本以上倒れ、まさに爆心地。

「少し自重しましょうか…」

これからは兵器の使用を控えようと決めた、今日この頃でした。

## 第四話・木を隠すなら森の中、では人を隠すのは？（後書き）

どうだったでしょうか？

ＡＣ４との矛盾があれば指摘お願いします。

主人公の能力はコジマ粒子を使用しておりませんので、環境に優しいクリーンな物になっております。

これから、【霊力浮遊】、【霊力急進】と書いていきますが、それぞれ【ブースト】、【クイックブースト】です。

最初だけルビがふってありました。

え？全部にルビをつけろって？

…面倒なので勘弁してください。

主人公は漢字の読み方で喋っています。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第五話・森のものを食べるときには毒に細心の注意を（前書き）

はい、第五話投稿しました。

今回は戦闘?がメインですね。

まあ、主人公の強さがわかったらいいなあ、と思います。

それじゃ第五話、始まり始まり…

# 第五話・森のものを食べるときには毒に細心の注意を

はい、神様に与えられた能力を確認した結果、現在爆心地さながらの場所にいます。

伊那楓です。

いやー、まさかここまで威力が強いものとは思いませんでした。

まあ、済んでしまったことは仕方無いので放っておきましょう。

あ、ちゃんと【レーダー】で確認して生物がいない場所で確認をしたので、大丈夫ですよ。

それにしても…

「お腹がすきましたね。」

そういえば朝食しか食べてませんでしたね。

何か食べるものは…

「木の実くらいしかありませんね。」

さすがに狩りをしてまで肉を食べたいとも思わない。

とは言ってもこの辺の木は、あらかた倒してしまってあるうえに、木の実がなっていそうな木が周りにはない。

「…探しに行きますか。」

木の実がなっていそうな場所を探すことにした。

閑話休題（時間は進み）

「これおいしいですね。」

今、私は見た目はリンゴ、味はイチゴという果物を食べている。

十分くらい森をさまよっていると木にリンゴがなっていたので、【霊力浮遊】で収穫したという経緯になっている。

食べてから気づいたけど…

毒があったかもしれないのに食べてよかったんですかね？

まあ済んだことをいっても仕方ありません。

それに食べ始めて三個めだ。

毒があるならもう回ってる頃だし、大丈夫だろう。

「ふう…おいしかったです。」

さて、果物も食べ終わり、どうしようか思案していると。

「ん？これは…」

出しっぱなしにしておいた【レーダー】に反応があった。

「おかしいですね。」

一つの緑の点が複数の赤い点に追いかけられている。

「でも、この速さは…」

見ている限り人間が走るスピードではない。

しかし、森の中で動物はこんなにスピードを出せるものなのか。

緑の点は一つしかないので生き物で移動しているとは思えない。

「車…なわけはないし。」

神様はこの世界【ケミスト】が科学や機械よりも【魔法】が発達していると言っていた。

「じゃあ【魔法】ですかね。」

【魔法】なら、馬などの代わりになるような物が有るのかもしれない。

「まあ、助けてみますか。」

【霊力浮遊】で飛んでいく…ことはできないので、【霊力浮遊】で

速度を上げつつ、木を避けながらところどころで【霊力急進】を使って道を急いだ。

「うあー、やっぱり慣れませーん。」

…先を急ぎました。

閑話休題（それから数分）

そろそろ精神的に限界か、というところでようやく現場に着いた。

いや、急いだんですがね。

向こうも移動しているもんですから、なかなか追いつけずに距離を縮めるのに【霊力急進】を連発しました。

追いかけている内に整備された道に出れたので最終的に【霊力突進】を使いましたよ。

やっぱり、あまり速度は出ませんね。

まあ、慣れてきたら徐々に速度を上げましょうか。

さて、目の前で繰り広げられている光景ですが。

大きな馬車が穴に落ちていて、その周りをいかにも、盗賊だ！って

人たちが取り囲んでる。

ちなみに私は草むらに隠れていますよ？

どうやら馬車に【魔力障壁】が展開されているらしく、盗賊達も持っている剣や槍で切り付けているがどうにもならないらしい。

「ちっきしょう、早くしねぇとギルド員呼ばれちまうぞ！」

「わかってるよ！でもお頭じゃねえと【魔法】が使えねえんだよ！」

どうやら【魔法障壁】は剣や槍でどうにかできるものではなく、【魔法】でないとどうにかできないらしい。

「くそっ！お頭はまだか！？」

「ああ！今連絡があった！あと数分で来るぞ！」

そのお頭とやらが着く前に減らしておいた方が楽かな？

そうと決めたら…

「あの、何してるんですか？」

ここは旅人を装って近づくのが無難かな？

近づけばブレードも当てやすいだろうし。

「ああ？なんだ、ガキ」

「遠くから馬車が倒れてるのが見えたので急いできたんですけど…」

自然に盗賊に近づくとブレードの射程内に入った。

「チッ！まさか見られちまうたぁなぁ。面倒だし消え――」

盗賊が何か言おうとしていたが、それ以上言葉を発することは無かった。

「て、てめぇ【魔法】を――」

もう一人の盗賊も何かを言おうとしたようだが、【霊力急進】で一気に近づき、ブレードで切った。

「ふぅ、意外と簡単でしたね。【魔力】を削る、とありましたが。なるほど、【魔力】を削られると気絶するんですか。」

直接【魔力】を削るから体に傷がつかない。

これは良いです、捕縛用として活躍しそうです。

さて、馬車の中の人は無事かな？

【レーダー】には緑の点が表示されてるから大丈夫だと思うけど…

馬車を確認しようとすると【レーダー】に変化があった。

「【レーダー】に反応…赤い点と緑の点、多分お頭とやらかな。」

まだ遠いけど確実にこちらに近づいてくる。

それにこの速さ…緑の点は馬か何かかな?

馬車は後回しか…

思案している内にかなり近づいてきていた。

【レーダー】を消し、装備していたブレードも消しておく。

「ああ?んだこりゃあ?」

そして、馬に乗った男が現れた。

「どうなってやがる。通信が入って来てみりゃ、もしやお前がやったのか?」

男…盗賊の頭は馬から降りながら、馬車には目もくれずに聞いてきた。

「ええ、そうですが…敵討ちでもしますか?」

盗賊の頭は何かを呟いた後に口元を歪めて言った。

「どうだ?ガキ、よければ部下にならねえか?どうやったか知らねえがそこのカス共を潰したんだ。弱いわけじゃないだろう?」

「…この二人はあなたの部下らしいですが。それをカス呼ばわりですか?」

「ああ?変なことを聞くなガキ。当り前だろうが、そいつらは【魔

法】もろくに使えねえ、カスって呼ぶのが当然だろ？」

盗賊の頭は下卑た表情で笑っている。

「あなたが来る前に馬車を襲うのに成功していたらどうしていたんですか？」

「もちろん、そいつらを殺して独り占めだ。」

「そうですか…」

私は満面の笑みを浮かべて…

「いいですね。じゃあこれから一緒に盗賊しましょうか。」

握手をしようと左手を伸ばす。

「おう、せいぜい俺の役にたてよ。」

盗賊の頭がつられて、手を伸ばすと…

「は？」

右腕にブレードを装備し、【霊力急進】を発動、胴体を両断した。

盗賊の頭は何が起こったか分からないように地面に倒れました。

「てめぇ…ガキが何しやがった！」

「なるほど…【魔力】がある程度あると、切っても気絶しませんか。

」

盗賊の頭は気絶しなかったようだが、地面に倒れて起き上がれないようだ。

「それでも十分に有効のようですね。」

私は倒れている盗賊の頭にゆっくりと近づく。

「や、やめろ…今まで集めた物は全部やる。だ、だから――」

「黙れ。カスが…」

ブレードを振り下ろすと盗賊の頭の頭部を貫いた。

盗賊の頭は完全に気絶したようだ。

「さて…と」

【レーダー】を出し盗賊の頭がやってきた方向を確認する。

「貰えるものは貰いますか。丁度道にも出て町にも行けそうですし。」

【霊力浮遊】を使いながら歩を進めた。

## 第五話・森のものを食べるときには毒に細心の注意を（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

主人公は命を軽く見る相手には容赦がありませんね。

それと、戦闘がメインの筈でしたがいつの間にかこのような圧倒的な形に…

主人公…おそろしい子！

ではでは、感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第六話・本当に方向音痴の人は自覚がない（前書き）

はい、第六話投稿しました。

今回はあれですよ。

平和です。

戦闘シーンもなく、ひたすらに平和です。

そして短い。

それでも第六話、始まり始まり…

# 第六話・本当に方向音痴の人は自覚がない

はてさて盗賊の頭を叩きのめして、来た方向から予測をしてアジトを目指しています。

伊那楓です。

あの盗賊の頭…長いですね。

あの男が最後に『今まで集めた物は全部やる』と言っていたので遠慮なく貰っておきましょう。

え？事実と違うって？

…気のせいですよ。

さて、【レーダー】を確認しながら歩いてきましたが…

「ここっぽいですね。」

地面に馬の蹄の跡もありますし、間違いないでしょう。

あったのは自然にできたような洞窟。

【霊力障壁】も展開してありますので、罠が仕掛けてあっても大丈夫でしょう。

一応ブレードを装備して侵入しました。

## 閑話休題（物色終了）

「うーん、あまりいいものがありませんでしたね。」

馬車が襲われていた道に戻り、馬車の進行方向を目指して歩きながらアジトから盗…いただいた物を見ています。

え？アジトですか？

罠なんてものは無く、長い一本道でした。

あの口ぶりからしてたくさん貯めこんでると思ったんですがね。

見つけたのはせいぜい金色の腕輪やら、綺麗な首飾り、あと指輪が数個。

価値なんて分かりませんよ？

【地球】では装飾品に興味ありませんでしたし。

とりあえず置いてあった袋に詰めて持ってきました。

それにしても…

「この袋どうなってるんでしょうか？」

私的にはこの袋の方が価値があるんですけどね。

見た目は汚い袋ですが、入れてみるとあら不思議、いくらでも入ってしまいます。

装飾品を全部入れても重さは変わらず、体積も変化しません。

【魔法】を使ってあるのは間違いないんですけどね。

今持っている私の知識はこの世界【ケミスト】の一般教養のみ。

【魔法】の知識は自分で学ばないといけません。

「まあ、いいです。」

今は町に行くことが先決です。

まだ日が高いので時間はあります。

【霊力浮遊】を使わずに歩いて道を進んでいきましょう。

## 閑話休題（日も傾き）

もうそろそろ夜になるかなー、と思い始めたところでようやく町の入口に着いた。

町は３m位の壁に囲まれていて中の様子が分かりませんでした。

「ようやくですか。日が暮れたらどうしようかと思いました。」

結構遠くから見え始めたので、かなり大きな町でしょうね。

「すみません門番さん。」

入口に立っていた門番さんに声をかけました。

「おや、お嬢ちゃん。どうしたんだい？」

…やっぱり小さいんですかね。

「あの…この町の名前ってなんですか？」

「ああ、旅人さんかい。この町は【グラブス】だよ。」

「それじゃあここは【アナリティカ】の領地ですか？」

「ああそうだ。旅人なんだから、そのくらいわかるだろ？」

「いえ、実は森で迷ってしまいまして。丁度森から出たらこの町が見えたので、確認しただけですよ。」

「なんだ、あの森で迷ったのか？あそこはほとんど一本道だからほとんど迷わないハズだが…」

「実は食料を切らしちゃいまして、探してたら迷っちゃったんですよ。」

「そうか、だからそんなに軽装なのか。」

ふう、口から出まかせでも何とかなりました。

「それでこの町に入りたいんですけど…」

「ああ、それなら入国税で２０００Ｓ（スピル）だ」

ちなみに１Ｓが【地球】でいう１０円です。

「それなんですがね。現金が無くって、見つけた装飾品でいいですか？」

「ああいいぞ。一応鑑定士も兼任しているからな。」

それを聞き、安心して金色の腕輪を出した。

「これなんですが…」

「ああ、ちょっと待っててくれ。」

門番さんが懐から紙を取り出し、その上に腕輪を乗せた。

その紙が光を発し、腕輪を包んでいきます。

「何をしてるんです？」

「ああ、【鑑定魔法】だ。知らなくて当然か。この紙に置いた物の希少価値、美術価値、年代を【アナリティカ】の経済、需要、資料

と照合して正当な価値を割り出す。人が鑑定するより正確だろう？」

「へぇー、そんな魔法もあるんですか。」

「まあ、魔法学校で専攻するやつも少ないしな。【鑑定魔法】よりも戦闘で役に立つ【探知魔法】を専攻するやつが多いからな。あんたも【探知魔法】を専攻したんだろ？」

「ええ…まあ。」

曖昧な返答でお茶を濁した。

「おっと、鑑定が終わったぞ。ふむ、なかなかだな。３０００Ｓか。じゃあ、２０００Ｓを引いた１０００Ｓを返すぞ。」

日本円にして３万円か…

「まあ、文句を付けられてもどうにもならんけどな。おれが価値を付けたんじゃなくて、国が価値を決めたようなもんだからな、変えようがない。」

文句はないから別に気にしませんけどね。

１０００Ｓを受け取ってお礼を言った。

「ありがとうございました。それじゃあ、入国してもいいですか？」

「ああ、出国の時はまたよってくれ、旅人は出入国を記録しなきゃいけないんだよ。」

「わかりました。それでは。」

そして私は【グラブス】に入国しました。

## 第六話・本当に方向音痴の人は自覚がない（後書き）

どうだったでしょうか？

【ケミスト】の通貨単位がわかりましたね。

そして最初に出た魔法が【鑑定魔法】って…

ちなみに門番に就くには【鑑定魔法】が必須要項です。

なぜなら、主人公のようにお金を持っていない旅人が来ても、身ぐるみを剥いでお金にすることができるからです（笑）

…ご都合主義じゃないですよ？

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第七話・宿を探して三千里…ところで三千里って何キロですかね？（前書き）

はい、第七話投稿です。

今回もあれです。

平和分がたくさんあります。

さて、書くこともすくないので。

そいじゃ、第七話、始まり始まり…

# 第七話・宿を探して三千里…ところで三千里って何キロですかね？

はいはい、ようやく【グラブス】に入国できました。

伊那楓です。

金色の腕輪が３０００S、日本円にして3万円で売れました。

でも入国税で２０００Sかかってしまったので、残りの１０００Sは袋の中に入れてあります。

まあ、まだ袋の中に首飾りと指輪数個が入っているので、これが換金できればお金になるでしょう。

そして今は日も暮れかかっていて辺りは薄暗いです。

早々に宿を見つけないとまずいでしょうね。

それにこの町【グラブス】は街灯も少なく、路地裏はもう真っ暗ですね。

閑話休題（それはさておき）

私が今置かれている状況はなかなかに大変です。

その前に、この世界【ケミスト】の事なんですがね。

この世界は奴隷が公に認められています。

それで、今の状況ですが男が数人倒れています。

【レーダー】は出さなくても頭の片隅に存在してるんですよ。

索敵範囲が狭くなってしまいますから、森にいた時は出していましたけど。

それでですね【レーダー】に反応があったんですよ。

複数の赤い点が後ろからついてきていました。

曲がり角でそれとなく確認したんですが、【レーダー】を出していないと範囲は１００m四方くらいみたいです。

つけてきていることが確認できたので路地裏に入って待ち伏せをしましたよ。

どうやら全員人攫いらしいんですがね。

そりゃ、見かけが小さい女の子がこんな薄暗い時間に、一人で歩いていたら人攫いくらいでるかもしれませんがね。

近づいてきたところをブレードで切りましたけど。

まあ、連れ去ろうとしても【霊力障壁】で近づけないんですがね。

「う…ぐ…何しやがった…」

これは驚きですね。

一人だけ意識があります。

「いえいえ、気にしないでください。自分の身を守っただけなので。」

奴隷は公に認められていますが、人攫いは犯罪です。

奴隷には犯罪者がなったり、口減らしの為に家族に売られたりしてなるものです。

しかし、それでは数が足りないので人攫いを仕事にする人もいるんでしょうね。

主に狙われるのは女や子供、攫われたら末路は大体決まっています。

「てめぇ…見つけたら…ただじゃ…」

なにか言っていますが知りません。

それに路地裏はかなり暗いうえに灯りもないので、顔は分かりません。

無視して宿を探しましょうか。

閑話休題（宿を見つけました）

丁度いいところに宿を見つけたので今日はここに泊まりましょうか。

外観は新しくも古くもなく、かといって綺麗でも汚くもない。

まあ簡単に言っちゃえば普通です。

これといった特徴もなく、完全に町並みに溶け込んでいます。

特徴が無いのが特徴みたいなかんじです。

入ってみても、いたって普通の宿屋ですね。

どうやら一階が食事場所で、二階が宿の様です。

数人が食事をしていました。

フロントにベルがあるので鳴らしてみましょうか。

ベルを鳴らすと心地よい音色が響きました。

間もなく奥から恰幅のよい、茶色い髪の女の人が姿を見せました。

「いらっしゃい、今日は泊まりかい？」

「はい、お願いします。食事もお願いできますか？」

「ああ大丈夫だよ。一泊、朝と夜の食事つきで３００Ｓだよ。ところで…」

「はい？」

「お母さんかお父さんはどこだい？」

むぅ…

「これでも２０超えてますよ？」

ん？後ろから何かを吹き出す音が…

「そうなのかい！？いやぁ、悪かったね。娘よりも歳下に見えたもんだから。とりあえずこれに名前書いておくれ。」

「まあ、自覚はあるので気にはしていませんけど。」

宿帳を渡されたので、そこに名前を書き込みます。

そういえば名前はどうしましょうか。

「ところでおかみさんの名前はなんでしょうか？」

「あたしかい？あたしはアラベル・ガドリンだよ。気軽にベルって呼んでちょうだいな。」

親から貰った名前をこの世界で使いたくないし、名字の伊那をカタカナにして、イーナでいいか。

「イーナだけかい？ファミリーネームかファーストネームかもわからないし…これだけかい？」

「どちらかと言えばファミリーネームですが…まあ、イーナと呼んでください。」

「まあ、詳しくは聞かないよ。人にも色々な事情があるからね」

「ありがとうございます。」

「そういえば一人で来たんだろ？大丈夫だったかい？」

「え？何がですか？特になにもありませんでしたけど…」

「そうかい？運がよかったね。暗くなってくると人攫いが出るからね。気をつけなよ。」

「はい、わかりました。気をつけます。」

確かに、気を付けておかないと危ないですね。

…主に人攫いが、ですが。

「じゃあ部屋に案内するけど…ミシェル！ちょいと来ておくれ。」

「はーい」

二階から声が聞こえ、女の子が下りてきた。

「どうしたの？お母さん」

「お客さんだから、部屋に案内しとくれ。じゃあ、あたしは食事の用意をするから。荷物を置いたら下りてきとくれ。」

そう言って部屋に戻っていった。

「それじゃ、お部屋に案内するんでついてきてください。」

「ああ、はい。」

先を歩くミシェルちゃんの後をついていく。

「お客さんはどこからきたんですか?」

「どこから、と言うと?」

「ああ、すみません。お客さんにどこから来たのかを聞くのが楽しみの一つなんですよ。まあ大体が【アンヴィーラ】からのお客さんなんですけど。」

【アンヴィーラ】というとこの世界の中央の国だ。

「へぇー、なにか理由でもあるんですかね?」

「うーん…私の考えですけど、この【グラブス】は【アンヴィーラ】から近い町ですからね。この町で補給をしてから他の国に行くんじゃないんでしょうか?」

なるほど、理にかなってるかな?

「でも、この宿って特徴がないじゃないですか？」

「まあ、言っちゃ悪いですけど、街並みに溶け込んでましたね。」

「ええ、でもそれがお客さんによっては『逆に目立っている』とか『老舗の風格がある』とかで結構評判なんですよ？」

「そうなんですか。」

まあ、確かに町並みに溶け込みすぎて逆に目立ってしまっているが…

「ですから、お客さんの話もたくさん聞けるんですよ。」

「へぇ…」

「で、お客さんどこから？」

「ええっとですね…」

これは困りました。

なんと言えばいいんでしょうかね？

「まあ、【アナリティカ】の近くにある村ですよ。」

「村…ですか？」

知識を参照したところ町よりも規模が小さい村も少数ながらあるようです。

「ええそうですよ。そこを出て…まぁ、稼ぎに出てきたようなものです。」

「そうですか…」

そんなことを話している内に部屋に着いたようだ。

「それじゃお客さん、荷物を置いたら下の食堂に来てください。お母さんが食事用意してあると思うので。」

そう言ってミシェルちゃんは下に降りて行ったようだ。

「ふぅ…」

荷物と言っても、持っているものは汚い袋だけ。

まあ、なんでも入る不思議な袋なんですが…

とりあえず袋だけ置いて下へ降りて行った。

食事終了

閑話休題

「いやぁー、おいしかったです。」

「こっちとしちゃ、そんなにおいしそうに食べてもらえるだけでありがたいよ。」

いや、本当においしかったんですよ?
さすがにご飯ではなかったですがね。

【地球】の欧州方面の料理に似ていました。

「そういえばベルさん。この宿屋の名前ってなんていうんですかね?外が薄暗くて看板が見えなくて。」

「そうなのかい?よくここが宿ってわかったね。ここは【グラブス】でも一番繁盛してる宿屋・ガバラスだよ。【アンヴィーラ】帰りの新人ギルド員がよって行くからね。」

「あれ?この町じゃ、ギルドに登録できないんですか?」

「ああ、ギルドに登録するには【アンヴィーラ】に行かないといけないんだよ。【アンヴィーラ】で登録さえすればそこいらにあるギルドで依頼が受けれるけどね。」

「面倒くさいですね…ここから【アンヴィーラ】までどのくらいかかりますかね?」

「直通の馬車が通ってるけどね。それでも丸1日はかかるよ。安全だけど値も張るし、お金が無いんなら乗合をお勧めするよ。」

「乗合ですか?」

「そう、【アンヴィーラ】まで一緒の人を探してから自分達で馬車を雇って、向こうに着いたら金額を折半する。人数が多いほど自分

の負担が少なくなるからね。」

タクシーみたいなものですかね。

【アンヴィーラ】までの運賃を決めてからでないとトラブルの原因になりそうですね。

「ちなみに歩きで何日くらいかかりますかね？」

「そうさね、野宿をしながら歩き続けて3日はかかるよ。」

時は金なり、とはよく言ったものですね。

「乗合の事なんですけど…ここから【アンヴィーラ】に行く人を都合よく見つけられますかね？」

「ああ、そのことかい？直通の馬車の停留所で待ってる人に声をかけて、都合があえばいいのさ。」

どうしましょうかね…

「まあ、時間もあるから今夜一晩じっくり考えな。」

「ええ、そうします。」

挨拶をして、部屋に戻りました。

閑話休題（入浴後）

やっぱりお風呂は気持ちいいですね。

浴槽にお湯をためるだけですが、あの芯まで温まる心地よさは何物にも代えられません。

お風呂は人類最大の発明ですね。

「それにしても今日は色々ありましたね…」

盗賊に遭遇したり人攫いを撃退したり、と大変でした。

ベッドに横になり、明日の予定を考えます。

「明日は図書館にでも行きますか…【魔法】について調べられればいいですね…」

一日の疲れや何やらで眠くなってきました。

今日の事はこれで眠りましょうか。

【霊力障壁】は常に展開しておきます。

何が起こるかわからない世界なので。

「明日は明日の風が吹く、か…」

まあ自分の人生です。

自分で道を決めますよ。

## 第七話・宿を探して三千里…ところで三千里って何キロですかね？（後書き）

どうだったでしょうか？

きっと人攫いはロリコンの集団なんでしょうね（笑）

話の流れからして、きっと【アンヴィーラ】に行くことになりますね。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第八話・市場…それは店と客との戦いの場（前書き）

はい、第八話投稿いたしました。

今回は主人公が【魔法】についてを学びます。

そして主人公が他の国に向けて旅を始めます。

それだけの話です。

ほんじゃま、第八話、始まり始まり…

# 第八話・市場…それは店と客との戦いの場

おはようございます。

伊那楓です。

ちなみにこの世界ではイーナと呼んでください。

え？今なにをしているかって？

朝食を食べていますよ？

朝食を食べないと頭が働かないと科学的にも証明されていますし。

トーストとハムエッグこの世界では割とポピュラーな献立らしいです。

それはそうと、朝から宿の中が騒がしいんですよね。

なんなんでしょうかね？

閑話休題（おいしかったです）

朝食も食べ終わり一息ついていると、ミシェルちゃんがこちらをまじまじと見ているのに気が付きました。

「どうかしましたか？ミシェルちゃん。」

「あの、お母さんに聞いたんですけど…」

「なにをですか？」

「イーナさんって、もう２０歳超えてるんですよね？」

「はい、そうですけど…」

「イーナさんってもしかして【エルフ】なんですか！？」

この世界には【人間】【亜人】【エルフ】がいます。

【人間】は、そのまま【地球】の人と変わりはありません。優れた所はありませんが、それ故に努力次第でどの方向にでも伸びることができます。

【亜人】は、人と獣が混じったような外見で、特に力に特化しています。

【エルフ】は、人間と見た目は変わりません。しかし耳が長く、能力が【魔法】に特化しています。

しかし…

「いえ、私は人間ですよ。」

「え…でも２０歳なのにそんなに背が低いし…」

そうなんですよ…ミシェルちゃんが間違えるのも無理ありません。

【エルフ】は体の成長速度が極端に遅く、【人間】の三倍ほど長く生きます。

まあ、【亜人】も【エルフ】ほどは長く生きませんが、それでも【人間】の二倍ほど長く生きます。

「ほら、耳もミシェルちゃんと変わりないでしょう？」

「ホントだ。じゃあなんでそんなに背が低いんですか？」

「さあ？なんででしょうね？」

私ほどの外見を【エルフ】でいうとおよそ２０歳くらいでしょうね。

ちなみに【エルフ】は一人一人の寿命が長いので、子どもの生まれる数が少ないようです。

長寿命の種族の宿命ですかね？

「こら、ミシェル！イーナちゃんを困らせるんじゃないよ。」

私とミシェルちゃんが話しているのを見てベルさんがミシェルちゃんを叱りつけました。

「いえ、ベルさん。別に困っていませんよ。ところで朝から騒がしいようですが、何かあったんですか？」

「すまないねイーナちゃん。実は昨日の夜遅くに騒ぎがあってね。」

「騒ぎですか？」

「どうにもこの近くで人が倒れていたらしいんだけどね。なんと、それが調べてみると人攫いグループ。ギルドに指名手配されてた奴もいたらしくてね。ギルドも誰がやったのか探してるんだよ。」

「指名手配犯もいたんですか？」

「そうだよ、賞金も懸けられてたらしくてね。確か５００００００Ｓだったかね？なんにしても人攫いは重罪さ。【アンヴィーラ】に送られて監獄行き、すぐに奴隷だよ。」

「もしかして、それに名乗り出たりしてるからですか？賞金を貰うために？」

「そう、この宿からも何人か名乗り出たらしいけどね。もう門前払いさね。人攫いもやけになってるらしくて。『子どもにやられたんだ！』とか言ってるらしいから、誰がやったのかも分からないままさ。」

「それは怪しいですね。子どもにやられるわけ無いですよ。」

「まあ、それもそうさね。それと今日の【アンヴィーラ】行きの馬車だがね。どうやら休止になっちまったみたいだよ。」

「え？どうしてです？」

「どうやら昨日の昼ごろに馬車が盗賊か何かに襲われちまったみた

いで、ギルド員が来て盗賊は捕まったみたいなんだけど、馬車が壊れちまったみたいでね、馬車は点検中だってさ。」

「馬車が壊れたぐらいで休止になるんですか？」

「ああ、イーナちゃんは来たばかりだから知らないかい。【アンヴィーラ】行きの馬車はね、馬じゃなくて【魔法】で作られたゴーレムで出来てるのさ。なにせ長距離だからね、馬じゃあそんなに早くは着けないさ。私らには分からないけど、ゴーレムは繊細らしくてね。何かあると壊れやすいのが欠点なのさ。」

「それじゃあ乗合の方は？」

「乗合の方は個人でやってるからね。これを期に儲けようとして値段を上げてるらしいからね。止めといたほうが賢明だよ。」

「そうですか…」

まあ、元々歩くつもりでしたから、そんなに困ってはいませんね。

「で、イーナちゃんはどうする？再開するまで泊まってくかい？」

「いえ、朝の内に荷物を整えて【アンヴィーラ】に向かうことにしますよ。」

「そうかい、また【グラブス】に来ることがあったらこの宿屋に泊まってくれたらありがたいね。」

「ええ、機会があったらまた来ますよ。」

３００Ｓを支払い、荷物を持って宿を出ました。

さて、宿を出て市場に向かうことにします。

宿を出るときに市場の場所を教えてもらいましたから。

３００Ｓを宿代に払ったので、残りは７００Ｓです。

さて、これで何が買えますかね。

図書館も探しつつ回ってみますか。

閑話休題（十数分後）

はい、市場に到着しました。

まだ朝の早くなのに活気づいていますね。

寝てる時でも【霊力障壁】を展開させておけば動物は近づけないでしょうからテントは必要ありませんね。

とりあえず必要なものは、水や食べ物と着替えですかね。

なるべく多く持っていきましょう。

多くて困ることもありませんし。

それに、袋にはいくらでも入るので持ち運びには事欠きませんし。

それにしてもにぎやかですね。

あちこちから声が聞こえてきます。

『ほら、そこのお姉さん、ニベアが5個でなんと62Sだ!』

『うーん…ちょっと高いわね。あっちは5個で57Sだったわよ。』

『なんだって!?それじゃこっちは5個で53Sだ!もってけドロボー!』

とかで桃に似た果物が売られていたり

『なんと、高級肉として名高いスパーの肉が120S!買わなきゃ損だよ!』

『スパーの肉が120Sか…塊で全部買うから1000Sにしてくれないかい?』

『お!お客さん太っ腹だね!気に入った!その値段でいいよ!』

と肉の塊を売っていました。

どこの店でも、店と客との値切り合戦が繰り広げられています。

さて、【地球】では見ることが出来ない光景に唖然としていましたが、気を取り直しまして。

「それじゃ、最初は食料かな？」

一時間後
閑話休題

とりあえずあらかたの物は買い終わりました。

え？なにを買ったかですか？

主に野菜や果物です。

その時の値切りの仕方ですが…

『あの…すみません。』

『お！どうしたお嬢ちゃん、お使いかい？』

『はい、そうなんですけど…新鮮な果物か野菜なんてありませんかね？』

『おいおい、お嬢ちゃん。うちにあるのは全部今朝収穫した新鮮な物だからね。どれが新鮮かなんて――』

『そうですか…おや？このカニス、ヘタが萎びてますね？この野菜は収穫しても数日はヘタに張りがあるはずですが…あと、このアルモも収穫したてだと、実全体にツヤがあるはずですし…それにこれ

も――――』

『お嬢ちゃん…脅迫するつもりかい？』

『いえいえ、私は素直なだけで、思ったことを口に出してしまうんですよ。だからこの店が古い物を収穫したてだと偽って売っていると口に出して――――』

『もってけドロボー！』

…脅迫じゃありませんよ？

ただ本当のことを言っただけですよ。

ところで野菜や果物の鮮度の違いが分かるのって一般教養なんですかね？

果物や野菜は見ただけで名前がわかりますがね。

まあ、おかげでたくさんの食料をタダ同然で買うことが出来ました。

お金を払わないのはドロボーですからね。

あとは違う店でファンガの干し肉を十枚ほど買いました。

味は牛肉に近いらしいですがね。

こちらは２０％ほど安く買うことができました。

え？着替えですか？

…女性にそんなことを聞くもんじゃありませんよ？

さて、これらを全部袋に詰めて、と

「とりあえず、旅の準備は完了ですね。」

まだ日が昇りきっていないのでまだ9時ほどでしょうか？

出発はお昼を食べたらにして、図書館を探しましょうか。

## 閑話休題（図書館発見）

さて、図書館を発見しました。

したのはいいんですが…

「ずいぶんと古めかしい建物ですね…」

レンガ造りの、壁はツタで覆われている、何年も放置されているような建物です。

看板にも書いてありますし、間違いはないはずなんですが。

とりあえず入ってみると、カビと埃が混ざったような独特なにおいがします。

「おや、いらっしゃい。こんなに小さなお嬢さんが来るなんて。珍しいこともありますね。」

カウンターの方から声が聞こえました。

見てみると、眼鏡をかけた、体の線が細く、背の高い、若い男の人が立っていました。

「あの、【魔法】関係の本を探しているんですが…」

「おや、珍しいお客さんがこれまた珍しい本をお探しですね。ええ、ありますよ。お探しの魔法書は【オーガニー】の水の魔法書でしょうか?それとも【アナリティカ】の風の魔法書?はたまた【アプライド】の火の魔法書?もしかして【フィジカ】の土の魔法書でしょうか?」

そう一息に言い終えると、どこからか出した四冊の分厚い本をカウンターの上に置きました。

「いえ、初心者向けの教本ってありますか?」

「あることにはありますが…」

そう言いながらカウンターにあった本をどこかへしまってから、これまた厚い本をカウンターに置きました。

「それで結構です。ところでこの本の内容は?」

「【魔法】を使うための基礎の基礎。【アンヴィーラ】の魔法学校

で使われているものと同じものです。」

「それで十分です。ここで読んでいってもいいでしょうか？」

「それはもちろん。ここは図書館です。本を読む人の邪魔は致しませんよ。」

それだけ言って男の人はカウンターの奥に消えて行った。

さて、【魔法】を詳しく調べますか。

数時間後
閑話休題

ふう…没頭してしまいましたね。

【魔法】に関しては大分理解できました。

神様から聞いたからも考えて【魔力】と【霊力】の違いも分かりましたよ。

長くなってしまいますが、【魔法】についての説明と【魔力】と【霊力】の違いについての考察を述べたいと思います。

この世界【ケミスト】に存在する【魔法】ですが、簡単に言うと『体に存在する【魔力】を一か所に集中させ、【呪文】によって属性を付加し、放出する。』とのことです。

神様が言っていたことと違うんですが…まぁ、神様の方が正しいんでしょうがね。

神様ですし。

…話がそれましたね。

この工程を省いてしまうと【魔法】として体外に放出することはできずに、暴走や不発の原因になってしまうようです。

【魔力】を集中させる時に使われるのは、【魔具】と呼ばれ、様々な形状があります。

素材によっても【魔力】を通しやすかったり、【魔力】を増幅させるものがあるらしいです。

【呪文】についてですが、読んでいたこの本ですが、呪文についてはあまり詳しく書かれてなかったんですよ。

水、風、火、土の【初級呪文】から【中級呪文】の【属性魔法】の一部と【基礎魔法】が載っていました。

【基礎魔法】というのは、属性によらず行使することができる、【魔力】があるなら使える、【属性魔法】よりも比較的簡単な魔法です。

【魔力障壁】も【基礎魔法】の中に入っていて【魔力】を込める量によって【魔力障壁】の強弱も変化するようです。

【魔力】と【霊力】との違いですが、神様が言っていたことと照らし合わせると何となくですが理解することができました。

この世界【ケミスト】で誕生した【人間】【亜人】【エルフ】は【魔力】を消費し【魔法】を使い、向こうの世界【地球】で誕生した私は【霊力】を消費し【魔法】とは違う現象を起こしています。

やはり、神様が言っていた【魂】の違いなんでしょうね。

【魔力】と【霊力】と、どちらも【魂】から湧き出してきますが、誕生した世界が違うので似て非なるものですね。

例えてみれば日傘と雨傘ですかね？

私は日傘をさしていて、この世界の住人は雨傘をさしているとしましょう。

形は同じようでも、用途が違う。

【霊力】を使う、私には【魔法】が使えませんが、【魔力】を使う、この世界の人々は、どうにかすれば私が起こしている現象を再現できるかもしれませんね。

晴れの日に雨傘をさしているようで、違和感がありますけどね。

ただ、消費が半端ではないのですぐに【魔力】がカラッポになりそうですがね。

それと、私のＥＮ兵器で【魔力】を減らすことが出来る理由ですが、これは推測になってしまいます。

おそらくは、【魔力】と【霊力】が互いに打ち消しあうからだと思います。

＋と－を思い浮かべてくれるとわかりやすいです。

＋が大きければ－が打ち消され、－が大きければ＋が打ち消されます。

私のＥＮ兵器は【霊力】を撃ち出しているようで、それが【魔力】を持っている相手に当たれば、もちろん【魔力】を削ります。

今までの人たちが気絶していたのは、【魔力】が削りきられたからでしょうね。

【霊力】をかなりの密度で撃ち出しているみたいなので、大体のこの世界の人々はこれを防ぐことができません。

【魔力障壁】の密度を増加させれば、威力をある程度は弱めることが出来るんじゃないでしょうか？

これくらいでしょうか。

固まっている体をほぐそうと席を立ち、背伸びをします。

「んー、久しぶりに本を読みました。」

さて、そろそろいい時間ですね。

本を返そうと、カウンターに行きます。

「すみませーん。本を返したいんですが。」

「はいはーい。お疲れ様でした。どうでしたか？」

カウンターの奥から先ほどの男性が出てきました。

「はい、【魔法】については大体理解できました。」

「それはよかった。ところで、これから【アンヴィーラ】の魔法学校に入学ですか？」

「いえ、【アンヴィーラ】には行きますが、魔法学校じゃなくてギルドの方です。」

「そうでしたか。すみません、丁度入学シーズンでして、授業の前の予習かと思いまして。大体は予習もせずに魔法学校に入学して、痛い目を見るんですよ。それにしてもギルドですか…」

「いえ、魔法学校に入学する歳でもありませんですし【魔法】については知っておかないとまずいでしょう？」

「…ところで歳を聞いても？」

「まぁ構いませんけど、これでも２０は超えてますよ？」

「…【エルフ】ですか？」

「いえいえ、私は人間ですよ。ほら、耳の長さは変わらないでしょう？」

耳をみせると男性は絶句しているようだ。

「ところで、あなたはこの図書館の館長さんですか？」

「え…ええ紹介が遅れました。図書館・ウェリアの館長を務めております。アムザイ・シーボーグです。」

「はい、私はイーナといいます。」

「イーナさんですか？」

「はい。また図書館に寄ることもありましたらよろしくお願いします。」

「わかりました。それでは、またお会いしましょうか。」

握手を交わしてから図書館から出ました。

さてと、そろそろ【アンヴィーラ】に行きますか。

数十分経過
閑話休題

「すみませーん、出国したいんですけど。」

昨日通った門に到着しました。

「おう…って昨日の旅人さんかい。どうした？もう出国するのか？」

「はい。【アンヴィーラ】に用事が出来たので。」

「なるほど、それじゃあちょっと待ってな。」

そう言って門番さんはノートに何か書き込んでいる。

「よし…と、それじゃあ旅人さん通ってもいいぞ。」

そう言って門を開けてくれました。

私が通ろうとすると…

「そういや旅人さん、あんたが来た日に森で馬車が襲われたんだが…何か知らないか？」

「いえ、知りませんが。」

「そうか。ここを通ったギルド員が言ってたんだがな、到着した時に盗賊はもう戦闘不能状態だったって。調べてみると体内の【魔力】がカラッポだったらしいんだ。盗賊の頭は【魔法】を使えたらしいからまだわかるんだが、その部下二人は【魔法】が使えなかったから、どうして【魔力】がカラッポだったのかが不明だったってよ。」

「そうですか。ところでもう通ってもいいですか？」

「ああ、すまねえな。引き留めちまって。気になったら誰かに聞い

ちまうんだよ。」

「まぁ、分からないでもないですが…それでは、また来たときはよろしくお願いします。」

「ああ、入国税を払ってくれればいつでも通してやるからな。」

「それでは…」

そうして私は【グラブス】を発ちました。

「さて、【アンヴィーラ】は東ですか。ま、ゆっくり行きますかね。」

私はゆっくりとした足取りで【アンヴィーラ】を目指しました。

「ところで東ってどっちでしょうか?」

…目指しました。

## 第八話・市場…それは店と客との戦いの場（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

主人公は二つの騒ぎに関係していますがとぼけているだけです。

それと【魔法】については説明にあった通りです

理解できない点があれば、なるべく答えたいと思います。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第九話・旅は道連れ世は情け、仲間が増えました（前書き）

はい、第九話投稿いたしました。

今回は本格的な【魔法】が出てきます。

珍しい戦闘シーンもある！？

とは言っても、数箇所だけですが…

ばってん、第九話、始まり始まり…

# 第九話・旅は道連れ世は情け、仲間が増えました

【グラブス】を発ち【アンヴィーラ】へ向かって早三日。

イーナこと伊那楓です。

結局東がどの方向かわからずに、門に戻って聞きましたよ。

方位磁石が１００Ｓでした。

まぁ、これからも必要なものなので迷わずに買いましたけど。

あと、ここに来るまでに【グラブス】へ行く商隊と出会いましてね。

なかなかに良い物を買いましたよ。

何を買ったかって？それは秘密です。

あとの方が楽しみも多くなるでしょう？

それに、もうそろそろ【アンヴィーラ】が見えてくるはずですしね。

あとどれくらいで【アンヴィーラ】に着くのかと考えていると、【レーダー】に反応がありました。

距離から見て、道から外れた茂みの奥２０ｍくらいの場所ですかね？

緑の点が複数の緑の点に追いかけられています。

「おかしいですね…」

野生の動物なら草食動物が肉食動物に追いかけられているのが自然です。

私の【レーダー】には肉食動物が赤い点で表示されるのは確認してあります。

それなのに緑の点同士が？

私に害意が無いので関係ないと言えば関係ないんですが…

「行ってみましょうかね。すぐ近くですし。」

何となく気になったので行ってみることにしました。

草が生い茂っていてよく見えなかったので【霊力浮遊】で木々の上を浮かびながら目的地に着きました。

もちろん目はつぶっていましたよ？

【レーダー】を確認しながらおりる場所を決めました。

浮遊感もなくなり地面に足が着いたことに安心していると周りから声が聞こえます。

「なんだお嬢ちゃんは？」

「そこにいると危ないぞ。とっとと道に戻りな。」

見まわしてみると、そこには傷付いた小さな白い竜が倒れていました。

どうやら気を失っているようです。

この竜は…

「私は何か音がしたので来てみたんですが…おじさんたちは何をしているんですか？」

服装は【地球】の洋服と変わりませんが、片方が羽織っている小奇麗なマントが目を引きます。

「ああ、俺たちは貴族からの依頼でな。竜がこの森で目撃されたからって貴族がそれを欲しがってな。」

「この竜を見逃すわけには…」

「ああ、そりゃ無理だ。なにせ、生け捕りで２００００Ｓの依頼だ」

「そうだ、それもあと一歩で達成できるしな。」

「金の為…ですか。」

「いや、金の為でもあるが、貴族からの依頼を成功させると今後も安泰なんでな。」

「【アンヴィーラ】の貴族は金羽振りもいいし、依頼を成功させると――ぐっ、なんだそ――」

最後まで言葉を言わせずに、プラズマライフルを撃ち【魔力障壁】を減衰させながら、レーザーライフルを撃ち、意識を断ちました。

「もういいです。うんざりしました。」

「なんだそりゃ？【魔具】か？」

仲間がやられたというのに、私のレーザーライフルとプラズマライフルについて聞いてきます。

「なんでもいいじゃないですか。これから戦う相手に説明する必要もありません。」

「まあ違いないな。それじゃ、お嬢ちゃんを叩きのめしてから、その竜を捕まえることにするか。」

そう言ってから男も杖を構えました。

「中級魔法【フレイムアロー】！」

そう言い、男は火でできた矢を私に向けて放ってきました。

私はそれに向けてプラズマライフルを撃ちこみます。

すると…

「は…？お嬢ちゃん何したんだ？」

【魔法】は【魔力】でできています。

そして【霊力】と【魔力】は互いに打ち消しあう性質を持っていると仮定しましたが…

「どうやら、当たっていたみたいですね。」

プラズマライフルで【フレイムアロー】を掻き消すことが出来ました。

【魔法】は【魔力障壁】でしか防げず、相対する属性の【魔法】でないと相殺することはできません。

それに、相殺をすると爆発したり破裂音が鳴ったりと何かしら反応があるはずですが、それもありませんでした。

この世界の常識を覆したので、この反応も当然でしょうね。

もし掻き消せなくても【霊力障壁】に守られているので、ダメージは通りませんでしたけどね。

「言ったでしょう?説明する必要はない、と。」

呆然としている男にプラズマライフルを撃ちこみます。

「んだこりゃ!?【魔力障壁】が!?」

レーザーライフルをしまい、レーザーブレードを取り出しました。

【魔力障壁】がなくなったことに驚いている男に一気に接近し、ブレードで切り付けます。

気絶しないように加減はしましたよ？

「ぐ…【魔力】が…」

そろそろ限界の様ですね。

「さて、あなたは戦闘不能、もう一人は気絶。私の勝ちでいいですかね？」

「ああ…？ふざけんじゃねぇ…こんなガキにやられてたまるかよ…」

そう言って、なけなしの【魔力】を振り絞って【呪文】を唱えようとします。

「上級魔法！【ブレイズ――――」

「遅いですよ？」

上級魔法を使おうとする男に再び接近し、ブレードで切り付けます。

「く…そ――――」

「気絶しましたか。」

気絶させないように加減したのが仇になりましたか。

上級魔法が使えるという事は、高位の魔法使いだったようですが…

【魔力】が足りないのに【魔法】を使おうとすると暴走の危険性が

大きいですからね。

それに上級魔法が暴走でもしてしまったら、この辺一帯が吹き飛んでいたかもしれません。

意識を失っている彼らを一瞥します。

ここは自然豊かな森の中、無防備で意識を失っている彼らを動物達が放っておくはずがありません。

しかし、弱肉強食の世界では隙を見せたものから死んでいくのは当然のことです。

「まあ、生きて帰れることを願いますよ。」

気を失っている白い竜を腕に抱き、その場を後にしました。

数時間後
閑話休題

あれから数時間たちましたが、まだ竜は目を覚ましません。

【アンヴィーラ】は見えているんですが、今日は野宿ですね。

「それにしても、竜の子どもですか…」

この世界の【魔獣】の頂点に君臨しているのが竜です。

数が少ないながらも赤、青、緑、黒、白と色の違いがありますが、その中で最も高貴であり、最も力を持っているのが【白竜】です。

その鱗は【魔法】が通用せず、吐く息（ブレス）は【魔力障壁】をやすやすと貫通し、空を飛んだ時に起きる風は台風に匹敵する。

その存在自体が天災と同等に恐れられています。

しかしそれも成体になってからの話、子どもの間はそういった特徴もないので親に守られている、ハズなんですが…

この竜が襲われていた時に、成体の竜は確認できませんでした。

【レーダー】を出して広範囲を確認したので間違いないです。

巣から飛び出してきてしまったんでしょう。

母竜に見捨てられたか、あるいは…

見捨てられたのはありえませんね。

竜は天災の象徴と同時に、母性の象徴としても崇められています。

それほどまでに子どもを大事にする竜が子どもを捨てるなんて…

「あなたも…」

まだ小さいこの竜が一人で生きていけるほど自然は甘くありませんし、先ほどのような【人間】にも狙われるでしょう。

それに抗えるハズもなく捕まり、その末路は…

「でも、決めるのはあなたです。私は強制しません。」

燃える焚火の明るさが私たちを照らしています。

竜の頭を優しく撫でる。

まだ柔らかい鱗が冷たくて気持ちいいです。

「でも、できれば…」

言葉を続けようとした時に、竜の体が動きました。

もう目を覚ましますかね。

竜は頭の良い【魔獣】なので、話せば通じると思いますが…

竜は目を覚まし、辺りをキョロキョロと見渡しています。

「起きましたか？ああ、大丈夫です。危害を加えるつもりはありませんよ。」

【魔獣】は悉く【魔力】に敏感です。

その中でも竜は特に【魔力】に敏感な【魔獣】です。

【魔力】と似た【霊力】にも敏感なハズです。

なので、警戒させない為に【霊力障壁】は展開していません。

私の声を聞いて驚いたのか、体を震わせています。

「お腹が空いたでしょう?干し肉もありますので食べてもいいですよ。」

そう言って干し肉を差し出しますが、警戒しているのか食べようとしません。

「私は寝ますが、あなたは自由にしてもいいですよ。干し肉を食べても食べなくても、森に戻るのも戻らないのも自由にしてください。でも、これだけは言っておきます。次にあなたが【魔獣】や【人間】に襲われても助ける気はありません。それだけです。では、おやすみなさい。」

まあ【霊力障壁】を展開しなくても大丈夫でしょう。

朝起きたら竜はどうしているのか。

まあ、行動を強制する気はありません。

自分で決めないと意味がありませんので…

## 閑話休題（朝になりました）

朝、懐のほのかな暖かさで目が覚めました。

懐を見てみると竜が丸まって寝ていました。

自然と頬が緩んでしまいます。

「やっぱりあなたも…」

昨日はあんなに怖がっていたのに、気を許してくれたようで嬉しい限りですね。

「ほら、起きてください。」

頭を優しく叩くと、眠そうな目をして目を覚ましました。

「キュ？」

涙で目を潤ませながら、首を傾げこんな声を出しました。

こ…これは！？

心の底から湧き上がってくる衝動のまま、竜を抱きしめてしまいました。

「キュッ！？キューッ！」

竜は嫌がって暴れながらジタバタもがいて…

「あ、ああ！すみません！」

これが天災とまで呼ばれている竜の恐ろしさですか。

なるほど、これは太刀打ちが出来ませんね。

竜はこちらを警戒するように離れてしまいました。

「本当にすみませんでした。で、でもあなたもいけないんですよ！？そんな目でこっちを見るから…」

「キューッ！？キュッキュッキューッ！」

と、まるで『なんだと！？そっちが急に抱きしめてきたんじゃないか！』と言っているように吠えながら、頭の上に飛び乗って噛み付いてきました…って！

「い、痛い痛い！すっごく痛いです！」

子どもと言っても、竜の中でも最強と呼ばれている白竜です。

その噛む力はなかなかの物。

まだ牙が生え揃っていないから良かったものの、所々に生えている短い牙が確実に頭に食い込んできます。

「は、放してくださーい！」

私の声は晴れた青空によく響きました。

数分後

閑話休題

「ふう…ようやく放してくれましたか。ってそんな目で睨まないで下さいよ。」

白竜は半分閉じられているような目でこちらを睨んできます。

「さて、そろそろ行きますか。」

【アンヴィーラ】に入国しようと荷物をまとめていると…

「キュ？キュッキュッキュ！」

どうやら私の頭の上が気に入ったのか、小さな翼を激しく動かして頭の上に乗ってきました。

あ、髪長いからって掴まないでくださいよ。

「おや？一緒に来るんですか？」

「キュッ！」

竜は『あんた面白そうだからついてくぜ！』とでも言いたげによく響く声で返事をしました。

「まあ、着いてくるのは勝手ですが…」

【アンヴィーラ】を臨み、旅の仲間も増えましたね。

「まあ、いいです。旅は道連れ世は情け、とも言いますし。情けをかけるかはわかりませんが…」

旅の仲間も増え、これからどうなっていくんでしょうね？

私たちは【アンヴィーラ】に向けて歩みを進めました。

「そういえば…竜って入国してもいいんですかね？」

「キュ？」

【アンヴィーラ】への道のりは短いです。

## 第九話・旅は道連れ世は情け、仲間が増えました（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

白竜は仲間になりたそうにこちらを見ている。

仲間にする

抱きしめる↑

ということで白竜が仲間になりました（笑）

ちなみに白竜は主人公の頭の上がお気に入りポジションです。

無理やり剥がそうとすると頭に噛り付いて離れません。

そして主人公の髪は長いです。

肩甲骨の辺りまで伸ばしている黒髪です。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

# 第十話・ギルドへの登録ってアルバイトみたいなものですか？（前書き）

はい、第十話投稿いたしました。

主人公がギルドに登録します。

ギルドって定番ですよね。

書いてて自分でも混乱してきた（笑）

けんども、第十話始まり始まり…

# 第十話・ギルドへの登録ってアルバイトみたいなものですか？

なんとか【アンヴィーラ】に入国できました。

イーナこと伊那楓です。

やはり竜、それも最強種と呼ばれている【白竜】です。

人目につくと騒ぎにもなりそうです。

なので、なんでも入るこの袋に入るように言ったんですよ。

しかし、頭の上が気に入っているらしく離れようとしてくれません。

離れるように言っても

「キュッキュッ！」

って言いながら、首を振って拒否します。

無理矢理剥がそうとしても頭に噛み付いて離れようとしません。

その度に私の頭が痛くなります。

仕方が無いので【アンヴィーラ】に着いたら果物を買ってあげるって言ったら、渋々ながらも頭から離れてくれました。

袋に入ることにも難色を示したものの、これも果物で手をうってくれました。

どうやらお肉より果物の方が好きなようです。

それでも、袋の中が嫌なのか、袋から頭だけ出しています。

…なんとか隠し通しましたよ？

ちなみに入国税は１０００Ｓでした。

手持ちが全くなかったので、袋から指輪を全部出し、ここでも【鑑定魔法】で換金してもらいました。

なんと、そしたら全部で３００００Ｓもしました。

どうやら指輪の一つが希少な【魔具】だったようで、それが高値だったようです。

袋の中身は首飾りと食料、それと竜です。

一つだけ異色ですね…

とりあえず宿を見つけましょうか。

## 閑話休題（宿発見）

なんとか宿を発見して、とりあえず三日ほど宿を取りました。

ギルドに登録さえすれば、他の国でも依頼が受けれるとベルさんも言っていましたし、長居する気もありません。

【アンヴィーラ】に来た目的はギルドに登録するためですよ？

しかし、この宿はただ寝るためだけの物だったので、朝食と夕食は出ません。

そして、袋の中の食料を確認しようとしたんですが…

「で、何故あなたはこんなことを？」

「キュ…キュキュゥ…」

「いえ、そんな事は聞いてないんですよ。」

『い、いやお腹が減っていたもので…』とでも言っているかのようですが、目を見ると目をそらします。

袋の中は、綺麗に食べられた果物の食べかすと、干し肉数枚が入っていました。

本当に果物がお好きなようで…

「まあ、果物を食べたことは許しましょう。また買えば済むことです、あまり置いておいても腐ってしまいましたし…」

「キュッ…キュキュッ！？」

『ほ、本当か！？』とでも言っているように、嬉しそうに声を出しています。

「しかしですね…」

「キュ？」

「何故果物だけなんですか！私も食べたかったのに！」

【グラブス】で買った果物が【アンヴィーラ】にもあるとは限りません。

あのアルモはお気に入りだったのに…

「キュ！？キューッ！？」

『な、なんだと！？あんなにまずかったのに！？』と言っているような目で、こちらを変な目で見てきます。

「まずかったのなら残しておいてくださいよ！まだ五個もあったのに！」

今日も今日とて平和です。

閑話休題（ギルド発見）

ギルドを発見しました。

宿から歩いて十分ほどの場所で、かなりの大きさです。

入ってみると中は体育館のように広くて薄暗く、人がたくさん椅子に座っています。

奥の方にカウンターがあるのでそこで登録をするんでしょう。

到着するまでにまわりから『なんであんなガキが？』とか『ガキがギルドに来るんじゃねぇよ…』と言われていたようですが、放っておきましょう。

さて、カウンターに到着しましたが向かいの席には、綺麗な女性が座っていました。

「はい、ギルド【セントル】へようこそ。私は当ギルドの受付をしております。リーナ・マテイカと申します。今日はどのような件で？」

「あの…ギルドの登録をしたいんですけど…」

「はい、ギルドの登録ですね？では、この用紙に書いてあることを読んでサインをお願いします。」

渡された紙には、Ａ４用紙に細かい文字でビッシリと書いてありました。

「ずいぶんと多いですね…」

「はい、やはりきちんと読んでもらってから、納得してもらわないといけませんので。」

そこに書いてあることを要約すると、こんな感じです。

1. ギルドは依頼者とギルド員との仲介をする組織であり、そこにトラブルがあってもギルドは一切関与しない。

2. もし依頼中に負傷、又は死亡したとしても、ギルドは賠償、損害、その他一切の責任を負わない。

他にも細々と書いてありましたが、大事なのはこの二つですね。

「わかりました。この紙にサインをすればいいんですね。」

そこにイーナと書き込みました。

「はい、イーナさんですね。ではこのギルドカードをお受け取りください。」

そういって渡されたカードには私の顔写真と名前、依頼の受諾数が書いてありました。

「このカードを紛失されると、カードに記載されていた事項も無効になります。再発行はできませんのでご注意ください。」

「あの、ここに空白がありますけど、なんでしょうか?」

カードの左半分に顔写真、右上から名前、依頼の受諾数と書いてあり、右の下半分が空白です。

「はい、それを説明するにはギルドのシステムから説明しなくてはいけませんが、よろしいでしょうか？」

「よろしくお願いします。」

「それでは…世界には【アンヴィーラ】の他に、東に【オーガニー】西に【アナリティカ】南に【アプライド】北に【フィジカ】があり、それぞれの国にギルドがあります。東の【オーガニー】には【エアスト】西の【アナリティカ】には【エスト】南の【アプライド】には【ソートフ】北の【フィジカ】には【ノルス】があります。それぞれの国に属している町にもギルドがあります。よろしいでしょうか？」

「はい、続けてください。」

「そして、それぞれが【Ｎｏ．】で【Ｎｏ．１】から【Ｎｏ．４０】まで３９人が順位付けがされています。そして【Ｎｏ．】を持っているものには、このマントが支給されます。」

そう言ってマントを取り出しました。

「【Ｎｏ．】ですか？」

「はい、例えばですが…【アンヴィーラ】を中心に依頼を受けている【Ｎｏ．３９】がいるとします。その人のカードには【アンヴィーラ・Ｎｏ．３９】と書かれることになります。書くか書かないかは本人が決めることが出来ますが、書いておくことでその国で優遇が受けられますので、書いておくことをお勧めします。」

「わかりました。ところで【Ｎｏ．】を得るには？」

「それには【Ｎｏ．４０】に勝利する必要があります。基本的に上の【Ｎｏ．】は下の【Ｎｏ．】との決闘の拒否権がありません。しかし、【Ｎｏ．４０】といっても選りすぐりの中の一人ですので、簡単には勝てません。」

「じゃあ【Ｎｏ．】ってどうやって決まるんでしょう。」

「はい、この順位は年に数回【アンヴィーラ】で開催される試合で【Ｎｏ．６】から【Ｎｏ．４０】まで決められます。その他にも、上の【Ｎｏ．】と決闘をして、勝利するとその【Ｎｏ．】を得ることができます。しかし【Ｎｏ．１】から【Ｎｏ．５】はそれぞれの国と契約を結んでおり、交代することはほとんどありません。【Ｎｏ．１】から【Ｎｏ．５】の【Ｎｏ．】を得るためには【Ｎｏ．６】になってから一対一の決闘を申し込み、それに勝利する必要があります。なお、現在の【Ｎｏ．２】から【Ｎｏ．５】ですが、それぞれの国の象徴になっている【属性魔法】に特化しており【アンヴィーラ・Ｎｏ．１】はすべての【属性魔法】を極めています。」

「なるほど、大体わかりました。」

「わかってもらえたようで何よりです。それと、これは警告ですが…」

「はい？なんでしょう？」

「もしも…ギルドに所属している間に殺人などの犯罪が目に余るようでしたら【Ｎｏ．１】から【Ｎｏ．５】までのいずれかが粛清に向かいますのでご注意ください。」

リーナさんが目を鋭くして告げました。

「そういうことを言う、ということは以前にそのようなことが？」

「はい、聞いた話になりますが、百年ほど前に一人だけ、当時の【Ｎｏ．１】から【Ｎｏ．５】が粛清に向かいましたが、【Ｎｏ．１】【Ｎｏ．２】【Ｎｏ．５】は死亡【Ｎｏ．３】と【Ｎｏ．４】は重症を負いました。なんとか粛清はしたようですがね。その犯罪者ですが【Ｎｏ．３９】と【Ｎｏ．】は最低位だったんですが、その強さはかの【白竜】を上回る程だったらしいです。今では半ば伝説のようになっていますがね。」

「犯罪者、といってもどういった罪ですか？」

「これも聞いた話ですが、当時の【オーガニー】【アプライド】【フィジカ】に壊滅的な被害をもたらし【アンヴィーラ】は半壊。故郷と言われていた【アナリティカ】もほぼ壊滅です。世界の人口の五分の二が死亡したと伝えられています。驚くところがこれが一晩の間に行われたところです。」

「一晩で、ですか？」

「どうやったのか、何故あのようなことをしたのかは今も分かっていません。ギルドではこれを忘れない為に【Ｎｏ．３９】を欠番としています。」

「なるほど、それで３９人と言ったんですか。」

「はい、説明は終わりましたが…イーナさんっておいくつですか？」

「どうしてそんなことを聞くんです？」

「いえ、見かけは魔法学校に入学したての子どもなんですが、それにしてはやけに落ち着いていますし…」

「まあ、２０歳は超えていますよ。」

「…もしかして【エルフ】ですか？」

「いえ、人間ですよ。」

そういって耳を見せます。

「…本当ですね。何度も【エルフ】を見ていますが…【エルフ】と間違えてしまってすみません。」

「いえ、気にはしていませんので。」

「それにしても【エルフ】じゃなくてよかったですよ。もしかしたら殺されていたかもしれませんし…」

「どういう事ですか？」

「いえ、数年くらい前からなんですがね。ギルドに登録した後の【エルフ】が次の日に殺害される事件が起きているんですよ。犯人の痕跡が全くないからギルドにも手が出せなくて、放置されている状態ですが。」

「へぇ、私も狙われてしまいますかね？背も小さいですし。」

「まあ、ここ数年は【エルフ】が登録に来ることも少なくなりましたから、大丈夫だと思いますけどね。」

「それじゃあ、今日は依頼を受けて帰りますよ。」

「そうですか。依頼はあの依頼板に張ってありますので、選んだらこちらに持ってきてください。」

「分かりました。いろいろありがとうございました。」

お礼を言って依頼板に向かいます。

依頼板を見てみると、たくさんの紙が無造作に貼られています。

上に新しいのが貼られているんでしょうか？

ペラペラと捲っていくと丁度いい依頼を見つけました。

「これでいいですかね？」

それを受付に持っていきます。

「あ、イーナさん。依頼決めましたか？」

「はい、これお願いします。」

「承りました。少々お待ちください。」

「そういえば、この依頼ずいぶん下の方にありましたけど…」

「ああ、そのことですか。あまり人気のない依頼は受注する者も少なくてですね。こういった採取系の依頼は特に人気が無くって…基本的には三日受注者がいないと、専属ギルド員たちが受注することになるんですが…」

「専属ギルド員ってなんですか？」

「その国のギルドと専属契約を結んだ者たちのことですよ。契約した国のギルドでしか依頼を受注できませんが、国によって様々な好待遇を受けられます。それに、一定額の給料も出ますのでギルド員よりは安定していますかね？」

なるほど、ギルド員はアルバイト、専属ギルド員は正社員、ってところですか。

「まあ、ギルド員の方が色々な国を周ることができるので、冒険者には向いていますけど…はい処理が終わりました。これで依頼を受けられますよ。依頼品をこの場所に持ってきたら報酬をお支払いいたします。」

「わかりました。それじゃあ、行ってきます。」

「あ、待ってください！イーナさん！」

「え？なんです？」

「大事なことを言い忘れてました。ギルドでは完全実力主義を採っていまして。依頼には複数のギルド員が受注する場合があります。依頼を受けている時に、他のギルド員が成果を横取りしようとして

も、それはご自身で対処してください。」

「それは、どういった意味でですか？」

「どう対処するかはご自身の判断です。素直に引き渡すか、抵抗するのかも、すべて自由にしてください。それと、相手が【Ｎｏ．】を持っていた場合にギルドカードを奪って、受付に提出すれば、その【Ｎｏ．】を自分の物にできます。」

「それってかなり無茶なんじゃ…」

「はい、このギルドが出来て以来、達成した人はまだ数人ほどしかいません。まあ、【Ｎｏ．】を持っているってことはそれだけ強いってことです。」

「まあ、心に留めておき――」

ますよ。と続けようとしたら入口の扉が乱暴に開かれ、ギルドの中が一瞬だけ静まりました。

扉を開けたのはまだ若い男の人のようです。

その人がこちらに近づいてきます。

「おっと、ごめんな嬢ちゃん。まだ話し中かい？」

「いえ、私はもう用事が済みましたので。」

そう言って受付から離れ、ギルドから出ました。

ギルドの中が騒がしいようですが、まあいいでしょう。

さて、森に採取に行きますか。

閑話休題（採取終了）

ふう、ようやく終わりました。

依頼にあったネスラー草とサルド草がなかなか見つからず、夕方近くまでかかってしまいました。

ギルドに入るとざわざわと騒がしいですね。

「あ、リーナさん。依頼終わりましたよ。」

「イーナさん。ご苦労様です。では、依頼書にあったものをこちらに。」

「はい。ネスラー草とサルド草です…あ。」

それぞれを袋から出そうと思ったところ、【白竜】が袋から頭を出してしまいました。

すぐに頭を掴んで押し込めましたが…

リーナさんを見ると、目を見開いてこちらを見ていました。

「い、イーナさん。今のは…」

「いえ、まったく、ちっとも、全然、何も見えませんでしたが。どうかしましたか？」

内心冷や汗ダラダラで答えました。

「い、いえ【白竜】みたいなものが見えたものですから…」

「気のせいではないですか？こんな小さい袋に【白竜】なんて入るはずないでしょう？」

そう言って袋を見せます。

「そうですか…【エルフ】が作る、なんでも入るカバンがあると聞いたことがあるので…」

「へえ、そんな便利なものがあるんですか。ぜひとも欲しいものですね。」

なんとかごまかせたようですね…

リーナさんに依頼料の７００Ｓを渡されました。

「それじゃあ、これで…ところでどうしてこんなに騒がしいんですか？」

「ああ、この騒ぎですか？イーナさんがいるときに男の人が来たじゃないですか？その人が【Ｎｏ．１７】のギルド員を倒したって騒

ぎになっているんですよ。」

「へえ【Ｎｏ．１７】を…ですか。」

「その人が今日の朝に倒したっていうことでですね。騒ぎになっているんですよ。」

「その人がどうやって【Ｎｏ．１７】を倒したんでしょうかね？」

「さあ…そこまでは。でも本当に凄いですよね。【Ｎｏ．１７】はいつも数人のグループで行動しているんですが、その人たちごと倒したって事なんですから。」

「なるほど、【Ｎｏ．１７】っていうのはそこまで強いんですか。」

「それはそうですよ。火の上級魔法を使って、実力で【Ｎｏ．１７】までになったんですから。それを倒した男性はそれ以上の強さのハズですよ。」

「ふーん、そうですか。」

「【Ｎｏ．１７】にもなると、上位クラスの強さですからね。ギルドも専属契約しようと動いていると思いますよ。」

「まあ、理解しましたよ。それでは、また明日にでも来ます。」

「はい、では。」

さて、宿に戻りますか。

決めたいこともありますし。

## 閑話休題（宿到着）

さて宿にも到着し、夕食も食べ終わりました。

【白竜】はもちろん果物しか食べなかったですよ。

「さてと、お腹もいっぱいになりましたね。」

「キュ…キュウゥ…」

お腹がいっぱいになって【白竜】が眠そうに目をこすっています。

「でも、寝るのはちょっと待ってください。」

そう言って【白竜】を膝の上に乗せます。

【白竜】もさすがに食事の時は頭から降りてますよ?

「決めたいことですが…だから寝ないでください。大事なことなんですから。」

眠たそうな【白竜】の頭を撫でながら話しかけます。

「決めたいのはですね…あなたの名前です。いつまでも名前を呼ば

ないわけにもいかないでしょう?」

「キュウ…キュッキュッ…」

「それであなたの名前ですがね…リリウムはどうでしょうか?」

「キュウ…?」

「この名前はですね。私の世界の…花の名前です。あなたのように…いえ、リリウムのように白くて、綺麗な花の名前です。それに…いえ、これはリリウムが大きくなったら言いましょうか。今のリリウムには似合いません。」

「キュ…」

私には竜の言葉は分かりませんが『いいよ…』とでも言っているようでした。

リリウムに毛布を掛けて、ベッドに横になります。

「これからよろしく、リリウム…」

「キュウ…」

目を閉じ、眠りにつきます。

意識がなくなる前に…

懐が、ほのかに暖かくなった気がしました。

## 第十話・ギルドへの登録ってアルバイトみたいなものですか？（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

【Ｎｏ．１７】までいくと一般の魔法使いじゃ太刀打ちができません。

それ以上の【Ｎｏ．】でもないと相手にならない、ハズですが…

まあ、弱肉強食、実力主義、勝ったものが強く、負けたものが弱い、そんな世界ですからね。

ちなみにリリウムってのは百合の学名ですよ？

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第十一話・ダチョウは空を飛ばないのではなく、飛べないのです（前書き）

はい、第十一話投稿いたしました。

戦闘シーンが少ないのは仕様です。

ええ、仕様ですとも。

決して苦手なわけじゃ…

ない…はず？

まあ、第十一話始まり始まり…

# 第十一話・ダチョウは空を飛ばないのではなく、飛べないのです

おはようございます。

イーナこと伊那楓です。

それと、私の旅に着いてきた【白竜】の子どものリリウムです。

そういえば竜の生態には謎が多いんですよね。

なぜですかって？

比較的捕まえやすい子竜を捕まえようとしても、親が守っているので排除されるからですよ。

リリウムは本当に例外です。

それに、長く生きた竜は人間に擬態することも可能だと言いますし。

まあ、私の生きている間には見れなさそうですが…

それはそうと、昨日はギルドに登録をしました。

今日もギルドで依頼を受けることにしましょう。

リリウムには引き続き、袋の中に入ってもらいます。

それにしても、私の頭の上がそんなにいいものなんですかね？

まあ、この国から出て、他の国に行く道中には袋から出して頭に乗せてあげますか。

## 閑話休題（朝食後）

さて、ギルドに到着しました。

昨日に引き続き、中はざわざわと騒がしいです。

受付には昨日に引き続き、リーナさんが座っていました。

「おはようございます。リーナさん。今日も騒がしいですね。」

「はい、おはようございます。いつもならこの時間はもっと静かなんですけどね。やっぱり昨日の件がありますから。今日も来てますよ。ほら、あの人ごみの真ん中に。」

どうやら昨日の男が騒ぎの中心のようですね。

「まあいいです。それじゃ、今日も依頼を受けたいと思いますので。」

「そうですか。それじゃあ依頼板から選んで持ってきてくださいね。」

そして依頼板を見に行きます。

「さて、何がいいですかね。」

依頼板の中でも、ジャラスの駆除、ネスラー草の採取、大岩の排除が目を引きます。

とりあえず全部持っていきますか。

「それじゃ、これお願いします。」

「はい、ジャラスの駆除、ネスラー草の採取、大岩の排除ですね。承りました。少々お待ちください。」

処理が終わるのを待っていると大きい声が聞こえてきました。

「ああ!?ふざけてんのか!俺ぁ、【Ｎｏ．１７】だぞ!そんな端金で使われてたまるか!」

件の男が何か揉めているようです。

そばにいた女性に話を聞きます。

「あの男の人、どうかしたんですか?」

「え?ええ【Ｎｏ．１７】になったから、他のチームから勧誘が来てるの。でも金が少ないって威張り散らして、でも【Ｎｏ．１７】は相当強いから反抗もできなくって。」

なるほど、よくあることですね。

強いものを自分で倒し、自分の力を過信する。

まだ自分より強いものなど、たくさんいるのに…

しかし、自分の力を過信するならまだしも、それどころか…

「ありがとうございました。それでは依頼がありますので…」

「あ、ちょっと待って。」

女性に呼び止められます。

「どうかしましたか？」

「あなたもギルド員なんでしょ？私のチームに入らない？」

「いえ、私は一人でいる方が気楽ですし、もうすぐこの国から離れる予定ですので。それにギルドに登録したのは昨日ですよ？」

「そうなの？」

「ええ、これから依頼を受けて、明日にでも出るつもりです。」

「じゃあ、チームに入るわけにはいかないわね。私のチームはこの国を中心に活動してるから。」

「でしょう？ですから、いいんです。」

「イーナさん。処理終わりましたよ。」

リーナさんに呼ばれました。
あまり待たせても悪いですね。
「それでは…」
「ええ、今度会ったときはよろしくね。」
だからチームに入る気はないですって…
それはそうと、受付に行きます。
「イーナさん、それじゃあ依頼ですが、ネスラー草の採取は昨日受けたからわかると思いますが、ジャラス十匹の駆除なんですが…」
ちなみにジャラスというのは、ダチョウのような空を飛ばない【魔獣】です。
【魔獣】というのは【魔法】を扱う動物の総称です。
この【魔法】は人間の扱う【魔法】とは厳密に言えば違うものですが…
【魔法】を扱うということは、同時に【魔力障壁】も展開しています。
この【魔法障壁】の存在が、依頼者がギルドに【魔獣】の駆除を依頼する一番の原因です。

【魔法】を使えない【人間】にとって【魔力障壁】が一番の壁ですから。

そこまで強くないので、一匹程度なら魔法学校を卒業した程度の腕前で倒すことが出来ます。

しかし十数匹単位の群れで行動していますので、あまりに多いと倒しきれないことも多々あります。

このジャラスは風の【魔法】を使います。

【人間】でいう初級と中級の間くらいの威力ですかね？

「ジャラス十匹の駆除なんですが…倒した証拠として、尾羽を一枚抜きとってきてください。」

「尾羽…ですか？」

「はい、そこがジャラスにとっての【魔具】なんですよ。それを加工して【魔具】を作ったりもしますよ。」

「でも、尾羽っていっても…」

「大丈夫です。一本だけ鮮やかな色の羽がありますから。それを抜き取ってくれれば大丈夫です。」

それなら大丈夫ですかね。

「分かりました。」

「それと大岩の排除なんですが、これは近くの町からの依頼ですので、その町の町長さんに会ってから現場に向かう形になります。その町で報酬も受け取ってください。」

そうなんですか…

「わかりました。では、採取と駆除を終わらせてから、その町に行くことにしますよ。ところで、その町の名前は？」

「ええっとですね。この国から北に行った【コーラル】という町です。」

北ですか…【アンヴィーラ】でもう用事もないですし、終わったついでに【フィジカ】にでも行きますかね。

宿も引き払った方がよさそうですね。

「それじゃあ、早いところ終わらせてきちゃいますね。」

そう言ってギルドを出ます。

じゃあ、急ぎますかね。

## 閑話休題（森に着きました）

さて、森に着きましたよ。

リリウムも袋から出ることが出来て、清々しそうな顔をしています。

もちろん頭の上に飛び乗ってきましたよ。

さてと、ネスラー草は森の色々な場所に生えているから大丈夫なんですが、問題はジャラスなんですよね。

この広い森の中でジャラスを探すのは一苦労です。

【レーダー】で探してもいいんですが、ジャラスは警戒心が強く、人間が近づくとすぐに逃げてしまいます。

やはり遠距離から狙うしかないですかね。

「まあ、とりあえず。【レーダー】」

広範囲を索敵するために【レーダー】を出します。

「多分これですかね？」

西におよそ２００ｍほどの場所に、十数匹が群れているようです。

逃げられない内に、連続で【霊力急進】を発動し、近づきます。

「キュッ！キュー！」

リリウムが悲鳴を上げているようですが、まあ…慣れですよ。

構っている暇もありませんし。

「やはり逃げますか、でも…」

ジャラスが逃げるスピードよりも、私が近づくスピードの方が確実に速い。

…見えてきましたね。

右腕にレーザーライフルを出し、近くにいた一匹を撃ちます。

鳴き声を上げる暇もなく気絶したようです。

まあ、弱めのレーザーライフルなのでその内に起きるでしょう。

それよりも…

「まあ、大丈夫でしょう。」

どうやら、仲間をやられて激怒しているようです。

ジャラスたちが数匹で固まっています。

風の【魔法】ですか…

その直後、ジャラスの風の【魔法】が発動し、木が切り刻まれ、地面が抉れました。

しかし…

「やはり【霊力障壁】を貫通できる程度ではありませんか。」

【霊力障壁】を展開させている私には届かず、僅かに減衰させる程度でした。

それもすぐに修復されますが…

「さて、結果はわかったでしょう？すぐに済みますので、安心してください。」

ジャラスが矢鱈滅多に風の【魔法】を発動させますが、私に届くわけもなく、無駄なだけです。

このまま無駄撃ちさせていても、【魔力】切れで気絶するのを待ってもいいんですがね…

「さすがに時間がかかってしまうので…」

左腕にもレーザーライフルを出し、近くにいたジャラスを銃撃します。

ジャラスが一斉に逃げ出そうとしますが、逃がしませんよ？

殲滅終了
閑話休題

いや、殺してはいませんよ。

ただ気絶させただけです。

まあ、十分もしない内に起きると思いますよ。

「それじゃ、必要なのは尾羽だけなので、失礼しますよ。」

一匹ずつ、色鮮やかな尾羽を抜いていきます。

なるほど、手触りがよく、綺麗な尾羽ですね。

必要な尾羽は十枚なので、数枚余りますね。

どうせなら貰っておきましょうか。

「キュー！キュー！」

「リリウムも触りたいんですか？ほら…」

リリウムにジャラスの尾羽を渡します。

リリウムが前足を器用に使って、羽を弄っています。

ちょっ、くすぐったいですって。

首は、首筋は弱いんですよ。

羽が首筋にさわさわと当たり、悶絶していると…

「おお、丁度いい具合だな。」

ギルドで騒ぎの中心にいた男が、茂みの奥から出てきました。

まあ【レーダー】で確認はできていましたが、今まで無視していたんですがね。

「それで、何の用ですか？」

「ああ、おれは【Ｎｏ．１７】だ。それで、俺もこの依頼を受けたんだ。これだけ言えばわかるだろ？」

依頼の横取りですか…

まあ、別にいいんですが…

「それでは、私が持っている尾羽を横取りする、ということですか？」

「まあ、そういうことだ。ジャラスの十匹や二十匹、楽勝だったがな。それにしても…」

【Ｎｏ．１７】が倒れているジャラスを一瞥します。

「なんでこいつらまだ生きてんだ？まあ、邪魔だしな。止め刺しといてやるよ。」

そう言い、持っていたナイフで、ジャラスの胴体を刺しました。

ジャラスは断末魔を上げて、息絶えたようです。

「で、とっとと証拠を渡してくれるか？それと、その【白竜】の子

ども貫っておこうか。高く売れそうだしな。俺は【Ｎｏ．１７】なんだ。戦いたくはないだろう？」

そう言って男は杖を取り出しました。

「さっきから…」

「ああ？」

「【Ｎｏ．１７】【Ｎｏ．１７】と何度も言っていますが、それを言う前に、実力行使でもなんでもすればいいじゃないですか。」

「は？」

「それをしないということは――」

【霊力障壁】に火でできた矢が衝突しました。

これは【火属性魔法】の中級魔法【フレイムアロー】ですかね。

中級魔法程度では、もちろんのこと私は無傷ですが。

「うるせぇんだよ！【Ｎｏ．１７】が本気を出せば、これくら――」

「【Ｎｏ．１７】なんですから、上級魔法くらい使えるでしょう？」

「な…てめぇは！」

「さて、どうしましょうかね？」

「キュー！キュッキュ！」

おや、リリウムもそう思いますか。

「やはり、実力で【Ｎｏ．１７】にならないと大したことありませんね。」

「…そりゃ、どういうことだ？」

「何を言っているんですか？元【Ｎｏ．１７】の人のギルドカードを奪ったんでしょう？」

「は、何を言ってやがる。それは俺の実力で――――」

「気を失っている人のカードを奪って、それを実力、と言いますか。」

「な！？」

「さあ、何故知っているんでしょうかね？あなたしか知らないハズの出来事を知っている。何故でしょうかね？」

「ま、まさか…」

「まあ、そんなことはどうでもいいんです。」

「は？」

「【Ｎｏ．１７】だった人も、その辺は覚悟出来ていたでしょうし、

特に追求するつもりもありません。」

「な、なら――」

「しかし、私はあなたを許すことはできません。」

ジャラスに使ったレーザーライフルよりも更に弱い、パルスライフルを出します。

実弾ではなくＥＮ…つまり【霊力】をマシンガンのように連射する兵器です。

そしてもう一つ、ハンドガンを出します。

これも威力が比較的弱く、実弾ですがね。

まあ、死にはしませんよ。

死には…

「な、なんだそりゃ!?【魔具】か!?」

「どうでもいいことです。あなたには、死ぬよりも苦しく、地獄よりも辛く、痛みで気絶をしても、更に強い痛みで目を覚ます。そんな目にあってもらいます。」

「キュー!キュキュッキュー!」

おや、リリウムも嬉しそうですね。

リリウムと出会ってまだ少ししか経っていませんが、リリウムも中々過激ですね。

まあ、そうでないと、私と一緒に旅なんてできないと思いますが。

「さあ、あなたには痛みを、苦しみを、悲痛を、苦悩を、与えましょう。そして、身体的に、精神的にも――」

「しょ、初級魔法【ファイアアロー】！」

初級魔法【ファイアアロー】が飛んできますが、【霊力障壁】の前には無意味です。

「――死んでもらいます。」

「キュー！」

さて、始めましょう。

一方的なものになってしまいそうですが…

## 第十一話・ダチョウは空を飛ばないのではなく、飛べないのです（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

主人公の怒る理由はただ一つです。

まあ、大体分かると…

分かりますよね？

ダチョウは地上を走ることに特化した鳥で、空を飛ぶことはできません。

しかし、その脚力たるや人間を殺してしまうとか…

街で見かけても決して近づかず、警察や保健所に連絡しましょう。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第十二話・ストーカーは犯罪です！（前書き）

はい、第十二話投稿いたしました。

今回は短いです。

まあ、次話への導入と考えてくだされば幸いです。

それそれ、第十二話始まり始まり…

# 第十二話・ストーカーは犯罪です！

お昼になりました。

イーナこと伊那楓です。

それと、リリウムは袋の中に入っています。

けれど、入るたびに果物を食べ尽くしてしまうのは、堪ったものでもありません。

まあ、お金はまだあるからいいんですがね。

しかし、節約するに越したことはないので、もう頭の上に乗せておきましょう。

袋の口を開けるとリリウムが飛び出てきました。

口が汚れている気がしますが…まあ、いいでしょう。

そして、定位置になっている私の頭の上に…

え？狙われるかもしれないって？

…まあ、大丈夫でしょう。

閑話休題（ギルド到着）

さて、ギルドに到着しましたよ。

え？あの【Ｎｏ．１７】がどうなったかって？

…知りたいですか？

まあ、そのうち発見されるでしょうから、そのうちわかりますよ。

いや、殺してはないですよ？

ただ色々な場所を撃ち抜いたりしただけですよ。

どうやら【魔力】の影響か、出血はすぐに止まっていましたがね。

最後の方は目の焦点が合っていなくて、口から涎を垂れ流しにしていた気もしますが…

まあ、ギルドカードは燃やしてきたので、あの男の【Ｎｏ．１７】としての地位は、どちらにしても終わりですね。

そんなことは置いておきまして…

「それじゃ、ジャラス駆除の証拠と、ネスラー草です。」

カウンターにジャラスの尾羽十枚と、ネスラー草を置きました。

「は、はい。それは分かりましたが…」

なにやら受付の人が青い顔をしています。
ちなみに、リーナさんは何やら用事のようで、今はいないようです。
「それで、報酬は？」
「い、いえ。あのですね…」
催促すると後ろから私の肩に手を置かれます。
「ほら、そんなにその子をいじめないであげて。まだ新人なんだから。」
この声は…
「ああ、リーナさん。どうかしましたか？」
「いや、そんなに普通に返されても…」
リーナさんは、やれやれといった風に、手を額にあてています。
「いやね、目の前に【白竜】を頭に乗せた子どもが来れば、こんな反応にもなると思うわよ？」
どうりで、私がギルドに入ってから視線を感じたり、ギルドにしては静かすぎると思いました。
「失礼ですね、リーナさん。私は子供じゃないですよ。」

「ツッコミどころはそこじゃないと思うけど…」

呆れたようにリーナさんが呟いています。

「それで、依頼金は？」

「ええ、今渡すわ。合計で１２００Ｓね。ほら、青い顔してないで、さっさと渡す。」

リーナさんが受付の女の人に告げると、お金がもらえました。

「で、その【白竜】はどうしたのよ？」

「それにしてもリーナさん。口調がちがいますね。」

「ええ、公私混同はしないから…って話をそらさない。」

「ちぇっ。別にいいじゃないですか。悪さをするわけでもないんですから。」

「キュー！」

「ほら、リリウムもこう言っていますし。」

「いや、竜の言葉なんてわからないから。で、どうするのよ。」

「え？なにがですか？」

「もう依頼も終わったんでしょ？」

「ああ、そのことですか。あと一つ残ってるので、終わらせようと思いますよ。」

「そうなの。それにしても…」

リーナさんはリリウムを一瞥します。

「その【白竜】だけど、狙ってるやつも多いから、気を付けなさいよ。」

「ええ、そのあたりは気を付けてますので、大丈夫ですよ。それでは、この国に来ることでもあれば、またよろしくお願いします。」

それだけ言ってギルドを後にします。

さて【コーラル】に行く前に…食料を買い込みますか。

特に果物が必要ですね。

リリウムが食べ尽くさないように大目に買っておきますか。

## 閑話休題（森の中）

さて【アンヴィーラ】を出たんですが【コーラル】に行く前にやらなければいけないことが出来ました。

【レーダー】を確認しつつ歩いていたんですがね、どうもつけられているようです。

理由はやはり…

「リリウムは人気者ですね。」

「キュ？」

リリウムを狙っていますか。

ギルドにいた者か、町で目を付けられましたかね。

まあ、覚悟はしていましたが…

確認できるだけでも赤い点が数個あります。

「はあ…面倒くさいですね。」

寝ている間に襲われても困りますし…

「いるんでしょう？出てきたらどうですか？」

【レーダー】通り、数人の男が木の陰から出てきました。

「それで、何の用事ですかね？」

「まあ、見つかったのは予想外だがな。さっさと終わらせるぞ。」

「おう。」

「ああ。」

答えるつもりはありませんか。

「まあ、いいです。向かってくるからには容赦はしませんよ？」

レーザーブレードとレーザーライフルを出し、戦闘態勢をとります。

彼らも杖を取り出しました。

さて、速いところ終わらせて【コーラル】に向かいますか。

## 第十二話・ストーカーは犯罪です！（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

袋に入る度に果物を食べ尽くすとは…

リリウム…おそろしい子！

リリウムの胃袋は底なしか！？

…調子に乗りました。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第十三話・爪が剥がれるとすごく痛いです（前書き）

はい、第十三話投稿いたしました。

前回が短かった分今回は長いです。

しかし、なかなか指が動かず、意味不明な場所があるかも？

あと、ちょっとだけ残酷な描写が有ったり無かったり。

さてさて、第十三話始まり始まり…

# 第十三話・爪が剥がれるとすごく痛いです

【アンヴィーラ】を出て二日ぐらい経ちましたかね？

イーナこと伊那楓です。

そして頭の上に乗って寝ている【白竜】はリリウムです。

今日は朝早くから歩き続けていますから、そろそろ着きそうです。

そう思っていたら町が見えてきました。

「ほら、リリウム、そろそろ着きますよ。」

「キュ…キュッ」

頭の上で背伸びをするとは…中々に器用ですね。

こら、髪で涎を拭わないでください。

なにはともあれ【コーラル】に到着しました。

閑話休題（町に入りました）

えーと…

なぜこんなことになっているんでしょう？

門が開けっ放しで、門番もいなかったので入ってみたんですよ。

周りには、弓を構えた人がズラリと。

ええー…

「この町に何の用だ！」

リーダーのような男が叫びました。

「いえ、私はギルドの依頼で――」

「頭に竜を乗せた奴の言うことなんて信じられるか！」

いや、まあそうなんですけどね。

「ほら、リリウムのせいですよ？」

「キュ、キュッキュー…」

リリウムはションボリしてしまいました。

そんなに気にしてはいませんがね。

「とりあえず、町長さんを呼んでくれませんか？この通り、依頼書もあるので。」

そう言ってギルドの依頼書を見せます。

【コーラル】の中は【アンヴィーラ】と比べると、どうにも活気があるとは思えません。

まあ、こんな森の近くにあれば、当然なのでしょうか。

「…そこで待っていろ。動くんじゃないぞ！」

私から依頼書を乱暴に奪い、町に消えて行きました。

町長さんの所にでも行ったんでしょうかね？

数分後
閑話休題

弓を向けられたまま立ち尽くしていると、先ほどの男性と一緒に、まだ若い男の人が走ってきました。

「す、すみませんでした！みんな、弓を下げて！」

町長と思われる男性が号令を出すと、一斉に弓を下げました。

「失礼しました。私は【コーラル】の町長をしています。ラザラス・コルベと申します。」

「いえ、当然の行動だと思いますよ？私はイーナと申します。頭の

上の【白竜】はリリウムです。」

「キューッ！」

リリウムも声を上げて挨拶をしました。

やはり、挨拶は大事ですよね。

「イーナさんですか？わかりました。それと、その【白竜】は…」

「大丈夫ですよ？勝手についてきただけです。」

「まあ、いいでしょう。それでは、こちらへどうぞ。」

町長さんに先導され、他の家より立派な家に案内されました。

「よく来てくれました。どうぞおかけください。」

家に通され、ソファーに座りました。

「それで、依頼の件なんですが…」

「あ、ちょっとその前にいいですか？」

「はい、なんでしょうか？」

「この町に入った時に気づいたんですが、少し竜に神経質すぎじゃありませんか？」

この町に入った途端に弓を向けられた。

竜を警戒するのは正しいが、警告なりなんなりして、追い返してもいいはずなのに。

それに、あの時の、あの男の目は…

「それはですね。率いていた男がいたじゃないですか？」

「あなたを呼んだ男ですか？」

「あの男は、リンドン・コルベと言いまして、私の父親なんですよ。」

「父親ですか？」

「はい、元はこの町の町長をしていたんですがね。もう…二十年ほど前になりますか。一匹の【赤竜】がこの町を襲いましてね。」

「【赤竜】ですか…」

「【赤竜】の火の息（ブレス）で、家は燃え、人が焼け、ここは【フィジカ】からも近いですから【土属性魔法】が使える人しかいませんでした。しかしそれが裏目に出てしまった。」

「裏目に…ですか？」

「【赤竜】の火の息で、土はマグマに、岩は火炎弾に、もう地獄でしたよ。私はその時十歳程でしたが、今でも時々夢に見るほどです。」

ＰＴＳＤですかね…

過去のトラウマ…竜なんて二度と見たくもないでしょうね。

「あの人達は…【赤竜】によって家族を失った人の集まりなんですよ。」

「では、ラザラスさんも…」

「いえ、死ぬ間際の母に言われたんですよ。『死んだ人を思って後ろを見ていたら、前には進めない。過去は思い出すだけ、未来を見て生きろ。』とね。」

「…」

「それがあったから、私は前に進むことが出来た。でも…父親も、あの人達も…過去の…あの事件に囚われているんですよ。もしも【赤竜】が町を襲わなかったら、もしも【赤竜】を退治できていたら。そんな幻想にね。過去を変えることなんて出来るはずがないのに…」

誰しも変えたい過去の一つや二つはあるはず。

しかし、それは不可能というものです。

それを受け入れて、自分を変えるしかない。

「あの時の出来事を忘れろと言うわけじゃない。でも…あの人達は、後ろを向いている。前を…未来を見ようとしていない…」

未来を見ようとしない、か…

「それで、ラザラスさんのお父さんは…」

「あの事件を期に父親は町長を辞め、同じ境遇の人を集めて、自衛隊【スタラング】を作りました。あの弓隊は【魔法】が使えない人たちが主でしてね。【魔法】が使える人たちは魔法隊に入っています。」

「そうなんですか…」

「イーナさんも一刻も早くこの町を出た方がいいです。竜がこの町にいるなんて知れたら【スタラング】に狙われてしまいます。いえ、もう情報が伝わっているかもしれません。」

「いえ、依頼は終わらせますよ。案内をお願いします。」

「しかし…」

「わざわざ【アンヴィーラ】のギルドに依頼を出したことも関係があるんでしょう？」

「それは…そうですが…」

「善は急げ、とも言いますし早く行きましょう。」

「…わかりました。では行きましょう。」

十数分後
閑話休題

「これが破壊を依頼した大岩です。」

案内された場所には、私の何十倍もありそうな大岩が道を塞いでいました。

「なるほど、この岩が道を塞いたから【フィジカ】との交通が断絶された、ということですか。」

「はい、数日前ですかね？夜中に物凄い音がしたんですよ。見に来てみるとこの岩が道を塞いでいて…」

「他に道はなかったんですか？」

「小さい道や、森の中にならあるんですが、馬車が通れなかったり、危険だったりで通ることができないんですよ。」

「けど【魔法】を使える人もいるでしょう？」

かなり労力を使うことになるが、破壊することは不可能ではないはずです。

「いえ、この町ではギルドよりも【スタラング】に依頼が多く行く状態でして。その【スタラング】に依頼を受け付けてもらえなかったんですよ。」

報酬が少なかったからか、何か理由があったかはわかりませんがね。

「まあ、いいです。それより早く終わらせましょうか。」

さて、この大きさだと…

「やはりこれですかね。」

そういって右腕に出すのは、あらゆる物体に対して絶大な破壊力を持つ兵器。

射突型ブレードです。

動いている物体にはまず当たりませんが、動かない物体は格好の的です。

グレネードやバズーカでもいいんですがね。

音がうるさいので…

「危ないので離れていてくださいね？それと、リリウムもですよ。袋にでも入っていてください。」

「キュー…」

少々不満げながらも、渋々と袋に入ってくれました。

これで大丈夫ですね。

「イーナさん、それは？」

「これは…まあ、ちょっとしたおもちゃですよ。」

「はあ…」

そう言ってラザラスさんは私より後ろに下がりました。

…まあ、大丈夫でしょう。

大岩に近づき、射突型ブレードを構えます。

カツン…

となるべく弱く、ゆっくりと岩に当てます。

その瞬間、先端部の杭が射出され、大岩が数m吹き飛んだかと思うと、鼓膜を震わせるような轟音が轟き、岩が粉々に砕けました。

…やっぱり破壊力が大きすぎますね。

弱めにやったつもりでしたが…

「さて、終わりま…どうしたんですか？」

ラザラスさんが口を開けて呆然としていました。

「え？いや？あれ？大岩は？」

「はい、破壊しましたのでもう大丈夫ですよ。」

あれだけ粉微塵に破壊してあれば、交通の邪魔にもならないでしょう。

「いや、岩を破壊したのは…」

「言ったでしょう？おもちゃですって。さて、リリウム出てきていいですよ。」

そう言うと、リリウムが袋から出てきて頭の上に乗りました。

ふむ、なんだかリリウムが頭に乗っていると、私も落ち着いてきますね。

「それじゃあ、私はこれで…ところで報酬は？」

「え…ええ。これがそうです。」

渡された袋には、報酬の５００Ｓが入っていました。

「はい。確認しました。それでは…」

さて、向こうの方角ですかね…

「ああ、ラザラスさん。町の外は危ないので、はやく戻った方がいいですよ。」

「え？それは…」

返事を聞く前に【霊力突進】で平野を突き進みます。

さてと…

## 閑話休題（数分後）

【霊力突進】で突き進み数分経ち、森の開けた場所に着きました。

ここなら大丈夫ですかね。

「いるのは分かっているんですから、出てきたらどうですか？」

【レーダー】には、十数の赤い点が表示されています。

私がラザラスさんと町を出た直後から分かってましたよ？

無視していただけです。

「まさか、ばれていたとはな。」

木陰から出てきたのはラザラスさんの父親…リンドン・コルベと、ローブを目深にかぶった人たち数名と、弓を携えた人たちが十人ほど。

「話に聞いていた【スタラング】が直々にお出ましですか…」

「まあ、気づかれていても関係ない。単刀直入に言う【白竜】を渡せ、そうすれば命は助けてやる。」

そうコルベが言うと、魔法隊は杖を構え、弓隊は弓を引きしぼりま

した。

「話し合いは…無駄ですか。」

「当り前だ。俺たちは竜を殺すためだけに【スタラング】をつくったんだ。そこに丁度いい獲物が現れたんだ。逃がすわけにはいかない。」

「それが、何の罪もない竜の子どもでもですか?」

「そうだ。竜なんて生きているだけで、存在するだけでも罪だ。【人間】が、竜に何度滅ぼされそうになったか。【亜人】や【エルフ】の中には竜と友好的な奴もいるらしいが…所詮化け物同士、同じ穴の貉だ。」

「あなたは【人間】以外がすべて化け物とでも?そんな考えが世の中で通用するとでも思っているんですか?」

【亜人】も【エルフ】も一部の国や町では、差別される傾向にあるが、一部の貴族や王族の中だけです。

「そんなことは露程も思ってはいない。しかし、竜に滅ぼされた村や町や国は無数にある。その生き残りを見つけ出し【スタラング】に勧誘していく。【魔法】を使える者もいるだろう。最終的には国を造る。竜や【亜人】【エルフ】を排除した【人間】だけの国をな。」

そう言ってコルベは高笑いを上げる。

しかし…

「バカバカしいですね。」

「なんだと…」

「国を造る?寝言は寝て言うから許されるんですよ?国を造るというのがどれだけ大変か…大体【コーラル】に【赤竜】がいること自体がおかしいんですよ。」

「…何が言いたい。」

「【赤竜】が本来生息するのは、南の【アプライド】です。それがわざわざ、北の【フィジカ】に近い【コーラル】を襲う?そんなことありえません。」

「何故そんなことがわかる!実際に私たちの町は【赤竜】に襲われたんだ!」

弓を持っていた一人がそう言いますが、無視して話を続けましょう。

「それに、およそ二十年前は【アプライド】と【フィジカ】は戦争寸前の膠着状態でした。あなた、元町長だったんでしょう?」

「…そうだ。」

「まあ、私の想像ですがね。【アプライド】と【フィジカ】は戦争が近かった。しかし、相手国の情勢がわからない。そんなときに送り込むのが間者…いわゆるスパイです。そして【アプライド】が目を付けたのが【コーラル】です。」

「…」

「もともと【フィジカ】と繋がりがあった【コーラル】なら【フィジカ】を調べても怪しまれませんからね。それに町長が加担していればなおさらです。」

『本当か？』

『そんなまさか…』

と魔法隊も弓隊も騒ぎ始めましたね。

「しかし、それも無駄になってしまった。理由は分かりませんが【アプライド】と【フィジカ】が友好条約を結んでしまった。さて、ここで困るのが【コーラル】の町長…あなたです。」

『本当か！？』

「あなたは【アプライド】から報酬を受け取り【フィジカ】の情報を流していた。このままでは、あなたは甘い汁を啜れない。そこであなたはこれをネタに【アプライド】を脅迫した。おそらく自分のやったことを【フィジカ】に明かそうとした。」

どこの世界でも、恐ろしいのは人間の欲ですね。

「それで【アプライド】は考えた。町ごと証拠を消してしまおう、とね。」

『まさか…』

「どうやったかは知りませんが【アプライド】は【赤竜】を送り込んだ。天災の象徴である竜をね。そこで二十年前の事件に繋がります。」

【スタラング】全員が、コルベに目を向けました。

「以上の事は推測にすぎませんがね。どうですか？元町長さん。当たっていますかね？」

「…悪いが二つほど違うな。」

「おや、どこが違うか教えてもらっても？」

「俺は【アプライド】に雇われてなどいないし【アプライド】は【赤竜】を送り込んでなどいない。」

「どういうことでしょうか？」

「簡単なことだ。俺は元々【アプライド】のスパイだ。【フィジカ】との戦争前から【コーラル】に住みつき、町長としての信頼を勝ち取る。簡単なことじゃあなかったさ。あんな何もない町に何十年といたんだからな。」

「それは、自白と受け取っても？」

「ああ、構わないさ。それとあの町を襲った【赤竜】だが――」

【レーダー】に反応ですか。

速い…

これはまさか…

その瞬間、木をなぎ倒すほどの突風が吹き荒れました。

【スタラング】は魔法隊と弓隊数人を残し、吹き飛ばされてしまったようです。

「――俺が【赤竜】に襲わせたんだよ。」

突風がやむと、コルベの前におおよそ7mはあるかと思われる【赤竜】が堂々と仁王立ちをしていました。

「【赤竜】!?そんな、何故!?」

【スタラング】の面々が慌てふためいています。

慌てるくらいなら、さっさと逃げればいいのに…

「それじゃあ、お前らには死んでもらう。俺は【白竜】を手土産に【アプライド】に戻るさ。」

「戻るつもりだったんですか?なら、何故【スタラング】を?」

「元々【スタラング】を手土産に【アプライド】に戻るつもりだったんだが、丁度良く【白竜】を連れた奴が来たんだ。その方が価値があるだろう?」

『そんな!?俺たちに語ったあの理想はなんだったんだ!?』

「そんなの嘘に決まってるだろう?国を造る?竜を滅ぼす?【亜人】を【エルフ】を滅ぼすだと?馬鹿を言うのも大概にしろ。お前らみたいなのが何人集まったところで、そんなの無理に決まってる。」

『そんな…』

何か落ち込んでいますが、その考えに賛同した以上、同情するに値しませんね。

「ところで、町を【赤竜】に襲わせたときに、あなたの奥さんも亡くなったはずでしたが…」

「ああ、いい女だったぜ。別に、死んだところでどうとも思わなかったがな。もういいか?」

「ええ、私は構いませんが…あちらの皆さんは何か言いたいみたいですよ?」

少し離れた場所には、魔法隊と弓隊がコルベに杖と弓を向けていました。

「お、俺たちは、あんたの理想を信じて、竜に復讐するためだけに…その為だけにあんたについてきたんだ!あ、あんたが竜に町を襲わせただと!?許せるか!」

魔法隊は初級魔法を、弓隊は弓を、コルベに向けて撃ち出しました。

しかし…

「そんなちっぽけなもんが【赤竜】に通用するとでも思ったか?」

【赤竜】がコルベの盾になり、それらをすべて受け止めました。

【赤竜】に初級魔法、ましてやただの弓が通用するわけがありません。

「ダメか！魔法隊、中級魔法を――」

その時【赤竜】が息（ブレス）を吐きました。

炎が彼らを包み込み、残ったものは何もありません。

「さすが【赤竜】の火の息（ブレス）ですね。骨一本残りませんか。リリウムもあんな風になれればいいですね。」

「キュッキュキュー！」

【白竜】が息（ブレス）を吐くのかはわかりませんがね。

まあ、楽しみにしていましょうか。

「残ったのは、飛ばされた奴らとお前だけか。いいな【白竜】は殺すなよ。」

「グゥウグオォォ」

そう言ってコルベは森に消えて行きました。

飛ばされた人たちを探しに行ったんでしょうね。

それよりも目の前にいる【赤竜】ですね。

「ところで【赤竜】さんはどうしてあんな男に従っているんですか？」

「グゥウグオォォォ！」

嘶き声をあげたかと思うと、火の息が私を包み込みました。

聞く耳持たず、ですか。

竜の息（ブレス）は【魔力】を使っているものですから【霊力障壁】で大幅に減衰することができるので無傷です。

【霊力障壁】でも熱は完全には防げないので、少々熱いですね。

まあ、手加減はしてくれたようですけど。

「グ？グウォォ！？」

「さて【赤竜】さん。どうしましょうか？今のが【白竜】を殺さず、私を確実に殺すギリギリだったんでしょうがね。これ以上やると【白竜】共々死んでしまうかもしれない。」

「グウォォォ！」

また火の息を吐く気でしょうかね。

「まあ、話を聞いてください。あの男のやり口から…おそらく脅迫でもされているんですかね？子どもを盾にされて…従うしかなかっ

た、でしょうか。」

「グ…グウゥゥ」

どうやら、そのようですね。

竜を従わせるには、それが一番手っ取り早いですから。

「私はあなたの言葉がわかりませんが…永く生きているんでしょう？擬態とかできませんかね？」

「グウゥゥ…」

【赤竜】が強烈な光に包まれ、徐々に光弱まってきたと思うとそこには…

「すみません！息子が捕まって、助けたければ言うことを聞けと言われて――」

赤い髪がよく似合う、綺麗な女の人が立っていました。

え？まさか【赤竜】ですか？

「――二十年前にあの男に息子が捕まって、助けるために、あの男に従ってきました。」

「二十年前ですか？あの事件も…」

「はい、しかし息子は帰ってきませんでした。それどころか更に要求を…」

なるほど、母性の強い竜をうまく使いましたね。

「でも、これが終われば息子を返すといわれて…」

「そうですか。ところで…その子が捕まって今まで会ったことは？」

「いえ、捕まってからは一度も…」

「そうですか…」

まさかとは思いますが…

「だから…あなたを殺して、その子をあの男に渡せば！それなのに…」

私は殺せずに、それどころか傷一つ負わなかった、ですか…

「じゃあ、こういうのはどうでしょうか？」

「え？」

「あなたの願いも叶うと思いますよ？」

その子に会える、という願いは…

数分後
閑話休題

「おお、終わったようだな。」

どうやら他の人たちは消し終わったのか、コルベが戻ってきました。

「なんだ、あいつは殺さなかったのか。まあ虫の息だろうしな【白竜】さえ生きていればいいさ。」

「グウゥ…」

【赤竜】はリリウムをコルベに渡します。

え?私ですか?

私は地面に倒れています。

細かく言えば、服が所々焦げています。

あの時【赤竜】に出した提案ですが…

『そういうことで、私に火の息を…」

『いいんですか?本当に…』

『ええ、大丈夫です。けど、手加減してくれるとありがたいですね。』

そして【赤竜】は擬態を解除し、私に火の息を…

『グウォォォ！』

ええ、とても熱かったです。

手加減してるとは言え、さすが【赤竜】ですね。

私を倒したように見せかけ、リリウムをあの男に渡し、そして【赤竜】の息子を取り戻し次第、私がリリウムを取り返す。

リリウムも賛成してくれましたよ。

同族のよしみって言うんですかね。

そして今、コルベにリリウムが渡されたんですが…

「ご苦労だったな。それじゃあお前の子どもだが…」

「グウゥゥ！」

そう言って男は持っていた籠を投げつけます。

「そん中に入ってる。後は好きにしな。」

そう言い、森を駆けて行きました。

【レーダー】で追跡はしていますから、どこに行ったかは一目瞭然です。

【赤竜】は擬態して、籠を開けようとしています。

しかし、鳴き声一つ出さないところを見ると、やはり…

「坊や、今開けるからね。」

そして籠を開けると中からは…

「え?坊…や?あ…ああ…あああああ!」

まだ小さかったんでしょうね。

竜の骨が落ちてきました。

【赤竜】が慟哭しています。

まあ、当然ですか。

「坊や!坊やぁぁぁ!殺す!殺してやる!あの男!」

「まあ、待ってくださいよ【赤竜】さん。」

「うるさい!邪魔をするならお前も――」

「今のあなたは、他の【人間】も見境なく殺してしまいそうなので。止めさせてもらいますよ。」

両手にレーザーブレードを出し【赤竜】を切り付けます。

人間に擬態していて助かりましたね。

あまりにも大きいと切り付けるのが大変なので…

「あぁぁっ！殺す！殺してやる！」

やはり最強種と呼ばれている竜ですね。

一回や二回切り付けただけじゃ【魔力】は尽きませんか。

まあ、いいです。

【魔力】が尽きるまで切るだけです。

「あああああ！」

【赤竜】が火の息を吐きます。

へぇ、擬態していても火の息を吐けるんですか。

でも、竜の時と比べたら…

「断然弱いですね。」

これくらいならブレードで…

「な！？」

ブレードで切り、息（ブレス）を掻き消します。

【赤竜】が驚いている隙に【霊力急進】で一気に接近し、更にブレードで切り付けます。

「私が…私が死んだら！誰があの男を！」

近づいた所にカウンターを合わせられましたが、それを【霊力急進】で回避します。

【赤竜】の拳が地面に当たりましたが、地響きと共に、小さなクレーターができました。

これは…回避していなかったらと思うとゾッとしますね。

【霊力急進】を繰り返し【赤竜】の背後に回り、ブレードで一刀両断にします。

「あ、あ…ぼ、坊…や…」

【赤竜】気を失い、地面に倒れました。

しかし、さすがは竜ですね。

【エルフ】を圧倒的に引き離す【魔力】と【亜人】を上回る力。

冷静さを欠いていたから良かったものの…

まあ、共感はしますが、同情はしませんが。

今は【赤竜】よりもリリウムですね。

幸い【レーダー】の索敵範囲外には出ていないので【霊力突進】を使えば大丈夫でしょう。

この距離なら、二十秒程で…

【霊力突進】で一気に距離を詰めます。

…見えてきましたね。

コルベがリリウムを抱えて走っています。

「さて、どこまで逃げるつもりですか？」

【霊力突進】を止め、道を遮ると、コルベは何やら驚いた顔をしています。

「てめぇ…【赤竜】にやられたんじゃねえのか？」

「【赤竜】にですか？それはもちろん。かなり熱かったですよ。」

おかげであちこちにやけどがありますよ。

「それで、リリウムを取り返しに来たんですが…」

「リリウム？ああ、この【白竜】か。何を言ってやがる。返すわけないだろう？」

まあ、それはそうですね。

「それじゃ、実力行使ということで…」

「は？――――がぁッ！」

【霊力急進】でコルベの後方まで移動し、片足を軸にしたまま、前方に【霊力急進】を…

そこで発生した遠心力を利用して回転する。

これが【霊力急進】の応用技【霊力急転（クイックターン）】です。

軸足が捻挫しそうになるので、あまりやりたくはありませんが…

今回は勢いを乗せて、回転と同時にコルベの背中を蹴りました。

蹴った時にコルベの手が緩んだのか、リリウムが小さな翼をパタパタさせて私の頭の上に乗りました。

「大丈夫でしたか？リリウム？」

「キュッキュキュー。キュキュ？」

『大丈夫だよ。所でおばさんは？』とでも言っているのでしょうかね？

「そうですか。それならよかったです。それと、あの【赤竜】は大丈夫ですよ。」

目を覚ましたらどうなるか、それは分かりませんがね。

「てめぇ！殺してやるよ！」

そう言ってコルベは杖を取り出しました。

【魔法】を使うつもりですか。

「中級魔法【ソイルクロー】！」

【土属性魔法】の中級魔法【ソイルクロー】ですか。

接近戦用の【魔法】ですね。

自分の腕に土でできた爪を出し、相手を切り付ける。

中々の強度を持ち、まともに当たれば、骨の一本や二本は簡単に持って行かれます。

【基礎魔法】の【身体強化】も併用しているせいか、なかなかの速さです。

しかし…

「な!?【ソイルクロー】が!?」

私の【霊力障壁】に触れた瞬間に【ソイルクロー】が崩壊を始めました。

【魔力】で構成されている【魔法】である以上【霊力障壁】で減衰されます。

まあ【土属性魔法】は、土を【魔力】で繋ぎとめているので、減衰されたのは【魔力】の方ですが…

「近づいておいて呆けているんじゃ、救いようがありませんね。」

近づいてきた所をレーザーブレードで切り付けます。

「てめぇ！【魔力】を！」

「そうですが…なにか問題でも？」

コルベが離れようとしますが、そうはさせません。

ハンドガンを出し、足を撃ち抜きます。

「がぁぁぁ！足がぁぁ――――がばッ！」

「うるさいです。黙りなさい。」

膝をついたコルベがうるさいので、顎を蹴り抜きます。

歯が折れたようで、口から血を垂れ流しています。

「さて、あなたは動けずに、一方的に蹂躙される立場にいます。」

「あ〝あ〝あ〝あ〝！」

「あなたをどうするか…わかりますかね？」

数分後
閑話休題

ふう、重たかったです。

【霊力浮遊】を使い、地面を引きずるようにして運んできました。

あまり乱暴にして死んでしまったり、気を失ってしまったら困りますし。

せいぜい恐怖を味わってもらいませんとね。

戻ってきたのは【赤竜】と戦闘になった場所…

【赤竜】が倒れています。

とりあえずコルベをロープで縛り、動けなくしておきます。

「さて【赤竜】さん。起きてください。」

袋から水を出し、倒れている【赤竜】の顔に水をかけます。

「…ゲホ、ゲホッ」

「ああ、起きましたか【赤竜】さ――」

「あああああ！」

まだ錯乱しているのか、目を覚ましたと同時に、その【亜人】を超える力を持った拳を、私に向けて放ってきました。

【霊力障壁】と拮抗しましたが、それも一瞬のことです。

拳が【霊力障壁】を貫通してきました。

【霊力障壁】で威力が殺されたといえ、それでもかなりの威力、スピードですね。

直撃したらただではすまないでしょう。

しかし…

「――まったく、危ないですね。」

私はそれを片手で受け止めます。

この前はかなりの速度で木に激突しても、打撲程度で済みましたからね。

これくらいなら大丈夫だと思いましたが、さすがに腕が痺れますね。

「さて、落ち着きましたかね？」

「はぁ、はぁ…」

「あなたが錯乱しているのは分かります。とりあえず聞いてください。」

【赤竜】を落ち着かせるために語りかけます。

「現実を受け止めてください。現実から目をそらさないでください。そうしないと、心が壊れてしまいます。」

「う…あああああ！」

受け止めている拳に力がこめられます。

「現実を見て、自分で自分に決着をつけてください。それでも、あなたの心が壊れてしまいそうだったら…」

コルベを【赤竜】の前に引きずり出します。

「この男を殺せばいい。私は、復讐は正当な権利だと思いますよ。」

「ヴー！ム〝ー！」

コルベには猿轡をしてあるので、声を出しても、まともには喋れません。

「あああああ！よくも坊やをおぉぉぉ！」

【赤竜】はコルベにその拳を放ちました。

このままだと相当にスプラッタな光景が展開されるでしょうね。

私はそれを止める気もなければ、コルベを守るつもりもありません。

しかし【赤竜】に向けて、これだけは言っておきます。

「その男を殺しても、あなたの子どもは戻ってきませんが…」

【赤竜】の拳がコルベの眼前で急停止しました。

「何を戸惑っているんです?当たり前でしょう。死んだ命は二度と戻ってきたりはしませんよ?」

コルベは泡を吹いて気絶しましたね。

【赤竜】は悲痛に歪んだ顔をしています

「なら!私は!私は…どうすればいいんですか…」

【赤竜】が泣きながら崩れ落ちます。

しかし、私はそれに答えることはできません。

「自分で決めてください。自分で判断してください。あなたの心は、まだ壊れてはいませんから。」

「キュ!」

その時、リリウムが私の頭から飛び降り【赤竜】の前に着地しました。

「キュッキュキュ!キュッキュッキュー!」

「リリウムちゃん?そう…ありがとう。でも…」

「キュ…キュキュッ!キュー!」

「リリウムちゃん…本当に?本当にいいの?」

「キュー！」

「ありがとう…本当に…」

【赤竜】が涙を流しながらリリウムを抱きしめます。

リリウムと【赤竜】の間でどんな言葉が交わされたのか、私にはわかりません。

しかし、何となくですが【赤竜】が救われたような気がしました。

さて、この男は…

その辺りにでも埋めておきましょうか？

## 第十三話・爪が剥がれるとすごく痛いです（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

【赤竜】がリリウムと何を話したかって？

…内緒ですよ。

竜同士ではデフォルトで会話をすることができます。

ご都合主義なんてなんのその。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第十四話・熊は坂を下るより上るほうが速い（前書き）

はい、第十四話投稿いたしました。

今回もちょっと長いですね。

この長さを毎回書ければ…

一話書くのに数日かかりますからね。

そうポンポンとは書けませんよ？

本職の人はどういう気持ちで書いているんだろう、と思う今日この頃だったり。

それはともかく…

さっそく、第十四話始まり始まり…

# 第十四話・熊は坂を下るより上るほうが速い

【コーラル】での依頼も終了し早二日【フィジカ】へ向かっています。

イーナこと伊那楓です。

それと頭の上には【白竜】のリリウムです。

それと、もう一人…

「リリウムちゃん。私の所にも来てくださいよー」

「キュ、キュキュ」

リリウムが首を横に振っています。

リリウムに話しかけたのは、赤い髪が特徴的な綺麗な女の人。

「それで、リリウムになんて言われたんですか？」

「ふふ…それはですね――」

「キュッ！キューッ！」

「痛たた！分かりましたから！頭を噛まないでください！」

リリウムは恥ずかしいのか、これを聞く度に頭を噛んできます。

「ふふ…内緒ですよ。これを言ってしまったら、リリウムちゃんに怒られてしまいます。」

「私はもう何回も噛まれてますけどね…」

この会話でわかってもらえたでしょうか？

そう【赤竜】です。

あの【コーラル】での一件で、なにやらリリウムと何かを話してから、私の旅に同行することになりました。

竜同士で会話ができるのはうらやましいですね。

数時間後

## 閑話休題

さて、ようやく到着しましたよ。

「ここが【フィジカ】ですか。初めて見ました。」

「永く生きている【赤竜】でしょう？国の一つや二つは見たことあるんじゃないですか？」

「いえ、永いと言っても３００年程度ですから、国に入ったことは無いんですよ。擬態できるようになったのもつい最近ですし。」

「３００年ですか…私には想像もつきませんね。」

「これでも若い方ですよ？竜の寿命は６００年あると言われていますから。」

「６００年…ですか。」

「ええ、擬態ができるようになるのは個体差がありますが…大体３００年ほど生きてからですし」

そういう話をしながら【フィジカ】への門をくぐります。

さて、とりあえずギルドに行きますか。

「それじゃギルドで依頼を受けようと思いますけど…」

「もちろん私もついていきますよ？」

「大丈夫ですか？【人間】がたくさんいますけど…」

「はい。もう自分との決着はつけましたから。」

そう言って【赤竜】は胸を張ります。

…羨ましくなんかないですよ。

「わかりました。ああ、それと…」

「はい？」

「【赤竜】と呼ぶわけにもいかないので、名前はどうしましょうか？」

ここに来るまでに【赤竜】としか呼んでいません。

それにこんなに綺麗な女性を【赤竜】と呼んだら変な目で見られてしまいます

「名前ですか？それなら…イーナさんが決めてください。」

「いいんですか？私が決めてしまって。」

「はい、イーナさんは私の恩人なので。そんな人に名前を付けてもらえれば、私も嬉しいです。」

とびきりの笑顔でそんなことを言います。

なんだかむず痒いですね。

「それじゃあ…ルビア、というのはどうでしょう？」

「ルビア、ですか？」

「私が好きな花をもじった名前ですよ。あなたの髪のように赤くて、綺麗な花です。」

それに、あの花の花言葉は…

「あなたにピッタリだと思いますよ。」

「…はい、ありがとうございます。イーナさん。」

頬を赤くして、微笑みながら照れくさそうに言います。

「喜んでもらえてよかったですよ。これからお願いします。ルビア。」

「はい、こちらこそ。イーナさん。」

「キューキュー」

リリウムも喜んでいるんですかね？

「それじゃ、ギルドに行きますか。」

「はい。」

「キュー」

閑話休題（ギルド到着）

【フィジカ】に到着してから数時間。

ようやくギルドに到着しました。

ギルドに着くまでに何があったかって？

市場に行って、リリウムが食べる果物を買ったり…

そういえばルビアに聞いたんですけど、竜って別に食べ物を食べなくても、生きていけるらしいんですよ。

空気中に漂ってる【魔力】を食べるとかで…

では、なぜリリウムは果物を食べるんでしょうか？

ルビアがリリウムに聞いてみたら…

『おいしかったから』

…だそうです。

実に単純明快な答えですね。

まあ、毒ではないと思うので別にいいんですけどね。

それと、ルビアなんですが…

『すみません。お茶でもどうです？』

とか

『一目惚れしました！結婚してください！』

という風に、数十分に一度は男の人に声をかけられるんですよ。

後者は求婚ですが…

まあ、確かに綺麗な女性なんですけどね。

そういう声を歯牙にもかけずに

『イヤです。』

と笑顔で返して、声をかけた男の人は灰になっていました。

…比喩ですよ？

リリウムも飽きたのか寝てしまいましたし。

もちろん私の頭の上で。

それはともかく、ギルドに入りましょう。

ギルドの中は【アンヴィーラ】のように広く、依頼板には依頼があるようです。

なかなかに人が多いですね。

何か視線が集中していますが…

さて、私たちはどう見えているのでしょう？

頭に【白竜】を乗せた子どもと、それに付き添う綺麗な女性。

…すごく奇妙な組み合わせですね。

まあ、十中八九ルビアに目を奪われているんでしょうが。

とりあえず依頼を見ましょうか。

「どの依頼がいいでしょうかね？」

「そうですね。…ところでイーナさんってどんな依頼をしてたんですか？」

「今までの依頼ですか…」

薬草の採取やらジャラスの駆除、大岩の破壊ですかね。

「まあ、依頼は少ししか受けてませんよ？ギルドに登録したのも一週間くらい前ですし。」

そんな話をしていると、後ろから声をかけられました。

「ちょっといいかな？」

声がした方を振り向くと、なかなかに整った顔立ちに小奇麗な服装、そして、無駄に装飾の施された剣が目を引きます

貴族か何かですかね？

「君は運がいいよ。この僕のお眼鏡に適うなんて。」

なんでしょうか、このナルシストな人は。

「はい？なんでしょうか…」

ルビアも若干引いているようですね。

まあ、当然だと思いますがね。

「君は【フィジカ】の貴族である、ベゼル・リュサックに見初められたんだ。光栄に思いたまえ。」

ああ、権力に物を言わせた貴族の横暴ですか。

普通なら有無を言わせないんでしょうね。

この世界では、貴族が大きな権力を誇っていますから、断ったりしたら大変なことになります。

しかし、そんなことルビアには関係ありません

「ああ、そうなんですか。お断りします。」

ベゼルと言いましたか？

口を開けて、ポカンとしています。

「なんだと！僕はリュサック家の次男だぞ！君の家がどうなってもいいのか！」

まあ、そうなりますね。

しかし、私たちには潰されて困る家はありませんからね。

「さて、ルビア。依頼も決めましたから、行きましょうか。」

「はい、イーナさん。」

さて、依頼を受けに行きますか。

と、思ったら後ろから声が…

「中級魔法【ソイルランス】！」

私に中級魔法【ソイルランス】が当たりました。

しかし、土のない場所で【土属性魔法】を使っても【魔力】のみで【魔法】が構成されることになります。

【霊力障壁】に当たったら消滅しましたけどね。

「大丈夫ですか！？イーナさん！」

「ええ、大丈夫ですよ。ルビア。」

どうして私を狙ったんでしょうかね？

「ど、どうして！？」

それはこちらのセリフですが…

そんな声を無視して、カウンターに向かいます。

「本当に大丈夫ですか？イーナさん。」

「大丈夫ですって。ルビアの火の息（ブレス）でも平気だったでしょう？あの程度じゃ傷一つつきませんよ。」

竜の息（ブレス）は、どれも上級魔法に近い威力を持っています。

「そ、そういえばそうでしたね。」

「そうですよ。ほら、行きますよ？」

後ろで睨んでる貴族様もいることですし。

閑話休題（依頼受諾）

さあ、依頼を受けましたよ。

受けた依頼は、ゴラウの駆除。

最近【フィジカ】の近くに出没するらしい、大きい熊のような【魔獣】です。

高レベルの土の【魔法】を操り、物理的な攻撃には弱いですが【魔法】には比較的強く、更に【魔法障壁】も厚く【魔法】がまともに通りません。

【土属性魔法】や【風属性魔法】の特性【貫通】を利用して物理的なダメージを与えるか【魔法障壁】を【水属性魔法】や【火属性魔法】で【減衰】させてから剣や弓でダメージを与える。

この二つがポピュラーな倒し方ですね。

爪を持って来ればいいとのことなので、早めに終わらせましょう。

「ルビア、行きましょう。」

近くの森にでもいますかね？

ギルドから出ようとすると…

「待ちたまえ！」

さっきの貴族の声が聞こえました。

「ここまで馬鹿にされたのは初めてだ！君に決闘を申し込む！」

えー…

私たちは何もしていない気がしますけど…

「イーナとかいったな！お前だ！」

そして、なぜに私なんでしょう？

「場所は僕の家だ！いいな！すぐに来いよ！」

そう言って、ギルドを出て行きました。

「…行かなくてもいいですかね？」

「はい、無視しても構わないですよ。」

ルビアも中々に辛辣ですね。

じゃあ、森に行きますか。

数十分後
閑話休題

大きな闘技場にいますよ。

え？森に行ったんじゃないかって？

…ギルドを出て、門に行ったんですよ。

そしたらなんて言われたと思います？

『悪いが、お前の出国は許可されていない。』

って言われたんですよ。

あのベゼルとかいう男が根回しをしたようで、国から出ることが出来なくなりました。

腐っても貴族なんですね。

まあ、無理矢理突破することもできるんですけどね。

そしたら面倒なことになりそうですし。

「で、私が勝利すればこの国から出られる。負けたらルビアはそちらに渡す、ですか？」

「そうだ。まあ、素直にあの女を渡せばこの国からだしてやる。」

理不尽極まりないですね。

私が勝っても一文の得にもなりません。

まあ、負けるつもりはさらさらないですが…

「では、始めるぞ。準備は…」

執事風の人が開始の合図をします。

「ああ、いいぞ。」

「あ、ちょっと待ってください。」

端の方で見ているルビアにリリウムを渡します。

「それじゃ、危ないのでリリウムをお願いします。」

「はい。私の為にもがんばってくださいね？」

「まあ、がんばりますけど…」

「キュッキュー」

はあ、気楽にやりますか…

この前商隊から買った眼鏡をかけます。

商隊の人は、遺跡から発掘した物とか言ってましたけど、本当かどうかは分からないですね。

高かったですよ？

１万Ｓもしましたから。

見た目は普通の黒縁眼鏡ですが、これをかけると、あら不思議。

【魔力】が視認できるようになります。

具体的には【魔法】の属性と【魔力】の量が、色とその濃さで判断できます。

さて、これでベザルを視てみます。

ベザルを包み込んでいるのは薄黒い【魔力】です。

なんて言うんでしょうかね。

光に近づいた時に影ができるじゃないですか？
そんな感じのうっすらとした黒い色が全体を覆っています。
まあ、視えるだけで何もできませんけどね。
「では…決闘を始める。どちらかが戦闘不能になるか、負けを認めた場合に勝敗が決まる。また、どちらかが死亡した場合は生き残った者の勝ちとする。よろしいか？」
「ああ。」
「はあ…わかりました。」
「では…開始！」
どうしましょうかね？
一気に潰してもいいんですが…
「中級魔法【ソイルゴーレム】！」
おや、ゴーレムを出しましたか。
数は二つですか。
ちなみに、ゴーレムは土でできた無骨な人型で、大きさは見上げるほどあります。
【魔法】のレベルが上がるにつれて、より大きく、より多く出せる

ようになります。

まあ、大きさと多さは反比例の関係ですが…

しかも、ゴーレムは【魔力】が続く限り修復され続けますから、厄介なこと極まりないですね。

まあ、そのために【土属性魔法】に有利な土の多いこの場所を選んだんでしょうね。

「どうだ。僕のゴーレム――――」

グレネードを出し、片方のゴーレムを撃ちました。

爆音が耳を響かせ、爆風がゴーレムを包みます。

煙が消えると、ゴーレムの上半身から上が消し飛んでいました。

「な！なんだそれは！？」

しかし、周りから土が浮き上がり、壊れた部分を修復していきます。

やはり無駄ですか…

まあいいでしょう。

やはり術者を直接狙いますかね。

グレネードをしまい、ブレードを出そうと思ったら、もう片方のゴーレムが私を殴ってきました。

【霊力急進】で回避しましたから無事でしたけど…

「くそっ！どうやって避けたんだ！」

まあ【霊力急進】をいきなり見ても理解できませんか。

「危ないですね。当たったらどうするんですか？」

「何を言っている！殺した方が早く済むだろう！」

なるほど、まあ確かにそうですね。

ルールにあったように、相手が致命傷を負うか、降参するか、死ねば勝ちですからね。

手加減するよりも、最初から全力で叩き潰した方が簡単でしょう。

こちらが体勢を直している間に、ゴーレムを前衛に、自分が後衛になり、無駄に装飾をされた剣を構えています。

なるほど、攻撃はゴーレムに任せ、自分は隙をついて【魔法】を当て、近づいてきたら剣を使う。

戦術的には良いと思いますよ。

相手に一方的に攻撃加え、反撃を許さない。

しかしですね…

「ゴーレムくらい簡単に…」

ゴーレムの攻撃を【霊力急進】で、四方八方に避けながら出すのは射突型ブレードです。

動きが緩慢なので懐にさえ入ることが出来れば…

「破壊できるんですよ。」

ゴーレムの足に射突型ブレードを直撃させます。

数メートルほど吹き飛び、粉々に砕け散りました。

これを完全に修復するには時間がかかるでしょうね。

動きを止めた横から、私を潰すには十分な力を持ったゴーレムの拳が襲ってきました。

それを正面から射突型ブレードで対抗します。

岩が砕けるような音が響き、片腕から崩壊が始まり、それが全身に伝播しゴーレムが崩壊しました。

さて、あとは…

「く、くそ!ゴーレムも使えない…仕方ない、僕が直接やってやる!」

剣を構え、こちらに向かってきました。

相手の手の内がわからないのに単身突っ込む…愚の骨頂ですね。

【霊力急進】で避け、すれ違いざまに一閃…

ブレードに手ごたえ?

もしかして…

「その剣【魔法】でも纏っているんですか?」

「ああそうだ!【土属性魔法】を纏っているからな!当たりさえすれば…!」

なるほど【魔法】を纏っているから、ブレードも透過しなかった、と。

それに【土属性魔法】を纏っているから、硬度が増し、さらに特性である【貫通】も作用している。

「参考になりました。そんな【魔法】もあるんですね。」

おかげで、これからは注意することが出来ます。

無茶苦茶に剣を振り回してきますが、そんなものに当たってやる義理もありません。

【霊力急進】で距離をとり、レーザーライフルを出し、遠距離から一方的に攻撃をします。

修復されたゴーレムが時々攻撃を仕掛けてきますが、それを避けつ

つ射突型ブレードでゴーレムを破壊します。
それを何回か繰り返したら、ベザルはもう息絶え絶えですね。
「降参…しませんか？」
「だ、誰が…」
こういうのが一番面倒なんですよ。
往生際が悪く、プライドが高い。
プライドが高い故に降参ができずに、ただ粘るだけ。
「それじゃあ仕方ないですね…」
レーザーライフルと射突型ブレードをしまい、ハンドガンを出します。
「死んでもらいますか。」
「なにを――」
【霊力急進】で距離を詰め、太腿を撃ち抜きます。
「あああ！わ、わかった。こ、こう――うべぁ！」
なんてことはありません。
倒れてきたところを【霊力急転】で喉に回し蹴りを入れただけです

よ？

何か聞こえた気がしないでもないですが…

まあ、気のせいですよ。

「こ、この決闘――――」

審判をしていた執事さんが慌てたように止めようとしましたが…

「何を言っているんです？降参なんて言ってませんでしたよ？」

「し、しかし――――」

「それに、この決闘を始める際に言いましたよね。この男は戦闘不能でもなく、降参をしてもいなく、死んでもいない。それをこの男も了承していました。あなたに止める権利はありませんよ？」

まあ、喉を潰しましたから声を出せはしないと思いますけど…

「っぐ…」

「わかったらどいてください。決闘に部外者が口を出さないでください。」

さて、仕切り直しです。

ちょっと目を離していると剣を杖代わりにして立ち上がろうとしています。

「まあ、その根性は認めますが…」

ベザルに近づき、ハンドガンをこめかみに当てます。

その眼には涙が溜まっていますが関係ありません。

「確か…死んだら終わりなんですよね？」

引き金を引こうとした、その瞬間――

【レーダー】に反応？

これは…

【霊力急進】で一気に離脱します。

その瞬間、ベザルに当たらないように、私のいた場所だけを、上下左右あらゆる方向から数十本の土の槍が襲います。

【土属性魔法】ですか。

あの【魔力】の込めよう…おそらくは上級魔法ですかね。

さすがにあの数では【霊力障壁】も容易く貫通してしまうでしょうね。

そして、ベザルの前には男が一人立っています。

「はあ…決闘の邪魔をするんですか？」

「いきなり乱入と不意打ちをしてすまない。それは詫びよう。しかし、こんな馬鹿でも弟なのでな。死なせるわけにはいかんのだよ。」

弟、ということはベザルの兄ですか。

「紹介が遅れた。リュサック家次期当主【Ｎｏ．４】のクレイグ・リュサックだ。これ以上は私が相手になろう。」

【フィジカ】の最高戦力ですか。

眼鏡を通して視る【魔力】は、ゼザルより少し濃くなった黒です。

上級魔法をあれだけ使えば【魔力】も無くなりますか。

これが【Ｎｏ．４】ですか。

「まあいいです。で、審判さん。この場合の勝敗は？」

「あ、ああ。ベザル様はもう気絶している。よって戦闘不能と見なす。この決闘、冒険者の勝利とする！」

そういえば名前を言っていませんでした。

まあ、別に構わないでしょう。

名乗る必要もありませんし。

「それでは、私はこれで…」

それだけ言って、ルビアの元に行きました。

「さて、終わりま…どうしたんです？」

ルビアが口をポカンと開けています。

「イーナさんって…」

「キュキュー」

「そうなんですか。リリウムちゃんはもう慣れたんですね…」

む、何か失礼なことを言われた気がしますね。

「ほら、終わりましたから、早く依頼を終わらせましょう。」

「はーい。」

「キュー」

数十分後

閑話休題

さて、どうしてこうなったんでしょう？

決闘が終わって、あの館を出て、門を出ることはできたんですよ。

これは安心しましたね。

あの…クレイグって言ってましたっけ？

あの人が話をつけてくれたようですね。

問題はその後、ローブで顔まで隠した人が後をついてくるんですよ。

まあ、たまたま行き先が同じなのかなー、と思ってゆっくりと進むことにしたんですがね…

てくてくと歩けばてくてくと歩幅を合わせ、たったったと走ればたったったと同じ距離を走り、ぴたっと止まればぴたっと止まる。

「ルビア、どうしましょうか？」

「どうしましょう。消しますか？」

「キュー」

ちなみに眼鏡はかけたままなので、ルビアの【魔力】はハッキリと視ることができます。

赤い、紅い、朱い。

今まで見たどんな赤よりも、どんな紅よりも、どんな朱よりも、あ：かい。

そんな、表現しか出来ないほどにあかい【魔力】です。

その【魔力】がルビアの中で胎動しています。

息(ブレス)ですか…

「こらこら、ダメですよ？いきなりそんなことをしちゃ。」

「あれ？私がなにをするかわかったんですか？」

「息(ブレス)でしょう？この眼鏡のおかげですよ。」

「そうなんですか？息(ブレス)がダメなら…」

そう言ってルビアは腕まくりをします。

「だから、そういうことじゃなくて、あ…」

【レーダー】に反応…

あの人の後ろからですね。

しょうがないですね…

「後ろの人ー危ないですよー」

「ぬ？ぎゃー！」

後ろを向いたときに熊のような【魔獣】が走ってくればそれは驚きますよね。

それにあの【魔獣】は…

「ゴラウですね。」

「ちょうどいいじゃないですかイーナさん。依頼も終わらせましょうよ。」

ゴラウは土の【魔法】を使い、後ろの人に攻撃を仕掛けています。

後ろの人も【土属性魔法】を使いながら、なんとか応戦しています。

しかし、初級魔法では地力で負けているのか、徐々に劣勢になっていきます。

「初級魔法【ウォータアロー】じゃ！」

【水属性魔法】の初級魔法を放ちますが、相手は土の【魔法】を操る【魔獣】です。

属性では有利でも、初級魔法では効き目は小さいのでしょう。

土の壁を出してそれを防がれ、更に土を操り反撃をされます。

「うぎゃー！」

それが直撃し、変な声を上げて吹き飛びました。

【魔力障壁】があったので、そこまで大怪我はしてないと思いますけどね。

「それじゃ、ゴラウは任せましたよ？あの人を介抱してくるので…」

「はーい。それじゃ行きますよ！」

「ああ、殺さないでくださいよ？必要なのは爪だけなので…」

「…わかりました。手加減はしますよ。」

そう言ってゴラウに突っ込んでいきました。

凄いですね。

土の【魔法】を片手で受け止めてますよ。

まあ、任せましょうか。

「さて、大丈夫ですか？」

「う…む。頭がくらくらするのじゃ…」

「それはそうですよ。まともに当たったんですし…」

飛ばされた衝撃でローブが破れ、顔が露になっています。

人形のような整った顔立ちの、金髪が映えた美しい少女でした。

「で、どうして私たちをつけてきたんですか？」

「そ、それはじゃな…」

「まあ、それは置いておきましょう。あなたの名前は？」

「妾の名は…キャリルじゃ！」

「へぇ、珍しいですね。ファミリーネームが無いなんて。それに、キャリルって【フィジカ】の第二王女と同じ名前ですね。」

「そ、そうじゃろう。その王女のように綺麗に育ってくれるようにと、母上がつけてくれた名前じゃ。」

「そうですか。それじゃ…」

適当に話を切り上げ、先を急ぎます。

「ま、待ってほしいのじゃ！」

そう言って私の服を掴んできます。

「た、助けてほしいのじゃ。今襲われて…」

「ああ、大丈夫ですよ。もう終わると思います。」

ふと見てみるとルビアがゴラウを圧倒していますね。

土の【魔法】を放たれてもそれを破壊し、土の壁を作ってもそれを破壊する。

ゴラウって強い【魔獣】のはずですけど、さすがに【魔獣】の頂点である竜にはかないませんか。

「あ、あの女性は――――」

その時、地面が揺れました。

「イーナさーん。終わりましたよー」

ゴラウが倒れていますね。

外傷も見当たらず、息もしているようなので、死んではいないようです。

「ご苦労さまでした。じゃあ、爪を…」

折るのは可哀そうなので、袋の中に何か…

その時、何かの呻き声が聞こえました。

「イーナさん。これでいいですか？」

ルビアが手に持っていたのは、鳥のくちばし程の大きさもある爪です。

「ちょっ、ルビア！無理矢理折ったんですか！？」

「はい。切る道具も持ってませんし。」

ゴラウの前足から血が流れています。

「はあ…驚いてるところすみませんが、回復魔法とか使えませんかね？」

「え？あ…使えることは使えるが…」

「じゃあ、ゴラウにお願いします。あのままじゃ痛そうなので…」

「う、うむ。わかったぞ。」

キャリルさんがゴラウに近づき【魔法】を使います。

「中級魔法【ヒーリング】」

そう唱えたかと思うと、血が止まり新しい爪が生えてきました。

他の爪とは大きさが違いますが、その内伸びてくるでしょう。

「ふう、終わったのじゃ。」

「イーナさん。一本でいいんですか？」

そういえば何本あればいいのか聞いていませんでしたね。

「まあ構わないでしょう。ダメだったらそれでも構いません。」

別にお金にも困っていない事ですし。

私たちは来た道を戻ります。

「ちょ、ちょっと待ってほしいのじゃ！」

「ああ、ありがとうございました。私たちは【フィジカ】に戻ります。キャリルさんもご自分の用事を済ませては？」

「あ、あの、それなんじゃが…」

キャリルさんが何かを決意したように、どことなく恥ずかしそうに…

「わ、妾のものになってほしいのじゃ！」

とんでもないことを言いました。

## 第十四話・熊は坂を下るより上るほうが速い（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

あの少女は何者だったのか？

次回、明らかになる！？

…まあ、今でもわかる人はわかると思いますが。

それと、クマに遭遇した時に死んだふりをするのは論外です。

目を外さないようにしてゆっくりと後退りをしましょう。

あとは坂道を下れば逃げれるって猫田さんが言ってた気がする。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第十五話・お城への潜入はかなり厳しいです（前書き）

はい、第十五話投稿いたしました。

６月に入って徐々に暑くなってきましたね。

梅雨ってどこに行ったんでしょうか？

え？これからだって？

…ジメジメでムシムシなのは嫌だなー

これより、第十五話始まり始まり…

# 第十五話・お城への潜入はかなり厳しいです

イーナこと伊那楓です。

頭の上には【白竜】のリリウム。

そして隣にいる美人さんは【赤竜】のルビアです。

ルビアは擬態しているんですがね。

【フィジカ】で受けた依頼のゴラウの駆除。

途中で変な男が決闘を申し込んできましたが、軽くあしらいました。

変な恨みを買いましたかね？

まあ、無事に終わりましたよ。

それで門を出て依頼を終わらせました。

そしたらですよ…

「で、どうなのじゃ？」

「ああ、すみません。ちょっと目まいが…」

いや、この少女がとんでもないことを言ったものですか…

「で、どういう意味でですか？」

「ぬ？そのままの意味じゃが…」

ちなみに、この世界【ケミスト】では同性婚が認められています。

まあ、滅多には無いことですが。

「それは…王族としての立場で言っているんですか？」

「お、王族！？ど、どういう意味かわからんのじゃが！？」

キャリルさんがどう見ても慌てながら言います。

「いや、バレバレですよ？」

その喋り方も、ローブから見える綺麗な服も、庶民ではありえないものですし…

それに名前も突然聞かれて慌てたんでしょうね。

王女の名前そのままでしたし。

「ぬ…ばれてしまっては仕方がない。なにを隠そう妾こそが【フィジカ】の第二王女キャリル・グリニャールじゃ！」

何か効果音でも出そうなポーズを決めて高らかに名乗りました。

「イーナさん。この人は？」

「ああ、ルビア。もう終わりましたから、行きましょう。」

「ちょ、ちょっと待ってほしいのじゃ！」

数十分後
閑話休題

門をくぐった途端、鎧を付けて槍を構えた人たちが私たちの周りを取り囲みました。

なんだかこんな展開が多いですね。

「そこの女！王女と女の子を開放し、素直に投降しろ！」

どうやらルビアが誘拐でもしたと思われていますね。

「もしかして…黙って城を出たんですか？」

「いや、ちゃんと護衛も一緒にいたぞ？途中で振り切ったが。」

いや、そんなどや顔で言われても…

そんなことを言いあっている間に、じわじわと迫ってきます。

「ちょ、ちょっと待つのじゃ！お前たち、この人たちは――」

その時ルビアが私とキャリルさんを脇に抱えました。

キャリルさんは私と同じくらいの身長なので、ルビアなら簡単に抱えられます。

「ふふふ。ばれては仕方ないですね。王女を攫ったのはこの私です。それと、この女の子も頂いていきます。」

「ルビア？何を――」

「は、放すの――うぎゃー！」

ルビアが私たちを抱えて飛び上がりました。

キャリルさんが悲鳴を上げています。

あ、高い。

地面が離れてく。

これは――

閑話休題

「イ…さ…イーナさん！」

声が聞こえます。

この声は…

「ん…ルビア…私…」

「ごめんなさい。イーナさん…」

ああ、気を失ってたんですね。

「気にしないでください。病気みたいなものですから…」

やはり、まだダメですね…

「それはそうと、ここはどこですか？」

ベッドに寝ていたようですね。

窓から外を見ると、もう薄暗くなっています。

「宿をとったんですよ。袋からお金使っちゃいましたけど。」

「構いませんよ。ところで…」

キャリルさんは？と続けようとしたら、奥から音が聞こえました。

「向こうには何が？」

「あっちにはお風呂が――」

その時、ドアが開きました。

風呂場から出てきたキャリルさんは一糸纏わぬ姿で…

率直に言うと裸で出てきました。

「むぅ、なんじゃこの粗末な風呂は？それに侍女もおらんし…早く服を着せぬか。」

やっぱり王族なんですね。

「服くらい自分で着てくださいよ。恥ずかしくないんですか？」

「なにを言うか。女しかいない場所で何を恥ずかしがることがあるのじゃ？」

いや、まあそうなんですけどね。

「しかし、大変なことになったのじゃ。」

キャリルさんが服を着ながら言います。

「なにがですか？」

「いや、そこの女…ルビアと言ったか。その女が妾を誘拐したなどと言って逃げ出したのじゃからな。外は大騒ぎじゃ。」

確かに、宿の外は何か騒がしいですね。

「いやー。槍を向けられたらつい逃げちゃいました。」

ルビアが笑いながら言います。

「まあ、それは後にしましょう。それで、あの時のことですが…」

「む…」

「あれは、私と結婚をしてほしいということですか？」

「…へ？」

「確かに同性婚は認められていますけど、さすがに…」

「い、いや。あれは――」

「いえ、否定しなくてもいいんですよ。少数ながらも同性愛は――」

「わ、妾の話を聞けー！」

数分後
閑話休題

「なんだ。そういうことだったんですか。安心しました。」

「妾が同性婚なんてするわけがなかろう。姉上ならともかく…」

何か聞こえた気がしましたが、流しておきましょう。

「で、どうなのじゃ？妾の騎士にならぬか？」

「しかし、どうして私に？城にはちゃんとした騎士がいるでしょう？」

「…城の者達は、信用ならぬ。妾に気に入られようと必死にご機嫌取りをしておるのじゃ。それも無駄でしかないのじゃがな…」

それはそうでしょう。

たとえ第二王女でも、その権力は大きいですからね。

「王女付の騎士になったら、色々と便宜が図られるからの。当たり前と言えば当たり前じゃがな。」

キャリルさんが何かを悟ったように言います。

「それで、なぜ私を？」

「ちょうどリュサック家の前を通りかかったときじゃ。館から小さな女の子が出てきたのじゃ。」

「そんなに背は変わらないじゃないですか。」

「いいから聞くのじゃ。リュサック家を覗いてみると、なんだか慌ただしかったのじゃ。クレイグに聞くと、次男が大怪我を負ったらしい。」

王女ですからね、面識はあったのでしょう。

「それに、その怪我を負わせたのが妾とそう背が変わらぬ者だったとも聞いたのじゃ。」

「それが私を追ってきた理由ですか？」

「そうじゃ。妾とそう変わらない者がそんなことをしたのじゃ。気にならないわけがないじゃろう？」

ふーむ…困りましたね。

私は一つの国に留まる気はありませんし、残りの国も見てみたいものです。

しかし、今この国はちょっとした騒ぎになっています。

国から出るのも一苦労ですかね？

仕方ありません…

「とりあえず、そのお話はお断りします。」

「な、なぜじゃ！？」

「あなたは権力に目が眩んだ騎士は傍に置きたくないと思っているでしょう？しかし、私は権力に興味ありませんから、騎士になる気はありませんよ。」

「しかし…」

「結局、騎士になるのは権力が目当ての人が大半ですよ。それに、

欲が無い【人間】なんていません。そういう人が騎士になっても、暴走を止めるのがあなたの役割じゃないんですか？」

「む…」

「そもそも、騎士っていうのは王女の身を守る為に存在する物です。それなら、あなたが騎士より強くなればいいんですよ。」

「なんじゃ？それは？【魔具】か？」

やはり、これは【魔具】に見えるんでしょうかね？

取り出した物は小型のレーザーブレードとレーザーライフルです。

【霊力】消費がほかの物と比べて少なく、扱いやすい武器です。

ちなみにこの世界の【魔具】とは【魔力】を消費し【基礎魔法】や【属性魔法】とは違った【魔法】を使うための道具のことです。

それはテレポートや無効化、読心に記憶への干渉、という風に千差万別です。

その中にはただ単に【魔力】を撃ち出すためだけの物もあります。

私の武器は【霊力】を消費しますが【魔力】と似たようなものなので、まあ扱えるでしょう。

「まあ、とりあえず持ってみてください。」

両方の武器を武装解除（パージ）して、キャリルさんに渡します。

これからあの武器を取り出すことはできませんが、使っていなかったので別に構いません。

「む？わかったが…」

そう言って武器を手に取りました。

「む…【魔具】は初めてじゃが…なかなかに【魔力】が…」

やっぱりですか。まあ、大丈夫でしょう。

「それじゃ【魔力】を流してみてください。」

「【魔力】を流す？うむ…」

少し間を開けて、レーザーブレードから光の刀身が、レーザーライフルからは光線が発生しました。

「な、なんじゃ！？これは！」

成功ですね。

【霊力】も【魔力】も似たような物ですから、使えるとは思ってましたけどね。

確認が出来ました。

「むぅ…つ、疲れた…のじゃ…」

そんな言葉を残して倒れてしまいました。

しまったです。

レーザーブレードは【魔力】を流し続けるとその分だけ【魔力】が消費され続けるんでした。

私は【霊力】の回復力が馬鹿みたいに多いですから、問題なく使えたんですよね。

「…イーナさん。わかっててやったでしょう。」

さて、何のことやら。

「こうなった責任はルビアにもあるんですからね。逃げなければこんなことには…」

「何を言ってるんですかイーナさん。もしも城に連れていかれていたら、決闘の件も詳しく聞かれてたかもしれませんよ?」

「む…それもそうですね。」

やっぱりルビアには感謝ですね。

「それで、王女さんはどうしましょう?」

倒れているキャリルさんを見ながら、ルビアが言います。

「このまま行方不明でもまずいですから。考えがあるので、とりあえず袋にいれましょう。」

気を失っているキャリルさんを袋に詰めます。

まあ、レーザーブレードとレーザーライフルはプレゼントですよ。

自分の身を自分で守ることが出来れば、それに越したことはありません。

まあ、使い方しだいです。

## 閑話休題（翌日）

昨日は大変でした。

お城に兵が少なくてよかったです。

王女さんを探していたんですかね？

「ルビア、次はどの国に行きましょうか？」

「そうですね…【フィジカ】から近いのは東の【オーガニー】か西の【アナリティカ】ですよね？」

「はい、どっちがいいですかね？」

【オーガニー】は自然が豊からしいですし【アナリティカ】は【魔

具】が他の国よりも発展しているらしいですが…

「それじゃあ…【オーガニー】に行きましょうよ。自然が豊かなら、おいしい物もあるでしょうし。」

そういえばルビアも最近は食事をする機会が多いですね。

リリウムは果物しか食べませんが、ルビアはバランスよく食べるんですよ。

まあ、気が向いたら食べる程度ですけど。

「東ですか…」

【オーガニー】は砂漠に囲まれていると聞きますが、まあ大丈夫でしょう。

水も樽ごと買いましたし。

私たちは門を出ます。

昨日の騒ぎが嘘のようでしたね。

「それじゃあ、行きますか。」

「はい。」

「キュー」

【オーガニー】に向けて歩を進めます。

さて、どんな国でしょうかね？

「イーナさん。そっちは西ですよ？」

…方位磁石を見るのを忘れていました。

## 第十五話・お城への潜入はかなり厳しいです（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

いやー、課題が多くてですね。

書く暇がなくって、ストックが切れちゃいましたよ。

なので、続きは誠意執筆中です。

それと、王族の方が出てきましたが年齢は１１歳ほどですよ？

主人公と身長が同じくらいですね。

次回は【オーガニー】に入れるか？

まあ、書きながら決めていくので、一概には言えませんね。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第十六話・高温多湿はイヤですね（前書き）

はい、第十六話投稿いたしました。

寒暖差が激しく、体調を崩しやすいので体調管理はしっかりとしましょう。

…そう言っている自分が体調を崩してるってゆうね。

なんとか、第十六話始まり始まり…

# 第十六話・高温多湿はイヤですね

イーナこと伊那楓です。

【フィジカ】を出発してもう４日がたちました。

「イーナさん…」

もうすぐ【オーガニー】に到着するはずですが…

「イーナさんってば…」

さっきからルビアがうるさいですね…

「イーナさーん…暑いですー」

「キュー…」

それはさっきから何度も聞きましたよ。

「仕方ないじゃないですか。砂漠なんですから…」

さすがは砂漠です。

暑くて熱いです。

【霊力障壁】である程度の熱は遮断できているんですが…

それでも暑くて熱いです。

頭の上のリリウムもぐったりしてます。

ルビアは【赤竜】だけあって、熱には強いようですけど、擬態状態では人間と同じように、暑さにも熱さにも弱いんだそうです。

「だって、もう2日も歩き続けじゃないですかー」

「それも仕方ないです。方位磁石が狂ってるんですから…」

方位磁石に目を向けても、指針がぐるぐる回っています。

なんなんですか？この砂漠は…

地面に磁石でも埋まってるんですかね。

【レーダー】も出していますが、索敵範囲内には何もありません。

ルビアが擬態を解いて見に行けばいいって？

…ルビアが嫌だって言うんですよ。

「イーナさーん。あーつーいーでーすー」

「キューキューキュー」

「あーもう。仕方ないですね。少し休みますよ。」

「おー。イーナさん。愛してます。」

「キュー」

そう言ってルビアが抱き着いてきます。

なんだか顔に柔らかいものが…

「あーつーいーでーすー」

「私も暑いんですから、ほら、離れてください。」

ルビアが物足りないような顔をしながら離れました。

なぜにそんな顔を?

「それじゃ、危ないですから下がってください。」

「はーい。」

「キュー」

リリウムが私の頭の上からパタパタと飛び、ルビアの腕に収まって私より後ろに下がります。

そして出すのは、バズーカとグレネードです。

何回かやっているので、要領は分かっています。

まずは地面に向けてバズーカを撃ちます。

バズーカなので、爆発はせずにかなり深くまで穴が開きました。

次にその穴に向けてグレネードを撃ちこみます。

地下数mのところで起爆し、爆風は開いた穴から出てきて、それと共に砂も一緒に巻き上げられました。

巻き上がった砂は一気に空中に巻き上げられ、重力に従い、地面に落ちてきました。

その結果は…

「ゲホッゲホッ…イーナさんもっと手加減を…ってイーナさん!?」

「キュ…キュー!」

てっとり早く言うと、砂に埋まりました。

「ルビアー助けてくださーい。」

【霊力障壁】があるので生き埋めにはなっていませんけどね。

砂風呂ですね。

とても暑くて熱いです。

「イーナさん!今掘り出しますからね!」

「キュキュー!」

リリウムも手伝ってくれているようですね。

ありがたいことです。

数分後
閑話休題

てんやわんやで穴が開きました。

地面より下は意外と涼しいとか涼しくないとか。

崩れにくくする為に、壁はルビアの火の息（ブレス）で溶かしてあります。

穴には袋に入れてあった布をかけておきます。

直射日光が無いだけで、案外涼しくなるものですよ？

「本当に心配したんですからね。」

「すみませんね。ここ数日で慣れてたつもりだったんですが…」

夜にはこの方法で穴をあけて、その中で寝ていましたよ。

今日に限って失敗してしまいましたけど…

「これを食べたらすぐに出発しますからね？」

「はーい。」

「キュー」

おいしそうに食べてますね。

【フィジカ】にもアルモがあったんですよ。

アルモを食べようとした時に【レーダー】に反応が…

「これは…」

「どうかしましたか？イーナさん。」

「ええ、何かが近づいてきていますね。」

【レーダー】には赤い点と緑の点が表示されていて、こちらに近づいてきています。

ここまで、サボテンみたいな植物がちらほらと点在し、トカゲやサソリのような生物しか見ませんでした。

まあ、どれも【魔獣】の幼生らしいですが。

【オーガニー】は【水属性魔法】が発展しているからこそ、こんな砂漠の中でも国を造ることができたんでしょうね。

「休憩はおしまいです。行きますよ。」

「えーもう少し休みたいですー」

「キュー」

「わがままを言わないでください。ただでさえ【オーガニー】に着くか分からないんですから、それにこのままだと水も食料も尽きますよ？」

迷ったおかげで現在地も分からず、水も食料も残り少ないんですよ。

この状況で、果たして【オーガニー】にたどり着けるのか。

「む…それならしかたないですね。」

もしも【オーガニー】から来たんだとすると…

行ってみる価値はありますね。

数分後
閑話休題

【霊力浮遊】を使って移動速度を上げ【レーダー】で確認した場所に着きました。

そこには…

「ぐっ…中級魔法【アクアアロー】！」

「ハッハー！弱えなあ！初級魔法【ウィンドアロー】！」

片方の男は水の槍を構えながら【水属性魔法】の中級魔法【アクアアロー】で牽制をし、もう片方の人…【亜人】ですね。猫の耳が付いてますし。【亜人】は【風属性魔法】の初級魔法【ウィンドアロー】でそれを迎撃しながら、持っている剣で攻撃を仕掛けています。

水が飛び散って、風が吹き荒れています。

飛び散った水は水蒸気になり、風がそれを辺りに拡散させています。

「暑いですー。イーナさーん。」

「キュー…」

それはそうですよ。

この辺一帯が高温多湿になってるんですから。

さっきは砂風呂でしたけど、今度は蒸し風呂ですか。

「くそっ…中級魔法【ヒーリング】！」

槍を持っている男が【ヒーリング】を使いました。

剣で切られた傷が徐々に治癒していきます。

「無駄だ無駄だぁ！おらぁ！」

【亜人】が男を剣で切り付けました。

もう【魔力】も限界だったのか、その剣は【魔力障壁】をも切り裂き、男の胸を深く抉りました。

「余計な手間をかけさせんなよ。まあ、これで終わっただろ。」

「ぐ…あ…」

「おお、まだ生きてんのか。驚いた。苦しいだろ？楽にしてやるよ。」

【亜人】はなんの感情も込めずに、淡々と言っています。

柄を両手で持ち、刃を男の胸に当てました。

「ま、待ってくれ。死にたく――――」

今まで表情が無かった顔が、ほんの僅かに歪みました。

「何を言ってやがる。殺されるだけのことをしたんだろうが。」

そう言った後、剣が男の胸に沈みました。

【亜人】は剣を抜いて血を拭い、剣をしまいました。

こちらを向きましたね。

「で、そっちのガキはなんなんだ？」

「実は迷ってしまいまして【オーガニー】ってどの方向ですかね？」

「迷った？よく生きてたな？」

「幸い食料はあったんですよ。なのでなんとか。」

「ふーん。食いもんか…」

その時、グギュルルルという音が響きました。

「…お腹が空いてるんですか？」

「あ、イヤ、これは！別に朝から何も食べてないとか、そういうことじゃなくてだな！」

今までの戦闘が嘘のように【亜人】が顔を赤くして弁解をしていますが、いくら弁解しても意味ありませんよ？

試しに袋から干し肉を出して【亜人】の前に出して動かしてみます。

【亜人】は干し肉の動きに合わせて顔を動かしています。

「…食べたいんですか？」

「い、いや。これはつい――」

閑話休題

「ふう、食った食った。」

どれだけ食べるんですかね？

数日分はあった食料が尽きてしまいましたよ。

「ああ、俺はセルナ・マーグナーって言うんだ。見ての通り【亜人】だ。よろしくな。」

そう言って手を出してきます。

「ええ、私はイーナと言います。頭の上にいるのが【白竜】のリリウムで隣にいるのがルビアです。」

「キュー」

「ルビアです。短い間ですが、よろしくお願いします。」

リリウムもルビアも名前を名乗り、出された手を取り握手をします。

セルナさんは驚いたような顔をしていますね。

「そ、それにしてもお前は度胸がいいな。普通死体を見たら取り乱すもんだが。」

なんだか話を変えられた気がしますね。

「いえ、度胸がいいわけじゃありませんよ。ただ…」

「ただ？」

「いえ、なんでもありません。それじゃ【オーガニー】まで頼みますよ？」

「おう、任せとけ。俺がいれば【オーガニー】まで安全だからな。」

たしかに、あの戦闘の一部を見ていましたが、なかなかの腕の持ち主のようですね。

「ところで【オーガニー】までどれくらいですかね？」

「んー、そうだな。あの男を追いかけて1時間くらいでここに着いたからな。」

意外と【オーガニー】は近くにあったようですね。

「おっしゃ行こうぜ。早く着いた方がいいだろ？」

「はい、お願いします。」

セルナさんについていこうとしたら…

「え？」

セルナさんが全力疾走をしています。

もしかして走って1時間なんですか！？

速！

自動車と同じくらいスピードでてますよ！？

「ルビア！急ぎますよ！」

「は、はい！」

私は【霊力突進】を使いながらセルナさんを追いかけます。

リリウムも落ちないように頭にしがみ付いています。

ルビアも走って追いかけています。

「おお、ついてこれんのか！それじゃ、飛ばすぞ！」

更に速くなりましたよ！？

【霊力突進】の出力を上げないと！

「イーナさーん！待ってくださーい！」

ルビアもこのスピードについてきます。

【オーガニー】には案外早く着きますかね！

ってまた速く――――

## 第十六話・高温多湿はイヤですね（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

猫の【亜人】が登場しましたね。

猫が目の前を歩いていました。どうする？

撫でる↑

愛でる↑

捕える↑

全選択ですね。

それと、主人公は特殊な能力を持っています。

砂漠を徒歩で横断など絶対に真似をしないでください。

砂漠を横断するときは装備を整え、徒歩ではなく車に乗って、自己責任で行きましょう。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第十七話・猫、時々、人間（前書き）

はい、第十七話投稿いたしました。

そういえばこの小説って残酷な描写がありますよね？

しかし、残酷描写指定はしません。

なぜなら私はちょめ介だから。

やっとこさ、第十七話始まり始まり…

# 第十七話・猫、時々、人間

どうも、イーナこと伊那楓です。

ようやく【オーガニー】に到着しました。

頭に乗っている【白竜】はリリウムで、横でグッタリしているのが【赤竜】のルビアです。

擬態をしているので見た目は【人間】ですけどね。

「お前すげーな。俺の全力に付いてくるなんて。」

こんなことを言っているのは猫の【亜人】のセルナさんです。

砂漠で偶然出会って【オーガニー】まで案内をして…

あれは案内と言えるんでしょうかね？

1時間の間、ただただ全力疾走を続けましたよ。

私は【霊力突進】を続けていたのでそこまで疲れてはないですけど…

「イーナさ…少し…休…憩を…」

ルビアは息も絶え絶えですね。

【赤竜】と言えども体力は変わらないんですかね。

「じゃあ、袋に入っていてください。疲れが取れたら出てくればいいですよ。」

「す…すみま…せ…ん」

そう言ってルビアは袋に入りました。

「さて、ありがとうございまし…どうかしましたか？」

セルナさんが呆然としています。

何かおかしいところでもありましたかね？

「いやいやいや！おかしいだろ！なんでそんなちっさい袋に入れるんだよ！」

ああ、そのことですか。

「どうも【エルフ】が作った物らしくてですね。なんでも入るんですよ。」

「へぇー、あの【エルフ】がか…見せてもらってもいいか？」

「いいですよ。」

そう言って袋をセルナさんに渡します。

「おお！ホントだ！底に手が付かねーぞ！…売ったらいくらになるんだろーな。」

質量保存の法則を軽く無視した袋ですからね。

欲しい人はいくら出しても買うでしょうね。

「それじゃ、そろそろ行きますので…」

「ああ、悪いな…あ！ジャラスが空を飛んでる！」

そう言ってセルナさんが私の後ろを指さします。

空飛ぶジャラス！？

ジャラスが空を飛ぶはずがないのに！？

つい後ろを向いてしまいました。

しかし視線の先には青空が広がっているだけです。

視線を戻すとセルナさんが走っています。

「悪いなー。どうしても金が必要なんだー」

そう言いながら人ごみの隙間を全力で走っていきます。

「あ！ちょっとー！」

「キュー！」

こんなに人が多くては【霊力突進】も使えません。

もたついている間にセルナさんは人ごみに消えてしまいました。

「ぬ、盗まれた…」

「キュー！キュー！」

閑話休題（ギルド到着）

幸いギルドカードはポケットに入れてあったので、依頼を受けることはできます。

しかし、依頼よりも先にやらなくてはいけないことが出来ました。

それは…

「じゃあ【亜人】は裏街にいるんですね？」

ギルド【エアスト】の受付の人に【亜人】がどこに住んでいるのかを聞き、そこに行ってみようと思います。

「はい【亜人】は例外なく裏街にいます。表通りに家を持てない【人間】が主ですが…そもそも【亜人】は裏街以外に住むことを禁止されていますから。」

【人間】がただ単に排除しようとしてるのか、それとも【亜人】が問題を起こすから排除されるのか…

まあ、考えた所で変わるわけでもありませんが。

「そうですか…ところで、セルナ・マーグナーって知っていますか？」

盗み方から逃げ方まで、やけに手馴れているようでしたが…

まあ、私の不注意もありましたけど。

受付の人は何やら資料を捲っています。

「ああ、最近ギルドに登録した【亜人】ですね。高額の依頼だけしか受けないのでこの辺では有名ですよ。まあ、確実に遂行しているので文句はありませんが…」

「そうですか…」

それだけ聞けば十分です。

ギルドを出て、裏街に向かいます。

そろそろ日も暮れてきそうですね。

急ぎましょう。

## 裏街到着
## 閑話休題

目的の場所に到着しました。

それにしても、ここが貧民街ですか。

表通りから路地に入ると薄暗く、ゴミが散乱していました。

ゴミ一つ落ちていなくて日が当たる表通りとは大違いですね。

まるで表通りの要らなくなったものを押し込めたみたいです。

人通りが少なく、活気もなかったです。

そして私達は一軒の家の前に立っています。

「ここがセルナさんの家ですか…」

「キュー」

どうやらこの界隈ではセルナさんは、良い意味でも悪い意味でも有名みたいですね。

名前を出しただけで家の場所を教えてくれましたよ。

猫の形を模したドアノッカーがあったので、叩いてみました。

鈍い音が響き、中から足音が聞こえます。

「はい…どなたでしょう?」

ドアを開けたのは、やんわりとした雰囲気の【人間】の女性でした。

「えっと…セルナさんはいらっしゃるでしょうか？」

「セルナ？あの子は外に出てますけど…セルナのお友達？」

「いえ、助けてもらったもので、お礼を言いにきたんですよ。」

間違いは言ってませんよ？

「まあ、そうですか。それじゃあ、あがって待っていてもらえます？あの子もそろそろ帰ってくると思いますから。」

そう言われ家の中に通されました。

「それじゃあ、座っててください。今お茶を出しますから。」

そう言って奥に行ってしまいました。

私はテーブルとイス、クローゼットが置いてあるだけの簡素な部屋に通されました。

まあ、待っていましょうか。

座るとテーブルに置いてある紙包みが目に留まりました。

なんでしょうかね？

紙包みからはなにやら独特のにおいがします。

「このにおいは…」

紙包みを手に取ろうとするとドアが開かれました。

「お待たせしました。」

【人間】さんがお茶とお菓子を持ってきてくれました。

「そういえば名前を言っていませんでしたね。私はロウザ・マーグナーです。あなたは?」

「ああ、すみませんでした。私はイーナと言います。頭の上の【白竜】はリリウムです。」

「キュー!」

リリウムも挨拶をするように一鳴きしました。

「イーナさんとリリウムさんですか。そういえば、助けてもらったと言ってましたけど…」

「はい、砂漠で迷っていたところをセルナさんに【オーガニー】まで案内してもらったんですよ。」

「そうなんですか…あの子が…」

「はい、本当に助かりました。ところでロウザさん。顔色が悪いようですが…」

「分かります？実は数か月前に倒れちゃいまして、それからずっと…」

「病気…ですか？」

「はい、あの子の為に働いていたのに病気で働けなくなって、今はあの子が私の為に働いていて。本当に…ダメな…」

ロウザさんは顔を伏せ、涙声で呟いています。

「あの子は…とても強くて、とても優しくて、でも…」

そこでロウザさんが顔をあげました。

「すみません。暗くなっちゃって。こんな話を聞いても困りますよね。」

「いえ、話すことも大事です。誰かに話したら少しは軽くなりますよ。」

「…はい、ありがとうございました。」

そう言ったロウザさんの目は赤くなっていました。

「あ、お茶なくなっちゃいましたね。入れてきます。」

ロウザさんが立ち上がった時に異変が起こりました。

「ケホッすみま――――ケホッ…ゲホゲホッ！」

ロウザさんが急に咳きこんだかと思うと倒れてしまいました。

「大丈夫ですか!?ロウザさん!?」

ロウザさんの口元からは血が流れています。

「すみま…ゲホゲホッ…せん。はぁはぁ…その…ゲホッ…薬を…」

ロウザさんはテーブルの上の包みを指さしました。

「これが薬?何を言ってるんです!これは――」

その時、玄関から声が聞こえました。

「姉さーん。帰ったよー。…あれ、いないのかな?姉さーん。」

この声は…

「姉さーん。姉――げ!お前、なんでここに――姉さん!?」

セルナさんは、私をみて驚いたかと思うと、それとはまた違う驚きの表情を浮かべました。

「姉さん!?姉さん!しっかりして!今薬を…!」

セルナさんが包みを開けてロウザさんに飲ませました。

それで落ち着いたのか、ロウザさんの咳は治まり、穏やかな呼吸が聞こえてきました。

「テメェ…何故姉さんに薬を飲ませなかった！」

物凄い剣幕で私に掴みかかってきます。

「お前もか！やっぱりお前も【亜人】と暮らしてるからって見捨てるのか！」

「落ち着いてくださいセルナさん。苦しいです。」

「少しの間でも信じた俺がバカだった！【人間】なんて――――ガアァ！」

ちょっと苦しかったので【霊力急転】で振りほどきました。

セルナさんはクローゼットに突っ込んでしまいましたね。

「自分の事を棚に上げて何を言ってるんですか。裏切られたのは私ですよ。」

クローゼットの破片をまき散らしながらセルナさんが立ち上がり、こちらを睨んでいます。

「とりあえずロウザさんを寝かせましょう。話したいこともありますし。」

閑話休題

ロウザさんを二階にあったベッドに寝かせ、私とセルナさんはもといた部屋のイスに座っています。

「で、あの薬とやらは、どこで、どういう説明を受けて買って、いつから飲ませているんですか？」

「…なんでお前にそんなこと言わなくちゃいけねえんだよ。」

まったく、この期に及んで何を言うかと思えば…

「あなたはお姉さんを殺す気ですか？」

「あ？」

どうやら興味を示してくれたようですね。

「どういうことだ？俺が姉さんを殺す？そんなことするわけないだろうが！」

手を叩きつけたせいか、テーブルが真っ二つになってしまいました。

「…ナロティという植物を知っていますか？」

「ナロティ？なんだそりゃ？」

「主に【アプライド】周辺にのみ生息していて、主に鎮痛剤として利用されています。」

「鎮痛剤？それなら問題は――」

「問題なのは、使われている箇所なんですよ。」

「箇所？そんなの、どこでも同じじゃ…」

「ナロティが鎮痛剤として使われる場合は、葉を磨り潰して患部に塗布したり、乾燥させて煎じて飲むんです。」

「それがどうした？」

「そして、ナロティの種を乾燥させて粉にして服用すると、強い鎮痛作用が得られます。それがあの薬の正体です。」

他国で栽培できないように、ナロティの種の持ち出しは禁止されているはずです。

それがあるということは…

「何言ってんだ？強いんなら――」

「それが強すぎるんですよ。」

「強すぎる？どういうことだ？」

まだ気づかないんですか…

「戦争では、兵士に飲ませていたんですよ。痛みを忘れさせて、死ぬまで戦わせるために…」

「な！？」

もう薬じゃない、麻薬と同じ…

依存性が無いだけ、まだマシですが…

「あなたは、それをロウザさんに飲ませていたんですよ。もう一度聞きます。いつから飲ませているんです？」

「…姉さんが倒れてから、ずっと…」

「ロウザさんは数か月前に倒れたと言っていましたが…ナロティの種には鎮痛作用しかありません。病気を治す作用なんてありませんよ。」

この数か月の間、ロウザさんはどんな思いでいたんでしょう。

知らずに飲んでいたのか、それとも…

「…もう、手遅れかもしれませんね。」

「姉さんが…死ぬ？」

「今までが奇跡だったんですよ。なんの処置もせずに、痛みがないだけマシですが…衰弱死していてもおかしくありませんでしたよ？」

「…」

最初の勢いはどこへ行ったのやら、すっかり意気消沈していますね。

「これで私の話は終わりですが…あの袋はどこに売ったんですか？」

「…」

セルナさんは呆然としていますね。

まあ、仕方がありませんか。

「徐々に効きにくくなっているはずです。もう、薬は飲ませない方がいいですよ。」

袋を売った分のお金もあるはずですから、それでまた買ってきたはずです。

「すべてを打ち明けて…お姉さんを楽にしてあげてください。」

もう、回復の見込みもありません。

残酷なようですが…

「…えに…」

セルナさんが何かを呟いています。

「お前に…お前に何が分かる！俺が【亜人】だからと差別されても！【亜人】と一緒にいるからと差別されても！一緒に生きてきた…たった一人の家族なんだよ！」

そう叫びながら、私に拳を繰り出してきますが【霊力障壁】を貫通するには至りません。

「俺を拾ってくれて！俺と一緒にいてくれて！俺は…俺はまだ姉さんに恩を返せてねえんだよ！」

眼鏡を通して視るセルナさんの【魔力】は、右腕に集中しています。

あの【魔力】の濃度なら【霊力障壁】を貫通しますかね？

「俺は！」

右腕は【霊力障壁】と一瞬拮抗しましたが【霊力障壁】を貫通しました。

「…その気持ちはわかります。しかし、お姉さんをこれ以上苦しめるつもりですか？」

「な！？」

ただ、右腕を受け止めただけですよ？

ルビアに比べたらまだまだですし。

「今でも十分苦しいはずなのに、薬で誤魔化して、僅かに生きながらえて、それをいつまで続けるつもりですか。」

「黙れ…」

「あなたがやろうとしていることは…お姉さんを苦しませるだけです。」

「黙れえええぇ！」

右腕の圧力が強くなってきましたね。
しかし、放すわけにはいきません。
「セルナ…」
「姉…さん？」
ロウザさんがセルナさんの背中から覆いかぶさるように抱きしめました。
私の手からセルナさんの拳が離れます。
「姉さん！寝てないと！」
「聞いてたよ…全部。」
「！」
「セルナ…あのね…私…」
「姉さん…ごめん。今まで苦しめて…」
「ううん。セルナが謝る事じゃないよ。私が…いけなかったんだよ。」
「どういう…こと？」
「セルナが買ってきた薬もね…私の病気もね…全部わかってたんだ

よ。」

やはり、全部知っていたんですか…

「どうして!?あんな薬、飲まなきゃ――――」

「もう…十年だね…覚えてる?あなたが…表通りで泣いていて…」

「うん…忘れるわけ…ないよ。」

「初めのころは…全然懐いてくれなくて…」

「うん…」

「私が…食事を作っても…食べてくれなくて…」

「うん…」

「セルナ…一回だけ…聞いてきたよね…『どうして私を拾ったか』って…」

「うん…でも、姉さんが…」

「あの時はごまかしちゃったけどね…今だから言うよ…私も…さみしかったんだよ…」

「え…?」

「私もね…セルナと同じ…捨てられたの…親に…」

「姉さんも…？」

「始めはね…同情だったの…でもね…一緒に暮らしていくうちにね…だんだんと…なんて言うんだろうね…これが母親なのかなぁ…って」

「でも…俺…姉さんに…何の恩も…」

「ううん…セルナがいてくれたから…一緒に生きてくれたから…私も生きてこれたんだよ？セルナが生きてくれることがね…私にとって一番の恩返しなんだよ？」

「姉…さん…」

「そんなセルナとね…一秒でも…刹那の間でも永く…一緒にいたかったから…」

セルナさんから嗚咽が聞こえます。

「ほら…泣かないで…セルナには…笑っていてほしいから…」

「うん…うん…」

「最後にね…お母さんって呼んでほしいな…」

「母さん…母さん！何度でも呼ぶから！最後なんて言わないでよぉ…」

「ごめんね…ダメなお母さんで…本当に…ごめんね…」

眼鏡を通して視るロウザさんの【魔力】が急激に減っています。

「でもね…セルナと出会えて…よかった…本当に…一緒に生きてくれて…ずっと…一緒にいてくれて…本当に…」

掠れるような声で、しかしハッキリと…

最後の、言葉を…

「　　」

「母さん！」

ロウザさんの体から【魔力】が完全に消滅しました。

【魔力】が回復することは二度と無く【亜人】と共に生きた一人の【人間】がこの世界から消えて行きました。

「母さん…母さん…」

セルナさんがロウザさんの亡骸を抱きしめています。

「母さん…私も…ありがとう…育ててくれて…」

ロウザさんの顔には、穏やかな微笑みが浮かんでいました。

セルナさんと共に暮らした日々を、走馬灯にでも見たんでしょうか…

静かに、音をたてないように、家を出ます。

もう辺りは暗くなっていますね。

「ちょうどいいですね。」

さて、薬屋はどこでしょうか？

私は、私のやりたい事をやるだけです。

誰かが死んだとか、誰のせいで死んだとかは関係ない。

私の、感情の赴くままに…

## 第十七話・猫、時々、人間（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

まともな話になっているでしょうかね？

それにしても、薬物って怖いですね。

薬物。ダメ。絶対。

さて、主人公はこの後どこへ行ったのか？

【赤竜】はどうなったのか？

【亜人】の今後は？

次話で明かされる！

…かもしれない。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第十八話・この泥棒猫！と一度は言ってみたいです（前書き）

はい、第十八話投稿いたしました。

さて、梅雨はまだあけませんかね？

雨が降りすぎると水害が起こり、雨が降らないと水不足になります。

雨って恵みの象徴ながらも、災害の象徴でもあるんだなぁ、と思った今日この頃だったり。

でもって、第十八話始まり始まり…

# 第十八話・この泥棒猫！と一度は言ってみたいです

おはようございます。

イーナこと伊那楓です。

いえ、もうお昼なのでこんにちはでしたね。

腕の中で眠っている【白竜】はリリウムです。

「起きてくださいリリウム…こら、私の腕は果物じゃないんですから…」

リリウムが私の腕をやわやわと噛んでいます。

くすぐったいやら、むず痒いやら。

昨日はちょっと忙しかったので、こんな時間まで起きれませんでした。

「リリウム、起きてください。リリウム…あれ？」

昨日ちょっとした不注意でできた腕の傷が消えています。

なんででしょうね？

閑話休題

さて、この【オーガニー】は砂漠の中だというのに、自然が豊かです。

自然が豊かということは、つまり…

「キュッ！キュー！」

リリウムが頭の上で涎を垂らしながら、今にも飛び立たんと翼をパタパタさせています。

…汚いですし、髪がボサボサです。

大方、周りにたくさんある果物に興奮をしているんでしょうがね。

市場ですから、野菜やら果物がたくさん売られています。

「今日は何も買いませんよ。用事もありますし。」

「キュ！？キューッ！」

そんな抗議めいた声を出しても買わない物は買いませんよ。

「お金がないんですよ。仕方ないでしょう。」

昨日、セルナさんに袋を盗まれてから一文無しです。

宿に泊まる分はどうにかなりましたが。

市場を抜けて、ギルドに到着しました。

ここに来るまでの間、リリウムはずっと、お菓子を買ってもらえない子どものように、駄々をこねていました。

ギルドの中は、相変わらず騒がしい、と思いきや…

「え？」

ギルドの中は不気味なほどに静まり返っていました。

人がいるのに、一人残らず顔を伏せています。

なんか怖いですね。

どういうことか受付の人に聞いてみましょう。

「どうしたんですか？この静まり様は？」

「え？は、はい…実は…」

受付の人から聞いた話の内容は、要約すると…

昨日の夜に、表通りにある一件の薬屋が全壊。

また、その直後に貴族の館から火事が発生し、館が全焼。

どちらも死者は出なかったらしいですけど…

ここまでならば、ただの事件と事故で済んだはずですが、薬屋からナロティの種が発見され、店主が捕まったそうです。

そして、捕まった薬屋の店主が、火事が発生した館の貴族との繋がりを自白。

貴族が門番を買収し、店主が種を仕入れてくるという流れになっていたみたいですね。

ギルドでは、夜通し専属ギルド員を動員して調査にあたったそうです。

貴族も重傷で捕まり、二人仲良く牢屋行きらしいです。

なるほど、顔を伏せているのは寝ているからですか。

「それに…大きな声では言えないんですが、火事の直後に【赤竜】の姿が目撃されていまして…」

【赤竜】って、ルビアですかね？

貴族のところに売られていたんですね。

「朝からギルドではその話で持ちきりですよ。討伐しようと有名なチームが集まってきているらしいですよ。【ルシャトリエ】や【オーム】【ベルクマン】といった名だたるチームばかりです。」

いや、チームの名前を言われても分かりませんが…

「これだけの面子が揃えば【赤竜】といえどもただではすみません

よ。」

…大事になっていますね。

「そうだったんですか。ありがとうございました。」

早いとこ、この国から出ましょうか。

閑話休題

【オーガニー】から出られましたよ。

【白竜】がいるので怪しまれましたが、何とか出ることができました。

さて、次は【アプライド】に行きますか。

そう思い、歩を進めた途端…

「待てよ！」

後ろから声がかけられました。

「どうしたんです？セルナさん。」

「…お前、そんな軽装でどこ行くつもりだ？」

「いえ【アプライド】に行こうと思いましてね。この国からも近いですし。」

「…ほらよ。」

「おっと。」

勢いよく、袋を投げつけられました。

中を覗いてみると、水や食料が入っています。

「どうしたんです。これは？」

「…礼だよ。」

「礼？私はお礼を言われることなんてしていませんが…」

「とぼけんじゃねえよ。お前だろ。薬屋を潰したのは。」

「さて、なんの事やらですよ。」

まあ、貰える物は貰いますが…

「それで、あなたはこれからどうするんです？」

「…母さんに言われちまったからな。俺が生きることが恩返しだって。けどな、ただ平凡に生きてるだけじゃダメだ。」

「それで？」

「だからな…」

セルナさんは熱い砂の上で土下座をしました。

「頼む！俺を連れてってくれ！お前は知識も豊富なんだろ！？母さんみたいな奴をもう見たくないんだ！そんな奴らを守る為に知識が必要なんだ！だから――」

「いいですよ。」

「お願い…って、いいのか！？」

基本的に来るものは拒まず、去る者は追わず、ですから。

「ちゃんとした目的があるのは良いことです。私は目的なく旅をしていますし。薬草は、森に着いたら追々話しましょう。」

「そうなのか？それじゃ、その【白竜】は？」

「さあ？頭の上が気に入ってるんじゃないんですか？」

「…真面目に答える気ないだろ。」

セルナさんは自分に付いた砂を落としながら答えます。

「まあ、いいじゃないですか。さて、これを…」

セルナさんに、落ちていた石を渡します。

「は？どうすんだ、こんなもん。」

「なるべく高く上に投げてください。お願いしますよ。」

「まあ、いいが…」

セルナさんが訝しげに石を投げました。

これは、また高く上がりましたね。

まあ、好都合です。

落下に合わせて、石にグレネードを撃ちこみます。

そして、起こる爆発音。

「――ッ！うるさっ！なんだそりゃ！」

セルナさんが頭についている耳を押さえています。

「まあ、いいじゃないですか。気にしないでください。」

「…ちゃんと説明しろよな。」

「まあ、気が向いたらしますよ。」

「…」

セルナさんがこちらを睨んできています。

そんな時に、突然薄暗くなりました。
来ましたかね？
「ん？なん――――」
セルナさんが上を向いた途端に硬直してしまいました。
「せ、せせ【赤竜】！？なんでこんなところに！？逃げるぞ！」
切羽詰まったように私の腕を引っ張ってきました。
「グオオォォ！」
【赤竜】の咆哮が耳に響きますね。
「何やってんだ！早く逃げんぞ！」
「大丈夫ですって。あの【赤竜】は…」
その時【赤竜】から眩い光が…
「酷いです！イーナさん！助けに来てくださいよ！」
光が収まったかと思うと、綺麗な女性が一気に捲し立ててきました。
「すみませんね。ルビアなら大丈夫だと思ったんですよ。」
「ホントに大変だったんですからね。目が覚めたら知らない場所にいるし、イーナさんはいないし、知らない人間がいるし、イーナさ

んはいないし。頭に来たから息(ブレス)を吐いてやりましたよ。あ、これも持ってきました。」

渡されたのはセルナさんに盗まれた袋です。

袋を覗いてみると、見た目からは想像できないほどのお金が入っていました。

「どうしたんです？このお金。」

「ふふふ、どさくさに紛れてお金も貰ってきたのですよ。」

「ナイスです。ルビア。」

ちょうどお金もありませんでしたし。

ふと、セルナさんを見るとハッとして、こんなことを言いました。

「いやいやいや！なんなんだよ！【赤竜】が【人間】になったって！ふざけてんのか！」

そういえば【赤竜】が擬態をすることは、一般には知られていないんでしたね。

「なんですか？泥棒猫が。文句でもあるんですか？」

ルビアが鋭い目をセルナさんに向けました。

「あ…いや…泥棒猫！？」

耳をペタリとさせ、明らかに怯えていますね。

「袋を盗んだでしょう？泥棒猫で十分です。」

流石に【赤竜】に睨まれれば文句も言えないでしょう。

「さ、行きましょイーナさん。次はどこに行きますか？」

「ええ、次は【アプライド】です。そういえば、ルビアの故郷って【アプライド】でしたよね？」

「そうですよ？任せてください！…と言いたいんですけど、森の中にばかりいたので【アプライド】のことは分からないんですよ。」

「そうなんですか。じゃあ【アプライド】に向かいながら考えますか。」

えーと、南は…

「こっち――」

「こっちですよー。イーナさん。」

脇に手を入れて持ち上げられ、向いている方向を変えられました。

「…こっちですね。行きますよ。」

「はい。イーナさん。」

「キュー」

「ちょっ…待てや！」

さて、また一人同行者が増えましたね。

それにしても…

「その口調変えた方がいいですよ？」

「は？どういうことだ？」

「いえ、女性だというのに、そんな乱暴な口調はどうかと…」

「…は？」

は？じゃありませんよ。

最初に見た時は男性だと思いましたが、すぐに女性だってわかりましたよ。

「そういえば、どうしてそんな男物の服を着てるんです？」

ルビアも気づいていたようですね。

「あ、いや、俺は…」

「見た所、晒も巻いてますね。外さないんですか？」

ルビアがセルナさんの胸を弄っています。

「や、やめろー！」

胸を弄っているルビアの手を払いのけようとしますが…

「猫ごときが、竜に勝てると思ってるんですか。」

その腕を逆に掴みかえし、更に胸を弄ります。

もうセクハラですね。

「うあー！やめろー！」

セルナさんがダッシュで逃げ出します。

「むむ、逃がしませんよ！」

あーあ、あんなに走って、疲れても知りませんよ？

「まあ、賑やかになりましたね。リリウム。」

「キュー！」

賑やかな二人の後をゆっくりと追いかけます。

「そういえば…水は大丈夫ですかね？」

【アプライド】まで、何日かかるやら…

## 第十八話・この泥棒猫！と一度は言ってみたいです（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

同行者が増えました。

以上！

※この小説は、作者の思いつきと行き当たりばったりで構成されています。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第十九話・素人のキノコ採取は危険です（前書き）

はい、第十九話投稿いたしました。

筋肉痛で足が痛い、マジで痛いです。

湿布が欲しい今日この頃です。

はてさて、第十九話始まり始まり…

# 第十九話・素人のキノコ採取は危険です

どうも、イーナこと伊那楓です。

ようやく砂漠を抜けましたかね。

大変でしたよ。

結局、水が足りなくなり、セルナに【水属性魔法】を使ってもらって、なんとか凌ぎましたから。

それと、ルビアとセルナは、犬猿の…いえ、竜猫の仲ですね。

仲が悪いってことですよ？

話を聞いたところ、どうやら、ルビアはセルナが同行するのが不満の様ですね。

「まあ、いいじゃないですか。」

「そうだ、別にいいじゃねえか。」

「よくないですよ！それと、泥棒猫は黙りなさい。」

「てめえ！まだ泥棒猫と言うか！」

セルナがパンチを繰り出すと、ルビアが身をずらしてその腕を取り、その勢いを利用してセルナを投げ飛ばしました。

「うおっ！」

「泥棒猫を泥棒猫と言って、何が悪いんですか。」

投げ飛ばされたセルナは、空中で身を翻すと綺麗に足から着地しました。

さすが猫の【亜人】ですね。

【アプライド】までは、まだ数日ほどかかりますが、大丈夫ですかね？

## 閑話休題（森に到着）

「これがヴァーナです。主に葉が解熱剤に用いられますね。」

「…」

「これはウェルトです。食べると数分で全身に発疹ができ、十分ほどで死に至ります。」

「…」

「ヴァーナとウェルトは、葉の形が似ているので注意が必要です。次に――――」

「だーーー！」

セルナが奇声を発して、用意した植物を机ごとひっくり返してしまいました。

「危ないですね。どうしたんです？」

「あー！もう！わけがわからねぇ！大体、なんでみんな同じような形をしてんだよ！」

「私にそんなことを言っても、形が変わるわけじゃないですよ？」

セルナが頭を掻きながら唸っていますね。

「大体、あなたが知りたいというから教えているんです。私は無理に教えるつもりはありませんよ？」

「…わかってるよ。」

「ほら。わかったら元に戻してください。続けますよ。この植物は…」

何をしているかですって？

セルナが旅をする目的ですよ。

『薬の間違った知識を正し、薬の適正な使用法を広める。』

ちょっと違いますが、こんな感じでしたよね。

この世界では【魔法】による治療が一般的で、薬による治療は公に認められていません。

外傷は【魔法】でも治しやすいんですが、内傷…つまり体の内側の病気は【魔法】では治しにくいんです。

しかし、薬が一般的ではないので、気休め程度にしかならくても【魔法】による治療を受けざるを得ないんです。

と、言っても薬で治る病気なんてたかが知れていますが。

薬屋が効果的な薬草を見つけても、独占してしますからね。

それに、一般人が見分けがつかない薬草を、わざわざ使ったりはしません。

下手をしたら毒草を飲んでしまうかもしれませんし。

「さて、これで最後です。お疲れ様でした。」

「あー。疲れたー。」

セルナがグッタリと寝転がりました。

「教え始めてもう四日経ちますが、そろそろ覚えましたかね？」

「そりゃあな。致死量やら成分やら副作用やら、よくわからない所もあったが、大体の薬草と毒草の効果は覚えたぞ。」

「それはよかったです。でも、忘れてはいけませんよ。命を助ける

も、命を奪うも、自分の匙加減ですからね。それ故に、責任が大きいんですよ。」

「ああ、わかってるよ…」

「さて、そろそろルビア達も戻ってきますかね？お昼の用意をしましょうか。」

袋から出したのは、フライパンと包丁です。

ルビアが貴族の館から、調理用具もついでに貰ってきたらしいです。

料理は問題なく作れますよ。

調味料は塩と胡椒が少しずつしかありませんので、味付けはシンプルなものになってしまいますが…

森に着いてからは、ルビアとリリウムには、狩りをしてもらっています。

私がセルナを教えているので、どちらも暇つぶしを兼ねているようですね。

調理用具の用意をしていると…

「それにしても、不思議だよな。」

「なんですか、唐突に。」

「いや、あんなに強い【赤竜】のルビアがおまえに従ってるなんて

…」

「私に従っているわけじゃありませんよ。ルビアが、自分の意志で同行しているんです。去るのなら止めませんし、止めるつもりもありません。」

「それじゃ、今すぐに俺が去ると言ってもいいのか？」

セルナが私の目を見ながら言います。

「ええ、構いませんよ？私は強制しません。私は相手の意思を尊重しますよ？」

「ふーん…」

おっと【レーダー】に反応がありますね。

「さて、ルビア達も戻ってきます。かまどを用意しましょうか。」

「…ああ」

さて、なにを狩ってきたんでしょう。

草むらからガサガサと音がして、人影が現れました。

「イーナさーん。戻りましたー。」

ルビアですね。

笑みを浮かべながらこちらに向かってきます。

「どうでしたか？ルビア。」

「はい。川があったので、魚を捕まえてきました。それと、こんなキノコがいっぱい。」

そう言って見せられたのは、赤茶色のキノコと、青紫色のキノコです。

「セルナ、来てください。」

「ん？どうした？イーナ。」

セルナを呼び、キノコを見せます。

「この二つのキノコですが、片方は毒キノコです。さて、どちらだと思いますか？」

「ん？そりゃ、この青紫色のだろ？」

そう言って青紫色のキノコを指さします。

「そうですか。何故そう思ったんです？」

「いや、体に悪そうな気持ち悪い色だし…」

ルビアも頷いていますね。

私は、そのキノコをパクリと齧ります。

「イーナさん！？」

「お、おい。大丈夫なのか？」

モグモグと咀嚼し、ゴクリと飲み込みます。

「ええ、大丈夫です。食べてみますか？」

そう言ってセルナに渡すと、恐る恐るセルナが口に入れ、咀嚼しています。

「なんだうめぇじゃ――――」

そこでセルナの言葉が止まります。

「薬草と毒草は、大体終わりましたから、次はキノコについて教えようと思っていますが…」

セルナが突然崩れ落ちてしまいました。

「お、お前…どうして…」

「このように【亜人】のみに効く毒キノコもあるので、気をつけてください。」

この青紫色のキノコはジュノニと言って【亜人】のみに筋弛緩作用をもたらす毒キノコです。

即効性がありますが、代謝されるのも早いので問題なしです。

ちなみに、赤茶色のキノコはエドデと言いまして、食用として人気のあるキノコです。

乾燥させると旨味が増すらしいですが、今日は魚と一緒に炒めましょうか。

「さて、食事の支度をしますか。ルビア、火をお願いします。」

「はい、イーナさん。」

そう言って、ルビアは火の息（ブレス）を吐きます。

かまどに、あっという間に火が付きました。

火熾しも簡単ですね。

「それじゃ、できるまで待っていてください。」

「はーい。楽しみにしてますよ？」

そう言ってルビアはセルナのところに向かいました。

フライパンに油をひき、かまどの火で温めておきます。

油は、生っていた種を絞り、抽出しました。

その間に、鯖に似た魚を捌き、骨と内臓を除き、食べやすい大きさに切ります。

キノコも石突きを切り、食べやすい大きさに切ります。

魚とキノコだけっていうのもどうかと思いますが、まあ仕方がないです。

一口大に切った魚とキノコを、フライパンに放り込みます。

ジュージューといい音といい匂いがしますね。

「キューキュー」

おや、匂いを嗅ぎつけたのか、リリウムが飛んで近づいてきました。

ここ数日で果物が無くなってしまったので、リリウムも普通に食事をしていますよ。

不満げに、仕方ないように食べています。

「味見でもしますか？」

「キュー！」

そう言った途端に小皿に取った分をあっという間に食べてしまいました。

「キュッ！キュキュー！」

おかわりでも欲しいんですかね？

「もうできますから。ルビア達を呼んできてください。」

「キュー」

パタパタと翼をはためかせ、ルビアの方に飛んでいきました。

「さて、出来上がりましたね。」

料理をそれぞれのお皿に盛りつけます。

ああ、これもルビアが貴族の館から貰ってきた物です。

無駄に金色の細工が施されています。

…こういう高い一点物よりも、安い物の方が使いやすいんですよね。

「イーナさーん。お腹空きましたー。」

ルビアがセルナを背負ってきました。

「セルナはまだ？」

「はい。食べた量が多かったんじゃないんですか？」

「う…うるせぇ…イーナぁ…」

このままではご飯が食べられなくなってしまいます。

仕方ないですね。

袋から、とある薬を出します。

「ジュニノの解毒剤です。飲めばすぐに効くと思いますよ。」

「てめぇ…持ってんなら…最初から…」

「いやいや、身を持って体験した方が、恐ろしさもわかるでしょう？」

それに、毒を摂取していると免疫ができるとも言いますし。

「ん…んっ！げほっげほ！まずっ！メチャクチャまじぃ！なんだこりゃ！」

「薬が美味しいわけないじゃないですか。飲まないのなら、お昼は食べられませんよ？」

「ちきしょー！あ、少し楽に…」

どうやら成功していた様ですね

いえ【亜人】だけに効く毒に対する解毒剤なので、私じゃ確かめようがなかったんですよ。

セルナがルビアの背中から降りて、笑みを浮かべてこちらに来ました。

「ありがとな。解毒剤をくれて、おかげで助かった。」

「いえいえ、動けるのならいいんです。では、お昼に――」

「――と言うとでも思ったか！初級魔法【ウィンドアロー】！」

杖を取り出してそう言うと、セルナの前に不可視の矢が現れました。
眼鏡をかけているので、ハッキリと視えていますよ？

「くらえやぁ！イーナぁ――――」

【ウィンドアロー】を発射した途端、セルナの膝が折れ【ウィンドアロー】はあさっての方向へ…

「あ」

「あ」

「キュ」

私を狙ったはずの【ウインドアロー】は私の横、つまりは料理が置いてあった机に直撃しました。

作った料理がメチャクチャになってしまいましたね。

「おい！どうなってんだよ！解毒剤が効いてねぇじゃねぇか！」

セルナが倒れ伏しつつも、喚いています。

まだ未完成だったようですね。

でも、今はそんな事よりも大事な、やらなくてはいけないことができました。

「この猫が！イーナさんの料理を――」

ルビアがこちらを向いた途端、息を呑んでしまいました

「おや、ルビアどうしたんです？」

「い、イーナさん…」

「キュ…キュー…」

「ああ、リリウムを連れてちょっと離れていてください。」

「は、はい！わかりました！行きますよ！リリウムちゃん！」

「キュッキュー！」

ルビアはリリウムを連れて全力で離れて行きました。

あんなに怯えて、どうしたんでしょう？

「んだよイーナ。元々お前が――」

セルナも、私の顔を見た途端に、顔を青ざめさせて、言葉を詰まらせてしまいした。

「い、イーナ。お、お前…」

いえ、私は怒ってなどいませんよ？

ただ、食べ物を粗末にしたセルナに、ちょっとしたお仕置きをする

だけですよ？

セルナは這いずって逃げようとしていますが、筋肉が弛緩しているせいか、上手くいかないようです。

「大丈夫ですよ。すぐに終わりますから。」

数十分後
閑話休題

「イーナさん…」

「キュー…」

「ルビアぁ…あいつひでぇんだよぉ…俺が謝ってるのにさぁ…あんなに…あんな…うあああぁぁぁ…」

セルナが泣きました。

ルビアに縋り付きながら、涙で顔をぐちゃぐちゃにして、泣いています。

いえ、セルナが必死に謝ってくるので早めに切り上げたんですがね。

何をしたかですって？

ただお説教をしただけですよ。

薬草少々とキノコ少々を混ぜましたけど。

しかし…

「ルビアぁ…ごめんなぁ…あんなに楽しみにしてたイーナの飯を…あんなにしちまってぇ…」

どうしましょうか。

今まで強気だったのに、一転して弱気になってしまいました。

「今度は私が何か狩ってきますから、セルナをお願いします。」

「は、はい…わかりましたけど…」

ルビアもセルナの扱いに困っているようですね。

「まあ、その内元に戻るでしょう。頭でも撫でてあげていてください。」

それとも、猫の【亜人】ですから喉元を撫でたほうがいいんでしょうか？

「それでは、行ってきます。」

セルナは魚が好きなようですから、魚でも捕ってきますかね。

【アプライド】までは、あと数日です。

## 第十九話・素人のキノコ採取は危険です（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

主人公はもちろん、料理が作れますよ。

調味料が無いので、単純な味付けしかできませんがね。

【亜人】が弱気になった。

普段強気な女性が、いきなり弱気になると…

…萌えるッ！

それと、自分で採ったキノコを食べるのは本当に危険です。

毒キノコの場合もあります。

ワライタケを食べても、笑うだけで済むはずがないので、食べることは止めましょう。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第二十話・円周率は3．１４以下略（前書き）

はい、第二十話投稿いたしました。

マジで暑いです。

寒いのも苦手ですけど、暑いのも苦手なんですよ。

それと、活動報告に目を通してくれると嬉しいです。

ほれほれ、第二十話始まり始まり…

# 第二十話・円周率は3．１４以下略

どうも、イーナこと伊那楓です。

この前は大変でしたね。

セルナが泣いたり、セルナが弱気になったりと。

【アプライド】もそろそろ見えてくるはずですが。

海に面している国は【アプライド】と【アナリティカ】の一部だけなので、楽しみですね。

しかし、それにしても…

「この森、やけに広くないですか？」

私の頭の上にはリリウム、前を先行するようにセルナが、そして隣にはルビアが歩いています。

「イーナさんもそう思います？」

「いや、だけどな。方位磁石は、ちゃんと南をさしてるぞ」

セルナが先行して、方位磁石を確認しながら歩いているので、間違いないはずですが。

「でも、森を歩き続けて、もう三日になりますからね。さすがに、おかしいと思いますよ」

「だがなぁ…」

セルナはどうにも腑に落ちないようです。

「私がこの森を出た時は、空を飛んでいましたが、こんなに広くはなかったはずですよ？」

「…それって、何年前だ？」

「え？えーっと…１００年…くらい…前かな。」

「１００年前て…」

セルナが呆れていますね。

まあ、ルビアは少々世間離れしている部分もありますから。

その時、ふと気付きました。

「…ルビア、セルナ、ちょっと来てください。」

「どうしました？イーナさん。」

「どした？イーナ。」

「あれを見てください。」

私が指さしたのは、一本の木です。

「この木がどうしたんだ？」

「その木の根元です。よく見てください。」

「んー…ん？この木、イーナが採ってたキノコが…あれ？なんだってこんな場所に？」

「そう言われてみればそうですね。どういうことです？イーナさん。」

その木には、私が採取したキノコと同じものが生えていました。

私は根こそぎ採取することはしませんから、採った痕跡が残ります。

「…まだハッキリとは言えませんが、セルナ、いいですか。」

「おう、なんだ？」

「ちょっと頼みがあるんです。」

数分後

閑話休題

「イーナさん。セルナに何を頼んだんです？」

あの日から、ルビアもセルナをちゃんと名前で呼んでいます。

怒った時はその限りではないですが。

「ええ、ちょっとした確認ですよ。」

私がキノコを採取したはずの木が、再び目の前に生えていた。

私たちは、ずっと南に進んでいたはずです。

セルナが、方位磁石を見ながら進んでいたので、これは確かです。

では、どうして、また同じ木があったのか。

私がセルナに頼んだのは『方位磁石を持って、全速力で南に向かってほしい』ということです。

セルナの全速力は、時速およそ８０ｋｍ程。

私の考えが正しければ…

「ありゃ？なんでイーナが？」

セルナが進行方向とは逆側から現れました。

およそ5分というところですね。

それが分かればこっちのものです。

「おい、どういうことだ？なんでイーナが前にいんだよ。」

「ちょっと待ってください。説明しますから。」

セルナの時速を秒速に換算して、円周は2πrですから、それを変換して…

「おい、イーナ！」

「…分かりました。説明します。」

二人を集め、落ちていた枝を使って、地面に円を書きます。

「さて、二人とも、これを見てどう思いますか？」

「何って、円だろ？これが関係あんのか？」

「キュー」

リリウムも丸くなっています。

まるでボールのようですね。

この世界の数学は、加減乗除くらいしかありません。

細かい式なんて、使い道がないからですかね。

「セルナ、質問です。あなたは南にずっと真っ直ぐに走りましたか？」

セルナは怪訝な顔をしています。

「当たり前だろ。南にずっと走ってたんだ。それなのに、イーナが

前にいやがるしよ。」

「では、これを見てください。」

円の一部分を囲み、その部分を大きく一本の線で表します。

「これはどうですか？」

「ただの線だろ。」

「そうです。それが重要なんです。」

「は？」

「一つの円も、部分部分を拡大して見れば、直線の集合として見ることができます。」

そう言いながら、細かい直線を円を描くように重ねて行きます。

六角形を思い浮かべると、分かり易いですね。

辺を増やし、内角を緩めて行けば…

「このように、セルナが走ったと思っている直線は、微妙に曲がっていたんですよ。こう…円を描くように。」

気付かないのも、無理ありません。

かなり大きな円です。

「だが、方位磁石は…」

「ですから、方位磁石も狂っているんですよ。」

方位磁石なんて、ちょっとした原因があれば狂ってしまいますから。

「ここからおよそ1．3ｋｍほどの地点、セルナが走った円の内側に、何かあります」

方位磁石を狂わせるような、何かが…

「いつから迷っていたのか、ハッキリとは分かりませんが…あの木に気付かなければ、いつまでも迷い続けていましたね。」

「なるほどな…」

「さて、どうします？磁石が正常になるまで離れるか。それとも、この異常の原因を叩くか。」

「決まっていますよ。イーナさん。」

今まで黙っていたルビアが、間を置かずに言いました。

「ああ、決まってるな。イーナ。」

セルナも同じ考えのようですね。

「それじゃ、行きましょうか。」

「はい」

「おう」

「キュー」

リリウムも乗り気のようですね。

それにしても、何があるのやら…

十数分後
閑話休題

円の中心を目指して歩いていると【レーダー】に反応がありました。

「ルビア、セルナ、何か来ますよ。気を付けてください。」

数は3、紫色の点が、私たちを取り囲むように迫ってきています。

紫色の点は、無生物を表しています。

そう言えば、最近【レーダー】の範囲が広がってきた気がしますが…

慣れてきたんでしょうかね？

「数は3、おそらくゴーレムだと思いますが、すぐに再生してしまいます。破壊するだけ無駄ですから、道を塞ぐゴーレムだけを破壊しますよ。」

ゴーレムは、術者を叩かない限り【魔力】の続く限り再生しますから。

それに、3体のゴーレムを出し、一度に操作するには、相当熟練しないと難しいはずです。

【魔力】切れは期待できませんね。

「急ぎますよ。もう、近いはずですから。」

右腕に、射突型ブレードを出しておきます。

ゴーレムには、これが一番効果的ですよ。

「おい、イーナ。なんでそんな事分かんだよ。」

そういえば、言っていませんでしたね。

「まあ、あとで説明しますよ。それよりも…」

木を薙ぎ倒しながら、前方からゴーレムが現れました。

見た印象は、とにかく大きいです。

この前見たゴーレムよりも、数倍も大きいです。

しかし、ただ大きいだけではなく、よりシャープになり、より人型に近づいていますね。

「な!?上級魔法の【アースゴーレム】じゃねぇか!なんでこんなのが!?」

どうにも大きいと思ったら、上級魔法ですか。

まあ、あまり関係ありませんが…

しかし、おかしいですね。

私たちの位置を、正確に捉えてきています。

どこかで見ていない限り、こんな動きは不可能なはず…

「とりあえず、破壊しますか。リリウムをお願いしますよ。」

リリウムをルビアに預け、ゴーレム破壊に向かいます。

大きくなったということは、その分だけ動きも緩慢になっているはずです。

私を狙い、拳を放ってきたので【霊力急進】で避け、懐に入り、足元に射突型ブレードを撃ちこみました。

足元が崩壊し、大きな音をたてて倒れこみました。

やはり、前のゴーレムと変わりませんね。

あまりにも大きいので、修復にも時間がかかるようですし。

「それじゃ、先に――――」

その時、眼鏡を通して視るゴーレムに変化がありました。

ゴーレムの胴体のヒビから、赤い【魔力】が漏れ出ています。

赤い【魔力】は【火属性魔法】の証。

それが、何故ゴーレムの中から…

「イーナさん！逃げ――――」

その声を聞き終わらない内に、圧倒的な熱量が、膨大な熱の塊が、赤い爆発が、私を包みました。

【霊力障壁】で辛うじて耐えていますが、今にも破壊せんと襲いかかってきます。

しかし、これが【魔力】で構成されているのなら…

【霊力爆発】

視界が一瞬真っ白に染まります。

【霊力障壁】を攻撃に転用した【霊力爆発】で、爆発を構成している【魔力】ごと消し飛ばしました。

「なんとか…なりましたかね。」

「イーナ！お前、腕が真っ赤じゃねえか！待ってろ、薬草を…」

セルナが焦った声を出しながら、袋に手を突っ込み、薬草を探していますが、それを制します。

「それよりも、早く行きましょう。さすがに、次はまずいです。」

あちこちに軽い火傷を負ってしまった上に、数十秒間は【霊力障壁】を展開することが出来ませんが、これくらいで済んで万々歳です。

あの爆発は【霊力障壁】をかなりの勢いで減衰させていましたから【霊力爆発】をしなければどうなっていたやら。

ゴーレムも再生を始めていますし【レーダー】には、他のゴーレムも確認できます。

こんな爆発が何度もあったら、さすがに堪えます。

「障壁もねぇじゃねえか！…は？なんで――」

セルナの後ろにゴーレムが一体、腕を大きく振り上げていました。

どうして…速すぎます…！

一瞬、右腕の射突型ブレードを構えようとしましたが、ダメです。

破壊したらまた爆発を…

この近距離で【霊力障壁】もない状態であの爆発を浴びたら…

それ以前に…

「セルナぁ！」

「ぐあっ…！てめぇなにし――――」

【霊力急転】による回し蹴りで、セルナを蹴り飛ばしました。

ゴーレムの振り上げた腕の勢いはそのままに、私に直撃し、ゴギャッ！と鈍い音が鳴りました。

右腕を曲げ、左腕を添えて防御をしながら、直撃した瞬間に打撃方向とは逆に【霊力急進】で加速して、どうにか勢いを殺すことができました。

【霊力浮遊】でスピードを緩めつつ、５０ｍほど飛ばされたところで、ようやく止まることができました。

内臓は無事のようですが、右腕は…さすがに折れましたかね。

木で遮られて見えませんが、爆発音が聞こえてきます。

まさか…

木の間を駆け抜けて元の場所に戻ると、ルビアが単身で2体のゴーレムを相手にしていました。

さっきの爆発音は、あの爆発したゴーレムですか。

しかし、そのゴーレムも修復を始めています。

「ルビア、大丈夫ですか。」

「大丈夫です！イーナさんは！」

「私は大丈夫です。それより、このゴーレムは構わない方が賢明です。行きましょう。」

「そんなこと言っても！」

ルビアの前に【霊力急進】で割り込み、グレネードで2体を撃ち破壊します。

…この二体は爆発しませんか。

「いえ、対処法が分かりました。二人とも、私に近づいてください。」

【霊力障壁】の出力を上げ、ルビアとセルナをすっぽりと覆うようにします。

修復を終えた3体のゴーレムは、目の前にいる私たちを尻目に、動きを停止させました。

「これは…どうなっているんです？」

「恐らく、このゴーレムは【魔力】に反応して、自動で攻撃を加えているようです。」

私が殴られた時も、最初はセルナを狙っていたようですし。

飛ばされた私を、追撃もしませんでした。

「私の障壁で二人を覆いました。これで、二人の【魔力】は認識できていないはずです。」

「…なんか、お前に【魔力】が無いって言ってるみたいだな。」

「はい、私は【魔力】をほんの少しも持ってない、ただの人間ですよ。」

ルビアもセルナも、きょとんとしています。

「いや、そんなこと言ってもな…」

「そうですよ。【魔力】を持ってない生き物なんていません。」

「それじゃ、私は生き物じゃないんでしょうね。」

私がそんなことを言うと、ルビアは目を瞬かせ、セルナは眉をしかめました。

「イーナさんは【人間】じゃないですか。イーナさんが冗談を言うなんて珍しいです。」

「…」

「さて【アプライド】に向かいましょうか。この先に何があるのかも気になりますが、方位磁石も治ったようですし。」

方位磁石もきちんと南をさしています。

「離れないでくださいよ。またゴーレムが動き出してしまうかもしれませんからね。」

「はい。イーナさん。」

「…ああ、わかってるよ。」

二人とも、私のなるべく近くに寄ってもらいます。

リリウムもいつの間にか、頭の上に乗っています。

さて【アプライド】までどれほどでしょうかね。

それにしても、右腕が痛いです。

その辺に、ナロティでも生えてないでしょうかね。

…冗談ですよ。

## 第二十話・円周率は3．１４以下略（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

骨折って痛いですよね。

経験者ならわかるはず、あの独特な痛みが…

さて、森の奥には何があったのか…

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第二十一話・風邪の主な症状は頭痛、発熱、食欲不振（前書き）

はい、第二十一話投稿いたしました。

今回は視点が変わり、違う人物目線になります。

色々と思うこともあると思いますが、まあ、見てください。

ほいっと、第二十一話始まり始まり…

# 第二十一話・風邪の主な症状は頭痛、発熱、食欲不振

どうも【赤竜】のルビアと言います。

イーナさんはどうしたかって？

「こら…リリウム…離れてくだ…さい。」

「キュー…」

イーナさんはベッドで寝込んで、リリウムちゃんはベッドに潜り込んでいます。

【アプライド】に到着して、宿を見つけて、部屋に入ったら倒れてしまったんです。

おでこに手を当てると熱がありました。

『疲れが出たんですよ。少し休めば治りますから…』

そう言っていましたが、心配です。

それに、イーナさんが倒れてから、もう二日経ちますが、一向に熱が下がりません。

イーナさんからは、自由にしていいと言われていますが、私は付きっ切りで看病をしています。

竜は何も食べなくても平気ですから。

セルナですか？

…知りませんよ、あんな泥棒猫は。

イーナさんが倒れた次の日から、姿が見えませんでしたし。

それに、イーナさんが泥棒猫なんかを庇ったから、骨折なんかして…

「イーナさんは、優しすぎます…」

イーナさんに聞こえないように、小さく呟きます。

「ルビア…いいですか…」

言葉を区切りながら、息苦しそうに言います。

「はい、なんでしょう。」

「少し眠りたいので…ルビアも…自由にしていて…下さい。」

「私は自由にしていますよ。イーナさんの看病をさせてもらっています。」

「そうじゃなくて…ですね…セルナ…みたいに…」

「あんな泥棒猫なんて…」

「こら…」

「あう…」

イーナさんの手が私の頭に置かれます。

「じゃあ…そうですね…私の為に…何か買ってきて…くれませんか…」

頭を撫でながらそんなことを言われては、断れません。

「それと…リリウムを連れて…果物でも買って…あげてください…」

ゆっくりと体を起こしながら、リリウムちゃんを持ち上げました。

「キューキュキュー」

リリウムちゃんは、ジタバタと手足をばたつかせています。

「はい…」

「それじゃ…お願い…します…」

リリウムちゃんを私に渡して、イーナさんがベッドに倒れこみました。

「大丈夫…です…寝ていれば…治ります…から…」

「キュ！キュキュー！」

「ほら、リリウムちゃんも、起こしちゃいけませんよ。」

「キュー…」

袋を持ち、部屋の扉に手をかけます。

「それじゃ、行ってきます…」

「キュ…」

扉を閉めると、イーナさんの苦しそうな寝息が聞こえなくなりました。

「イーナさん、大丈夫でしょうか…」

「キュ…」

リリウムちゃんも、私の腕の中で項垂れています。

「それにしても…あの泥棒猫はどこに行ったんでしょう。」

「キュ、キュキュ」

「む、リリウムちゃんもイーナさんと同じことを言うんですか。」

「キュッキュキュ、キューキュ」

「それもそうですが、でも…」

「キュ、キュー」

「それでも、セルナは…」

「キュキュ、キュー」

「それじゃ、セルナを探しながら買い物をして、見つけたら問い詰めましょう。」

「キュー」

そういえば、リリウムちゃんと出かけるのは初めてですかね。

十数分後
閑話休題

宿を出て少し歩くと、たくさんの【人間】が色々な物を売っていました。

「ここが市場ですか？」

「キュー」

リリウムちゃんはイーナさんと行ったことがあるらしいですが、私はこういった場所は初めてです。

「とりあえず、果物を買いましょう。リリウムちゃんは何が食べたいですか？」

「キュ…キュキュー」

そう言ってリリウムちゃんが選んだものは…

「これがいいんですか？」

「キュー」

真ん中が妙に膨らんだ、茶色く、ザラザラとしている実でした。

どこか上の空のおじさんに声をかけます。

「すいません。この実を…」

「あ、ああ、いらっしゃい。アルモかい？一つ１２Ｓだよ。」

物の価値はイマイチ分からないんですが、どうしましょう。

「それじゃあ…８つください。」

「あいよ。それにしても珍しいね。アルモを買ってくなんて。」

「え？そんなに珍しいんですか？」

「ああ、うまそうに食べる奴もいれば、一口齧って吐き出しちまう奴もいる。大半は後者だが。」

そう言いながら、紙袋に詰め終ったようです。

「ほら、９６Ｓだ。しかし、有る分だけ買ってもらえるたぁな。そういや、最近も買ってく物好きが――」

「おじさーん！アルモ3つちょうだいなー！」

何かを言いかけましたが、ローブを着て、フードを目深にかぶった女性の声で遮られてしましました。

身長は、私より少しだけ低いですかね。

「やっぱり、今日も来たか。お前さんはそんなにアルモが好きなのかねぇ…」

「あったり前じゃないの。アルモが食べれないのなら、死んだ方がマシよ。」

女性はいたく真剣な声色で言いました。

「まあ、買ってくれるのはありがたいが…もう全部売れちまったぞ。」

「な、なん…ですって…」

女性は人目も憚らず、地面に両手両膝をついて体全体でショックを表しています。

「だ、誰よ！あんなくそマズイのを買った奴は！おかしいんじゃないの！」

「否定はしねぇがな。それは自分の首も絞めてるようなもんだからな。」

「あのマズさが癖になる。世界の七不思議よ。」

「んな七不思議なんて聞いたことねぇよ。」

「そりゃそうよ。口から出まかせだし。」

おじさんも慣れているんでしょう。

感情的にならず、のらりくらりと受け流しています。

「まあ、どうでもいいが。そのおかしい奴は、あんたの隣にいる美人さんだぞ。」

おじさんにそう言われると、女性がこちらを向きます。

「うわぁ…すっごく綺麗…ハッ！じゃないわ！あんたね、ふざけ半分でアルモを買ったのは。止めときなさい、絶対後悔するわよ。」

「いえ、食べるのは私じゃなくて…」

腕に隠れていたリリウムちゃんを見せつけます。

「この子ですよ？」

「キュッキュ、キュー」

「あれ？リリウムちゃんが食べるんじゃないんですか？」

「キュキュー」

「なるほど、リリウムちゃんは優しいです。」

どうやら、イーナさんの為に買ってあげようとしたようです。

リリウムちゃんの小さな頭を優しく撫でてあげます。

目を閉じて気持ちよさそうにしています。

む、周りがやけに静かですね。

どうしたんでしょう。

「な、なんで【白竜】が!?ちょ!子どもよね!?親が来るわよ!」

女性がそう叫ぶと、周りが一気に喧騒に包まれます。

『この国はもうダメだ!【白竜】に襲われる前に逃げるぞ!』

やら

『くそ!ギルドに連絡は…してない!?な…真っ先に逃げただぁ!?』

などなど、阿鼻叫喚が繰り広げられ、罵詈雑言が飛び交っています。

「さて、大変なことになってしまいました。どうしましょう。」

「キュー…」

「リリウムちゃんは悪くありません。悪いのは【人間】達です。」

もちろん、イーナさんは除きます。

「あんたは！何を考えてるのよ！この国は…この国は、もう終わりよ！」

さっきの女性が胸倉を掴んできます。

「大丈夫です。この子の親が来ることはありません。」

「そんなこと…」

「それにしても、見事に人がいなくなってしまいました。」

あんなに人が居たのに【人間】の気配が全くありません。

アルモを売っていたおじさんも、いつの間にか姿を消しています。

いるのは目の前の女性だけです。

「当り前よ！【白竜】が襲って来るのに！逃げないわけないじゃない！」

「では、どうしてあなたは逃げなかったんです？気付いたのなら、真っ先に逃げ出せばいいのに、わざわざ叫んで周りの人を先に逃がして。」

「私は…！」

「私にはどうにも理解が出来ません。自己犠牲のつもりですか？も

しそうだとしたら、とても滑稽です。」

胸倉を掴んでいる女性の腕を引き剥がします。

「あなたがそんなことをした理由はなんです？【白竜】を撃退しようとしたんですか？正義感からそんなことをしたのならあなたはただの馬鹿です。どうしてこんなことを？」

女性は、何か戸惑っているようですが、何かを決心して自らのフードに手をかけます。

「私は…この国を愛している！【白竜】を撃退するつもりでも、正義感で動いたつもりじゃない！私は――」

そう叫びながら、フードを剥ぎ取りました。

「私は！この国の王として！国を！国民を守る為に動いたのよ！」

フードを外して見せた女性の顔は、目鼻立ちがハッキリとしていて、体はスマートですが、出るところは出ています。

基準がよく分かりませんが、まぎれもない美人なのでしょう。

「だからこそ！国を危険に晒しているあなたを許せない！今の私は【フィジカ】の王、フィリス・オストヴァルトじゃない！【Ｎｏ．５】フィリス・オストヴァルトとして――」

女性、オストヴァルトは杖を構えました。

「あなたを、この国から追放する！力尽くにでも！」

そう言って私に【魔法】を撃ってきました。

槍のような【火属性魔法】です。

しかし、擬態しているとはいえ私は【赤竜】です。

このまま直撃してもなんら支障はないんですが、リリウムちゃんを腕に抱いていますから。

「ちょうどいいです。せっかく人気もありませんし、イーナさんもいないんです。ちょっと暴れてもいいですよね？」

左腕でリリウムちゃんを抱きながら、右腕で【火属性魔法】を掴みます。

オストヴァルトは絶句していますね。

どうしてでしょう？

「リリウムちゃん、見ててくださいよ？これが竜としての戦いです。」

「キュー」

【火属性魔法】を握り潰し、擬態を解除すると、光が私を包みます。

まだ小さいリリウムちゃんですが、竜としての戦いも見てほしいです。

「グゥオオオオオ！」

やっぱり、この姿の方がのびのび出来ます。

擬態をしているとなんだか狭苦しいですから。

まあ、イーナさんの前で擬態を解くつもりはありませんけど…

「キューキュー！」

リリウムちゃんも、この姿を見るのは久しぶりでしたね。

背中に乗っていますが、振り落とされないでくださいよ？

おや？オストヴァルトが体をガタガタ震わせています。

「あ、あなたが【赤竜】だとしても！私は…負けられないのよおおぉぉおおぉ！」

無謀な【人間】は嫌いですけど、無謀で馬鹿な【人間】は嫌いではないです。

「上級魔法【ブレイズアロー】！」

そう叫ぶと、十数本の火の矢がオストヴァルトの周りに集まり、私に向けて飛来します。

上級魔法と言うからには、強い【魔法】なんでしょうね。

では、私も…

口内に【魔力】を溜め、火の【魔法】に変換。

変換した【魔法】を高密度に凝縮、圧縮を繰り返し威力を高めます。

イーナさんもこれくらいは平気でしたから、耐えてくださいよ？

【魔力】を凝縮と圧縮を繰り返し、密度を高めた、竜固有の【魔法】息（ブレス）を一気に解放。

上級魔法が私に当たる寸前、私が放った火の息（ブレス）が火の矢を呑み込み、オストヴァルトをも呑み込みました。

## 第二十一話・風邪の主な症状は頭痛、発熱、食欲不振（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

主人公は疲れからか、風邪をひいてダウンです。

代わりとして、今回は【赤竜】の視点です。

そして、王様が登場してしまいました。

それにしても、王様が最高戦力って…

次回はどうしましょうかね？

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第二十二話・夢は記憶の整理という説が濃厚です（前書き）

はい、第二十二話投稿いたしました。

前回に引き続き、今回も視点変更です。

風邪をひいているときは休養を取りましょう。

それと、皆さんから寄せられた感想への返信に疑問点を解決する内容を載せています。

見てくれたら解決するかも？

そんじゃま、第二十二話始まり始まり…

## 第二十二話・夢は記憶の整理という説が濃厚です

おう、俺はセルナ・マーグナーだ。

理由があってな、今は【オーガニー】を出て【人間】のイーナ【白竜】のリリウム【赤竜】のルビアと旅をしてんだ。

見た目はまるっきりガキだが、あんななりでもかなり頭がいいしよ。

それに【白竜】が頭に乗ってるし【赤竜】が従ってたり、何者なんだか…

まあ、あいつには感謝してる。

あいつに会わなきゃ、今頃はどうなってたんだろうな…

それに、母さんに恩返しをするためにな、薬草について学ばなきゃいけねぇんだ。

それなのに【アプライド】に付いた途端、あいつが倒れちまった。

まあ、イーナの看病はルビアに任せて、俺はこの国を見て回ってる。

【アプライド】にゃあ、沢山薬になるものがあるって言ってたからな。

それに、気になることもあったし…

そういうわけで、薬草とかを買いに市場に来たわけだ。

やっぱり【オーガニー】とあんまり変わんねえな。

薬草を見て回るが、なかなか質が良い薬草が無い。

「やっぱり、採りたてじゃねえとな…」

そりゃ、使う時には乾燥させる必要のある薬草もあるが、ここに売ってるのは論外だ。

必要な部分は無いわ、虫に食われているわで使い物にならねえ。

薬草に見切りを付けていると、ふと一つの果物が目に留まった。

「おっさん。これは？」

「ああ、アルモって果物だ。買うか？」

そういや、あいつがいつもうまそうに齧ってたな。

「そんじゃ、一つくれよ。食ってみてぇ。」

「ああ、１２Ｓだ。確かに…しかし、珍しいこともあるもんだな。」

「あ？なにがだ？」

「アルモがよく売れるんだよ、この頃。あんたくらいの女が――」

「おっじさーん！今日も来たよー！」

なんか後ろから、元気そうな声がしやがった。

「やっぱり、今日も来たか。」

後ろを見ると、ローブで頭まで隠した奴が走ってきてた。

「あいつが、さっき言ってた奴か？」

「ああ、この暑い中をあんな格好だ。印象によく残る。まあ、来たからには客だ。売るもんは売るさ。」

「ふーん…」

てか、あのローブって【魔具】じゃねえか？

なんかあの女の周りだけ、不自然な感じがするし。

「どうしたの？ジロジロ見て、なにか付いてるかしら？」

「ん、いや、なんでもねえよ。」

まあ、おいそれと姿を見せれねえ身分なんだろうな。

そうじゃねえと、わざわざ【魔具】を使ってまで意識を外したりはしねえだろ。

「じゃあな、おっさん。うまかったらまた買いに来る。」

「ああ、これからもご贔屓に…」

市場から少し歩いたところに広場があったから木陰に座って、さっき買ったアルモとやらを食べてみることにした。

「匂いは良いが…さて、味は…」

アルモを服の袖でよく拭いて、一口齧った。

「べっべっ！まずっ！なんだこりゃ！」

一口齧ったら甘味なにもなく、ただ強い苦味とそれ以上の酸味が口の中に広がった。

あいつ、味覚おかしいんじゃねえのか！

「うぇ…気持ちわる…」

だめだありゃ、もう二度と食わねえ。

「それにしても…」

この【アプライド】は海に面しているせいか、風に乗って潮のにおいがするな。

「【アプライド】にしかない薬草とかもあるからな。買うのも馬鹿

らしいし、採りに行くか…」

市場にも碌な薬草が無かったしな。

これもイーナから教えられたことだ。

海は門の外だが、まあ大丈夫だろ。

そう思って立ち上がろうとした時だ。

イーナよりも小さいガキが目の前でいきなりこけた。

周りの奴らは、チラチラ見ながらも、何事もなかったかのように歩いている。

まったく【人間】ってのは、同じ種族同士なのに助け合ったりはしないんだな。

「おら、泣くなっての。」

「うぇぇ…でも…」

まだ小さい【人間】のガキが泣きながら蹲ってる。

「だから、なんで泣いてんだよ。泣いてるだけじゃ分かんねえぞ。」

そう言ってガキが膝を見せてきた。

ガキの膝は擦りむいて、血が滲んでいた。

「こんなもんな、ほっときゃ治るんだよ。我慢しとけ。」

そう言うと、ガキの目に涙が溜まっていくのがわかった。

はぁ…これだからガキは苦手なんだよ。

「…初級魔法【リカバリー】」

そう唱えると、薄青色の光が膝を包み、あっと言う間に傷が治癒していく。

この程度の傷なら、初級魔法で十分だ。

てか、初級魔法しか碌に使えねえし。

「【亜人】さん【魔法】が使えるの？」

「ん？まあな。別に、珍しくもないだろ。」

適当に返事をし、その場を立ち去ろうと…

「…いや、離せよ。」

ガキが俺の脚にしがみ付いてきやがった。

無理矢理振りほどこうとしたが、ガキの言葉が俺を硬直させた。

「お、お願いだよ！母ちゃんを、母ちゃんを助けてくれよ！」

「…こりゃ酷ぇな。」

壁はボロボロ、床のいたる所に穴が開き、今にも崩れそうな家に案内された。

ここ、表通りだよな。

俺が住んでた所の方がマシだな…

「で、お前の母親は。」

「うん。ここだよ。」

そう言って開けた扉の奥には…

「こいつは…」

体中に切傷、擦傷、火傷、裂傷、挫傷、爆傷、熱傷、あらゆる傷を負い、生きているのが不思議なくらい体中が傷に包まれている、人の形をした傷が横たわっていた。

「…お前、父親は?」

「…父ちゃんなんて、いない。」

「父親がいない、ねえ…」

てか、なんで包帯の一つも巻かずに放置してんだ。

「どこかに【水属性魔法】を使える奴がいるだろ。なんで頼まなかった。」

「もちろん頼んだよ。でも【魔法】を使ってる途中で…」

大方、金が無いってんで途中で切り上げたんだろ。

「で、今はどうしてんだ。」

この矢鱈滅多ある傷で呻き声一つ漏らさず寝ている、まるで痛みを感じないかのように…

「これだよ。」

そう言って取り出したのは、独特のにおいがする白い粉末。

「薬屋さんでこれが良いって言われたんだ。本当に母ちゃんが呑んだら、楽になったって…」

「これ、どこで買ったんだ。」

「すぐそこの、角のドラグって薬屋さんだよ。この国で一番有名なんだ。」

「ふーん…」

有名な薬屋、ねえ…

「わかった。とりあえずお前は部屋から出てろ。」

「ど、どうしてさ！」

「いいから、早く出ろ。元気な母親を早く見たいだろ。」

「…」

顔を下に向けながら、黙って部屋を出て行った。

「さて、まずは【水属性魔法】で軽く治癒させねえとな。」

【水属性魔法】で表皮から真皮、皮下組織までの細胞を活性化させる。

火傷やら切傷やらでズタズタになっている細胞を治癒させるためだ。

結局は【水属性魔法】なんて相手の【魔力】に干渉して細胞の新陳代謝を上げて、結果として傷が治るもんだ。

これは、イーナから教わった体の仕組みを基に、自分なりに【水属性魔法】を理解した結果だ。

初級の【水属性魔法】しか使えねえから、本当に気休め程度だが、やらないよりはマシだ。

中途半端でも【水属性魔法】で治癒してあって助かったな。

これがなきゃ、すぐにでも死んでただろうしな。

「これで粗方はいいだろ。次は薬草で…」

あとは薬草の出番だな。

それにしても、あの袋から出してきた薬草でどこまで治せるか…

【アプライド】に来るまでに採取したフィルマを磨り潰し【水属性魔法】で少し治した皮膚に塗布する。

フィルマを傷口に貼り付けると治癒を促進させるからな。

それとナロティの葉を少し磨り潰してフィルマと混ぜれば鎮痛作用も期待できる。

あとは、これを繰り返していけば…

「【亜人】そこまでだ！」

「ああ…？」

後ろから男の声が聞こえ、後ろを振り向くと…

「我々はギルド【ソートフ】の者だ。【亜人】が子どもを誘拐していると通報があった。ギルドに来てもらおう。」

「誘拐だぁ？」

杖を構えた男が3人、その後ろにニヤニヤと笑っているおっさんと

おばさんが2人、そしてガキがいた。

ギルドって言ってたしな、専属ギルド員か。

「じゃあなガキ。薬草は置いとく。磨り潰して、こまめに塗り替えれば数週間で治る。それと、その薬は二度と飲ませるなよ。」

「う、うん。」

薬草の入った袋をガキに渡して、元々持っていた薬を注意し、ギルド員の方に歩く。

大方、あのおっさん達だろうな、通報したのは。

「忠告するが、ドラグって薬屋には行かねえほうがいいぞ。」

「はっ【亜人】風情が、薬屋の真似事をして、一人前に嫉妬のつもりか？」

それに続いて、聞くに堪えない暴言がとんできた。

ま、忠告はしたからな。

どうなろうと知ったこっちゃねえ。

「とりあえずギルドで話を聞く。それからお前の扱いを決定する。」

そう言って俺の腕に手錠をかける。

しっかし、手錠までされるたあな。

まるで犯罪者だ。

「ごめん。【亜人】さんが家に入るところを近所の人が見てたらしくて…」

「ああ、気にすんな。こんな扱いには慣れてっから。」

【亜人】の話を聞くだけ、まだマシな方だ。

所によっちゃ、問答無用で殺されたりもするらしいしな。

「それより【亜人】って呼ぶのはやめろ。俺はセルナ・マーグナーだ。」

「うん。セルナ兄ちゃん。俺はランダル・シーボーグってんだ。」

俺は女なんだがな…

ってかシーボーグってえと…

「さっさと来い！」

考えが纏まらない内に、腕を掴まれ引っ張られる。

「ありがとう！母ちゃんが治ったら！絶対にお礼に行くから！」

「おーう。期待しないで待ってるぜ。」

まあ、治ることを願うぜ。

## 閑話休題（翌日）

「ん…あ、ああ、ふぁ～あ…寝ちまってたか…」

結局、ギルドに連れていかれた後は証拠が無いってことで、無罪放免になった。

その後は、図書館に行って薬草について調べて、そのまま寝ちまったみたいだな。

「やっぱり、解熱にはヴァーナが一番か…」

イーナは『少し休めば治りますから…』って言ってたが…

「ま、解熱剤でも作って、呑ませりゃ大丈夫だろ。」

しかし、ルビアが看病してるだろうからな、昨日ほっといたから、会えば憎まれ口でも叩かれそうだ。

「宿を出たのを見計らって行くとするか。」

そうすりゃルビアにも会わなくても済むだろ。

それまでにヴァーナを買っとくか。

所詮葉っぱだしな、そのままじゃ呑みにくい。

イーナは成分だけを抽出すれば、効果が高くなるとも言ってたが、まだ教えてもらってないからな。

なんか【魔法】を使えば簡単だとも言ってたが、よくわからん。

「ともかく、呑むのは俺じゃねえしな。この前の解毒剤の件もあるし、ちょうどいいな。」

数十分後
閑話休題

ルビアはリリウムを連れて市場で見かけたし、今はいないはずだ。

これで部屋にはイーナだけだ。

階段を上り、扉の前に立った。

「おう、戻ったぜ。」

扉を開け、部屋に入った。

イーナはベッドに横になって寝てるみたいだな。

苦しそうな寝息が聞こえるし。

「寝てるのか…起きるのを待つか。」

その間に本で薬草を確認すっか。

これは、ここに来るまでに古本屋で見つけた、薬草について詳しく書いてある本だ。

なんか安かったから買ってみたんだが、これがなかなか便利だ。

イーナの言った事がそのまま載ってるんだよ。

まあ、イーナの説明の方が解りやすいが…

あいつもこれで勉強したのかね。

それにしても…

「ごめんな、イーナ…」

あの時、俺を庇わなきゃこんな怪我もしなかったんだろうな…

布団から出ているイーナの腕は、火傷で赤くなっている。

「…初級魔法【リカバリー】」

そう唱えると、あのガキの時と同様に、薄青色の光がイーナの腕を包む。

あのガキには効いたんだから【魔法】は発動しているはずだ。

しかし…

「効果無し、か…」

イーナの腕は相変わらず、赤いままだ。

なんで【魔法】が効かない？

この程度の火傷なら治るはずなのに…

その時、イーナの言葉が頭を過った。

『私は【魔力】をほんの少しも持ってない、ただの人間ですよ。』

いや、しかし…

【魔力】ってのはどんな生き物にも、大小の差はあっても否応なしに宿るもんだ。

しかし【魔力】が無いのなら、理解ができる。

イーナを見ると、あどけない顔を苦しそうに歪ませている。

それにしても、黒い髪ってのはイーナが初めてだな。

まあ、考えても仕方ねえ。

「お前から言い出すのを待つぜ。」

イーナにゃ感謝してる。

俺から問い詰めたりはしねえよ。
言いたくないのなら、それでもいいさ。
そして本を開こうとすると…
「ご…め…さい」
「ん？」
イーナが何か呟いてるな。
寝言か何かか？
イーナの口に耳を近づけて聞き取る。
「やめ…いよ。お…さん。…けてよ。お…い。」
「起きろ！イーナ！」
呼吸も荒くして、体を震わせてる。
所々声が小さくて聞こえなかったが、なにかヤバい。
イーナの肩を掴み、揺さぶって叩き起こした
「セルナ…？どうして…？どうしてですか…？」
イーナが虚ろな目で涙を流しながら俺を見つめている。

何が、どうしてなんだよ！

「これ呑め、解熱剤だ。」

解熱剤を渡すと、イーナがごくごくと、ヴァーナの搾り汁を黙って呑みほした。

「…お前、ずいぶんとうなされてたな。悪い夢でも見たのか？」

「行かないと…」

俺の話を聞いていないのか、虚ろな目のまま、窓を開けて出て行こうとする。

「イーナ！お前！まだ夢の中にいるつもりか！？」

窓の桟に足をかけたイーナを、後ろから羽交い絞めにして引き留める。

ここ二階だぞ！？

「離してください…行かないと…」

この小さい体の、どこにこんな力があんだよ！

「いいから…寝てろ！」

全身の力を振り絞ってイーナをベッドに引き戻した。

「病人なんだからな！おとなしく寝てろよ！」

そう言うとおとなしくベッドに潜り込んだ。

ふう、これでなんとか…

そう思ってイーナから目を放すと…

「すみません…セルナ…」

イーナの謝る声が聞こえ、バリン、とガラスの割れる音が鳴った。

驚いてそちらを向くと…

「イーナ！」

イーナの姿は既に無く、割れたガラスと所々に飛び散った血が、やけに存在を主張していた。

## 第二十二話・夢は記憶の整理という説が濃厚です（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

今回は【亜人】の視点です。

前回の【赤竜】の視点の前日から始まっていますね。

【亜人】が何をしていたのか分かりましたね。

【人間】を助けた理由ですが、まあ、琴線に触れたんでしょうね。

そして、主人公はどこへ行ったのか…

次回へ続く！…かもね。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第二十三話・死に用心、赤竜一匹、致死のもと（前書き）

はい、第二十三話投稿いたしました。

そういえば、主人公たちのプロフィールやら【魔法】についてやらを纏めた番外的な物を書いた方がいいですかね？

書こうと思えばすぐにでも書きますが、どうしましょうか？

要望があれば、次々回にでも載せたいと…

けれども、第二十三話始まり始まり…

# 第二十三話・死に用心、赤竜一匹、致死のもと

【アプライド】に着いたと思ったら、倒れてしまいました。

イーナこと伊那楓です。

この世界に来るまでにも、数か月に一度は倒れていましたから、ちょうど時期だったんでしょうね。

熱が出て、体が思うように動きません。

右腕も折れてるようですし、ジワジワとした痛みが続いています。

添え木をして、固定はしていますが、完治にはどれほどかかるでしょうね。

三人には悪いことをしてしまいましたね。

私のせいで足止めさせてるなんて…

「ルビア…いいですか…」

昨日は一日中私の看病をさせてしまったので、今日くらいは自由にしてもらいたいですね。

いつもなら、一日寝ていれば治るんですけどね。

環境が変わったからでしょうか。

「はい、なんでしょう。」

ルビアが笑顔でベッドに近づきます。

どうやら、セルナは昨日の内から外出しているようで、部屋に姿が見えません。

「少し眠りたいので…ルビアも…自由にしていて…下さい。」

「私は自由にしていますよ。イーナさんの看病をさせてもらっています。」

ルビアが椅子に座りながら、そう言います。

「そうじゃなくて…ですね…セルナ…みたいに…」

「あんな泥棒猫なんて…」

「こら…」

ルビアを窘め、頭をポンポンと叩きます。

「あう…」

ルビアが叱られた子どものような顔をして、目線を落とします。

「じゃあ…そうですね…私の為に…何か買ってきて…くれませんか…」

頭を撫でると、ルビアの顔が赤くなりました。

もう、限界が近いですね…

口がうまく動きません。

ベッドに潜り込んでいるリリウムの前足に手を回し、ルビアに渡します。

「それと…リリウムを連れて…果物でも買って…あげてください…」

「キューキュキュー」

こら、暴れないでください。

リリウムをルビアに渡すと、ルビアが心配そうな顔をしています。

「それじゃ…お願い…します…」

ベッドに倒れこんでしまいました。

体に力が入りません。

「イーナさん…」

そんな顔をしないでください。

「大丈夫…です…寝ていれば…治ります…から…」

「キュ！キュキュー！」

二人とも、すみませんね。

理由を付けて追い出してしまって。

でも、迷惑はかけられませんから。

セルナもいませんし、誰にも迷惑がかかりません。

それに、もう、目が開けていられません。

また、ですか…

閑話休題

夢を見ました。

私が、あの家にいた時の夢…

夢を見ました。

私が、家族と暮らしていた時の夢…

夢を見ました。

お父さんが、笑っている夢…

夢を見ました。

お母さんが、キッチンにいる夢…

夢を見ました。

私が、紅いカーペットに寝ている夢…

夢を見ました。

私の、忘れることのできない夢…

そして、気付きました。

「…夢、なんですね。」

目覚めれば、忘れてしまう、とても儚い夢。

それでも、私はこの夢を忘れられません。

なぜでしょう…

夢は唐突に移ろいます。

何の前触れもなく、突然に…

夢を見ました。

お父さんが、紅いカーペットに寝ている夢…

夢を見ました。

お母さんが、笑っている夢…

夢を見ました。

私が、キッチンにいる夢…

夢のような、境界が曖昧で、それでいて、現実のような、境界が明瞭で。

「ごめんなさい。」

不意に、口が動きます。

私の意志とは関係なく、口がひとりでに…

「起きろ！イーナ！」

今まで見ていた夢が、溶けるように消え、目が覚めました。

…セルナ、ですか？

「セルナ…？どうして…？どうしてですか…？」

セルナに答えてもらいたいわけではなく、自分に問いかけたんでしょうね。

自然と目から、涙が流れてきました。

「これ呑め、解熱剤だ。」

と言って、器に入った緑色の液体を渡してきました。

解熱剤ということは、ヴァーナですかね…

特に味もなく、すんなりと飲むことができました。

呑んだら、体から少しだけ熱がひいていきました。

窓の外を見るとたくさんの人達が、慌てた様子で走っています。

流れの本を【レーダー】で確認すると…

「行かないと…」

緑色の点が二つが、赤色の点と対峙していました。

恐らく、ルビアとリリウムでしょうね。

窓を開け【霊力浮遊】を使って、二人の元に行こうとすると…

「イーナ！お前は寝てろ！まだ夢の中にいるつもりか！？」

セルナがそう言って腰に手を回してきました。

目はもう覚めましたよ。

大丈夫です。

「はなしてください…行かないと…」

「いいから…寝てろ！」

セルナに力が入ったかと思うと、ぼふっとベッドに倒れてしまいました。

「病人なんだからな！寝てろよ！」

そう言い、私から目を放しました。

「すみません…セルナ…」

一言だけ謝罪をし、ガラスを破って外に出ます。

所々を引っかけて、血が出てしまいましたが、気にしている暇はありません。

たくさんの人が逃げていた事から推測すると、リリウムが人目に付いたんでしょうかね。

袋を持って行ったはずですから、隠すこともできたはずですけど…

ルビアはリリウムを溺愛していますから、リリウムが嫌がることはしないでしょう。

やはり、竜は…

赤い点がいたという事は、リリウムに害を及ぼす【人間】でもいたんでしょうね。

【霊力浮遊】で浮かびながら進むと、目的地が見えてきました。

そこにいたのは【赤竜】と、その背中に乗っている【白竜】そして、綺麗な女性がそれに対峙していました。

【赤竜】…ルビアの竜としての姿ですが、その大きな口に大量の【魔力】が凝縮されているのが視えます。

視えたと思った途端、息（ブレス）が放射され、女性を包もうとしています。

【霊力突進】を発動【霊力急進】も併用し、全力で【赤竜】と女性の間に割り込み、【霊力障壁】で女性の盾になるように、息（ブレス）を受け止めます。

ルビアの息（ブレス）を受けるのは、二回目ですね。

しかし、体調が悪い上に【霊力突進】で消耗した【霊力障壁】では、ルビアの火の息（ブレス）を完全に防御することはできません。

徐々に【霊力障壁】が減衰して行き…

「どうです？リリウムちゃ…え？」

「キュ？キュ…キューッ！」

圧倒的な熱量を持った炎が、生身の私を包みました。

## 第二十三話・死に用心、赤竜一匹、致死のもと（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

久々に【赤竜】の竜の姿が出ましたね。

あと、主人公は基本的におかしいです（笑）

夢の内容ですが…

伏線的な？そうじゃないような？

深読みしたい人は、してもらっても構いませんよ？

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第二十四話・火傷への対処法は流水でよく冷やすこと（前書き）

はい、第二十四話投稿いたしました。

一言だけ言います…

短っ！

すっげえ短いです。

今までで一番短いかも？

てか、一話ごとの長さがまちまちで、統一感がない…

勘弁して下せえ。

そういえば、今日は七夕ですね。

予約投稿なので、今日は六日ですが…

みなさんの願い事は、なんでしょう。

やっと、第二十四話始まり始まり…

# 第二十四話・火傷への対処法は流水でよく冷やすこと

「くそっ！あいつどこ行きやがった！」

セルナ・マーグナーだ。

今は、宿を飛び出したイーナを追ってる。

『行かないと…』とか言ってやがったが、意味がわからねえ。

「ああ、くそ！」

どこにもいやがらねえし、しかもあいつ空飛んでたしよ。

【風属性魔法】でも使えんのかよ。

そんな奴に追いつけっか。

「てか、なんで、人っ子一人いねえんだよ。」

今朝はずいぶんと賑わってたはずだぞ？

それが、今は不気味なくらい静かだ。

「あ…なんだ？今光って…」

隣の通りに通じる道から、強い光が漏れてきた。

今の光は見たことあるな。

確か…

「ルビアの擬態か…」

擬態をしたか、解除したかは分からねえが、いることは確実だ。

「まずいな…この国にゃいれねえぞ。」

【人間】達がいないってことは【赤竜】のルビアから逃げてるってことだろうな。

ルビアの擬態も見られてるだろうし、今日にでも出るしかないな。

リリウムも【白竜】だしな、こんなことになってもしょうがねえか。

「グダグダしててもしょうがねえ。行くっきゃねえな。」

イーナもいるだろうしな。

イーナを連れ戻すのを優先だ。

閑話休題

「なんだよ…こりゃ…」

自分の目を疑った。

倒れているイーナに、リリウムが寄り添って鳴き叫んで。

ルビアが呆然としていて。

女が唖然と、倒れているイーナを見つめていた。

「イーナ！おい！返事しろ！」

すぐにイーナに駆け寄って、体を診る。

くそ…熱がまた上がってやがる。

それに、火傷自体は酷くはないが、とにかく規模が広い。

しかも、熱風を吸って、肺と気管でも火傷したのか、呼吸も弱々しく、小刻みになっている。

「ルビア！どうしてこんなことになった！お前もいたんだろうが！」

「わ、私は…」

ルビアは口元を震わせて、碌に喋ろうとしない。

ルビアの胸倉を掴み、語調を強くして言った。

「早くしろ！一秒でも惜しいんだよ！」

「そ、そこの女が、リリウムちゃんを…」

尻餅をついて微動だにしない女を一瞥する。

目を見開いて、体をガタガタ震わせている。

当り前だ【白竜】を目の前で見せつけられれば、危険だと思うに決まってるだろ。

「それはいい！どうしてイーナがこんなことになってんだよ！」

「で、でも、セルナは【水属性魔法】を使えるんでしょう…？イーナさんも、すぐに…」

ルビアが、怯えながら、震える声で言った。

「【魔法】で治せってか！？治せるんなら、とっくに治してるよ！」

中級魔法【ヒーリング】を使い、薄青色の光がイーナの腕を包むが…

「【魔法】が効かねえんだよ！【魔法】は発動しているのにだ！わけが分からねえ！」

「そ、そんな…」

ルビアの目に絶望の色が浮かぶ。

薬草は…ダメだ間に合わねえ。

薬草にそんな即効性は無いし、限界だってある。

【魔法】は効かねえ、薬草は間に合わねえ。

「くそ、どうすりゃ…」

その時、ふと気付いた。

なんだ、あいつは。

イーナの傍らに、イーナと同じくらいの背の、白髪で白い服を着た少女が蹲っていた。

さっきまであの場所にいたのは…

「お姉ちゃんは…私を助けてくれたから…」

少女が、倒れているイーナを抱きしめた。

「私が…お姉ちゃんを助けるから…それが…」

その眼は、血のように真っ赤で、それが白い肌に映えていて、綺麗で美しくて。

「私の…お姉ちゃんへの恩返しだから…」

白い光が、少女とイーナを包み込んだ。

## 第二十四話・火傷への対処法は流水でよく冷やすこと（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

最後に登場した少女ですが、白い肌に、色素の抜けた白い髪、そして赤い眼、一言でいえばアルビノですね。

人間でも極稀に発生するらしいですが…

それが、幸運なのか不幸なのかは、判断できませんね。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第二十五話・ペンは剣よりも強く、姉は妹に弱い（前書き）

はい、第二十五話投稿いたしました。

課題がマッジで忙しいっす。

それと、あと一か月ほどで夏休みです。

気が早いですが、たーのーしーみーです。

夏休み中の更新は…恐らく半停止状態ですね。

今のうちに執筆を進めて、予約投稿という手段もあるのですが…

なかなかに厳しいです。

それと、登場人物のプロフィールやらですが、要望が無かったので

今回は見送りという事で…

そーい、第二十五話始まり始まり…

# 第二十五話・ペンは剣よりも強く、姉は妹に弱い

「ん…うん…ここは…」

目が覚めました。

イーナこと伊那楓です。

目が覚めて、まず最初に目に飛び込んできた光景は…

「むにゃ…すぅ…」

白い髪が肩まで伸びた、小柄な少女が、静かに寝息立てて私の隣に寝ています。

誰でしょうか？

それに、ここはどこでしょうか？

とても広い部屋に、私たちが寝ているベッドが一つ。

更に、窓からは街並みが見えます。

確か、私は【アプライド】に着いてすぐに倒れてしまって…

「宿じゃ…ありませんよね。」

それに、リリウムとルビアとセルナもいませんし…

「どこに行ったんでしょうか？」

扉を押しても引いてもビクともしませんし。

右腕に射突型ブレードを出そうとした時です。

「むにゃ…あれ…お姉ちゃん…？」

少女が目を覚まして、寝ぼけた目でキョロキョロしています。

「あ…お姉ちゃん…どうしたの…？」

私がお姉ちゃんですか？

私を見つけると、その少女は笑顔でパタパタと走り寄ってきました。

その少女は、目が大きくパッチリしていて、肌が白く、白い髪がよく映えている赤い眼をしています。

身長は私と同じくらいですが…

「ところで、あなたは誰でしょうか？」

いえ、本当に知らないんですよ。

自慢じゃないですが、今まで会話したことのある人は忘れることはありません。

私のことをお姉ちゃんと呼んでいるようですが、話したことはありません。

「え…？私がわからないの…？」

少女が驚いたように答え、涙目になってしまいました。

「うっ…えっ…酷いよぉ…えぐっ…ずっと一緒にいたのに…忘れるなんてぇ…」

ずっと？一緒に？

この世界に来てから、ずっと一緒にいるというと…

「リリウム…ですか？」

そう考えると白い髪と白い肌、そして赤い眼は【白竜】の特徴と合致しています。

「うん…そうだよ。リリウムだよ…お姉ちゃん…」

パァッと明るくなり、笑顔で抱き着いてきました。

頭を撫でると、気持ちよさそうに、和らげな表情を浮かべました。

「ところで、なんで擬態ができるんですか？ルビアは３００年ほど生きていないと擬態ができないと言っていましたが…」

リリウムは、まだそれほど生きていないはずですが…

「うんとね…お姉ちゃんの【魔力】がね…とっても美味しくてね…いっぱい食べてたらね…私の【魔力】もたくさん増えたの…そした

らお姉ちゃんが倒れてね…助けたい！って思ったらね…できたの…」

私には【魔力】がありませんから【霊力】のことを言っているんでしょうね。

それにしても【霊力】が美味しい、ですか…

「ところで、ルビア達はどこですか？見当たりませんが。」

「お母さん…？お母さんは…」

その時、扉がノックされました。

「イーナ、起きてっか？」

この声はセルナですか。

「はい、起きてますよ。早く開けてください。」

この扉、こちら側から開かないんですよ。

まるで牢屋みたいですね。

扉が開き、部屋に入ってきたのは…

「おう、元気そうだな。飯持ってきたからな、食っとけよ。」

「イーナさん…すみませんでした。」

食事を持ったセルナと、なぜか私に謝ってくるルビアでした。

「はい、元気ですよ。それと、どうしてルビアが謝るんです？」

「お前、覚えてねえのか？」

「何をです？」

私は【アプライド】に着いて、すぐに倒れて、ずっと寝ていたはずですけど…

「そういえば、ここはどこでしょうか？あの宿じゃないようですし。それと、右腕も治っているようですけど…」

そういえば、右腕に痛みを感じません。

指を開いたり閉じたり、腕を振り回しても、痛くありません。

「あ…それはね…リリウムが治したんだよ…？」

「リリウムがですか？」

「うん…そうだよ…？」

リリウムが頭を撫でてほしいような顔をしています。

「それで、ここはどこです？」

リリウムの頭を優しく撫でながら、セルナに質問をします。

「…まあ、食ったら説明するから、とりあえず食え。二日も寝てた

んだ。腹減ってんだろ？」

そういえば、お腹が減りましたね。

「わかりました。それじゃ、いただきます。食べ終わったら説明してくださいよ？」

「ああ、わかってる。」

それにしても、いいにおいですね。

閑話休題（食事終了）

「ふぅ、ごちそうさまでした。」

食前にはいただきます、食後にはごちそうさまを忘れてはいけませんよ？

それにしても、なかなかの量でしたね。

小食の私にとっては、少し多かったです。

しかし、残してはいませんよ？

作ってくれた人にとっても、失礼ですから。

「…美味かったか？」

セルナも食べたかったんでしょうか？

「ええ、もちろんです。さて、説明をお願いします。」

「…わかった。説明すんぞ。とりあえず、お前はどこまで覚えてる？」

「どこまで、と言われましても…」

【アプライド】に着いて、すぐに倒れて、ルビアを送り出して…

「とりあえずは、ルビアが買い物に言ったところまでは覚えていますけど。」

「そうか…」

そう言って、セルナがルビアと目を合わせます。

どうかしたんでしょうか？

「よし、まずは今この場所だが、城だ。」

「城ですか？」

まあ、薄々感づいていましたが、それにしても城ですか。

「なぜお城なんかに？」

「まあ、それなんだが…」

セルナが頬を掻きながら、言いにくそうにしています。

「実はな…あー、なんて言やあいいんだろうな…」

セルナは更に言いにくそうに、頭を掻いています。

それにしても、中身は女性なんですから、もう少し身なりを整えればいいのに。

せっかくの整った顔が台無しですね。

「セルナ、難しく言わなくてもいいですから、簡単に言ってください。二十字以内で。」

「ルビアが王を攻撃した。お前がそれを助けた。」

「残念ですね。句読点を入れて二十一文字です。後で薬草のテストです。」

セルナが喚いていますが、放っておきましょう。

何がいいですかね？

見分けがつきにくいアコニとテミシアでいいでしょう。

まあ、それにしても…

「私が王様を助けた、ですか。」

ルビアに攻撃された王を庇い、私が怪我をして、リリウムがそれを治したんですか…

「イーナさん。本当にすみませんでした。」

ルビアが私に頭を下げてきます。

「私が軽率なことをしなければ…」

「いいんですよ。私は何も覚えていませんし、その王様は死んでいないんでしょう?それに…」

私の後ろにいたリリウムを、ルビアの前に出します。

「リリウムも擬態ができるようになって、話せるようになりましたし。」

「お姉ちゃん…抱っこ…」

リリウムがこちらを向いて、抱っこをせがんできます。

まったく…

「ほら…」

私が腕を広げると、リリウムが飛び込んできました。

妹がいたら、こんな気持ちなんでしょうね。

「そういえば、リリウムは擬態を解けないんですか？」

「擬態…？どうやって解くの…？お母さん…」

「え？ええっと…こう…ギュッとなっている体をバッと解き放つ感覚で？」

どうにも抽象的で分かりにくいですね。

竜ごとに感覚が違うんですかね？

まあ、普段行っている動きを説明しろ、と言われても難しいですからね。

指をどう動かしている？と聞かれても、答えようがありません。

つまり…

「リリウムは【白竜】に戻れないんですか？」

「ふぇ…？」

「えっと、もうちょっと大きくなれば、できたりできなかったり…」

「じゃあ…もう…お姉ちゃんの頭に…乗れないの…？」

そう言いながら、目を涙で潤ませています。

そんなに気に入ってたんですか？

「ほら、手を繋いであげますから。泣かないでください。」

手を差し出すと、リリウムがその手を取りました。

「うん…」

まったく、可愛いですね。

「それでセルナ、いつまでここにいればいいんでしょうか？」

まだこの国を見ていませんが、そろそろ他の国に行きたいですね。

「ああ、そのことなんだが…」

セルナが何かを言おうとした時に、扉が開けられました。

「失礼する。王が件の少女をお呼びだ。すぐに来てほしい。」

扉を開けたのは、腰に剣をさした動きやすそうな服を着た、青年でした。

私をお呼びですか…

「ま、無視するわけにも行きませんし、ちょっと行ってきます。」

扉から出ようとしたら…

「リリウム？」

「お姉ちゃん…」

リリウムが私の手を離してくれません。

「大丈夫ですよ。すぐに戻ってきますから。」

「戻ってきたら…抱っこしてね…？」

「はいはい。」

リリウムの頭を撫でると、気持ちよさそうに目を細めました。

「それじゃ、リリウムを頼みますね。」

「はい、気を付けてくださいね。」

「おう、任せとけ。」

そして、部屋を出ました。

扉が閉まり、青年が歩き出しました。

それについていくことにしましょう。

「まったく、王は何故こんな少女に会いたがっているんだか…」

道すがら、青年が愚痴をこぼすように言いました。

「さあ？あなたは聞いていないんですか？」

「ああ、王が独断でな。それに【亜人】やら、見知らぬ女性や子ど

もを連れ込むし…」

よく分かりませんね。

私を何のために城に入れたのか、何のために呼びつけたのか。

「まあ、王様に聞けばわかるでしょう。もう着くのでしょう？」

「ああ、その角を曲がれば王の執務室だ。」

角を曲がり、突き当りには一つの扉がありました。

簡素なその扉には、貼り付けられたプレートに執務室とだけ書いてありました。

「ここで王がお待ちだ。くれぐれも粗相のないように。」

そう言って扉を開きました。

この青年は扉の前で待っているらしいですね。

中に入ると…

「ああ、来てくれたの。その辺に座ってて。」

そこにいたのは、喋る書類の山…ではなく、天井付近まで積まれた書類に囲まれた女性が座っていました。

「少し待っていてちょうだい。これが終われば…よし、終わったー。」

女性は座ったまま背伸びをしています。

「うーん…うわっ、と…うきゃん！」

女性が、背伸びをしてバランスを崩したのか、椅子ごと後ろに倒れてしまいました。

机に積み上げられていた書類もろとも、ガシャーンと倒れてしまいました。

あーあ、あんなに大きい音を立てて…

「どうかしましたか…王!?大丈夫ですか!?」

扉の前で待っていた青年も入ってきてしまいました。

「貴様！王に対する狼藉！許さん！」

そう言って腰にさしてある剣に手をかけ…

「痛ったー…止めなさい。ここは執務室よ。剣を抜くのなら訓練場に行きなさい。」

女性が書類の山から這い出し、青年を咎めました。

「…はい。仰せのままに。」

「それに、その子は何もしてないわ。私が勝手に倒れただけだから…」

そう言うと、青年は訝しげに部屋を出て行きました。

「さて、助けてくれて感謝するわ。私は【Ｎｏ．５】兼【アプライド】の王のフィリス・オストヴァルトよ。あなたは？」

そう言って手を差し出してきました。

握手でしょうか？

「私はイーナです。人間の、しがないギルド員です。」

「イーナ？それだけ？それにただのギルド員？」

「はい。【Ｎｏ．】も何も持っていない、専属ギルド員でもない、ただのギルド員です。」

そう言ってギルドカードを見せます。

「ふーん…珍しいわね。まあいいわ。座って。」

そう言われ、来客用のソファーに座ります。

「さて、改めてお礼を言うわ。あなたが守ってくれなければ、私は確実に死んでいたわ。本当に、ありがとう。」

そう言って、オストヴァルトさんが頭を下げます。

「一国の王が、一般人に頭を下げるものじゃありませんよ。兵士に見られたら、あらぬ誤解を受けてしまいます。」

「いえ、本当に、感謝するわ。」

「経緯は聞きました。と言っても、私は何も覚えていませんが…」

「本当にありがとう。それにしても…」

「どうしましたか？」

「何も持っていない生身の体で、どうやって【赤竜】の息（ブレス）を受け止めたの？」

ああ、その質問ですか。

「さて、どうやってでしょうね？【Ｎｏ．５】が恐れた攻撃を受け止めたことに、恐怖でも覚えましたか？」

「…いえ、そんなことは。」

「沈黙がすべてを物語っていますよ。私は誰の敵になるつもりも、誰の味方になるつもりもありません。まあ、その時の気分で対処は違いますが。」

この世界に来たばかりの時の盗賊退治も、リリウムを助けたのも、ルビアを助けたのも、セルナを助けたのも、その時の気分ですし。

一歩間違えれば、誰かがいなかったかもしれませんし、もっと増えていたかもしれませんね。

【人間】が他の種族を見下したりするのは、やはり個体数が多いか

らでしょうかね？

私は【亜人】や【エルフ】に偏見は持っていません。

なぜなら私は…

「…ハッキリ言って、私はあなたが怖いわ、恐ろしい。【赤竜】の息を受け止めるのもそうだけど【赤竜】があなたに従っているのも【白竜】がいたのも、あなたの意志一つで一国を滅ぼすことのできる戦力が存在している。」

「さっきも言ったでしょう？私は、敵にも味方にもなるつもりはありません。」

「…あなたとだけは、敵対したくはないわね。」

そちらが何もしなければ、私は何もしませんよ。

「そう言えば、一つ聞きたいんですが…」

「え？何を？」

「この国はナロティが採れますよね？」

「ええ、ナロティの取引は、信頼できる薬屋に任せているわ。この国の建国当時からの老舗のドラグって薬屋ね。」

「それで、ナロティの種はどうなっていますか？」

「それは全部、この城に納められているわ。使い方次第では危険な

ものだからね。」

まあ、他の薬草と調合すれば、依存性が発生することもありますからね。

「それなんですが、これを見てください。【オーガニー】の薬屋で売っていた物らしいです。」

セルナが持っていた、薬を袋から取り出します。

「これは…ナロティの種の粉末!?なんでこんなものが!」

知っているようで助かりました。

話が進みます。

「なにか心当たりはありませんか?」

「そう言えば…最近店主が高齢で引退して、息子が引き継いだらしいけど…」

「内政に干渉する気はありませんが、早々に対処した方がいいですよ。既に他国にも広まっていますから、この国にも蔓延しているかもしれませんね。」

「忠告感謝するわ。早速証拠を集めないと…」

「いえ、ついでですから。」

やっぱり、直接潰すのはリスクが高いですから。

【オーガニー】では気分で潰しましたけど。
国家権力には盛大に動いてもらいませんと。
「それと、私たちはこの国を出ようと思いますが、構いませんよね？」
「ええ、それは構わないけど…」
オストヴァルトさんは忠告するように言いました。
「【赤竜】がこの国に出没したって情報が出回ってね。【オーガニー】から【ベルクマン】が来ているらしいわよ。」
そう言えば【オーガニー】のギルドでそんなことを言っていた気がしますね。
「忠告感謝します。まあ、適当にあしらえばいいでしょう。」
「一応【Ｎｏ．１１】と【Ｎｏ．１６】が組んでいるチームなんだけど…【赤竜】がいれば楽勝かしらね。」
「それでは、ナロティの件が解決することを願いますよ。」
「ええ、私もあなたの無事を願うわ。」
最後に握手をして執務室を出ます。
部屋の外に出ていた青年が入れ違いに部屋に入っていきました。

それにしても、聡明な王でしたね。

私のことを詳しく聞かず、無暗に干渉をしない。

と言うより【赤竜】が従っている時点で、私の強さを見抜いていたんですかね？

そして、私をひきこみもせず、援助も求めない。

自分の国の揉め事は自分の手で、ですか。

でも…

「それだけじゃ、決着がつかないこともあるんですよ。」

閑話休題

滞りなく城から出ることができました。

「さて、これからどうしましょうか？」

リリウムは私と手を繋ぎ、ルビアとセルナは後ろで横に並んで歩いています。

傍目から見れば、家族のようにも見えますね。

「そうですね。じゃあ【アンヴィーラ】に行きませんか？私もギルドに登録してみたいです。」

「お姉ちゃん…私も…してみたい…」

「んーそうだな。【アンヴィーラ】にも薬草があるらしいし、行ってみてえな。」

「わかりました。それじゃあ【アンヴィーラ】に――」

門への道を曲がったところに、一人の少年が倒れていました。

「ん？どうした――ってあいつは…」

セルナが倒れている少年に近づきます。

「おい、どうした。怪我だらけじゃねえか。」

セルナが【水属性魔法】を使い、少年の怪我を治しています。

「知り合いですか？セルナ。」

「ああ、イーナが倒れてた時に、ちょっとな。」

そう言っている内に、少年の怪我がある程度治ったようです。

「よし、もう喋れんだろ？何があった？」

「兄ちゃん…母ちゃんが…母ちゃんが…」

「母親がどうした?薬草は渡しただろ?あれを付けてりゃ…」

「違うんだよ…母ちゃんが…」

その後に続いた言葉は、私にとっては聞きたくない言葉でした。

「母ちゃんが…俺なんて、息子じゃないって…俺、捨てられて…」

「捨てられたぁ?どうしてだ。」

「【亜人】に助けてを求めたのが【人間】として恥ずかしいって…そんな奴はもういらないって…」

少年は涙声になっていますね。

「家に入ろうとしても、知らない男に殴られて、蹴られて、すごく痛くて、動けなくて。」

「つか、母親はどうした。まだ治ってねえだろ?」

「ううん。兄ちゃんが連れてかれた二日後には、もう治ってて…」

「は?たった数日で治るわけねえだろ。」

「でも!母ちゃんが元気になって、元気になったら俺の事を構ってくれるかも、って。そしたら…」

少年が黙り込み、静かに泣き出しました。

「セルナ、どんな薬草を使ったんですか？」

「ああ、とにかく傷だらけだったからよ。傷口にフィルマとナロティを混ぜたのを塗ったんだ。」

「確かに、それだけならそんなに速くは…何か【魔法】でも使いましたか？」

「そうだな…そういえば【水属性魔法】で軽く治癒させてから塗ったが…」

「ああ、きっとそれですね。」

【魔法】と薬草を併用する、という考え自体がこの世界では異端ですからね。

【魔法】が使えないから薬草を使い【魔法】が使えるのなら薬草なんていらない。

そんな考えがまかり通っていますから。

「それでもな、数週間かかると診たんだぞ。それが、たったの数日で…」

「【魔法】はそれほど強力な物という事ですよ。それに、傷にピッタリの薬草を使ったんでしょう。それはセルナの手腕ですが…」

「おう、それは保障できるぜ。」

「それで、少年はどうしますか？」

泣いていた少年が、私を見ました。

「このままここで泣いていても、その内誘拐でもされるのが目に見えています。かと言って、帰る家もない。」

少年は、ビクリと肩を震わせました。

「お、俺は…」

「その前に、少年の名前を聞いてもいいですか？いつまでも少年じゃ、呼びづらいので。」

「ああ、こいつの名前な、ランダル・シーボーグっていうんだ。」

シーボーグ？

確か【グラブス】の図書館で…

「てか、シーボーグって元【Ｎｏ．３】のファミリーネームだよな？アムザイ・シーボーグって、お前の父親だよな？」

少年…ランダル君が今までの声とはうって変わって、憎々しげに言います。

「俺に、父ちゃんなんていない…」

まあ、アムザイ・シーボーグという名前を聞き、確信が持てました。

「予定変更です。【アナリティカ】に行きますよ。」

「どうした？【アンヴィーラ】に行くんじゃねえのか？」

「いえ、ランダル君の父親に心当たりがあります。けど、どうします？行きたいのなら連れて行ってあげますが？」

「お、俺は…うわぁ！」

何かを言う前に、セルナがランダル君を持ち上げました。

「グチグチと言ってねえで、とっとと行くぞ。」

「は、放せよ兄ちゃん！俺は、あいつの所になんて――――」

暴れていたランダル君の腕が、セルナの胸に当たりました。

「あ、あれ？兄ちゃん、なんで…」

「ああ、そういや言ってなかったな。俺は女だぞ。」

まあ、一度や二度見たくらいじゃ、普通気づきませんよ。

「…」

「どうした？いきなり黙りこくって。」

ランダル君が急に黙ってしまいました。

何やらランダル君の顔が赤くなっていますね。

「それでは行きましょうか。」

【アプライド】に来る途中のゴーレムも気になりますが、ランダル君が先決ですね。

それに【グラブス】は【アナリティカ】の近くですので、ちょうどいいです。

「すみませんね。ルビアとリリウムの登録はもう少し先になりますけど…」

「いえ、私は気にしてませんよ。時間はたくさんあります。」

「お姉ちゃん…私も…気にしてないよ…」

そう言いながらも、リリウムはガッカリしているようです。

仕方ないですね。

「ほら、抱きしめてあげますから、そんなにガッカリしないでください。」

「ガッカリなんて…ふにゃ…むにゃ…はふぅ…」

リリウムを抱きしめると、眠たそうな、気持ちよさそうな声を出しました。

なんだか、ルビアの視線が強くなりましたね。

「どうしたんですか？ルビア。」

「い、いえ。なんでもないです。」

なんだかルビアの様子がおかしいですね。

「ほら、セルナも、そろそろ行きますよ。」

「おう、わかった。じっとしてろよ。動くと持ちにくいからな。」

「う、うん。」

それにしても、あの館長が【Ｎｏ．３】だったんですね。

それほどの人が、なぜあんな場所で…

まあ、いくら考えても仕方ありません。

直接聞くことにしましょうか。

## 第二十五話・ペンは剣よりも強く、姉は妹に弱い（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

【人間】の子どもが一時合流しました。

なぜ元【Ｎｏ．３】が辺鄙な町で図書館の館長をしているのか。

なぜ【Ｎｏ．３】という称号をなくしたのか。

分かってくるかも？

それと、王様と面会しました。

特に何事もなく終わりましたね。

まあ、王様の内心はハラハラでしたけどね。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第二十六話・猫が魚好きだと思ったら、大間違いです（前書き）

はい、第二十六話投稿いたしました。

今回は急ぎの投稿でした。

ちょっとおかしなところがあるかも？

うーい、第二十六話始まり始まり…

# 第二十六話・猫が魚好きだと思ったら、大間違いです

どうも、イーナこと伊那楓です。

【アプライド】を発ってから早三日。

【アナリティカ】領内の【グラブス】という町を目指していますが、未だに影も形も見えません。

そういえば【グラブス】に着いたのって、半ば偶然なんですよね。

この世界に着いて、彷徨っていたら【グラブス】に着いた、と…

私の旅は、運任せが多いですね。

閑話休題

「イーナさん！海ですよ！」

先頭を歩いていたルビアがそんなことを言っています。

「お姉ちゃん…海って…何…？」

私と手を繋いでいたリリウムが、聞いてきます。

おや、リリウムは知らないんですか。

「海はですね。簡単に言えばおっきい水たまりですよ。」

「そうなの…？お兄ちゃん…？」

そう言って、リリウムは首を傾げながらセルナの方を向きます。

リリウムにとって、セルナはお兄ちゃんのようですね。

「んーまあな。でけえ水たまりで間違ってねえだろ。でもな、忘れちゃねえのが一つある。」

忘れてはいけないもの？

「それはな…魚だ。」

「魚ですか？」

「ああ【オーガニー】にゃ海が無かったから、魚が流通してなかったけどな。一回だけ、海で捕れた新鮮な魚を食ったことがあるんだ。」

確かに【オーガニー】は砂漠の中の国ですから、魚が流通することなんて、まずないでしょう。

「あのうまさと言ったら…」

頭に生えている耳をピコピコ動かして、その時の気持ちを表現しているかのようです。

さすが、猫の【亜人】と言いますか。

魚が大好きなんですね。

「ランダル君は、海を見るのは初めてですか？」

セルナの隣を歩いていたランダル君に話しかけます。

「うん【アプライド】を出たのが初めてだから…」

まあ、この歳の子どもが一人で出国することは、まずないですから。

「ところで、ランダル君は何故父親を嫌っているんですか？」

「…」

「まあ、言いたくなければ構いませんがね。」

ランダル君が父親を嫌っていますが、父親がランダル君をどう思っているのか分かりませんからね。

「【グラブス】に着くまでには、教えてくれると嬉しいですよ。」

「…うん、わかったよ。」

父親に会ったとしても、どんな結果になるのやら。

それが、ランダル君にとって最良な結果であれ、最悪な結果であっても、そうする以外にないのですが…

閑話休題

目の前に広がるは、大海原。

碧い海、青い空、白い雲です。

地球ではまず見る事の出来ない、よく澄んだ綺麗な海と、遠くまで見渡せる青い空。

「綺麗ですね…」

環境破壊も何もない、ありのままの自然の姿ですね。

「どうしたんですか？イーナさん。ボーっとして。」

「お姉ちゃん…？」

いけませんね、私としたことが。

「いえ、なんでもないです。」

「おっしゃー！魚捕るぞー！」

セルナが、服を着たまま海に入っていきました。

まあ、暑いので構いませんが…

そういえば、もう夏でしたね。

「うおー！冷てー！魚！魚どこだ！」

セルナが血走った目でざぶざぶと沖に進んでいます。

「ルビアとリリウムはいいんですか？」

ランダル君はセルナと一緒に海に入っています。

私たちは砂浜に座り、セルナ達を見ています。

「いえ、私は海は苦手なんです。【赤竜】ですから。」

「私も…海を見たのは…初めて…だから…」

なるほど、リリウムは擬態をしてからまだ数日ほどですからね。

「そういえば、猫って水に濡れるのを嫌がりますけど…」

セルナ達は大丈夫でしょうか…

「あれ…？お兄ちゃん達は…？」

リリウムが海を見ながら、呟きました。

その言葉に続いて私も海を見ます。

セルナもランダル君もおらず、ただ静かな風景が広がっています。

「そういえば、セルナって海は初めてって言ってましたよね？」

「ええ、ランダル君も、海は初めてと言ってました。」

「…溺れてますよね？」

「はい、間違いないですね。」

ルビアは慌てた様子で言います。

「い、イーナさん。た、助けなくてもいいんですか！？」

「いえ、私も海は苦手で…」

確かに【霊力浮遊】を使えば水に沈むこともなく、水面を滑るように移動をすることができます。

【霊力浮遊】を切れば沈んで、水中で【霊力浮遊】を発動すれば浮かぶこともできますが、助けるには潜らないといけませんし…

困っているところに【レーダー】に反応がありました。

それに、眼鏡を通して視る風景にも、変化が…

「緑色の【魔力】ですか？」

緑色の【魔力】は【風属性魔法】の証です。

その【魔力】が海の中から滲み出ています。

「…そういえばルビア。」

「はい、なんでしょう?」

「この場所は【アプライド】と【アナリティカ】の境目辺りですよね?」

「多分…そうだと思いますけど…」

やっぱり【アナリティカ】に入っていますかね。

そんなことを話している内に、滲み出ている【魔力】が多くなってきています。

これは、まさか…

「ルビア、ちょっと大変な物が出てくると思いますけど、攻撃はしないでくださいよ?あと、リリウムもルビアと一緒にいてくださいね。」

「どういうことで――――!」

ルビアが息を呑んで、光に包まれて擬態を解いてしまいました。

「こらこら、ルビア。擬態は解いてもいいですが、攻撃はしないでくださいよ?」

「グ…ググウゥゥ…」

久しぶりに【赤竜】のルビアを見ましたね。

「お母さん…どうしたの…？」

リリウムは若いからか、気づいてはいないようですね。

その時、何かに叩きつけられた様に、海からしぶきが上がりました。

お出ましですか…

それと一緒に、セルナ達も砂浜に落下してきました。

セルナは大丈夫でしょうから、ランダル君を受け止めましょう。

「ゲッホ、ゲホッ…痛ってぇ！死ぬかと思った！」

「大丈夫ですか？セルナ。」

どうやら、ランダル君は気絶していますね。

「ああ、何とかな。いきなり深くなったからビビったぜ。」

そう言って【火属性魔法】で火を出して体を乾かしています。

「つか、何が起こったんだ？沈んでたらいきなり吹っ飛ばされ――」

セルナが海に振り返ると、言葉を失ってしまいました。

「は…？な、なんでこんな場所に！？」

セルナが驚いていますね。

いや、驚くなという方が無理がありますけど【赤竜】に会っているんですから。

「それにしても【緑竜】ですか。なんだって海から出てきたんでしょうかね？」

海から出てきたのは【アナリティカ】に生息している【魔獣】の【緑竜】です。

【赤竜】のルビアと同じくらいの大きさで、翼が動いていないのに宙に浮いています。

まるで、重力を無視しているようですね。

眼鏡を通して視ると、緑色の【魔力】を纏っているようなので、風の【魔法】を使っているんでしょうね。

「それじゃセルナ、ランダル君をお願いしますよ。」

気絶しているランダル君をセルナに渡します。

「お前…まあ、イーナなら大丈夫なのか…」

セルナが呆れたように、呟いています。

「どうやら、敵意むき出しの様なので…ちょっと潰してきます。」

【緑竜】も待ってくれるつもりはないようですし。

眼鏡を通すと、緑色の【魔力】が【緑竜】の口内に集中しているのが確認できます。

【緑竜】の風の息（ブレス）ですね。

「ギャオオォォォ！」

【緑竜】が咆哮をあげたかと思うと、風の息（ブレス）が発射されました。

狙いは…セルナ達ですか。

と、いうより私も射線上に入っているんですがね。

なので、私の【霊力障壁】で防ぐことになりました。

【貫通】に優れている風の【魔法】ですが、私に直撃させるのならもっと密度を上げないと突破はできませんよ。

「ま、この程度ですかね。」

私の【霊力障壁】で大幅に減衰させられた風の息（ブレス）は、そよ風程度になりました。

この暑い中では丁度いいですね。

「ギャ…ギャオオ！」

【緑竜】が息(ブレス)を連射してきますが、初撃と比べては微々たるものです。

「さあ、ルビアの所に行っていてください。守りながらは厳しいですから。」

「…ああ、わかったよ。」

【緑竜】の攻撃が止んだ隙に、俊足を活かしてルビアの元に駆け込みました。

さて、これで安心ですね。

右腕にライフルを出し【緑竜】に撃ちこみます。

ただのライフルと驚くなかれ、一発が岩石を貫通する程の威力です。

それを毎秒3発で連射可能です。

正確に撃ちこまれた銃弾は【緑竜】に直撃…

「おや?おかしいですね。」

【緑竜】に当たったかと思ったんですがね?

どうやら、逸らされたようですね…

【緑竜】の風の【魔力】が、弾を逸らしているんですかね。

あれは【緑竜】独特の障壁のようですね。

「まあ、対処法はありますが…」

一つ目は、風の障壁が逸らせないほどの速さで【貫通】させるか。

二つ目は、実体のないＥＮ兵器を用いてあの障壁を【貫通】させるか。

「面倒ですし、両方で構わないでしょう。」

右腕に出すのはスナイパーライフル、左腕に出すのは高出力のレーザーライフルです。

相手が相手ですし、これくらいで構いませんよね？

重たいので、碌に動けませんが…

「さて、始めましょうか。どちらが潰れるが早いか、勝負です。」

何かを察知したのか【緑竜】が縦横無尽に宙を飛び回りながら、息（ブレス）を正確に当ててきます。

さすがに、あそこまで速いと当てられませんね。

仕方ありませんね。

スナイパーライフルをしまい、新しく出すのはハンドミサイルです。

同時に四発を射出し、ある程度まで相手を追跡して、接触次第爆発します。

あまり使いたくはないんですがね。

「まあ、言っている暇はありませんか。」

さすがに、このままだと終わりが見えませんし。

縦横無尽に飛び回っている【緑竜】を視界に納め、ミサイルを射出しました。

【緑竜】の後を正確に追跡し…

「ギャオオォォ！ギャアォォォォ！」

全弾命中ですね。

被弾した衝撃からか、少し動きが鈍くなりました。

レーザーライフルを構え【緑竜】に狙いを付けます。

「恨むのなら、手を出したあなたを恨んでくださいね。まあ、死にはしませんから、安心してください。」

青白い閃光が【緑竜】に直撃しました。

【緑竜】から【魔力】が消失し、海に落下していきます。

「はあ…少し疲れましたね。」

このレーザーライフルは【霊力】を尋常じゃないくらいに使います

からね。

しかし、それも数十秒程で回復しました。

まったく、本当に…

まあ、竜ならその内に目を覚ますでしょうね。

「さて、終わりま――」

「イーナさん！」

言い終わらない内に、ルビアが私を抱きしめてきました。

「あの…どうかしましたか？」

「イーナさん…本当に、無事で、よかったです。」

「ルビア？泣いてるんですか？」

「そりゃそうだろ。」

セルナが、ランダル君を背負いながら言います。

「リリウムも、ルビアも、心配してたぞ。なんてったって【緑竜】が相手だからな。まあ【赤竜】を従えてる時点で心配無用だと思うが…」

「別に、ルビアを従えているわけじゃないんですがね…」

未だに抱き着いているルビアの頭を撫でながら言います。

「大丈夫ですよ。私はここにいますから。心配してくれてありがとうございます。」

「お姉ちゃん…」

おや、リリウムもですか？

「ほら、おいで…」

「うん…」

抱き着いてきたリリウムの背中をポンポン叩き、落ち着かせるように言います。

「リリウムは私を心配してくれたんですか？」

「うん…」

「ありがとうございます。でも、私は大丈夫です。ほら、心臓の音が聞こえるでしょう？」

リリウムの頭を抱えるように、私の胸に近づけます。

「うん…聞こえるよ…」

「私は生きています。心臓が動いている限り。リリウムはどうですか？」

リリウムの胸に耳を近づけ、鼓動を聞きます。

「ほら、リリウムも同じです。でも、リリウムはまだ力が弱いです。私でも、ルビアでも、セルナでも誰でも頼ってください。分かりましたか？」

「うん…分かった…」

「それでは【グラブス】を目指しましょう。時間は無限にありますが、寿命は有限です。無駄にはできませんよ。」

リリウムと手を繋ぎ、ルビアが横を歩き、セルナがランダル君を背負ってついてきます。

さて【グラブス】までは、あと何日やら…

## 第二十六話・猫が魚好きだと思ったら、大間違いです（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

とうとう登場しました【緑竜】です。

しかし、相手が悪かったですね。

なんてったって主人公ですからね。

この【緑竜】ですが、見た目はあれですよ…某鋼龍をモチーフにしています。

それと体色は薄い緑色です。

あと、どんな生物でも心臓の鼓動は約２０億回とかいう説があるそうです。

実際、どうなんでしょうかね？

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第二十七話・電気が無くても、意外と生活はできます（前書き）

はい、第二十七話投稿いたしました。

相も変わらず、話によって長さがまちまちですね。

その時のモチベーションで、結構変わってくるのですが…

まあ、一番は〆切までの期間ですね。

課題が…課題が…

だども、第二十七話始まり始まり…

# 第二十七話・電気が無くても、意外と生活はできます

イーナこと伊那楓です。

数日前に【緑竜】を潰してきました。

いえ、殺してはいませんよ？

それにしても、なぜ【緑竜】が海にいたんでしょうか。

推測ですが、セルナ達が魚を捕っているところで【緑竜】も狩りをしていたんでしょう。

狩場に侵入されたから、排除しようとしたんでしょうね。

【緑竜】は風を纏っていましたから、水中でも呼吸ができたんだと思います。

閑話休題

さて、ようやく【グラブス】に到着しましたよ。

門には、以前お世話になった門番さんがいますね。

もう夕方なのに、ご苦労様です。

「どうも、お久しぶりです。」

「おう、久しぶり…って随分前に来たお嬢ちゃんか、よく生きてたな？」

「ええ、色々ありましたが、なんとか生きていますよ。」

火に包まれたり、土の槍に貫かれそうになったり、爆発に巻き込まれたり、骨折したりと色々ありました。

「それに、えらい別嬪さんまで連れて…一体どうしたんだ？」

「色々あったんですよ。色々と…」

他愛ない話をして、門をくぐりました。

「さて、とりあえず宿に行きますよ。ついて来てください。」

「おい、ランダルの父親の所に行くんじゃねえのか？」

「あの人が逃げるわけではありませんし、ゆっくりしても罰は当たりませんよ」

そして歩を進めるのは【グラブス】に来た時に宿泊した、宿屋のガバラスです。

外観は新しくも古くもなく、かといって綺麗でも汚くもない。

これといった特徴もなく、完全に町並みに溶け込んでいる宿屋です。

「イーナさん、ここに泊まるんですか？」

「ええ。食事もなかなかでしたし、部屋も広かったので。ここでいいでしょうか？」

「はい、イーナさんがいいのなら、どこでもいいですよ。」

「まあ、別に構いやしねえがな。」

ルビアとセルナの承諾も得られましたし、ここにしましょう。

ちなみに、ランダル君はセルナの、リリウムは私の背中で眠っています。

おそらく、疲れてしまったんでしょうね。

とりあえず、宿に入りましょう。

「いらっしゃいませ。今日は…ってイーナさんじゃないですか。」

出迎えてくれたのは、ミシェルちゃんでした。

「ええ、お久しぶりです。覚えててくれたんですね。」

「それはもちろん。宿屋の娘としては、お客さんの顔は忘れられませんから。」

「ありがとうございます。ところで、ベルさんは？」

「お母さん？お母さんは…」

「おや、イーナちゃんじゃないかい。」

私たちが入ってきた入口から、恰幅のいい、この宿のおかみさんが入ってきました。

「それに、美人さんに女の子にカッコいい兄ちゃんに男の子まで連れて、この一ヶ月で何があったんだい？」

「色々とあったんですよ。国を回って、あとは【アナリティカ】だけなんですよ。」

「それはまた…よくそんなに早く行けるもんだね。それはそれとして、今日は泊まりかい？」

「はい、とりあえずは二、三日程お願いします。」

「はいよ。部屋はどうするかい？さすがに一つの部屋に五人は狭いだろう？」

そうですね…

「私とランダル君は相部屋で、ルビアとセルナとリリウムが相部屋でいいでしょう。いいですか？セルナ、ルビア。」

「いやいや、どうしてお前がランダルと一緒の部屋なんだよ！？」

「そうですよ！イーナさんは私とリリウムちゃんと相部屋にするべきです！その少年はセルナに任せればいいんですよ！」

大変な勢いで反発されてしまいました。

「何を言っているんですか。ランダル君はまだ子どもですよ。そういえば、セルナはいくつなんですか？」

「…１６だ。」

「なんです。ランダル君と五つしか変わらないじゃないですか。間違いが起こる事なんてありませんから、大丈夫ですよ。」

「…反論しても、無駄なんだよな？」

「ええ。それはもちろん。」

「はあ、わかったよ…」

そう言って、セルナがランダル君を私に預けます。

「それじゃ、リリウムは、む…。」

リリウムをセルナに

リリウムが、私の首に手を回して、放してくれませんね。

「仕方ありません。リリウムもこちらの部屋ということで。ランダル君は、セルナが連れて来てください。」

「な！？」

ルビアが大げさに驚いて、身をのけぞらせました。

「そんな、イーナさんに加えて、リリウムちゃんまで…それに、こんな猫と一緒だなんて…」

「あんだと！てめぇ！」

「ほらほら、ケンカしない。で、イーナちゃんと男の子と女の子、美人さんと兄ちゃんでいいのかい？」

「はい、それでお願いします。」

「とりあえず、三日分で一人１０００Ｓだね。夕食は今から作るから、荷物でも置いてくるんだね。」

そういって、ベルさんは奥に言ってしまいました。

「それじゃイーナさん。これがお部屋の鍵です。案内するので、ついて来てください。」

ミシェルちゃんはどこか緊張しながら、先頭を歩いていきます。

「ほら、行きますよ。他のお客さんの迷惑になってしまいます。」

座って雑談をしていたお客さんたちが、迷惑そうにルビアとセルナを睨んできています。

「チッ…わかったよ。」

「…イーナさんに迷惑をかけるわけにもいきません。今日の所は我

慢します。」

すみませんね、我が儘を言ってしまって。

でも、ルビアとセルナだと、対処ができませんから。

本当は、リリウムもルビア達と一緒の方がよかったんですがね。

閑話休題

さて、夕食も食べ終わり後は寝るだけです。

「イーナさん…寂しくなったら、私のベッドに来てくださいね…」

「いや、今までも普通に寝てたじゃないですか。」

寂しいのはルビアの方じゃないんですか?

セルナも、ランダル君と何やら話していますね。

「お姉ちゃん…早く寝よ…?」

リリウムが私の服の袖をクイクイ引っ張ってきます。

「ほら、子どもたちは来てください。もう寝ますよ。」

ルビアが名残惜しそうしていて、セルナが手を挙げています。

「それでは、おやすみなさい。また明日…」

そう言って、私、リリウム、ランダル君は部屋に入り、それぞれベッドに入ります。

「お姉ちゃん…一緒に…寝よ…？」

私がベッドに横になったと思ったら、リリウムも一緒に横になりました。

「リリウムは、竜だったときもこっそり潜り込んできていたでしょう？何をいまさら…」

「あの時は…お姉ちゃんと…話せなかったから…」

そう言って、リリウムが私に抱き着いてきます。

「でも…今は…お姉ちゃんと…話せるから…それに…」

「それに…？なんですか？」

「お姉ちゃんのこと…だいす…き…だか…ら…」

電気もないこの世界では、ランプがあるとは言え、かなり薄暗いです。

眠くなるのも仕方ありませんね。

「ええ、私も、リリウムの事は好きですよ。そろそろ寝ましょう。明日も早いんです。」

ランプの灯を消し、視界が真っ暗になります。

窓からは、月の光と街灯の灯りが入ってきます。

「ランダル君は、一人で大丈夫ですか？寂しかったら、セルナの所にでも…」

「お、俺は、女と一緒になんか寝ない！」

そう言って、布団を被ってしまいました。

まったく、強がりなんですね。

それに、いつの間にかリリウムの寝息が聞こえます。

抱きついてくるせいか、リリウムの体温が心地よいですね。

そういえば、リリウムとこうやって眠るのも、久しぶりだと思います。

閑話休題

さて、リリウムも寝ましたね。

…やはり、見つかってしまいましたか。

【レーダー】で確認する限りでは、この町に入った時から、数人がつけて来ていましたからね。

狙いは…

「やはり、ランダル君ですかね。」

リリウムを起こさないように、呟きます。

私に抱き着いているリリウムの腕をそっと外し、音を立てないように部屋から出ます。

やはり、元【Ｎｏ．３】とは言え、利用価値はある、という事ですかね。

子どもを誘拐し、脅迫をする。

単純ながらも、実に効果的な方法です。

「さて、どこが、なんの目的で、ですかね。」

しかし、この方法には重大な欠点と、リスクがあります。

「果たして、どうなりますか…」

【アプライド】で攫われなかったのは、幸運と言うしかありませんね。

通りに出ると、街灯の灯りがボンヤリと、辺りを照らしています。
宿を一歩出た途端、十人ほどの、暗闇に溶け込んでいる様な服を着た男たちが、物陰から出てきました。
まるで、黒い塊ですね。
「一体、何の用でしょうか？まあ、察しは付いていますが…」
私がそう言うと、リーダーでしょうか？
男が一人、黒い塊から出てきました。
「…ただのガキだと思っていたのが間違いだったな。単刀直入に言おう、元【Ｎｏ．３】の息子を渡せ。そうすれば危害は加えない。」
「さて、ランダル君を渡す？ランダル君にそこまでの価値が？」
「…もう一度言おう。元【Ｎｏ．３】の息子を渡せ。」
男の声に、僅かな苛立ちが見えますね。
「ランダル君を渡せば、危害は加えない？嘘ですね。あなた達の姿を目撃した私を消すのがセオリーなのでは？」
「…交渉決裂だな。」
男が口笛を吹くと、それに反応したかのように、リーダーの後ろに待機していた男たちが、一斉に短刀を取り出しました。

眼鏡を通して視ると、短刀が緑色の【魔力】に包まれています。
どうやら【風属性魔法】を纏っているようですね。

「…殺れ。」

リーダーの男が静かに呟くと、男たちが一斉に飛びかかってきます。
一糸乱れぬ動きで、私を囲むかのように短刀を突き出してきました。
しかし…

「なんだと…!?」

男たちの短刀が、私の【霊力障壁】の阻まれ、肝心の私の体に届いていません。
それでも尚、男たちは短刀で切り付けてきます。
ちょうどいいですね。

【霊力爆発】

私を中心とした、半径数メートルを【霊力】による爆破で包みます。
この爆発半径も、徐々に広まってきているんですよね。
爆発の光が止むと、男たちが揃って倒れていました。

「さて、あなた達には少し眠っていてもらいますよ。あ、安心してください。後できちんと始末しますから。」

ま、聞こえていませんか。

リーダーと思しき男は…

「逃げましたか…」

いつの間にか、影も形もなくなっています。

しかし【レーダー】には、あの男の居場所が、リアルタイムで表示されています。

男たちが持っていた短刀を数本拾い、男の後を追います。

追う側から、追われる側に回った物は、えてして脆いものですよ。

「こういうのは、ハッキリさせませんと…」

どこが、なんの目的で、来たのか聞き出しませんと。

推測はあくまで推測です。

事実を聞くまでは、安心できません。

それに、ああいうのが何度も来たら、鬱陶しくて堪りません。

それにしても【霊力爆発】の光でリリウム達が起きなければいいんですが…

## 第二十七話・電気が無くても、意外と生活はできます（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

サブタイトル候補として、以下の物もありました。

・１１歳は、親に甘えたい年頃です

・外見から年齢は判断ができません

・誘拐と略取、総称して拐取といいます

…まあ、何となーく付けたサブタイトルですので、気にしない方がいいです。

それにしても、主人公には、トラブルに巻き込まれる才能でもあるんでしょうか？

もちろん、エッチな方じゃなくて、面倒事の方ですよ？

まあ元【Ｎｏ．３】といえども、味方にする事ができたら、かなり大きいですからね。

どこの国や組織でも…

おっと、これ以上はネタバレですね。

え？もうすでにネタバレだって？

気にしない、気にしなーい。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第二十八話・食べ物を粗末にしたら罰が当たります（前書き）

はい、第二十八話投稿いたしました。

ここに来て、レポートや課題の山、それに加えてテストまで…

ヒャッハー！

もうダメだー！

しかし小説は投稿します。

なぜかって？

…ちょめ介ですから。

へっへい、第二十八話始まり始まり…

# 第二十八話・食べ物を粗末にしたら罰が当たります

おはようございます。

イーナこと伊那楓です。

昨晩は結局、遅くなってしまいました。

案外逃げ足が速くって、追いつくのに時間がかかってしまいました。

それにあの男、口を割ろうとしないんですよ。

まあ、人は意外と丈夫だという事が、再確認できました、とだけ言っておきましょう。

部屋に戻っても、リリウムとランダル君が起きていなくて、ホッとしました。

「おはようございます。リリウム、それにランダル君も。」

「ん…おはよ…お姉ちゃん…」

「…はよ、姉ちゃん。」

どちらも、まだ眠たいようですね。

「ほら、顔を洗ってください。目も覚めますから。」

二人を洗面所まで連れて行きます。

やっぱり二人とも子どもなんだと分かりますね。

閑話休題

「おはようございます。よく寝られましたか？二人とも。」

「はい。でも、イーナさんと一緒に寝たかったです…」

ルビアがションボリしながら言います。

「お母さん…私と一緒に…寝るのは…イヤなの…？」

リリウムが、涙声になって、目に涙を滲ませてながら言いました。

「ち、違うんですよ！？イーナさんとも一緒に寝たいという意味で、決して、リリウムちゃんと寝たくないという意味ではないですよ！？」

ルビアの慌てる姿も、珍しいですね。

ルビアが慌てていると、ベルさんが朝食を運んできました。

「さ、朝食だよ。なるべく早く食べてくれると助かるね。」

朝食のメニューは、パンと目玉焼き、そしてサラダです。

「うげ…俺、野菜嫌いなんだよ。」

朝食を食べている途中に、ランダル君がそんなことを言いました。

「おや、ランダル君は野菜が――――」

「おい、ランダル！」

セルナが私の言葉を遮って、ランダル君の肩を掴みました。

「イーナの前で、そんなことは言うな！いいな、絶対に残すなよ！」

「ど、どうしたんだよ兄ちゃん。だって、苦いし…」

「頼むから…残すなよ。俺の時は、うあぁぁぁ…」

セルナは、以前食事を台無しにした時の事を覚えているようですね。

「嫌がっている子どもに、無理矢理食べさせるわけないでしょう。あの時は、セルナが料理を無下にしたからですよ。」

私にも苦手な物はありますし。

「無理に食べる必要はありません。食べないのなら、セルナにでもあげてください。」

そう言うと、ランダル君はサラダの入ったお皿を、セルナの空のお皿と交換しました。

食べ物を残すと、もったいないおばけに祟られてしまいますから。

セルナは、テーブルの下で子猫のように震えています。

「セルナ、いつまでも震えていないで、早く食べてください。」

ルビアとリリウムも既に食べ終わっていますし、そろそろ件の図書館にも行かないといけません。

「…怒ってねえか？」

目から上をテーブルから覗かせて、聞いてきます。

「話を聞いていなかったんですか？嫌いなものを、無理矢理食べさせませんよ。」

「…わかった。少し待っててくれ、食っちまうから…」

そう言って、サラダを手に取り――

「あ」

「あ」

「あ」

「あ」

「あ」

震えが治まっていなかったのか、セルナの手からお皿が滑り、床に落ちて行きます。

甲高い音を立ててお皿が割れ、お皿の破片とサラダが床に散らばりました。

…お皿を持つのは、マナー違反ですし。

セルナの震えが頂点に達したのか、イスまでガタガタと音が鳴っています。

「さて、セルナ…」

「あ…あぁぁ…」

いつの間にか、ルビアとリリウムがいなくなっていますね。

部屋に戻ったんでしょうか？

そしてランダル君は、困惑の表情を浮かべています。

私は肘をテーブルに置き、眼前で指を組みます。

「覚悟は…よろしいでしょうか？」

「…す、すみませんでしたー！」

往生際がいいのはよろしいです。

潔さに免じて、２０％オンにしてあげましょう。

何をするのかって？

ふふ、秘密ですよ。

閑話休題

「さて、ここが例の図書館ですよ。」

「う、うん…」

目の前に建っているのは、レンガ造りの、壁はツタで覆われている、何年も放置されているような建物です。

図書館・ウェリアです。

ランダル君は、セルナにも一緒に来てほしかったらしいですけど、セルナが倒れてしまったので、来ることが出来ませんでした。

とりあえず、ここまでの地図を置いてきたので、目を覚まし次第来るでしょう。

「さあ、入りますよ。」

「…」

「どうしましたか？」

「お、俺…や、やっぱり、戻る。」

ランダル君が踵を返して、宿に戻ろうとしています。

「こらこら、今更戻ってどうするんです？せっかくここまで来たのに…」

ランダル君の腕を掴んで、それを留めます。

「不安なのはわかります。しかし、父親に会わずにどうするんです？ランダル君一人で生きていけるほど、世の中は甘くないですよ？」

「兄ちゃんたちについてく…」

「まあ、私は構いませんが…ついて来てどうするんです？まだ小さい、何の力も無いあなたが、どうやって自分の身を護るんです？」

「そ、それは…」

「【魔法】も使えない、力も普遍的な【人間】と同じ。ハッキリ言って、足手まといになるだけです。」

「…」

「あなたには、選択肢があります。父親に会わずに【グラブス】を去るか、父親に会い【グラブス】を去るか…」

「…俺は、父ちゃんに会っても、話すことなんて、ない。」

「そうですか。では、戻りましょう。【アナリティカ】にも行ってみたいですし。」

そう言って、図書館から離れました。

しかし、ランダル君は俯いて、ついてこようとしません。

「どうしましたか？会いたくないのなら、早く離れましょう。」

「…」

「ほんの少しでも、心残りがあるのなら吐露した方がいいと思いますよ。伝えるのは、今しかありませんから。」

「うん…」

小さく返事をして、ランダル君は図書館へ歩を進めました。

それを見送り、ランダル君が図書館に入ったのを確認しました。

さすがに、親子の会話を盗み聞く趣味はありませんよ。

「さて、この雰囲気をぶち壊す、無粋なお客さんはどちら様でしょうか？」

ずっと、つけられていたんですよ。

宿を出てから、ちょっと遠回りをしてみたり、路地を通ったりしても、付かず離れずの一定の距離を保ちながらついてきています。

もはや偶然ではありませんね。

「ふむ、このような小童に暴露されるようでは、儂もまだまだじゃな…」

爺言葉を発しながら、曲がり角から老齢の男性が姿を現しました。

「昨日、この街に到着してからずっと、私たち…いえ、ランダル君を狙っていたでしょう?今度は何の用ですか?」

「ふむ、昨日からずっと認識していたとは、末恐ろしい…」

「それで、あなたも昨日の夜更けの男と同じ目的ですか?」

「ふむ、元【Ｎｏ．３】の息子を攫えば、決定的なアドバンテージになるからの。どこの組織も、国も、そう考えるじゃろう。しかし…」

老齢の男性は、少し言葉を出すのを躊躇わせてから、言いました。

「元【Ｎｏ．３】の庇護下に入ったからには、もう手出しが出来ないのでな。これで安心じゃろ。」

老齢の男性は、ホッとしたように言いました。

「どういうことです?あなたもランダル君を狙っていたのでは?」

「ふむ?ああ、いやいや、儂はそんなことは考えておらんよ。あの少年の母親からの依頼じゃ、元【Ｎｏ．３】の庇護下に入るまで見

届けろとな。」

母親の依頼？

「どういうことです？ランダル君は捨てられたと…」

「ふむ、あまり話さない様に、と言われておるのじゃが…まあ、いいじゃろ。」

老齢の男性は、図書館の門に続く階段に座りました。

「元【Ｎｏ．３】…アムザイ・シーボーグじゃが【Ｎｏ．３】になる前にの、夢があったんじゃよ。」

「夢…ですか？」

「ふむ、夢じゃ。持って生まれた膨大な【魔力】に、圧倒的な【魔法】を扱う資質。これは稀な才能じゃからの、期待を一身に受けて育った。彼もその期待に応え【魔法】を学び、遂には【Ｎｏ．３】になった。もちろん、夢を叶えることもできた。しかし、環境がそれを許さなかった。彼は、仕方なく【Ｎｏ．３】になったのじゃよ。」

【Ｎｏ．３】が霞むほどの夢ですか…

「彼が【Ｎｏ．３】になると、すぐに弟子を育て始めた。昔の自分に、勝るとも劣らない才能を持っておった。弟子も彼に懐き、よい師弟だった。そして数年経った…」

弟子ですか…？

「そして突然じゃ、彼が【Ｎｏ．３】を引退すると言ったのは…『夢を叶えたいんです。』と、それだけ言って姿を眩ました。そして、その後釜として彼の弟子が【Ｎｏ．３】に収まった。まあ、世間には弟子に後を任せた、と発表されたのじゃが…」」

「【Ｎｏ．３】を捨てるほどの夢ですか…それほどまでの夢だったんですか？」

「ふむ、傍目から見れば馬鹿らしい夢だったんじゃがな。彼にとっては、何物にも代えがたい夢じゃったんじゃろうな。」

「しかし【Ｎｏ．】は国との契約なんですよね？そんなに簡単に破棄ができるんですか？」

一度交わした契約は、余程のことが無い限り、不可能だと思いますが。

「ふむ、それは当然不可能じゃ。【Ｎｏ．３】が夢の為に国を捨てたと、どうして発表が出来る？当然、指名手配がされる…はずじゃった。」

「はず、ですか？」

「ふむ、指名手配をすると報復が恐ろしい。しかし、ただ見逃すのは気に食わない。そこで国は考えたのじゃ【Ｎｏ．】を得ると一般には秘匿されるはずの情報を公表すれば、自分たちの手を汚さず、追いつめることができると…」

なかなか、国もえげつないことをしますね。

それにしても【Ｎｏ．】を得ると、情報が一般に秘匿されるんですか。

復讐や報復を防止する為ですかね。

「【Ｎｏ．】を持っているだけで、超一流の証じゃからな。家族、親類を人質にされて、国を裏切られても困るんじゃろうな。」

なるほど、国の上層部は、自分や国の利益を優先しますからね。

裏切られたら不利益を被ってしまいます。

「一部には自分の貴族は家の為に、あえて公表する者もいるが…大半は秘匿する。恨まれる筋合いはたくさんあるからの。」

まあ、それはそうでしょう。

そういった手合いは際限がありませんから。

「しかし公表された【Ｎｏ．３】の情報は、一部の街や村には伝わらなかった。それが…」

「この街【グラブス】もその一部…と言うわけですか。」

「ふむ、彼には…【Ｎｏ．】を得る前から交際していた女性がおったんじゃ。その女性との間に生まれたのが…」

「ランダル君…と言うわけですか。」

「ふむ、彼は彼女を愛しておったし、彼女も彼を愛しておった。【Ｎｏ．】を得てからは、安全の為に離れて暮らしておったのじゃが…」

「情報が公表されてからは、その女性も危険に晒された、と。」

「ふむ、その女性も【魔法】が使えたんじゃが…いかんせん質より量じゃ、数には勝てず、全身に傷を負った。儂にも理由があっての、常に護ることが出来なかったのじゃよ。」

まあ、個人対集団では、圧倒的な力が無い限り、個人が潰されますからね。

「その少し後じゃ、猫の【亜人】が傷を治してくれた、と知らせが入っての。確かに傷が綺麗さっぱり治っておった。理解が出来んかったよ。」

全部、ランダル君をここまで連れてくるための芝居だったんですかね？

それにしても、運任せですね。

「なるほど、ところで、あなたは誰なんです？」

「儂か？儂は…まあ、しがない、ただの年寄りじゃよ。」

「嘘を言ってはいけませんよ。その尋常じゃない【魔力】…【エルフ】でしょう？」

このお爺さんから視える【魔力】は、過去に視た【Ｎｏ．】の誰よ

りも多いものです。

それにしても【エルフ】の【魔力】は、ここまで【人間】を凌ぐものなんですか。

「…お嬢ちゃんこそ何者…なるほど、その眼鏡じゃの。」

「おや、この眼鏡のことを?」

「知っているも何も、儂が若い頃に作った【魔具】の一つじゃ。懐かしいのう。あの頃は【魔具】をたくさん作っておった、若気の至りじゃな…」

「この【魔具】は便利です。助かっていますよ。」

「ふむ、そう言ってもらえて何よりじゃな。それにしても、あの頃は【彼】も…」

そう言ったお爺さんの目は、昔を懐かしんでいるようでした。

「まあ、儂の依頼はこれで終わりじゃ…あとは、あの二人に任せるわい。」

「それもそうですね。他人が入る隙間なんてありません。」

「それじゃあの、儂は戻るわい。彼女は儂の家に保護しているのでの。彼に伝えてくれるとありがたい。君には…まあ、その内会えるじゃろ…」

そう言って【エルフ】のお爺さんは唐突に消えてしましました。

瞬きをした一瞬のうちに、跡形もなく…

【レーダー】にも表示されていません。

「…何か【魔具】でも使ったんでしょうかね？」

そういえば、名前も、家の場所も聞いていませんね。

あの人に伝えれば分かるんでしょうね。

「ああそうじゃ、忘れておった。」

「いきなり現れないでください。驚きます。」

瞬きを瞬間に、また【エルフ】のお爺さんが突然現れました。

「これに儂の家までの地図が書いてある。渡しておいてくれんかの？」

「はいはい。分かりましたよ。」

私に一通の手紙を渡すと、すぐに消えてしまいました。

「しかし、母親ですか…」

ランダル君は捨てられたと言っていましたが、実際は…

「愛されて、護られて、とても大事に…」

まるで、私とは大違いです。

まあ、偶然に偶然が重ねって、たまたま、ランダル君はここまで来れたんでしょうかね？

それとも、ランダル君と会ったのも…

「まあ、考えても仕方ありません。今はランダル君ですね。」

そろそろ二人の話し合いも終わったでしょう。

図書館に入りましょうか。

## 第二十八話・食べ物を粗末にしたら罰が当たります（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

突然現れた【エルフ】のお爺さん、彼は一体！？

そして少年は愛されていたんですね。

母親も、身を切る思いで送り出したと…

そして次回へ続く！

ちなみに、タイトルの罰は、ばちと読みますよ？

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第二十九話・人の夢は儚い、だからこそ夢なのです（前書き）

はい、第二十九話投稿いたしました。

さて、この小説もそろそろ三十話に届こうかというところ。

とりあえずは、三十話で一区切りにしたいと思います。

まあ、木曜日ですね。

詳しいことはその時にまた…

けれど、第二十九話始まり始まり…

# 第二十九話・人の夢は儚い、だからこそ夢なのです

こんにちは。

イーナこと伊那楓です。

結局、あの【エルフ】のお爺さんはなんだったんでしょうね。

敵意も悪意も無かったようですし、本当にランダル君を見守っていただけなんでしょうね。

疑問も多々ありましたが…

でも、急に消えたのは【魔法】でしょうか？

そんな【魔法】は聞いたことはありませんが…

近いうちに会えるとも言っていましたし、その時にでも聞きますか。

さて、ランダル君たちはどうなったのでしょう。

まあ、どちらに転んでも、どうでもいいんですがね。

閑話休題

図書館の中は、相変わらず、カビと埃が混ざったような独特なにおいがします。

「さて、二人はどこに…」

【レーダー】を確認すると、カウンターの奥の部屋、書庫でしょうか？

そこに、二人がいるみたいですね。

書庫に入ってみると、閲覧室とはまた違った古い本がズラリと並んでいました。

二人はもう少し奥のようです。

二人の元に向かっていると、ふと、本棚の本が目に入ってきました。

その本棚は、他の本棚と違い三冊の本だけが収められていました。

「なんでしょうか、この本は。根本から文字体系が違うようですが…」

この世界【ケミスト】の文字でもない、かと言って英語でも、ロシア語でも、今まで見たことのないような、文字とも図形とも記号とも言えるモノで綴られています。

いくつか同じようなモノが並んでいますが、さすがにこれだけで読めと言うのは無理があります。

しかし、この世界にあるからには【ケミスト】の文字に違いはあり

ません。

そして、神様は私に【ケミスト】の文字を読めるようにする、と言っていました。

つまりは…

「…なるほど、読めるわけがありませんね。」

私が、この世界の文字だと認識した瞬間、その本の文字が読めるようになりました。

その本は、滅びた文明の失われた言語で書かれており、そして…

「不老不死、ですか…」

あらゆる種族を【吸血鬼】と化し、それに伴う不老不死化についてが、事細かに記載されていました。

【地球】でも、太古の昔より追い求められ、それでも実現されなかった、叶うはずのない夢…

どうやら、吸血鬼化に伴って発生するはずの太陽への弱体化は、不老不死化で補完されているようですね。

太陽で肌を焼かれても際限なく再生し、心臓を杭で貫かれても死ねず、肉体を粉々にされても復活する。

確かに、不老不死には違いありませんね。

肉体の成長も止まり、永遠の若さも得られますし。

そのかわり、生き物を吸血し【魔力】を補填することが必須になるようです。

それでも、吸血は数年に一度でいいらしいですね。

この【吸血鬼】は【亜人】として存在する吸血種族とは、似て非なるもののようですね。

吸血種族も、生き物を吸血し【魔力】を補填できますが、不老不死とは言えませんし。

「しかし、不老不死に、なんの意味があるんですかね…」

残る二冊の本を読んでみても、死人を蘇らせる【魔法】や記憶を消す【魔法】に、生物を即死させる【魔法】や生物を操る【魔法】など、外道な【魔法】ばかりが記載されていました。

どの本も、現在使用されている【魔法】とは、全く違う方向性の【魔法】が記載されています。

「どうなっているんですか、この図書館は…」

一般には公開されてなくても、このような街の図書館にあっていい本ではないです。

それこそ、博物館や研究機関といった場所にあって然るべきものばかりです。

この世界に、そのような機関があるのかは、疑問ですが…

「まあ、読む事が出来ないのが、せめてもの救いですね。」

滅びた文明の、失われた言語ならば解読するのが、まず不可能だと思います。

【地球】でも、まだ解読されていない言語がありましたからね。

発見してから、たかが数年で、全てを解読するなんて不可能ですね。

「それでも、処分するに越したことはありませんが…」

この本を、どこで見つけたのかを…

「誰です！そこにいるのは！」

本棚の陰から、この図書館の館長であるアムザイ・シーボーグが、杖を突き付けてきました。

「館長さんですか。どうも、お久しぶりです。」

「あなたは…イーナさんですか？」

「はい、イーナです。ランダル君の様子はどうですか？」

「あなたでしたか…お恥ずかしながら、ランダルと会ったのもあの子が生まれて以来でしたから、今更何を話せばいいのやら…」

そう言ってアムザイさんは、恥ずかしそうに頭をかきました。

「今まで何も出来ずに、今更父親面して…私に親の資格なんて、ないんですよ…」

「親であることに、資格なんて必要ありませんよ。」

「え？」

「私の育った地では、生みの親より育ての親、と言われています。あなたがランダル君を生んだわけでも、育てたわけでもありません。しかし、これから育てて行けばいいんです。あなたの奥さんと一緒にです。」

「しかし、妻は…」

「【エルフ】のお爺さんから、手紙を預かっています。あなたの奥さんを保護しているらしいです。」

そう言って【エルフ】のお爺さんから預かった手紙を渡しました。

「【エルフ】の…あのお爺さんですか。それなら安心です。」

「怪我は治ったらしいですが、それでも、傍にいた方がいいんじゃないですか？」

「はい、それはそうですが…」

アムザイさんは、周りの本を気にしているようですね。

「今を拾って未来を捨てるのか、今を捨てて未来を拾うのか。夢は、

もう叶ったんでしょう？」

「全部、知っているんですね…」

「全て【エルフ】のお爺さんに聞きました。【Ｎｏ．３】であったことも、夢の為に全てを捨てたことも、ランダル君のことも。もう、十分捨ててきたでしょう？最後の一つくらい拾ったらどうですか？」

この人は、一体どれだけのモノを捨ててきたんでしょう。

唯一拾えたモノは、図書館の館長という夢と、愛する人と一緒になる事。

その一つも、捨てようとしています。

「…はい。私にとっての一番は、やはり家族です。今まで、随分と迷惑をかけてしまいましたから…」

「十年という年月は、決して短いモノではありません。しかし、これから何十年とあるんです。取り戻せないモノではありませんよ。」

「はい…ありがとうございました。」

そう言って、アムザイさんは頭を下げてきました。

「さて、私はこれで戻りますよ。ランダル君にもよろしく――――」

言葉を続けようとすると、扉がバーンと開く音がしました。

【レーダー】で確認すると、緑色の点でした。

おそらく、セルナでしょうね。

「また、ですか…」

なにやら、アムザイさんが険しい表情をして、杖を構えました。

「どうしたんですか、杖を構えたりして。それに、また、とはどういう事です？」

「実は【教団】の連中が、この図書館の明け渡せと、このところ押しかけてくるんですよ。」

「【教団】ですか？」

「はい。およそ百年前に創設されたんですが、ここ数十年で急に力を付けてきたんですよ。遥か昔に失われた文明の【遺産】を発掘したとかで…」

【地球】の宗教団体と同じ様なモノですかね？

「そんな【教団】が、何故この図書館に？」

「それが、失われた文明の手掛かりがあるという話で…その度に追い返しているんですが…」

手掛かりですか？

「もしかして、この本の事ですかね？」

「その本が…ですか？」

「はい、その古代文明の歴史が…」

「その本に書いてあることが解るんですか！？」

アムザイさんは、驚愕の表情で私を見てきます。

あー、そういえば古代文明の事って、一般人には知られていないんですよね。

墓穴を掘りましたね。

まあ、アムザイさんも一般人とは言えない立場ですがね。

「その本は、どれだけ文献を調べても、文字一つの手掛かりも見つからなかったんですよ！？それを、歴史書だと、解るんですか！？」

アムザイさんは、私の肩を掴んでガクガクと揺さぶってきます。

それにしても【教団】ですか。

何やら、不穏な事を聞きましたね。

失われた文明の【遺産】ですか…

どんなモノか、気になりますね。

そんな時に、ふと、目の片隅にセルナの姿が見えました。

「イーナに…何してんだ！テメエは！」

セルナが凄いスピードで走ってきて、ジャンプをし、慣性の法則に従って、速度を維持したまま、アムザイさんの頭に蹴りを叩きこみました。

手早く言ってしまうと…

「ドロップキックですか…」

さすがに、不意打ちに近いモノを避けられるはずもなく、アムザイさんは物凄い音を立てて、本棚に突撃し、本に埋もれてしまいました。

「変態が！イーナに近寄ってんじゃねえ！」

本に埋まっているアムザイさんに向けて、罵詈雑言を吐いています。

「セルナ、その辺にしておいてください。私は別に――」

「と、父ちゃーん！」

ランダル君が本棚の裏から飛び出し、必死に本をかき分けています。

「ん？ランダルが父ちゃんって言ってるってことは…」

「ええ、ランダル君の父親ですよ？」

「…元【Ｎｏ．３】のか？」

「はい。」

「…」

セルナの顔色が、徐々に青くなっていますね。

「だ、大丈夫かー！」

セルナも、ランダル君と一緒に本をかき分けていますね。

まあ、元【Ｎｏ．３】なんですから、これしきの事は大丈夫でしょう。

閑話休題

「すみませんでしたー！」

セルナが、目を覚ましたアムザイさんに土下座をしています。

なんだか、セルナの土下座も板に付いてきましたね。

「いえ、私もつい興奮してしまいました…」

アムザイさんも、セルナの土下座を見て気まずそうにしています。

「さて、ランダル君。」

「ん？どうしたんだ、姉ちゃん。」

「アムザイさんとは、どうですか？」

「…うん、今はあんまり喋れないけど、もう少し一緒にいれば、きっと。」

「そうですか。」

まあ、心配するほどでもないでしょう。

両親と一緒に暮していれば、自然と慣れてくるはずです。

「そう言えば…アムザイさん。」

「はい、なんでしょうか？」

「この本は、一体どこから？」

三冊の本を本棚から取り出し、アムザイさんに聞きます。

「実は、この図書館を開く前なんですが…」

アムザイさんが言う話では、この図書館を購入し、元々置いてあった家具を全て整理した時に見つけたらしいです。

どうも、壁に【魔法陣】で仕掛けがしてあって、解除して開いた扉の中に、十冊ほどの本が入っていて、その【魔法陣】を解除したらあらゆる方向から上級魔法にも匹敵するほどの【魔力】が襲ってき

たらしいです。

かろうじて回避したものの、その【魔力】のせいでほとんどの本が消滅してしまい、残ったのがこの三冊の本、とのことです。

その【魔法陣】は消滅してしまい、二度と現れなかったらしいです。

「なるほど…」

「今も【魔法陣】で【魔法】を発現できますが、あそこまで膨大な【魔力】を溜めこむことはできません。今思えば、あれも古代文明の【魔法】だったのかもしれませんね。」

確かに、この本にも古代文明の【魔法】について書いてありましたがね。

他の、消滅した本に書いてあったんでしょうか？

「ところで…イーナさんはその本を読めるんですよね？」

「はい、読む事はできますが…」

アムザイさんが、興味津々と言った目でこちらを見てきます。

「…聞きたいですか？」

「是非とも！」

アムザイさんが、ノートとペンを取り出し、メモを取る体勢になりました。

…どこから出したんでしょうか？

「まあ、いいです。この本に書かれている内容はですね…」

その時、ふと思いました。

「…アムザイさん。一つ聞いてもいいですか？」

「はい？何をです？」

今まで見ていたノートから視線を上げ、こちらを見ました。

「もしも…もしもの話ですが、あなたの最愛の人が無くなったとします。その時に、その人を蘇らせることが出来たとしたら…どうしますか？」

「…それは、その本に関係する話ですか？」

「…」

私の沈黙を肯定と受け取ったのか、アムザイさんはノートとペンをしまいました。

「…そうですか。やはり、その本の内容は話さなくてもいいです。」

「…すみません。」

「いえ、例えそうだとしても、希望に縋ったら、それに頼りきりになってしまいます。別れは…何度もするものじゃないんですよ。そ

の本も差し上げます。私は【魔法】に縋るつもりはありません。」

そう言って、ランダル君の方を向き。

「さあランダル。一緒に、母さんの所に行きましょう。」

その言葉に、ランダル君は体をビクリと震わせました。

「…でも、俺、母ちゃんに捨てられて…」

「大丈夫です。全部、嘘だったんです。大丈夫です…母さんは、あなたの事を愛しています。」

「本当？本当なの…？母ちゃんは、俺を、捨て、てない、の？」

ランダル君は鼻をすすりながら、喋っていますね。

「さて、セルナ。」

「ん、どうした？」

今まで土下座をしていたセルナが、顔を上げます。

「そろそろ戻りますよ。ルビア達も待ちくたびれていると思います。」

「お、おい。ランダルは…」

「あの二人は、もう大丈夫です。」

図書館を出て、宿に向かいます。

家族というモノは、一度捨ててしまうと、二度と手に入れることはできませんからね。

だからこそ、貴く、儚く、愛しく、そして…

「羨ましい、ですね。」

「ん？なんか言ったか？」

「いえ…なんでもないです。そう言えば、セルナ。」

「どうした？」

「どうしてランダル君を…いえ、ランダル君の母親を助けたんです？」

「…さてな、俺にもわかんねえや。」

「…そうですか。」

「お、てめ、何笑ってんだよ！」

本心を隠すセルナに、つい…

「いえ、セルナも優しいんだな、と思いまして。」

セルナが何やら騒いでいますが…

「私は、セルナのそんなところが、大好きですよ。」

「す、好きって…」

セルナが狼狽していますね。

「さあ、急ぎますよ。ルビアが怒ったら、こんな小さい街なんて、一瞬で消し炭ですよ。」

「おま、恐ろしいこと言うんじゃねえよ！」

そう言いながら、ゆっくりと宿に向かいます。

今は、こんな平穏が嬉しいです。

神なんて、信じないことに決めていましたが…

ありがとうございます。

感謝しますよ。

神様。

## 第二十九話・人の夢は儚い、だからこそ夢なのです（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

とうとう登場しました【教団】という謎の組織。

はいはいよくあることです。

活動目的がイマイチ不明瞭ですね。

滅びてしまった古代文明とは！？

そして【教団】が発掘した、古代文明の【遺産】とは！？

色々な、謎という名の伏線を残し、次回以降へ続く！

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第三十話・大丈夫と言う人ほど、大丈夫ではありません（前書き）

はい、第三十話投稿いたしました。

これで、前期の投稿は、一区切りにしたいと思います。

なんてったってテストがありますから。

勉強をしないと、マジでヤヴァイのですよ。

夏休みは、実家にも戻りますし、執筆が出来たら不定期に更新、という事で…

詳細は、活動報告にでも。

さて、第三十話始まり始まり…

# 第三十話・大丈夫と言う人ほど、大丈夫ではありません

イーナこと伊那楓です。

昨日は忙しかったですね。

図書館から宿に戻ると、ルビアが素敵な仁王立ちをしていました。

どうも、置いていかれたからと御立腹だったようです。

セルナは、笑みを浮かべて仁王立ちをしているルビアを見た途端に、宿から飛び出してしまいました。

結局、私を真ん中にして、ルビアとリリウムが抱き着く形で寝ることになりました。

いえ、ルビアもリリウムも、泣きそうな顔をして、無言で私の目を覗きこんでくるんですよ？

なんだか、罪悪感が沸々と…

まあ、私が了承した途端に、二人とも私に抱き着いてきました。

しかし、私は見逃しませんでしたよ。

無邪気に抱き着いて喜んでいたリリウムとは違い、ルビアの口元は、新世界の神に成ろうとしている青年のように、歪んでいましたから。

…嵌めましたね、ルビア。

まあ、一緒に寝られなくて寂しいと言っていましたし、今日のお詫びも兼ねて、一緒に寝ることにしました。

セルナは、夕食前に戻ってきましたよ？

ルビアに見つかった途端に、どこかに連れていかれてしまいましたが…

気を失って、ルビアに担がれて戻ってきました。

夜になって寝ようとしたら、ルビアが私を持ち上げて、ベッドに連れてかれました。

ルビアはその間、ずっと笑顔でしたよ？

リリウムもベッドに潜り込んできて、私に抱き着いてきました。

まあ、こんな一日も悪くないと思いました。

閑話休題

おはようございます。

昨日の疲れも取れました。

それよりも、この二人は一晩中抱き着いていたんですかね？

「ん…お姉…ちゃ…」

「んん…イーナさ…」

そんな寝言を言いながら、もぞもぞと体を動かしています。

こら、変なところで手を動かさないでください。

「…おう、目ぇ覚めたか。」

そう言ったセルナの目の下には、隈が目立っています。

「どうしたんですか？隈なんて作って。」

「…いや、なんでもねえよ。寝れなかっただけだ。この街出んのは明日だろ？寝るから、何かあったら起こしてくれよ。」

そう言って、セルナはベッドに倒れて、寝息を立て始めました。

おかしなセルナですね？

「ん…お姉ちゃん…？どうした…の？」

「いえ、そろそろ起きますよ。今日は何をしましょうかね？」

「みんなと…お出かけしたい…」

「みんなとですか？それじゃあ、セルナとルビアが起きたら、街に

出てみましょう。」

「うん…」

心なしか、リリウムの声が強かったですね。

そう言えば、みんなで出かけるのは、初めてでしたね。

閑話休題

ルビアも起きたので、リリウムとルビアと私で、朝食を食べに来ました。

食堂には、まばらに【人間】が食事をしていました。

「おはようございます。ミシェルちゃん。」

「あ、イーナさん。おはようございます。」

ベルさんの手伝いをしていたミシェルちゃんに、挨拶をします。

「イーナさん、昨日は外に出てましたけど、大丈夫でしたか？」

「大丈夫？とはどういう事ですか？」

「いえ、それが…」

「こらミシェル！何を無駄話をしてんだい！」

朝食を配っていたベルさんが、ミシェルちゃんを叱りました。

「こんの忙しいのに…ってイーナちゃんかい。」

「はい、すみません。お忙しいのに、邪魔をしてしまって。」

「いーや、イーナちゃんは悪くないよ。ほら、朝食だよ。山は越えたから、ミシェルも終わりでいいよ。」

私たち三人分の朝食とミシェルちゃんの分を置いて、ベルさんが戻っていきました。

「じゃあ、食べちゃいましょうか。ほら、リリウムとルビアも。」

「はい、イーナさん。」

「うん…」

「あ、じゃあ私も一緒に食べちゃっていいですか？」

「ええ、構いませんよ。」

いただきます、と手を合わせ朝食を食べ始めました。

食事前の挨拶は大事ですよ？

リリウムとルビアも、いただきますと手を合わせ、食べ始めました。

ミシェルちゃんは、何やら不思議な顔をしていますね。

「あの、イーナさん。」

「はい、なんでしょうか？」

「その…手を合わせるのはなんでしょうか？」

「ああ、これですか。」

そういえば、この世界には手を合わせる習慣がないんでしたね。

「これは…まあ、お祈りみたいなものですよ。食べられることに感謝を…といったお祈りですね。」

「へぇ…そうなんですか。」

そう言って、ミシェルちゃんも手を合わせてから食べ始めました。

「そういえば、ミシェルちゃん。」

「むぐ…なんでしょう？」

「先ほど言いかけていたことですが、なんでしょうか？」

「そういえば…でも、食事中に話してもいいんですか？」

「構いませんよ。どんなに残酷で残虐で吐き気を催しそうな話でも、食事を残すことなんてありませんから。」

「それがですね…今日と昨日の早朝に、二日続けて道に怪我人が見つかったんですよ。」

「二日続けて怪我人、ですか？」

「はい、聞いた話なんですが、今日の人は、体中が剣で切られていて、見つかって間もなく死んでしまったらしいです。ですが、昨日の人は、目と喉を潰されて、両方の指が全部落とされて、脚の骨も折られて、短刀が何本も体に刺さっていて、でも、生きていたんですよ。何も見えず、喋れず、文字も書けなくて、結局犯人が誰かは分からなかったらしいですけど…」

「へえ、それは酷いですね。」

「…イーナさん、よく食べられますね？私、食欲無くなってきました…」

「それで、続きはあるんですか？」

「…その男性なんですが、今日になって突然消えてしまったらしいんですよ。脚の骨が折れていて、傷も深くて、一人じゃ動けるはずもないのに。」

「不思議なこともあるんですね。」

「街は噂で持ちきりですよ。ギルドも、目撃者を捜しているようなんですし、難航しているようですね。お客さんも言っていましたよ。『こんなことができるのは【亜人】くらいなもんだ』って。」

「…ふーん、そうなんですか。」

さて、リリウムとルビアも食べ終わったようですし、部屋に戻りますか。

「あれ、もう食べちゃったんですか？」

「はい、部屋に戻ります。セルナはまだ寝てるでしょうし、起きるのを待っていますよ。行きますよ、二人とも。」

まだ食事をしているミシェルちゃんを尻目に、部屋に戻ります。

セルナには、聞かないといけないこともできましたし。

数時間後
閑話休題

さて、セルナも起きたので、外出をする…つもりだったのですが。

「さて、どういう事か説明をしてもらえますか？」

「…」

「…それで、ルビアは？」

「すみませんでした…」

「はあ…」

セルナは黙っていて、ルビアは謝るばかり。

…埒があきませんね。

「…まあ、いいです。この街にいるのも明日までですし、今日は外に出て見て回りましょう。ほら、行きましょう。」

リリウムの手を取り、部屋を出ようとした時。

「イーナは！」

セルナが突然大声をあげました。

「イーナは！…俺が【人間】を殺したことを、追求しないのか！？」

まったく、何をいまさら…

「私が、何故セルナを追求するんですか？ギルドにでも報告するとでも思っていたんですか？」

「…」

「沈黙は金、と言いますが、ここでその選択は、鉄屑以下ですよ？」

「イーナさん…」

ルビアが、震える声で私を呼びます。

「セルナを、あまり責めないでください。私もですから…」

「そうだったんですか？」

「はい、私がイーナさんを見張って、セルナが撃退するって。私から提案したんです。イーナさん…昨日の夜に外に出ましたよね？私、遠くから見てたんですよ…」

あの時【レーダー】に反応はありませんでしたから、索敵範囲外からですか。

「その時のイーナさん…なんだか、とても、辛そうで…」

辛い、ですか。

「ルビアは【人間】を傷付けている私を見て、どう思いましたか？」

「…」

沈黙、ですか。

その時、リリウムの手に力が入りました。

「ほら、行きますよ？いつまでもこうしていたら、日が暮れてしまいます。」

「お姉ちゃん…」

リリウムが、心配そうに見つめてきます。

「大丈夫ですよ。リリウム。大丈夫、大丈夫です…」

私とリリウムが部屋を出ると、ルビアとセルナもついてきます。

「さて、何を買いましょうか？お金はたくさんあるんです。」

「お姉ちゃん…私…果物が欲しい…」

「もちろん、いいですよ。セルナは何がいいですか？」

「…そんじゃ、薬草の本。」

「本は、アムザイさんの所でいいですね。ルビアは？」

「私は…」

「歩きながら考えましょう。まだ着くまで時間はあります。」

大丈夫、大丈夫です。

だって、私は、もう…

## 第三十話・大丈夫と言う人ほど、大丈夫ではありません（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

主人公が第二十七話で起こした事の顛末が、少しだけ出てきました。

実際、殺さずに口を封じるには、文字を書けなくする為に指を切り落として、声を出せないように喉を潰せば十分だと思います。

…うん、恐ろしいね。

それでいて死んでいないと言う。

さて、あの男はどこに消えたのやら…

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第三十一話・白くて赤くて暖かいです（前書き）

はい、第三十一話投稿いたしました。

およそ一ヶ月ぶりの投稿となってしまいました。

夏休みをダラダラと過ごした結果がこれですよ。

後期は忙しくなりそうなので、前期同様な更新が出来なくなるかもしれませんが、その時はよろしくお願いします。

…そういえば、ユニークが４万突破していました。

それっと、第三十一話始まり始まり…

# 第三十一話・白くて赤くて暖かいです

リリウムだよ？

この名前はお姉ちゃんにつけてもらったんだ。

今日は、お姉ちゃん達と一緒にお出かけするんだよ？

でも、お母さんとお兄ちゃんが怖い顔してたの。

どうしてかな？

閑話休題

お姉ちゃんと手をつないで、市場に来たの。

お母さんとお兄ちゃんは、私たちの後ろで何か話してるけど…

「お姉ちゃん…あれ欲しい…」

私が指差したのは、赤くて粒々がついている小さい果物だよ？

「ラガリアですか？いいですよ。」

お姉ちゃんの袋の中に入ってたのを食べたけど、すっごくおいしか

ったの。

でも、私が袋に入ってた時に食べた、あの果物は嫌いなの。

なんだか、口の中がすっごく苦くて…

一人でいた時は、いろんな果物を食べてたけど、あんなに不味かったのは初めてだったんだよ?

でも、お姉ちゃんはおいしそうに食べてるの。

どうしてかな?

閑話休題

「それじゃあ、図書館に行きましょうか。」

私が欲しかった果物も買い終わって、次はお兄ちゃんの用事だよ?

「あの図書館は、もう閉めるらしいですから、不要な本も貰えるでしょうね。」

「そうなのか?」

「ええ、なにやら知り合いの【エルフ】のお爺さんの所に行くとかで。ランダル君とも、ここでお別れですね。」

ランダル君は、お兄ちゃんが助けた【人間】の男の子だよ？

でも、私の方がお姉さんなんだ。

えへん。

「…そうか。」

「母親もそこにいるらしいですし。これで、安心ですよ。」

「…そうだな。安心だ。」

そう言ったお兄ちゃんは、なんだか辛そうな顔をしていたの。

どうしたのかな？

「お母さん…お兄ちゃん…どうかしたのかな…？」

お母さんは息（ブレス）も吹ける【赤竜】なんだよ？

今は、擬態をして【人間】の姿になってるけど、竜に戻ったらすっごく強いんだよ？

でも、お姉ちゃんはもっとすっごく強いの。

私は、お姉ちゃんを助けたい、って思ったら、突然擬態ができたの。

でも、竜の姿に戻れなくなっちゃったの。

でも、お姉ちゃんと一緒だから、嬉しいな。

「んー。たぶん寂しいんだと思います。」

「寂しい…？」

「はい。リリウムちゃんもイーナさんと離れたら、寂しいでしょう？」

「うん…」

私は、お姉ちゃんと離れたら、また一人ぼっちになっちゃうから。

「それと同じだと思いますよ？セルナは、ああ見えて寂しがり屋ですから。」

「そうなんだ…」

俯いているお兄ちゃんに声をかけたの。

「お兄ちゃん…」

「ん…どうした。」

「お兄ちゃん…寂しいの…？」

「は…ば、バカ！さ、寂しくなんか…」

「おや、セルナ。ランダル君がいなくなって寂しいんですか？」

「そ、そんなことねーし！寂しくなんかねーし！むしろ清々したし！」

お姉ちゃんが声をかけたら、顔を赤くしながら言ってるの。

「まあ、いいです。もう図書館も見えてきましたし。そこでお別れにしましょうか。」

道の先には、ツタで覆われている建物があったの。

あれが図書館なのかな？

閑話休題

図書館の中は、なんだかカビ臭いにおいがしたの。

「それじゃ、セルナの欲しいのは薬草関連の本でしたね。聞いてきますから、待っていてください。」

そう言って、お姉ちゃんは奥に行っちゃったの。

「お母さん…抱っこ…」

「はいはい、リリウムちゃんは甘えん坊さんですね。」

寂しくなっちゃったから、お母さんに抱っこをねだったの。

お母さんは、暖かくて、いいにおいがして、安心するんだよ?

「よしよしです。」

「ん…」

お母さんが、頭を撫でてくれたの。

「まったく、お前らは仲がいいよな。てか【白竜】と【赤竜】って、そんなに仲がいいものなのか?」

「何を言っているんですセルナは。リリウムちゃんは、私の娘です。リリウムちゃんも、私の子どもになってくれるって言ってくれました。」

「そうなのか?」

お兄ちゃんが、私に確認してきたの。

ううう…恥ずかしいよぉ…

お姉ちゃんには、知られたくないな。

「うん…私は【白竜】だけど…お母さんはお母さんだよ…?」

「ふーん…で、何でお前らはイーナに連れ添ってんだ?」

なんで、って…

「お姉ちゃんが…私を助けてくれたからだよ…？」

「あいつがお前を助けた、ねぇ…」

「うん…そうだよ…？私が【人間】に襲われて…私は気を失っていたんだけど…気がついたら…お姉ちゃんが隣にいたの…」

あのとき、お姉ちゃんに助けてもらえなかったら、今ごろどうしてるのかな？

「そん時はまだ【白竜】だったんだろ？お前を襲ってたのって、やっぱり【人間】か？」

「うん…白いマントを着けてた【人間】だったよ…？」

「はぁ…やっぱりか。やっぱ【人間】ってのは――白いマントだぁ！？それって【Ｎｏ．】の証じゃねーか！…いや、まてよ。偽者って可能性は…」

お兄ちゃんが何か考え込んじゃったの。

「お母さん…お兄ちゃん…どうしたのかな…？」

「さあ？何か考え込んでるようです。まあ、そのうち元に戻りますよ。」

お母さんが、ギュってしてくれたの。

やっぱり、暖かくって、いいにおいがして、とっても安心するの。

お母さんは、小さい声で『至福です』って言ってるけど。

私は、みんなに出会えて幸せだよ。

閑話休題（数分後）

お姉ちゃんがランダル君と【人間】の男の人を連れてきて戻ってきたの。

「セルナ、図書館では静かにしましょうね。向こうまで響いてきましたよ。」

お兄ちゃんは、お姉ちゃんが持っていた本を頭に落とされて、目を回しているの。

「に、兄ちゃん…大丈夫か？」

「あ、ああ。大丈夫だ…」

頭を抱えながら、お兄ちゃんが体を起こしたの。

「おう、ランダル。元気だったか？おっ、なんか急に背が伸びたな。」

「…兄ちゃん、なんで父ちゃんの頭を撫でてんだよ。俺はこっちだぞ。」

お兄ちゃんが、男の人の頭を撫でてるの。

「こら、セルナ。アムザイさんの頭を撫でてどうするんですか。ランダル君は左ですよ。」

「んあ…わ、すみません！」

「いえいえ。ほら、ランダル。お世話になったんでしょう？お礼を言いなさい。」

「う、うん。」

ランダル君が、男の人に背中を押されて、前に出てきたの。

そうしたらお母さんに抱っこされたの。

「リリウムちゃん、私達には関係ありませんから、向こうに行っていましょうか。」

お母さんに抱っこされて、お姉ちゃんたちから離れたの。

やっぱり、お母さんは暖かいな。

そういえば、お姉ちゃんの【魔力】はお兄ちゃんともお母さんとも、違う味がしたけど…

## 第三十一話・白くて赤くて暖かいです（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

今回は【白竜】の視点です。

心の中では流暢に考えたりしてますね。

ほら、いきなり擬態をしたから上手く喋ることが出来ないんですよ。

あと、少年のこれからもちょっとだけ。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第三十二話・地図の見方は上が北で左が西です（前書き）

はい、第三十二話投稿いたしました。

前回から間が開いてしまい申し訳ありません。

それと、今回の後書きには、主要人物のイメージ画像やらが掲載されています。

あなたのイメージ像を崩壊させる可能性がありますので、ご注意ください。

まあ、一人だけですがね。

前書きを読んでいない方は…

ささっと、第三十二話始まり始まり…

## 第三十二話・地図の見方は上が北で左が西です

イーナこと伊那楓です。

そういえば、リリウムとルビアはどこに行ったんでしょうか。

姿が見えませんが…

「それでは、ありがとうございました。」

アムザイさんが私とセルナに頭を下げます。

「そういえば、二人はどこに行くんですか？あのお爺さんのところでしょうけど、どの辺りですか？」

【エルフ】のお爺さんは、手紙に書いてあると言っていましたが…

「ああ、それなんですが…」

そう言って見せられた手紙には…

「…地図、ですか？」

「はい【アプライド】周辺の地図ですね。それで…」

そう言って指をさした場所には、赤い丸が付けられていました。

「ここですね。印も付いていますし、間違いないです。」

「ここって、森の中ですよね？村かなにかですか？」

「実は、私も行ったことはないんですよ。あの人にも妻と一緒に随分前に一度会ったきりでして。」

「そうなんですか？」

再び地図に視線を落とし、

「あれ？ここって…イーナ、ちょっといいか。」

ランダル君と話していたセルナが横から地図を覗きこみ、私の耳に口を近づけて小声で言いました。

「あの場所って、あのゴーレムがいた場所じゃねえか？ほら、あの場所も【アプライド】の近くだったし…」

そう言われてみればそうですが…

「それだけで決めつけるのは早いですよ。まあ、また今度行くとしましょう。幸い、突破方法もわかっていますし。」

【魔力】にのみ反応するゴーレムには【霊力障壁】を大きめに展開して、反応されなくすればいいことはわかりましたから。

「アムザイさん、その場所に近づいたら気を付けたほうがいいですよ。【風属性魔法】で一気に突破したほうが賢明です。」

「え？それは一体？」

「危なかったですよ?爆発するゴーレムや、高速で移動するゴーレムがいましたよ。破壊しても再生しますから、一気に突破をしてくださいね。」

「…イーナさんは、そのゴーレムと?」

「もちろん、爆発で半径数メートルは木端微塵です。それに、もう一体のゴーレムには、殴られてしまいました。」

「大丈夫だったんですか!?」

「ええ、ちょっとした怪我だったので、すぐに治りましたよ。」

「そ、そうなんですか…しかし、爆発するゴーレムと高速移動するゴーレム…ふふ、興味が惹かれますね。」

アムザイさんが、なんだかマッドな笑みを浮かべています。

「こうしてはいられません。ランダル行きますよ。」

そう言ってアムザイさんがランダル君の腕をとりました。

「それでは、ありがとうございました。それで、この図書館の本なんですが…」

アムザイさんは図書館の中を一瞥したあとに。

「差し上げます。このまま本を腐らせておくのも、勿体ないですから。」

「本当ですか？では、適当に貰っていきますね。」

「それと、この図書館も差し上げます。【魔法陣】で防犯も施していますから、安全面はバッチリです。この鍵で解除しない限り【魔法陣】が起動します。」

そう言って懐から赤い鍵を取り出しました。

「防犯ですか？」

「はい、この図書館を開いてから、寝ている間に何度か泥棒が入ってしまいまして。さすがに頭にきたのでつくったんですよ。」

【魔法陣】ってそう簡単につくれるものなんですかね？

「実は、あの本を見つけた時の【魔法陣】を参考につくったので、強すぎるのが玉に瑕ですがね。」

「一瞬見ただけの【魔法陣】を再現したんですか？」

「ええ、大まかな形は覚えていたので、一週間程度で完成しました。しかし所々欠けていてちょっと改良を加えたので、私の時とは少し威力が落ちていますが…」

…威力が落ちているのに、強すぎるんですか？

「いやー、我ながら凄まじいものをつくってしまいました。普通の人が直撃したら一瞬で消し炭ですよ。まあ、この建物の裏口や窓に仕掛けたので、夜中に侵入しようとしなければ起動することは――」

バン！ダダダダ！ドン！グガァーン！

何かが撃たれたような、爆発したような、崩れたような音が轟き、図書館全体が激しく揺れました。

「…そういえば【魔法陣】を切り忘れていたような気が…」

「…まあ、見に行きましょうか。」

さて、誰がかかったのやら…

閑話休題

「イーナさーん！痛かったです！すっごく痛かったです！」

かかったのはルビアでした。

そして裏口の周りは爆心地の如く大穴が空いていました。

裏口も崩れてしまっています。

「…こりゃ酷いな。つかアムザイさん、こんなのを個人でつくったんすか？」

セルナも呆れたように、呆然と言いました。

「…出力設定を間違っていましたかね？少し火傷をする程度に抑えていたんですけど…」

「何かおかしな事とかはなかったんですか？」

「いえ、調整機は書庫にありましたし、今日は特に何も…あ。」

「何か心当たりが？」

「実は…本棚の近くに調整機があったんですが、セルナさんに蹴られた時にそれに突っ込んだ気が…」

ああ、セルナがドロップキックをした時ですか。

「それにしても…」

ルビアの服は所々焦げて穴が空き、髪も所々焦げています。

果たして、これだけの傷で済むルビアが凄いのか【赤竜】であるルビアに傷を負わせた【魔法陣】が凄いのかわかりませんね。

「イーナさーん！」

ルビアが私に抱き着いてきました。

「ほら、これを塗ってください。火傷ならすぐに治りますから。」

ルビアに渡したのは、ロエの樹液から採った火傷によく効く軟膏です。

樹液から採った軟膏は火傷全般や軽い傷などに、実を食べれば風邪にも効くと、ちょっとした万能薬といっても過言ではないです。

「うう…ヒリヒリします…」

ルビアがそう言いながら腕に軟膏を塗っています。

「ところで、何があったんですか？」

「はい…リリウムちゃんと外に出てきたら、おかしな【魔力】を感じたので、近づいたとたんに…」

例の【魔法陣】ですかね。

「リリウムちゃんを庇ったら、まともに受けてしまって…あの壁ごと壊しちゃったんですけど…」

やっぱり、壊したのはルビアでしたか…

「まあ、そのことは気にしなくてもいいんですがね。」

どうやら軽傷のようなので大丈夫ですね。

「あ、あのイーナさん…」

「はい？どうしましたか？」

アムザイさんが私に話しかけてきました。

「あの、どうしてその女性は無事なんでしょうか？あの【魔法陣】の出力だと人一人を消し炭にするはずなんですが…」

「ああ、その辺りは気にしないでください。あなたの言っているのは、あくまでも【人間】を一人でしょう？」

「…彼女は【人間】じゃないとでも？」

「さて、どうなんでしょうね？」

わざわざ教える義理もありませんし、教えるつもりもありませんよ。

「…まあ、いいです。それでは私たちはそろそろ【アプライド】に向かいますよ。向こうにも興味が惹かれました。」

そう言って、手に出してきました。

「私たちは、明日にでもこの街を発って【アナリティカ】に向かうつもりでしたが…まあ、当分は図書館に住ませてもらいますよ。」

私はその手を握り、握手をしました。

「お姉ちゃん…お母さん大丈夫…なの？」

「ええ、薬も渡したので、すぐに治るかと――」

「イーナさーん！」

私がリリウムに返した途端に、ルビアがとびついてきました。

体格の差もあって、ルビアに押し倒される形になってしまいましたね。

「イーナさぁん…」

なんだか、ルビアの息が荒いんですけど…

「イーナさぁん…痛かったんですよぉ…」

そう言ったルビアの目には、涙が浮かんでいました。

「はいはい…」

抱きついてきたルビアの背中を、ポンポンと慰めるように叩きます。

今まで傷を負わされたことがなかったのでしょうね。

それだけに、さっきの出来事がショックなのでしょう。

「まったく、ルビアはリリウムの母親なんでしょう?リリウムが泣いていないのにルビアが泣いては示しがつきませんよ?」

「でも…」

「ほら、わかったらどいてください。服が汚れてしまいます。」

「はい…」

「ああ、それとルビアの服も買いに行きましょう。そんなボロボロの服では嫌でしょう?」

そう言うと、ルビアが立ち上がりました。

「すみません…イーナさん…」

「いえ、謝らなくてもいいんですよ。気にしてませんから。」

「はい…」

さて、この街に洋服屋はあるんでしょうかね？

まあ、あとでアムザイさんに聞いてみますか。

閑話休題

「兄ちゃーん！俺、でかくなったら、兄ちゃんの弟子にしてもらうからー！」

「おーう！期待しないで待ってるぞー！」

そう言って、ランダル君はアムザイさんに手を引かれて、街を去っていきました。

「さて、弟子の弟子ということは、私にとっては孫弟子ですかね？」

「おいイーナ。俺の弟子だからな。お前にゃ手を出させねえからな。

」

「ええ、当然ですよ。でも、下手なことを教えられても困りますから、これからは一層厳しくやっていきましょうね。」

私が笑みを浮かべると、なんだかセルナが怯えた表情をしました。

「い、いや…それはちょっとなぁ…」

「まあ、当分の住居はありますし、落ち着いて勉強に励むことができますね。森もすぐそばにありますし、ちょうどいいでしょう。」

「また…実験台になるのか…」

そう言ってセルナはガックリと項垂れました。

む、失礼ですね。

「実験台とは、薬などの効能や施術などの効果が判明していない時に、人体実験をする時に使う言葉です。私は、セルナを実験台にした覚えはありませんよ。」

まったく、失礼な物言いです。

「あ、ああそうなのか…ん？じゃあ、今まで俺がされてきたことってなんなんだ？」

「やっぱり、知識だけではわからないことも多いですからね。実際に見てみないと。」

「…やっぱり実験台じゃねーか！」

「いえいえ、私はあくまで致死量以下に投与して、毒への免疫をつけることも目的にしていましたからね。決して実験台ではありません。」

「…もって言ったよな。もって。それ以外には何があんだよ。」

「まあまあ、セルナが私に会ってから、毎日のように食事に毒を混ぜていましたからね。少しずつ多く混ぜていたので、大体の毒は網羅したと思いますよ。」

「…それは初耳だな。おい、どんな毒を混ぜてたんだよ。」

「知りたいですか？」

ニッコリとした微笑みをセルナに向けると、急に黙ってしまいました。

「…いや、いいや。そういや、あの時から寝込んだりする日があったっけな…」

「さて、リリウムたちも図書館で待っていますから行きましょうか。ついでに今日の夕食の材料も買いましょうかね。」

「おういいぞ。何にすんだ？」

「さあ、何がいいですかね。道すがら考えましょうか。」

私は何でもいいんですが、リリウムたちにはしっかりしたものを食

べさせないといけませんからね。

もう夕暮れも近いので、市場がにぎわってきています。

「それでは、行きましょうか。」

さて、当面の間はこの街にいることになりそうですね。

まあ、それもいいでしょう。

それよりも、あの二人の無事でも祈りましょうかね。

けど、祈る対象なんてこの世界には存在しませんが…

## 第三十二話・地図の見方は上が北で左が西です（後書き）

さて、ここで再度の注意です。

後書きに掲載されているイメージ画像は、あなたの中のイメージを粉砕してしまう可能性があります。

あと、ネタバレもあったりするかもね。

ご了承いただけたら、先にお進みください。

名前・イーナ（伊那楓）

種族・人間

年齢・２０以上

性別・女

身長・小学４年生程

体重・小学４年生程

＞ｉ３０３２８―３８９４＜

キャラクターなんとか機を使用させていただきました。

雰囲気・顔に表情が出ることが少なく、無表情であることが多い

その他・軽度の方向音痴　重度の高所恐怖症　完全な味覚障害

来歴・【地球】で神様の部下に殺され、紆余曲折を経て異世界である【ケミスト】に神様からＡＣ４の能力や世界の知識を貰い転生した。
西の【アナリティカ】国内の街である【グラブス】の森の中で目が覚めた。
当面の目的は【ケミスト】を見て周ること。

## 第三十三話・お金は天下のまわりものです（前書き）

はい、第三十三話投稿いたしました。

今回の後書きにも主要人物のイメージ画像が掲載されています。

あと、これからの更新については一週間で一度になってしまうかもです。

木曜日か月曜日のどちらか固定になるかもですね。

詳しくはまた後日に活動報告で…

さあ、第三十三話始まり始まり…

# 第三十三話・お金は天下のまわりものです

こんにちは。

イーナこと伊那楓です。

先日、アムザイさんから図書館を頂いてから早くも一週間が経ちました。

この一週間は、リリウムの欲しがった果物を買ったり、ルビアの服を買ったり、セルナに薬草についてを教えたり、忙しい毎日でした。

さて、その結果ですが…

「セルナ、ちょっといいですか？」

「ん、どーした？イーナ。」

私が出した課題をこなしていたセルナが、手を止めてこちらに来ました。

「セルナ…ちょっと話があります。」

「ど、どーした？そんな深刻そうな声を出して。」

なんだかセルナが怯えていますね。

「実はですね…」

「実は…？」

セルナが顔を近づけて、言葉を反復しました。

「…お金が、ありません。」

「…は？」

「お金がありません。ちっとも、少しも、ほとんど、まったくありません。」

「いや、金が無いのはわかったから。」

そうなんですよ。

ルビアの服を買ったら、ついでだからと言って、ルビアが選んだ全員分の服を買うことになってしまいました。

それも大量にです。

まあ、今まで来ていた服も汚れてきていたので、丁度いいとも思ったんですけど。

「で、金が無いからって、それをなんで俺に言うんだよ。」

「だって、セルナもギルドに登録をしているでしょう？この頃体も動かしていませんし、運動と実益を兼ねて依頼を受けようかと。」

「いや、そんなことをしなくても作った薬を売れば…」

「今まで馴染みの無かった物が受け入れられるようになるには、何かのきっかけが必要です。どんなに効果があろうと、初めて見る薬を買ってくれるはずがありません。」

「まあ、それもそうだが…」

「今セルナが調合している薬は、確か解熱鎮痛剤でしたね。確かに、市販されている薬と比べて効果は段違いです。しかし、セルナが知っている薬とは全然違うでしょう?」

「まあ、な…」

この世界でいう薬とは、薬草やキノコを乾燥させ、それを粉末にしてから水に溶かして飲んだり、すり潰して患部に塗布するのが一般的です。

比べてセルナが作っている薬は、薬草から成分を抽出し、それを粉末にした物です。

「こんな白い薬なんて、誰も呑みたがりませんよ。こればかりは仕方ありません。」

それにしても、本当に【魔法】というものは便利ですね。

面倒な設備や工程が必要ありませんから。

まあ、私は薬を売るつもりはありませんでしたから構いませんがね。

セルナはどうするんですかね?

「そういや、ルビアたちはどうしたんだ？」

「ルビアはリリウムと一緒にお昼寝です。書置きを残していくので、心配はいりませんよ。」

「そうか、んじゃ行くか。ギルドも久しぶりだしな。それで、お前はギルドに登録してんのか？」

「ええ、もちろん登録していますよ。まあ、依頼は数回ほどしか受けていませんがね。」

「そうなのか？んじゃ、ギルドの先輩として俺がよく教えてやるよ。これでもな、専属ギルド員にスカウトされたんだぜ。」

「へぇ、それはなかなかの腕前だったんですね。では、今回の依頼はセルナが決めてくださいね。」

「いいのか？」

「ええ、もちろんです。では、そろそろ行きましょうか。リリウムとルビアが起きてしまいます。」

「ああ、そうだな。」

ギルドも久しぶりですね。

たしか【アンヴィーラ】で依頼を受けて以来でしたかね。

さて、図書館から十分ほどでギルドに到着しました。

【アンヴィーラ】のギルドと比べると、少し小さめですね。

「ここがこの街のギルドらしいですね。」

「…なんか【オーガニー】のギルドと比べると小せえな。」

「それはそうですよ。この街はあの国ほど大きくありませんし、そもそもあんなに大きいギルドは数えるほどしかありませんよ。」

「まあいいか。んじゃ入ろうぜ。どんな依頼があるかも見たいしな。」

そう言って、セルナがギルドの中に入っていきました。

と、思ったら出てきました。

「どうかしましたか？セルナ？」

「…ちょっと聞くが、ここって街のギルドだよな？」

「ええ、ここは【グラブス】ですよ。【アナリティカ】までは徒歩でおよそ3日【アンヴィーラ】までは徒歩でおよそ6日ほどの位置にありますね。」

「…うん、だよな。」

何をしているんでしょうか。

早く入ればいいですのに。

何か考え込んでいるセルナを置いて、私はギルドの扉を開けて中に入りました。

ギルドの中には…

「なるほど、セルナが逃げ出すわけですね。」

依頼板の前にはたくさんの人集まっていて、カウンターの前には更にたくさんの人が集まっていました。

この街にしては、やたらと人が多いですね。

「混んでますね。どうかしたんでしょうか?」

まあ、私には関係ないですが。

「ではセルナ、依頼を選んできてくださいね?」

「ええ!?俺があん中に行くのかよ!?」

「あの人混みだと、私では入れませんし、でもセルナなら大丈夫でしょう。」

「はぁ…わかったよ。選んでくるからな。」

「では、よろしくお願いしますね。」

そしてセルナは人混みに向かっていきました。

さて、何をしていましょうか。

「あれ？あなたは…」

そんな声が聞こえ、後ろを振り向くと…

「やっぱり、久しぶりね。【アンヴィーラ】で会って以来かしら。」

「あなたは…ああ、あの時にチームに誘った。」

そこにいたのは【アンヴィーラ】で私をチームに誘った女性でした。

「あなたも【緑竜】の討伐に参加するの？」

【緑竜】の討伐ですか？

「一週間前くらい前からこの街の周辺で【緑竜】が確認されてるのよ。それがこの街に近づいてきているから。それで緊急に依頼が出ているのよ。」

「緊急といっても、一週間も前から依頼があるんでしょう？もう誰かが討伐を…」

「いえ、あの依頼板の前にいるのはただの野次馬よ。まあ、私も【アナリティカ】のギルドで依頼を受けて、この街に来たんだけどね。

」

「あなたが受けた、討伐する自信が？」

「ええ、それは勿論よ。これでも【Ｎｏ．１２】で【ルシャトリエ】のリーダーなのよ？」

【ルシャトリエ】ですか？

どこかで聞いた気がしますが…

「あれ？もしかして聞いたことない？これでも有名だって自負してるんだけど…」

そうなんですかね？

「おい…依頼取ってきたぞ…」

そう言って紙を渡してきたセルナは、髪がボサボサ、服がボロボロでした。

依頼を確認すると…

「ああ、ご苦労様です。…さて、それでは行きましょうか。それにしても、セルナも強気ですね。」

「は？何言ってんだ。テキトーに取ってきたんだが…」

「内容を確認しないで取ったんですか。まあ、いいですけどね。」

セルナに紙を渡すと、セルナの顔が真っ青になりました。

「は…？【緑竜】の討伐…？」

「さあ、早く行きましょう。探すのにも時間がかかりますし、夕方までには――」

「いやいやいや！待て待て待て！」

うるさいですね。

「どうしたんですか？」

「やっぱ無しだ！ダメだろこれは！」

「別にいいじゃはないですか。それに…」

セルナの耳に口を近づけて言いました。

「この【緑竜】は、海にいた【緑竜】かもしれません。一度会って、話してみるのもいいでしょう。」

「いや【緑竜】と話せるわけ…ああ、ルビアたちは竜だったっけな。」

「ええ、擬態ができるかもしれませんからね。まあ、できなかったらその時に考えますよ。」

「…まあいいか。」

そして、ギルドを出ようとすると。

「あなた、その【亜人】とチームを組んでるの？」

【ルシャトリエ】のリーダーの女性が声をかけてきました。

その顔には侮蔑と嘲笑が浮かんでいました。

「ああ？なんだてめぇは？」

「そんな【亜人】となんて組まないで、やっぱり私たちのチームに入らない？」

「いいえ【ルシャトリエ】なんていうチームには入りませんよ。そういうのは…苦手ですし。」

そう言った途端に、今までざわついていたギルド内が一斉に静まりました。

「お、おいイーナ。い、いま【ルシャトリエ】って言ったか？」

「ええ、知っているんですか？」

「はぁ…お前は何にも知らねえんだな。いいか【ルシャトリエ】ってチームはな――――」

「ああ、別に構いませんよ。特に興味はありませんから。」

なんだか、ギルドの静けさが耳に痛いですね。

「それはそうと、行きますよ。セルナが受けた【緑竜】の討伐もありますし。」

そう言った途端に、ギルド内に笑い声が響き渡りました。

『ハッハッハ！あんなガキと【亜人】が【緑竜】を！」

『自殺行為だな…【緑竜】を討伐するなんて…』

それ以外にも、私だけに限らずセルナに対する暴言も聞こえてきました。

「【亜人】が…【人間】といっしょにいるだけで汚らしいのよ！」

「んだとてめぇ！」

セルナがリーダーの女性に掴み掛りました。

「【亜人】は！粗暴で！乱暴で！暴力的だから嫌いなのよ！」

それを女性が【魔法】で弾き飛ばしました。

「あっちい！何しやがる！」

「なに？私はただ自分の身を守っただけよ。非難されるのは、あなたのほうよ。」

周りを見渡すと、迷惑そうな、汚いものを見るかのような視線がセルナに集まっています。

「はぁ、まったく…ほら、行きますよセルナ。」

私はセルナの手を引き、ギルドを後にします。

ギルドの出口の扉に手をかけると、リーダーの女性から声をかけられました。

「あなたも【人間】なんでしょ!?なんでそんな【亜人】と!」

何を言うかと思えば…

「いえ、私は人間です。生憎とそういうものに興味がないので…」

「あなた…いつか恨みを買うわよ。」

「ふふ…そういうものにも興味がないので…」

恨みを買われたら相手をするだけですし。

閑話休題

「どうしたんですか?さっきから黙りっぱなしですよ?」

ギルドを出てからずっとセルナが黙っています。

「…いや、やっぱ【亜人】ってのは嫌われてんだなぁって…」

「ああ、さっきのことですか。」

「やっぱり、お前は他の【人間】とは違うな。【オーガニー】でも俺と母さんを助けてくれたしな。」

「いえ…ただ【人間】が信じられないだけですよ。」

「お前も【人間】だろ？それなのに…」

「私は【亜人】にはセルナにしか出会っていません。それでも、これまでに見た【人間】よりも、純粋で、真面目で、どこまでも優しいです。」

「過大評価をしすぎだな、そりゃ…」

「いえ、私個人のセルナに対しての評価です。その辺の【人間】よりも、よほど信頼ができます。」

「ハハ…そりゃうれしいね。」

「さて、森に行きましょう。あの…なんでしたっけ？」

「いや、忘れんなよ。【ルシャトリエ】だよ。」

「ああ、そうでした。彼女のチームも【緑竜】討伐に行くらしいですよ。」

「はぁ？あのチームもかよ！？」

「そうらしいですよ。まあ【緑竜】がそう簡単に討伐されるとは思えませんが…」

「ああ…それなんだがな…【ルシャトリエ】ってチームはな【Ｎｏ．１２】の…あの女を筆頭にな、バランスよく【魔法】を使う奴が揃ってんだよ。そんで有名になった理由なんだがな。」

セルナがなんだかためらうように言いました。

「えっとな…竜を倒してんだよ。」

「竜…ですか？」

「ああ、たしか【白竜】だったか？【ベルクマン】とか【ヘス】とか色々と組んで討伐してたな。」

【白竜】…？

「どんくらい前だったっけ？んー…確かイーナに会うちょっと前だったっけな。【アンヴィーラ】の近くで【白竜】が現れて――」

「セルナ。」

「ん？どうし…た。」

「その話は、絶対にリリウムとルビアの前では話さないでくださいね。」

「わ、わかった。」

「さあ、それでは行きましょう。少し無駄話が過ぎました。」

「あ、ああ。あいつらに先を越されるのも癪だしな。」

そうして門に向けて歩き出しました。

しかし【白竜】を討伐した、ですか…

まさか、とは思いますが…

## 第三十三話・お金は天下のまわりものです（後書き）

さて、ここで再度の注意です。

後書きに掲載されているイメージ画像は、あなたの中のイメージを粉砕してしまう可能性があります。

その辺りをご了承のうえで先にお進みください。

名前・リリウム

種族・【白竜】

年齢・人間換算で１０歳程度

性別・女

身長・小学３年生程

体重・小学３年生程

＞ｉ３０８５２―３８９４＜

キャラクターなんとか機を使用させていただきました。

雰囲気・笑顔が似合う可愛い女の子

その他・言葉が上手く喋れない

来歴・【グラブス】周辺でイーナと出会い、助けられイーナの頭の

上を定位置とした。
【コーラル】の一件から【赤竜】であるルビアを母親と慕うようになった。
【オーガニー】で出会ったセルナを兄と呼んでいる。
【アプライド】の一件でイーナを治した時に擬態をしてから解除ができなくなり、以後は人間の姿で生活をしている。
目的は特になく、イーナたちと一緒にいられればいいと思っている。

## 第三十四話・緑色は目に良いと言います（前書き）

はい、第三十四話投稿いたしました。

今回の後書きにも、またまた主要人物のイメージ画像が掲載されています。

イメージ画像掲載も、あと数えるほどです。

まあ、服は時々変わっている、ということでお願いします。

よし、第三十四話始まり始まり…

# 第三十四話・緑色は目に良いと言います

おう、セルナ・マーグナーだ。

森ってのはいいな。

なんて言うか、街や国よりも空気がいいな。

それに、薬草とか毒草とかキノコとかの薬の材料もあるしな。

それにしても…

「ほらルビア、エドデにテミシアです。今日の夕食に使いましょうか。それにヴァーナです。ちょうど調合していましたし、これも採っていきましょう。」

なんか、イーナが生き生きしてんな。

いや、何となくなんだがな。

「おいイーナ、薬草とかも大事だがな、目的は【緑竜】の討伐だろ？こんな所で道草食っててていいのか？」

こんな所で道草なんて食ってたら、あいつらに先を越されちまう。

「いいんですよ。越されたら越されたで、別に構いませんから。」

はぁ…まったく、こいつの考えることはよく分かんねーな。

「それに、あのチームと鉢合わせたら面倒な事になりそうですし。そう言えば何人のチームなんですか？」

「ああ、あのチームは…確か5人編成だったな。あの【Ｎｏ．１２】がリーダーで、あとの４人は中々の手練れらしいぞ。」

確か【Ｎｏ．１２】が上級の【火属性魔法】を中心に使って、周りの奴らがほかの属性の【魔法】を補完してるんだっけな。

「そのチームと他のチームで【白竜】を討伐したという触れ込みでしたよね？」

「もっとも、あの程度で【緑竜】が討伐できるとは思えませんが…」

「は？どういう事だそりゃ。」

「だってそうでしょう？【Ｎｏ．】が何人か集まって、チームが何組も団結して、ようやく【白竜】を討伐できる程度なんでしょう？今回の討伐は、自信過剰の自意識過剰の思い上がりですよ。」

「…いや、それは言いすぎだろ。」

「いえ、今までに得た情報をまとめて、自分なりに解釈しただけです。別に、セルナが考えを変えなくてもいいんですよ。夢を見るのは個人の自由ですから。」

そう言って、イーナはまた採取を始めた。

はあ…もういいか。

俺も採取しよ。

閑話休題

採取を始めてもう一時間にもなるな。

「なあイーナ。そろそろ【緑竜】を探し始めてもいいんじゃねえか？あいつらも探してるだろうし。」

「放っておいてもいいんですが…まあ、薬草もたくさん集まりましたし、そろそろ――」

「あ！ようやく見つけたわよ！」

茂みの中から、ガサガサと音を立てて一人の女が姿を現した。

緑色の髪に緑色の目をした、男なら惹かれそうな容姿をしてんな。

…なんか、似たような奴に毎日会ってる気がすんな。

「あの時の恨み！晴らさせてもらうわよ！」

そう言った途端に、女の周りに歪んだような透明な塊が現れた。

【風属性魔法】か！？

しかも、あの密度――――！

「消えなさい！【人間】が！」

その塊がイーナに当たり、一気に爆発した。

風が吹き荒れ、木が薙ぎ倒され、地面が吹き飛び目が開けてらんねえ。

「いってえ…」

くそ、なんとか踏ん張ったが…

「イーナ！無事か！？」

「ええ、何ともないですよ。それよりも、セルナは離れて隠れていてください。狙いは私のようなので。」

なんか平然としてるし、それよりも…

「お前が狙いって、なんか心当たりは――――」

「何を喋ってるのよ！そんな暇ないわよ！」

ガガガガガ！

と歪んだ塊が地面に無数に突き刺さり、その地点が爆発していく。

てか、さっきから何の詠唱もしてねえぞ！？

なんなんだよ、あの【魔法】は!?

「ふん!【亜人】なんかに用はないのよ。用があるのは…そこの【人間】だけよ!」

そう言って、ビシッとイーナを指差した。

「ふむ…私に恨み、と言いましたが。あなたはあの時の【緑竜】で間違いないですか?」

「もちろんよ!あんたに恨みを晴らすためにここまで来たのよ!ちょっと時間はかかったけど…見つけたから関係ないわ!ここが年貢の仕舞い時よ!」

いや、あの女【緑竜】かよ!?

そういや、ルビアと同じような感じがしたしな、それよりも…

「…なあ、ちょっといいか?」

「なによ【亜人】」

「さっきは年貢の仕舞い時って言ってたけど、そこは年貢の納め時じゃねえのか?」

少し【緑竜】が沈黙した。

「…う、うるさいわね!【亜人】が口答えしてんじゃないわよ!」

「うお!あぶね!」

【緑竜】が歪んだ塊を投げつけてきた。

何とか避けれたが、木に当たった途端に木端微塵になった。

だから、なんなんだよあれは!?

「ふぅ…私としたことが、ついカッとなっちゃったわ。つい言い間違えるなんてね。」

こっちはいい迷惑だ!

「恨みがある、と言いましたがどうすれば恨みが晴れるんですか?」

「ふん!決まってるじゃないの!」

そう言って、またイーナをビシッと指差した。

「あんたを同じ目に合わせれば気が済むのよ!だから…おとなしくやられなさい!」

イーナを中心に広範囲に歪んだ塊が突き刺さり、地面が木端微塵に吹き飛んだ。

そして、まだ砂埃が舞っている中、甲高い音と共に青白い光線が【緑竜】に放たれた。

「まったく、危ない【魔法】を使うものですね。私じゃなかったら即死ですよ?」

そう言ったイーナの手には、あの時の【魔具】が握られていた。

あの後に聞いたら、こと座の星が何とか言ってたが…

「くっ！この前もそうだったけど、卑怯よ！正々堂々と近づいて戦いなさい！」

お前が言えることでもねえだろ！

「まあ、いいじゃないですか。あなたの【魔力障壁】もなかなかにずるいですから。」

まあ、前に見た風みたいなあの【魔力障壁】は、イーナのあの変な【魔具】の攻撃を逸らしてたしな。

「うぐっ…じゃあ、私は飛ばないわ。あなた【人間】なんだから、飛べないでしょう？これだけでも十分ハンデでしょ？」

「まあ、別に構いませんよ。では、私は近づいて正々堂々と戦う、ということで。」

そう言ったイーナは【魔具】を消して、板みたいな薄い【魔具】を取り出した。

なんだありゃ？

「ふん！そんなおかしな物で私を――――ッ！」

「また避けますか。反応速度は上々ですね。」

数メートルはあったイーナと【緑竜】の距離は一瞬の内に縮まり、左腕につけていた【魔具】で殴りつけていた。

【緑竜】は紙一重で避けたが、イーナの【魔具】が木に当たり、緑色の閃光が場を支配した。

は？

いつの間に移動したんだよ。

てか、なんなんだよあいつの持ってる【魔具】は。

当たった木が枯れてんぞ。

「くっ…危ないわね！てか何よ！その速さは！」

「まあ、いいじゃないですか。あなたもあんな【魔法】を使っているんですから。」

確かにな、あいつの【魔法】も何かに当たったら木端微塵になるし。

「あたしの【魔法】が効かないんだから！あんたもそんな【魔法】使うんじゃないわよ！」

「いえいえ、私は【魔法】なんて使えませんし、使っていませんよ？」

「嘘言ってんじゃないわよ！あたしの【魔法】が効かないなんて、どんな【魔法】を使ってんのよ！」

「だから【魔法】なんて使ってないですよ。」

【緑竜】もそうだが、イーナも大概だな。

あの【魔法】を受けても無傷だし、あの【魔具】は無駄に強いし。

やけに知識はあるけど、背は小せえし。

まったく、なんなんだよあいつは。

貴族…とかじゃねえよな。

あいつ、自分のことはあんまり話さねえからな。

そんなことを考えているうちに【緑竜】が歪んだ塊を操ってイーナを狙い、それをイーナは回避してる。

流れ弾が！流れ弾があぶねえ！

「おいイーナ！あぶねえだろ！もうちょっと考えろ！」

「はあ…だから離れていろと言ったんですがね。まあ、いいです。そろそろ終わらせます。」

「はっ！私がやられるわけ――――」

「油断大敵、ですね。」

今まですぐそこにいたイーナが【緑竜】の背後に現れ、あの【魔具】を【緑竜】に直撃させた。

イーナと【緑竜】が緑色の閃光で包まれ、光が消えたと思ったら【緑竜】が倒れていた。

だから、いつの間にそこに行ったんだよ！

まさか…【転移魔法】なわけないよな。

あんな【魔法】個人がどうこうできるもんじゃないし…

「な…どうして…」

「背後は生き物にとって最大の死角ですよ。狙うのなら、まずそこですよ。」

「で、でもどうやって…」

「まあ、いいじゃないですか。そんなこと。でも、まだ意識があるんですね。さすがは【緑竜】です。」

「ぐ…」

ふう…終わったか？

「イーナ、もういいか？」

「ええ、終わりました。もう出てきて大丈夫ですよ。」

さっきまでは気づかなかったが、イーナと【緑竜】の周りは、木々は薙ぎ倒され地面はあちこち抉れていた。

「いや、さすがにこれはやりすぎだろ。」

「む、失礼ですね。私じゃないですよ。全部あの人の仕業ですよ。」

まあ、確かにそうか。

「で、どうする？この【緑竜】をもってけば…」

「まだよ！あたしはまだ負けてないわ！」

「まったく…どうしたら負けを認めるんですか？もう立てないでしょう？」

「くっそ…！あたしが！あたしが死ぬまでは負けじゃないわ！」

はぁ…なに言ってんだこいつは…

負けず嫌いにも程があんだろ。

俺が【緑竜】に呆れているときに、何となく背筋に悪寒が走った。

「へえ…」

イーナが持っていた【魔具】を消して、また変な【魔具】を出した。

あれは…杭か？

先端が尖った杭がついた【魔具】？

そんなのなんの為に…

「では、そうしましょう。」

そう言い、倒れている【緑竜】に接近し【魔具】で殴りつけた。

「――――ッ！」

【緑竜】はそれを紙一重で避け、地面に直撃した。

そうすると

ドゴンッ！

という轟音と共に、数メートルはあろう大穴が空いた。

「な、なにするのよ！危ないじゃない！」

「なんです？死ねば終わるんでしょう？死ねば負けなんでしょう？早く死にたいんでしょう？」

「な、なにを…」

「死ねばいい。死ねばいいんですよ。死ねば。」

イーナの声には、何の感情も籠っていなかった。

まるで、どこか別の場所を見ているような、何も見えていないような、そんな声だった。

「げぶっ…あああっ！」

イーナの【魔具】が直撃し【緑竜】の体が吹き飛んだ。

「げ…はぁっ！はぁっ！あん…た…！」

【緑竜】の口から血が溢れて、まともに喋れてない。

「ぐ…げっ！はっ！」

【緑竜】が体を引きずりながら、森の奥に逃げようとしている。

「何をしているんです？逃がしませんよ？」

イーナの【魔具】が消え、また新しい【魔具】を出した。

その【魔具】を【緑竜】に向けると

プシュッ！

という音と共に【緑竜】の腹から血が噴き出していた。

「は…？あ…」

信じられない物を見たような声をだし、力が抜けたように【緑竜】が倒れ伏した。

なんだありゃ…何も見えなかったぞ。

イーナが倒れている【緑竜】に近づいて、無言で【緑竜】を見てる。

「セルナ、知っていますか？」

唐突に俺の名前を呼んだ。

「…なんだよ。」

イーナが袋から短剣を取り出した。

その短剣を弄んで。

「生き物は、首を落とせば死ぬんですよ？」

そう言って、イーナは――

「死ね。」

――短剣を、振り下ろした。

## 第三十四話・緑色は目に良いと言います（後書き）

さて、ここで通算三回目の注意です。

後書きに掲載されているイメージ画像は、あなたの中のイメージを粉微塵にしてしまう可能性があります。

その辺りをご了承のうえで先にお進みください。

名前・ルビア

種族・【赤竜】

年齢・人間換算で２０歳を超えた辺り

性別・女

身長・モデル並みに高い

体重・身長不相応に軽い

＞ｉ３０８８８―３８９４＜

キャラクターなんとか機を使用させていただきました。

雰囲気・大人の魅力が漂う綺麗なお姉さん

その他・イーナとリリウムとセルナ以外には、基本的に無関心

【コーラル】の一件で息子を【人間】に殺され、以後はリリウムを

娘として愛している。
【オーガニー】で出会ったセルナは、出会った当初は犬猿の仲だった。
しかし【アプライド】の一件でイーナが怪我を負った際に、セルナへの認識を改め、以後は喧嘩仲間のようになっている。
目的は特にないが、イーナを溺愛し、リリウムに愛情を注ぎ、セルナと喧嘩をする日常を楽しく思っている。

## 第三十五話・お茶を飲むと心が落ち着きます（前書き）

はい、第三十五話投稿いたしました。

今回の後書きにも、四度目の主要人物のイメージ画像が掲載されています。

そこん所をよろしくです。

ちなみに、登場人物の服の色は、その人物のイメージカラー的なものです。

さあーてと、第三十五話始まり始まり…

## 第三十五話・お茶を飲むと心が落ち着きます

おう、セルナ・マーグナーだ。

さっきまでイーナと【緑竜】が戦っていて、辺りは圧巻の光景だな。

そんな中、目の前では短剣が振り下ろされようとしている。

くそ…間に合うか。

【身体強化】で脚力を底上げし、イーナに近づく。

「死ね。」

その言葉と共に、短剣が振り下ろされた。

間に合え…！

「…なんのつもりですか？セルナ。」

いってえ…

なんとか、間に合ったか。

短剣が【緑竜】の喉元に当たるか当たらないかの所で防ぐことができた。

「悪いな。俺は薬師志望なんだ。俺の目の前で怪我してる奴がいるんだからな。どんな奴だろうと、放っておけないんだよ。」

まあ、所詮自己満足だし、無理なことも多い。
でも、手の届く距離。目に入る範囲にいる奴だけは助けてやりたいんだよ

「ふう…まあ、いいですよ。もう興味もありません。」

そう言って短剣を袋にしまった。

さて…

倒れている【緑竜】を見る。

腹から血が流れ、破れている服から見える肌は青ざめている。

骨が折れてるか、内臓に傷があるかもな。

イーナのあの【魔具】の仕業か…

「おい、袋貸せ。」

「はいはい。」

イーナから袋を渡され、袋から取り出したのは、ナロティの葉とフィルマを混ぜ合わせたものだ。

ナロティの鎮痛作用と、フィルマの回復促進作用で、こういった傷にはよく効くはずだ。

とりあえず、外傷はこれで。

それと…

「中級魔法【ヒーリング】」

【緑竜】の傷口に青い光が集まり、傷口が少しずつ治っていく。

【水属性魔法】の【ヒーリング】で外傷共々内傷も治していく。

でも、この回復系の【魔法】はかなり【魔力】を消耗するからな。

長時間維持することなんて、それこそ【Ｎｏ．２】でもないと不可能だ。

まあ【Ｎｏ．２】なら、致命傷すらもあっという間に完治できるだろうけどな。

「よし…なんとか治ってきたか…」

薬の作用もあったのか、それとも【緑竜】だからなのか、そこまで【魔力】を消耗せずに治すことができた。

腹の痣も消え、傷跡が残っているが、開いた穴は塞がっている。

「ふう…終わりか…」

さて、これで【緑竜】が起きるのを待つだけだ。

しかし、久しぶりに【魔法】を使ったな。

使わなきゃ使わないで、特に不便でもないな。

数分後
閑話休題

「ん…んん…」

お、やっと起きたか。

「あ、あれ…あたし…」

「おう、起きたな。」

「――――ッ！」

【緑竜】が体を跳ね上げ、俺とイーナから距離を取り、恨みが籠った目でこちらを見てくる。

「まあ落ち着け。これ飲んだら落ち着くぞ。」

そう言って【緑竜】に渡したのは、テミシアの葉を乾燥させてお湯で煮だしたものだ。

これは、以前イーナが作ったものを飲ませてもらい、気に入ったから少し分けてもらった。

なんかルビアと一緒にテミシアの葉を火であぶったり、炒ったりしてたな。

イーナが自分の住んでいたところでは、こういうのを飲む習慣があるとか言ってたが、そんなの聞いたことねえし。

…まあ、美味いからいいか。

イーナも気に入ったのか、毎日のようにこれを飲んでいるしな。

「毒なんて入ってねえよ。入れる意味もねえしな。」

お茶を怪しげな視線で見ていたので、一応言っておいた。

「いや、これ何よ。なんだかいい匂いがするけど…」

「ああ、お茶ってやつだ。飲んでみりゃわかる。」

怪しげな目こちらに向けながら、お茶を飲み…

「な、何よ！これは！」

「気に入らなかったか？んじゃこっちを…」

そう言って袋から別のお茶を出そうとすると…

「この芳醇な香り！すっきりとした味わい！そして後に残らず諄くない渋味！」

「は？」

「今まで水を飲んでたあたしがバカみたいじゃない！」

ゴクゴクグビグビと喉を鳴らせながら、まだ熱いはずのお茶を飲みほした。

「うん！美味しかったわ！もう一杯！」

「いや、別にいいけどな…」

空いたカップにお茶を注ぐと、それも喉を鳴らして飲みほした。

「ふう、美味しかったわ…もう一杯！」

「もうねえよ。」

まったく、俺とイーナの分もあったのに、全部飲みほしちまった。

「仕方ないわね…って！あんたその手どうしたのよ！」

「手って…ああ、そういや忘れてたな。こんなん薬草つけときゃ治る。」

そういえば、イーナの短剣を止めた時の傷を忘れてたな。

とりあえず薬草を…

「セルナ、これを塗っておいてください。すぐに治りますから。」

イーナが懐からガラス筒を取り出し、俺に投げてきた。

中には緑色の液体が入っている。

「なんだ、これ？」

「いろんな薬草を混ぜたものです。効果は保証しますよ。」

「…ま、一応つけとくよ。」

「ええ、そうしてください。傷を放っておくと、面倒な病気にもなりますから。」

まったく、さっきこの薬を渡してくれれば、楽だっただろうに…

「で、お前がここ最近その辺りの村を荒らしてる【緑竜】だろ？」

ギルドで受け取った紙を再度確認すると、一週間ほど前から村を襲っている【緑竜】を討伐してほしいというものだ。

やっぱりこいつが…

「は？あたし知らないわよ？」

…は？

「だ、だってあたし、その【人間】に落とされて、ずっと海ん中にいたのよ。で、やっと昨日目が覚めて、騒ぎになるとまずいから【人間】に擬態して探してて…」

この女の…【緑竜】の仕業じゃないのか？

「どういうことだ？イーナ。」

「もう一匹いますね。」

「いやいや、確かに【魔獣】はやたらといるがな、竜っつったら【魔獣】に頂点だぞ？それがそうポンポンと――――」

ベキベキベキ！ガガガガガ！ドドドドド！ズズン！

木が薙ぎ倒されるような、地面を削るような音が響き、地響きが轟いた。

「うわ…まさか、この音って…」

「多分【緑竜】の仕業ですね。その他にも、何体かの生き物がいます。」

何体かの生き物って…【探知魔法】も使えんのかよ。

こいつは、底が知れねえな。

ちなみに、俺は【魔法】は独学で学んだんでな、基本的な【属性魔法】以外は使えない。

「それでは、行きましょうか。依頼も完遂できることですし。」

そう言って、イーナは先に行ってしまった。

「ふう…で、お前はどうするんだ？もうあいつと戦う気もねえだろ

？」

「…ついてくわ。あの…お茶だっけ？気に入ったし、また飲みたいしね。」

「そか、んじゃ――――」

その時、嫌な予感が体を過った。

なんとなく、この【緑竜】がついてくることに対して背筋に悪寒が走った。

「どうしたのよ。さっさと行くわよ。」

「…あ、ああ。さっさと行くか。置いて行かれちまうしな。」

…気のせい、だよな？

とりあえず、今は向こうの【緑竜】だな。

## 第三十五話・お茶を飲むと心が落ち着きます（後書き）

さあ、第四回目の警告です。

後書きに掲載されているイメージ画像は、あなたの中のイメージを木端微塵にしてしまう可能性があります。

その辺りをご了承のうえで先にお進みください。

名前・セルナ・マーグナー

種族・猫の【亜人】

年齢・１７歳程

性別・女

身長・高校３年生程

体重・身長相応の体重

＞ｉ３０８８９―３８９４＜

キャラクターなんとか機を使用させていただきました。

雰囲気・一見すると、男のようにも見える

その他・基本的に男物の服を着用

来歴・【オーガニー】周辺でイーナと出会い、何でも入れることが

できる袋を盗み、逃走。
袋を高値で貴族に売りつけた後、家に押しかけたイーナに母親の病状を明かされ、母親の最期を看取る。
その後、薬を売った店を潰しに出向くが、既に潰された後だった。
【アプライド】の一件で【魔法】の無力さを痛感し、以後回復に特化した【水属性魔法】を鍛錬しながら、薬草を中心に学んでいる。
目的は母親のような者を出さないようにする為に、薬の知識を身に着けること。
そのため、イーナの下で目下勉強中。

## 第三十六話・飛行機には騒音がつきものです（前書き）

はい、第三十六話投稿いたしました。

レポート祭りだワッショイワッショイっと…

いやー、休みがあっても無いようなもので、忙しいですね。

相も変わらず死にもの狂いです。

まあ、小説の更新は週一でやっていけるとは思いますが…

ひっふー、第三十六話始まり始まり…

## 第三十六話・飛行機には騒音がつきものです

どうも、イーナこと伊那楓です。

【レーダー】で位置を確認しつつ【緑竜】がいると思しき場所に向かっています。

距離的には、２ｋｍも離れていないかと思います。

しかし【魔獣】の頂点である竜とこんなに遭遇するなんて、何か呪われているんですかね？

個体数も少ないハズなんですが…

「おいイーナ！速い！もっと速度落とせ！」

ああ【霊力突進】を発動していましたね。

そういえば、ここ最近【霊力浮遊】や【霊力急進】や【霊力突進】の出力が全般的に上がってきてるんですよね。

【霊力浮遊】で最高時速２００ｋｍ程【霊力急進】の瞬間最高速度が時速５００ｋｍ程【霊力突進】も最高時速５００ｋｍ程ですね。

それに【レーダー】の範囲もさらに広がってきています。

…やっぱり、慣れでしょうかね？

でも、よくついて来れましたね。

「ハァ…ハァ…つ、疲れた。お前は…なんで疲れてねえんだよ…？」

「まあ、疲れるようなことはしていませんから。それと…その【緑竜】はなんなんですか？」

その【緑竜】は、さんざん痛めつけたハズなんですが…

まだ足りないんでしょうか？

「ああ、こいつな。お前の作った…お茶だっけ？あれをえらく気に入ってな、また飲みたいんだと。」

そう言ったセルナの背中に張り付くように【緑竜】がおり、こちらを睨んでいました。

「ふ、ふん！別にあなたが怖いわけじゃないんだからね！ただこの【亜人】の背中が暖かくて…って！何言わせんのよ！」

そう言った【緑竜】がセルナの頭を叩きました。

「いてえ！」

パシーンといい音が響きました。

「まあ、どうでもいいですがね。」

さて、図書館に戻ったらどうなるか…

さあ、目標地点に着いたわけですが…

「うぇ…なんだこりゃ…」

「確かにね…これは…」

辺り一面は血飛沫、肉片、杖や服の切れ端、そして緑は赤く染まり、地は血に塗れています。

恐らく、先に来ていた【ルシャトリエ】のメンバーでしょうね。

「ふむ…なかなかに圧巻な光景ですね。」

まあ、そんなことはさて置いて…

「さて、件の【緑竜】はどこでしょうか?」

あるのは【人間】の面影を残さない肉塊ばかりで【緑竜】がいた痕跡は、抉れた地面、倒れた木々、そして【人間】だった肉塊のみです。

「…お前は何とも思わねえのか?同じ【人間】だろ?」

「はい?死んだ【人間】なんて、ただの肉の塊でしょう?そんなものに、何の感慨も浮かびませんよ。」

「な!?お前――――」

「なんて、冗談ですよ。」

「――――は?」

「まったく、そんな素っ頓狂な声を出して、私がそんな【人間】だと思っていましたか?無感情で無感動で無表情で冷酷な、そんな【人間】だと思っていたんですか?」

「そ、そうだよな。たまに変人で、たまに言動がおかしくて、たまに変な物を作るし、変な【魔具】も持ってるけど、普通の【人間】だよな。そうだよな、冗談だよな。」

「ええ、冗談ですよ。冗談です。あと、街に戻ったら課題を出しますから。」

「そ、それも冗談――――」

「いえ、純然たる事実です。よかったですね。薬草を採取しておいて。たくさん薬を作れますよ。」

それを聞いた途端に、セルナが崩れ落ち、手と膝を地面につきました。

まったく、そんなに落ち込まなくてもいいでしょうに。

でも、無感情で無感動で無表情で冷徹な【人間】ですか…

本当に、冗談ですよ。

私は、そんな【人間】ではありません。

「さてセルナ、そんなことをしてる暇はないですよ。」

「そんなことって…お前な…」

つい先ほどから【レーダー】に高速で接近中の物体があります。

「さあ、来ますよ。耳を塞いでください。」

上空を一瞬だけ緑色の物体が横切り、視界の外に消えていきました。

「な、なんだありゃ――――」

その直後、轟音と共に突風が殺到しました。

突風により木々が倒れています。

それにしても、衝撃波（ソニックブーム）ですか。

「はぁ…なにしてんのよ。あんた【亜人】でしょ？このくらい踏ん張りなさいよ。」

「――――ッ！無茶言うな！あんなの踏ん張れるか！」

後ろから聞こえる声に振り向くと、セルナの腕を【緑竜】が掴み、吹き飛ばされないようにしていました。

「あー…耳が痛い…なんだよありゃ…」

「さっき【緑竜】が高速で飛行をしていました。その衝撃波みたいなものですよ。それに、こちらに気付いたみたいですね。戻ってきます。」

離れていったはずの【緑竜】が急旋回しこちらに向かってきているのが【レーダー】で確認できます。

「お出ましです。では、始めましょうか。」

とりあえず、出すのはレールガンと、こと座のα星の名前を模した高出力レーザーライフルです。

そうして咆哮と共に降り立ったのは…

「近くで見ると、案外大きいものですね。」

「いや、なんでそんなに落ち着いてんだよ…てかうるせーな。」

全長十数メートルはあろう巨大な【緑竜】が姿を現しました。

以前海で見た【緑竜】よりも大きいですね。

「うわ…なんであいつがいるのよ…」

こちらにいる【緑竜】は、向こうの【緑竜】のことを知っているらしいですね。

「知ってんのか?…って同じ【緑竜】だよな。お前の知り合いか?」

「あー…あたしの結婚相手――」

「はぁ!?」

「――だった奴よ。」

「…だった、ってなんだよ。だったって。てか、お前がここにいるから、あの【緑竜】も追ってきたんじゃねえのか?」

「ふん!あたしより弱い奴になんて興味はないのよ!大体ね、あたしに負けたから【人間】なんて襲ってたのよ?バッカじゃないの?あいつ。」

「…てことは、イーナには興味ありってことか。」

「んなわけないでしょ!バカ!」

【緑竜】がセルナの頭を叩きました。

さっきまで殺し合いをしていたのに、二人は仲がいいですね。

それにしても…

「【緑竜】一つ聞きます。」

「な、なによ?」

「あの【緑竜】は、憂さ晴らしに【人間】を襲っていた。それは本当ですか?」

「え、ええ。さっき大声で鳴いてたでしょ。あいつ【人間】を何人殺したとか、いくつ村を襲ってたとかをあたしに自慢してたのよ。」

「ふぅん…」

「ま、そんなんであたしの気を引こうとしたみたいだけど…無駄な足掻きね。あたしに負けた時点で、もう興味なんてないのよ。」

【緑竜】がそう言った途端…

「グギャアアァァァ！」

と咆哮を上げ、その攻撃を【緑竜】に向け――

「うるさいわね。その口、閉じときなさいよ。」

【緑竜】の手が握られた途端に、宙に浮いていた【緑竜】が地面にめり込みました。

「は…？お前、何したんだ？」

「別に、ただあいつを押しつぶしただけよ。でも、やっぱり【人間】に擬態してちゃ上手く【魔法】が使えないわね。」

そう言って【緑竜】が指を弾くと、地面にめり込んでいる【緑竜】に四方八方から歪んだ塊が殺到しました。

しかし【緑竜】にはあまり傷が付いていませんね。

どうやら【緑竜】独特の風の【魔力障壁】が、威力を弱めているようですね。

「まったく、面倒ね。ま、このまま続けてればその内――」

とりあえず、左腕に持っていたレーザーライフルを放ちました。

「な、なにするのよ！まさか…あいつに同情してるつもり？」

まあ、当てるつもりはなかったので、レーザーはあさっての方向に向かっていきました。

「別にそこの【緑竜】の味方をしているわけではありませんよ。そのままあなたに任せると、グチャグチャになってしまって、討伐した証拠を持っていくことができませんから。」

あのまま押しつぶすと【緑竜】がミンチになり、歪んだ塊が効けば粉微塵に消滅してしまいます。

これが依頼でなければ、そのまま放っておいてもいいんですがね。

「ところでセルナ。どの部位を、どの位持っていけばいいんですかね？」

「あ、ああ、ちょっと待て…えっと、牙やら爪やら鱗やら骨やらがあるが…特にどの位持ってけばいいのかは書いてねえな。」

「ああ、それなら簡単ですね。」

とりあえず、飛べないようにレールガンで【緑竜】の翼を撃ち抜き

ます。

なにやら【緑竜】が甲高い鳴き声を上げました。

「そういう時は、文句を言われないように全部を持っていけばいいんですよ。」

レールガンとレーザーライフルをしまい、出したのは射突型ブレードです。

【緑竜】が無様な体勢で、風の息（ブレス）を吐いてきますが【霊力障壁】に阻まれ、私には届きません。

倒れている【緑竜】に、ゆっくりと近づきます。

「生きることは命を奪うことです。それはどうしようもありませんし、咎めるつもりはありません。でも、あなたは自分の憂さ晴らしに、無関係の【人間】を、殺した。」

そして、この射突型ブレードなら【魔力障壁】が有ろうと無かろうと関係ありません。

「まあ、あなたを殺しても、死んだ【人間】が戻ってくるわけでもありませんが…」

悪あがきのように、風の息（ブレス）を放ってきます。

いくら貫通に優れた風の【魔法】だろうと【霊力障壁】に減衰され、私に届くのは僅かなそよ風のみです。

無駄だとわかっているはずなのに…

「哀れですね。まあ、同情はしませんけど。」

【緑竜】に最接近すると、前肢を振り上げ私を押しつぶそうとします。

「最後の抵抗ですか。」

振り下ろされた腕を【霊力急進】で避け、射突型ブレードを腕に打ちつけます。

【緑竜】の腕の肉が吹き飛び、骨が露わになりました。

「さて、終わりですね。」

倒れた【緑竜】の頭に【霊力急進】で近づきます。

なにやら、恐ろしいものでも見たかのような目の色をしていますね。

まあ、どうでもいいですけど。

「さようなら。」

射突型ブレードが【緑竜】の頭を吹き飛ばしました。

## 第三十六話・飛行機には騒音がつきものです（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

主要人物紹介のためのイメージ画像も掲載終了し…

いや、まだあるかもしれませんがね。

この後書きを書くのも、およそ一か月ぶりですね。

まあ、それはともかく。

主人公は別に【人間】の味方でも【緑竜】の味方でもありません。

かと言って【人間】の敵でも【緑竜】の敵でもありません。

さて、主人公は誰の味方で誰の敵なのか…

そんなことより【緑竜】が結婚相手だったと言っていましたが、それは後々明らかになる予定です。

ご期待せずにお待ちください。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第三十七話・楽しい時間はあっという間に過ぎ去ります（前書き）

はい、第三十七話投稿いたしました。

さて、タイトルにある通り、楽しい時間はあっという間に過ぎ去ります。

それとは逆に、面倒な時間は長々と続きます。

これって、よくあることですよね？

いえー、第三十七話始まり始まり…

## 第三十七話・楽しい時間はあっという間に過ぎ去ります

「ん…ふぁ…」

うん、リリウムだよ？

お母さんとお昼寝していたんだけど、なんだか目が覚めちゃったの。

「お母さん…」

お母さんの体を揺さぶっても、スヤスヤ眠ってて起きてくれないの。

「お母さん…起きてよ…」

「んー…イーナさ…ムフフ…セル…邪魔で…」

いくら揺さぶっても起きないの。

お姉ちゃんとお兄ちゃんの夢でも見てるのかな？

お姉ちゃんは本を読んでて、お兄ちゃんはお薬を作ってて、お母さんはお姉ちゃんのお手伝いをしてるの。

私も、お姉ちゃんのお手伝いをしてるの。

お姉ちゃんの作ってくれたお茶、また飲みたいな。

一回だけお兄ちゃんのお手伝いもしたんだけど、薬草を間違えて渡しちゃったり、落としちゃったりで、邪魔をしちゃったの。

お兄ちゃんは苦笑いをしてたけど、そのあと頭を撫でてくれたんだ。

みんなリリウムに優しくしてくれるんだよ？

「そうだ…お姉ちゃん…」

お姉ちゃんはいつも隣の部屋で本を読んでて、リリウムが傍に行くと頭を撫でてくれるの。

お姉ちゃんに撫でてもらうと、なんだか胸がポカポカするの。

「あれ…お姉ちゃん…？」

扉を開けたら、部屋の中には誰もいなかったの。

いろんな部屋を探したけど、お姉ちゃんとお兄ちゃんがどこにもいなかったの。

どこに行ったのかな？

「お外かな…？」

お姉ちゃんとお兄ちゃんとお母さんは、お買い物でお外に出ているけど、リリウムだけでお外に出た事はないの。

「そうだ…」

お母さんも眠ってるし、起きるまでに戻ってくればわからないよね？

うん、そうしよう。

お姉ちゃんが作ってくれたカバンもあるし、お金も少し持たせてくれたから、何かあったら買ってみるの。

閑話休題

いっぱい【人間】が歩いてるの。

それに、いろんな食べ物が置いてあるの。

お姉ちゃんたちが言ってた、市場なのかな？

「おや、見ない顔だけど、お使いかい？」

【人間】の間を歩いていると【人間】の男の人に声をかけられたの。

「ううん…お姉ちゃんに…」

「おお、そうかい。で、ここは果物が専門だけど、お姉さんは果物が好きなのかい？」

「うん…えっと…」

お姉ちゃんがよく食べてた果物…？

「アルモ…？」

「あ、アルモかい？それはここには売ってないな…そうだ！確か…ほら、見えるだろ？あの青い屋根の建物。」

【人間】のおじさんが指をさした方を見ると、でっかい青い屋根が見えたの。

「あそこは、ここよりももっと大きい店だから、きっとアルモもあるよ。」

「ありがと…【人間】のおじさん…」

お姉ちゃんに、お礼は大事って教わったの。

挨拶さえしておけば、何事も円滑に進むって…

「ハハハ…まあいいよ。今度は、ここの果物もよろしくな。」

そう言われて、青い屋根に向かって歩いたの。

それにしても【人間】が多いの。

お母さんと、一緒に来ればよかったの…

閑話休題

扉を開くと、きれいな鈴の音が鳴ったの。
お店の中には、前にお姉ちゃんの袋の中で食べた果物がたくさんあったの。
それに、カウンターには【人間】の男の子が座っていたの。
「はい、らっしゃ…ってなんだ、ガキかよ。」
男の子に、なんだか失礼なことを言われたの。
「あなたも…私と同じくらい…だよ…？」
「う、うるせ！まったく、これだからガキは…」
そう言って男の子が、こっちに近づいてきたの。
「で、何の果物が欲しいんだ？いろんなのがあるが、おすすめはこの…」
男の子が持ったのは、丸い真っ赤な果物だったの。
「エイプレってのだな。ちょうど今の季節が旬だし…４個２０００Ｓだな。」
「うん…わかった…」
お姉ちゃんにも食べてもらおうと思って、私がカバンからお金を出そうとすると…

「わー！待て待て待て！冗談だ！」

なんだか、男の子が慌ててるの。

「どうしたの…？」

「だから冗談だって！４個で７００Ｓだ！悪かったよ。ごめん。」

「うん…いいよ…」

お姉ちゃんにも、謝られたら許せ、って言われたの。

でも、あんまり酷ければ許すな、とも言われたの。

「で、何を探してんだ？ニベアか？ラガリアか？それとも――――」

「アルモ…」

「あ、アルモか？なんだってそんなのを。」

「お姉ちゃんが…好きなの…」

この頃は食べてる所を見てないけど、お姉ちゃんはあの果物が好きなはずなの。

「いや、まあ。あるにはあるけど…ホントに食うのか？」

「うん…お姉ちゃんは…おいしそうに…食べる…よ…？」

「ふぅん…お前の姉ちゃん、おかしいんだな。」

「おかしい…？」

「ああ、あんなくそまずい果物を、好んで食べるなんて、よっぽどの変人か、味覚のおかし――――」

「お姉ちゃんは…優しいよ…おかしくなんて…ない…」

そんな言葉を聞いたら、体が勝手に動いちゃったの。

「お姉ちゃんは…おかしくない…優しくて…強くて…それで…」

「ちょ、はなせ…！苦し――――」

「お姉ちゃんは…おかしくなんて…おかしくなんて…！」

「悪かった！ごめん！謝るから！離してくれ！」

「分かった…」

ついカッとなって、男の子を首を絞めちゃったの。

でも、酷いことを言ったから、いいと思うの。

「お姉ちゃんは…私の…大切な人…だよ…酷いことを…言ったら…許さない…」

「あ、ああ。悪かった。…で、アルモだったな。えっと…ああ、これだな。５個で２００Ｓだ。両方で９００Ｓだ。」

「うん…これ…」

９００Ｓって、高いのかな、安いのかな？

「んじゃ…ほらよ。エイプレとアルモ。それじゃ、また来いよ。」

「ん…それじゃ…」

扉を開けると、きれいな鈴の音がまた響いたの。

お姉ちゃんはもうちょっとこの街にいるみたいだけど、どうなのかな？

閑話休題

図書館に戻る途中で、おっきい広場を見つけたの。

木陰が涼しそうだったから、ちょっと休んでから図書館に戻ろうと思ったの。

「ちょっとだけ…」

今日買ったエイプレの味見をしようと思ったの。

でも、アルモは食べないの。

「ん…おいし…」

噛んだら、新鮮な音がして、甘酸っぱい味がしたの。

ちょっと酸味が強いけど、うん、おいしい。

お姉ちゃんも、喜んでくれるかな？

「ふぁ…」

エイプレを食べ終わって少ししたら、なんだか、眠くなってきちゃった…

いつもより早く起きちゃったからかな？

「ん…む…」

少しだけ、眠ってもいいよね？

少しだけ、少しだけ…

閑話休題

ゆらゆらと、揺れる感覚で目が覚めたの。

目を開けると黒い髪があって、匂いを嗅ぐといいにおいがするの。

嗅ぎ慣れた、落ち着くにおい。

「ん…お姉ちゃん…？」

「目が覚めましたか？リリウム。」

「あれ…ここ…どこ…？」

周りを見ると、木がいっぱいだったの。

「もうすぐ街に着きますからね。眠かったら、眠っててもいいんですよ？」

「ううん…眠く…ない…」

今は、お姉ちゃんの温もりを、少しでも感じていたいから。

お姉ちゃんの首に回っている手に力を入れて、ギュッってしたの。

「こら、苦しいですよ。」

「ごめんなさい…」

「ふふ、いいですよ。落ちないように、しっかり掴まっていてくださいね。」

「うん…」

ゆっくり、ゆっくりと。

こんな時間がずっと続けばいいな…

# 第三十七話・楽しい時間はあっという間に過ぎ去ります（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

今回のラスト付近で【白竜】が街の外に居た理由ですが…

何も考えずに書いているわけじゃありませんよ？

書いて、投稿してから、続きを考えているわけじゃないですからね？

ほ、本当ですよ。

…多分。

それと、今回登場した少年ですが…

モブです。

それと、妙に背伸びしたい年頃ってあるじゃないですか。

ちょうどそんな年頃だったんですよ。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第三十八話・金は決して錆びません（前書き）

はい、第三十八話投稿いたしました。

そういえば、ふと思ったんですが、この「」の最後に句読点っていらないんですかね？

まあ、修正も面倒なので、直すつもりはありませんがね。

これも個性ってことで。

文章の基本？

こまけえこたぁいいんだよ！

そーれ、第三十八話始まり始まり…

# 第三十八話・金は決して錆びません

おう、セルナ・マーグナーだ。

なんだかんだで、ようやく街に戻ってこれた。

しっかし、疲れた。

戻る途中で、擬態した【緑竜】になんやかんやイーナについて聞かれたし。

てか、イーナの事なんてほとんど知らねえよ。

小さな村の出身だとか、無駄に強いだとか、変な【魔具】をいくつも持ってるとかしかな。

それに、イーナは【緑竜】を討伐して、先に帰っちまった。

つまり、俺がギルドまで報告に行けってことか。

てか…

「どうすっかなぁ…」

「なに悩んでんのよ。それ持ってけば、その【Ｎｏ．】になるんでしょ？楽でいいじゃない。楽で。」

今問題なのは、手に持っている【Ｎｏ．１２】のカードだ。

血溜まりから見つけたせいで、所々が赤く染まっている。

イーナはどうにも【Ｎｏ．】には興味がないらしいし。

これを持ってきゃ、俺も【Ｎｏ．１２】になれるし、イーナも好きにしていいと言ってたし、隣を歩いている【緑竜】も持っていけばいいと言ってるが…

「やっぱり、ダメだよなぁ…」

【火属性魔法】を使って、カードを焼やした。

「ちょ…あんた何してんのよ！せっかくのチャンスなんでしょ！？なんで燃やしちゃうのよ！？」

【緑竜】がそんなことを言ってくる。

「いいんだよ。実力があるわけでもないし、あっても邪魔なだけだ。」

特に【亜人】ってだけで襲撃してくる輩もいるしな。

分不相応な【Ｎｏ．】を持ってても、あいつらに迷惑をかけちまう。

「ふぅん…あんたも色々考えてんのね。」

「まあ、俺も薬について教えてもらうために、イーナに同行してるんだ。」

それだけじゃなくて、この街に来て、図書館で一緒に暮らして。

イーナが本を読んでて、ルビアと口喧嘩をして、リリウムが薬作りを手伝って失敗をして。

時々呆れて、時々怪我をして、時々苦笑いをして。

でも、それが楽しかったんだよ。

「俺にはイーナみたいな【魔具】も無けりゃ、ルビアみたいな力もないし、リリウムみたいに可愛くもない。」

自分でも分かってるさ、俺は平々凡々な【亜人】だってことくらい。

「でもな…いや、だからこそ。あいつらが怪我をした時くらいは俺を頼ってほしいんだよ。」

イーナには【水属性魔法】で回復させることは出来ないし、リリウムはまだ子どもで、ルビアは…まあ、大丈夫だけど。

俺にしかできないことが、一つくらいあってもいいんじゃないか？

傷つけた【人間】を助けても、傷ついた【亜人】を助けても、倒れている【エルフ】を助けても、所詮は偽善で慈善だけどな。

でも、一緒に暮らしてる、そうだな…【家族】を助けるのは、偽善でも慈善でもない。

「へぇ…あんた、やっぱり優しいのね。」

「いーや。俺はただの臆病者で【人間】一人助けられない、ただの

【亜人】だよ。」

イーナと出会ってなけりゃ…

いや、もしもの話なんて、考えても仕方ないか。

「ふぅん…で、そのルビアとリリウムって誰よ。」

突然に【緑竜】がそんなことを聞いてきた。

なんか声に抑揚が無かったけど。

「ん？言ってなかったか？お前と同じ――」

「あたしと同じ！？女！？女なのね！？」

「いや、まあそうだけど。お前と同じりゅ――」

「りゅ！？りゅって何よ！ごまかす気なの！？まさか…この…！」

【緑竜】が腕を大きく振りかぶった。

「え、ちょ、ま――」

「うわきものー！」

瞬間、腹に途轍もない衝撃が走った。

ああ…俺も飛べたんだな…

上級の【風属性魔法】は使えなかったんだけどな…

閑話休題

「本当に、死ぬかと思った…」

「だからゴメンって言ってるでしょ！まったく…」

「いや、謝って済む問題じゃねえよ、こっちがまったくだよ。まったく…」

結局、あの後激痛に悶えながらルビアが誰とか、リリウムが誰とかを説明した。

【緑竜】は驚いてたけどな。

「でも、あの時の【赤竜】が…もう、ホントにあの【人間】は何者なのよ。」

「俺に聞くな、本人に聞けよ。」

「…や、やっぱりいいわ。触らないなら【人間】に撃たれることもないわね。」

まあ、俺も気になってたし、今度聞いてみるか。

そんな話をしながら街道を進み、ようやくギルドに到着した。

「やっと着いたな。まったく、誰かのせいで時間がかかっちまった。」

「う、うるさいわね！あんたがちゃんと説明しないからよ！」

説明しようとしたら殴られたんだが…

「まあ、それはもういいや。あと…一つ注意な。」

「ん、なによ？」

「殺すなよ？」

「は？何言ってんのよ。」

「お前のあの【魔法】な。普通の【人間】にゃ見えないし、避けれないし、当たったら木端微塵だからな。自重しろよ。」

【緑竜】の肩に手を置き、真摯に頼んだ。

いや、ホントにこの【緑竜】は邪魔だからってあの【魔法】で皆殺しにしかねないからな。

「わ、わかったわよ。誰も殺さないから安心しなさい。てか、顔近いわよ…」

「あ、悪いな。」

なんか【緑竜】の顔が赤くなってたけど、俺に惚れる女なんていないよな。

まあ、注意もしたしギルドに入った。

ギルドの中は、相変わらず【人間】が多かった。

扉を閉じると、筋肉質な【人間】が近づいてきた。

はあ…またか。

どうせ、俺が【亜人】だからって、嫌味を言ってくんだろうな。

まあ、もう慣れたが…

「ああ？【亜人】がこのギルドになんの――――」

ガオン！

と、聞き慣れたけど、もう聞きたくなかった音がした。

「邪魔よ。どいてなさい。」

【人間】の足元には拳くらいの穴がポッカリと空いていた。

あの【魔法】かよ…

だから、こういうのをやめろと言ったんだが…

「ひ、ひいっ！な、なんだよ！俺はなにも――――」

【人間】が尻餅をつき、這いつくばるようにしている。

「はぁ？あたしは邪魔だって言ったのよ？なんでそこにいんの？あたしはどけって言ってんのよ！」

あの歪んだ塊をいくつも出現させ【人間】に当たらないように、器用に床を貫いていく。

「ひ、ひいっ！だ、誰か！助けてくれぇ！」

【人間】が助けを求めているが、チラチラと見ている奴はいるが、誰も助けようとしない。

「あのな、こういうのをやめろって言ったんだよ。」

「なによ。殺してはないでしょ。」

いや、それはそうだけどな。

「だけどな、壊した床はどうすんだよ。修理費は壊した奴が持つんだぞ？」

床にいくつも空いた拳大の穴。

【緑竜】は床を一瞥し…

「…ほら、依頼も終わったんだし、さっさと証拠を見せて行きましょうよ。」

【緑竜】に背中を押され、カウンターに近づいた。

「はぁ…まあ、金も入るしいいか。」

なんか周りの【人間】が近づかねえな。

楽でいいんだが…

「は、はい。な、なにかご用でしょうか。」

…職員も怯えてんじゃねえかよ。

「ああ、この依頼終わったから、証拠を…」

「は、はい。承りまし――――【緑竜】の討伐ですか!?」

「ああ、そうだ。で、証拠は…」

「は、ははは…証拠は!証拠はどこだ!嘘でも言ってんじゃねえか!?だいたい【Ｎｏ．１２】のチームも行ったはずだ!そいつらはどうしたってんだ!」

今まで這いつくばっていた【人間】が水を得た魚のように、ここぞとばかりに言ってくる。

「いや、だから…面倒だし、ここに出してもいいか?」

「は、ひゃい!どどどどうぞ!」

いや、だから落ち着けよ。

とりあえず、イーナから受け取った袋から、ズルリと【緑竜】の死体を取り出した。

「な！？」

「あわわわわ！」

ギルドが広くて助かったな。

狭いと部屋が壊れてたかもしれないし。

でも、やっぱり、この袋おかしいよな？

【緑竜】の死体を袋に近づけたら、急に光って、いつの間にか袋に入ってたんだよ。

何回か試したけど、袋の中で掴む感覚で取り出したら取り出せたし。

「で、これでいいか？」

「ひゃひゃひゃい！ももももちろんです！」

「そりゃよかった。それじゃ…」

「う、嘘だ！こ、こんなのありえない！」

はぁ…うっせーな。

「だ、だいたい【Ｎｏ．１２】はどうしたんだよ！？あのチームも

――」

「ああ、あいつら死んでたぞ。この【緑竜】に殺されたんだよ。」

「だ、だが【Ｎｏ．１２】は【白竜】を――」

「いくつかのチームで討伐したんだろ？だったら一つのチームで【緑竜】が討伐できるわけねーだろ。」

イーナもそう言ってたしな。

「ど、どうせ【緑竜】を討伐して疲弊してた【Ｎｏ．１２】を襲ったんだろ！だから【亜人】は野蛮で粗暴で暴力的で――」

「それがどうした？ギルドの規則、覚えてるよな？完全実力主義だ。もしそうだったとしても、依頼も受けずに、ただギルドに入り浸ってる奴に、言われる筋合いはねえな。」

「な――！」

それっきり、突っかかってきていた【人間】は黙りこくった。

「で、いいか？んじゃ報酬を…って大丈夫か？」

「だだだ大丈夫です！わわわ私は大丈夫です！」

いや…まぁ、いいか。

「んじゃ、これが依頼書な？よろしく頼む。」

「ははは！ししし少々お待ちください！」

そう言って奥に戻って行った。

「ねぇねぇ、それで何が貰えるのよ？」

「ん？ああ、確か１２０万Ｓだったっけな。」

しかし、竜の討伐で１２０万Ｓか…

もうちょっと、高くてもいい気がするんだが。

「１２０万Ｓ？それって何？お茶が何杯飲めるのよ？」

「Ｓってのは金だ。ってか、お前はお茶にしか興味がねえのか？そもそも、あのお茶はイーナのオリジナルだから、どこにも売ってねえぞ？」

「な、なんですって！？あの【人間】の…ど、どうすればいいのよ…」

「まあ、俺からも頼むから。気を落とすな。」

目に見えて落ち込んでる【緑竜】を慰める。

「あ、ありがと…やっぱり、優しいわね…」

だから、なんで顔が赤いんだよ。

「お、お待たせ、しました。」

「お、やっと来た…か…」

目に入ったのは、金色、金色、金色で眩い光だった。

「は…？」

「ふぅ…すみません。貨幣だと持ってくる事が出来なくて、金塊でなんですが、よろしいでしょうか？」

いやいやいや、これって絶対１２０万Ｓじゃねえよな。

大体金塊だと？

１２０万Ｓで金塊の出番なんて…

「【緑竜】討伐の報奨金１２００万Ｓです。一本当たりの価値１２０万Ｓの金塊で１０本ですね。依頼書にある通り――」

１２００万Ｓ？

「ちょ、ちょっと待った！依頼書もっかい見せてくれ！」

「は、はい。構いませんが…」

ちょっと待てよ、もしかしたら…

「いち、じゅう、ひゃく、せん、まん、じゅうまん、ひゃくまん、せんま…あ…」

ゼロ一つ、数え間違えてた…

閑話休題

街の門から走って１０分くらい経ったか。

「あー…もう疲れた…」

「何言ってんのよ！疲れたのはあたしの方よ！まったく、お人よしなんだから…」

まあ、その通りかもな。

あの後、金塊を袋に突っ込んで、ギルドを急いで出ようとしたら…

「すみません！緊急の依頼が入りました！」

受付から大きな声が聞こえ、ギルド内が一気に静かになった。

「門を強行突破した大型の馬車を確認しました！馬車は【土属性魔法】のゴーレム！現在【アンヴィーラ】方面に向けて逃走中です！」

ギルド全体に声が響き、言葉が続いた。

「犯人は奴隷商人の模様！尚リーダーとみられる男の写真があります！」

そう言って、どこからか大量の紙を取り出した。

「依頼の報酬金は2万Sです！速やかにリーダーと思われる男の身柄を確保してください！」

「どうしたのよ？行きましょうよ。あの【赤竜】もいるんでしょ？」

「あー…金塊じゃ換金しねえと使えねえし、ちょっと現金あったほうがいいな。」

「あの依頼も受けるの？」

「ああ、どうせついでだ。それに、周りの奴らは…」

周りを見ても、誰も依頼書を受け取ろうともせず、ただ静まりかえっている。

「誰も動こうとしないしな。それに、奴隷商人だろ？ちょっと頭にきた。」

「…まったく、仕方ないわね。あたしも行くわ。そのかわり、あの【人間】にお茶を頼みなさいよ？」

そう思い返して、手元にある紙に目を落とす。

そこには、男が鮮明に写っている。

やっぱり、どこのギルドにもあの【魔具】はあるんだな。

たしか、かなり高価だったと思うが。

「まあ【アンヴィーラ】まではほとんど一本道だしな。その内見つかるだろ。」

【身体強化】を使っているしな、馬車よりもちょっと速いくらいか。

「別にいいわよ。走ってるだけなら疲れないし。」

「…お前【身体強化】使ってるのか？」

「【身体強化】ってなによ？」

まあ、いいや。

竜に常識は通じないってのは、ルビアで分かってたよ。

「それにしても、この依頼なんて受けなくてもよかったんじゃないの？別に【人間】がどうなろうと、構わないじゃない。」

まあ、それもそうなんだがな…

「奴隷ってのにはムカつくんだよ。女を犯して、男を嬲って、飽きたら捨てて。胸クソが悪くなる。」

「ふぅん…ま、いいわ。それに、もう近いわよ。」

「へ？なんでわかるんだ？」

まだ何も見えねえけど…

「あたしには分かるのよ。風にのって、においがね。」

「へぇ、そりゃすごいな。今はどんなにおいなんだ？」

「今は…血のにおいね。あと、焦げたにおいとなんか…変なにおいがするわね。」

血のにおい…？

「急ぐぞ。まだ間に合うかもしれねえ。」

「はいはい…わかってるわよ。」

閑話休題

破壊されたゴーレムとボロボロの馬車。

そして…

「なんだよ…これ…」

腹に大穴が空いた死体、頭から血を流している死体があった。

「ふぅん…あ、この【人間】ってその紙に写ってた【人間】でしょ？こいつを持ってけばいいんじゃない？」

【緑竜】が持ち上げたのは、確かに写真に写っていた男だ。
腹に大穴が空いてるけど…
「あ、ああ、そうだけど…ちょっと待ってろ。」
確か、ギルドで奴隷商人って言ってたよな。
馬車を覗くと、たくさんの【人間】と少しの【亜人】がひしめき合っていた。
まだ成人もしていなさそうな子供が多いな。
全員が、首輪をしている。
「おい、何があった。」
「わ、わかんない。ぼく、気付いたら、ここに、いて。」
声をかけたのは【人間】の子どもだった。
全身を震わせて、よっぽど怖かったのか。
「わかったから落ち着け。誰かいないとか、わかるか？」
「ぼ、ぼくは――――」
【人間】の子どもを抱きしめる。

俺も、小さい頃は母さんにこうやってもらって、落ち着いたもんだ。

「…落ち着いたか？大丈夫だったら、ゆっくり話せ。」

「そ、そういえば、ひとり、いない。いちばん、さいごに、きた。おんなのこ。」

「いないって、この馬車が襲われた時か？」

「た、たぶん。いきなり、おっきなおとが、して。すこしして、だれか、はいってきて。」

くそ、誰か攫われたのか。

「くろいかみで、ちいさいひとが、つれていった。」

黒い髪で、小さい人？

まさか…

「そのいなくなった奴って、白い髪だったか？」

「う、うん。そうだよ。」

まさか、イーナか？

## 第三十八話・金は決して錆びません（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

さて、今回で【亜人】が間違えた桁ですが、よくあることですよね？

ゼロが何個もあると、混乱しちゃいますよね？

…しないって？

…ま、まあ、いいんですよ、はい。

あ、あとここで出てきた馬車とは、幌馬車のことですよ？

馬車とは、馬が荷車を引いている状態の総称だと考えていますので、この場合は幌が被さっている荷車ですね。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第三十九話・銃声その後に剣（前書き）

はい、第三十九話投稿いたしました。

言い訳になってしまいますが、今回の小説は時間がなく一日で書き上げました。

もう眠いのなんのって…

至らない点があれば、この場所を持ってお詫びをいたします。

それと、今回の小説では、人によっては不快な表現があるかもしれません。

その点を留意していただけると幸いです。

てりゃー、第三十九話始まり始まり…

# 第三十九話・銃声その後に剣

どうも、イーナこと伊那楓です。

ギルドでの面倒くさそうな事はセルナに任せました。

袋も渡しましたし、持っていくことは簡単でしょう。

それにしても【緑竜】討伐は簡単でしたね。

あの程度で１２００万Ｓなんて、信じられませんね。

【Ｎｏ．１２】も死んでいましたし、カードはセルナに渡しましたが、セルナの事ですから【Ｎｏ．１２】にはならないでしょうね。

まあ、なったらなったで幻滅しますが…

それに、あの【緑竜】は…

「ま、関係ないですか。任せましょう。」

今は図書館に戻って、この街を出発する準備の方が先決です。

「セルナ達が帰ってきてから話しますか。」

それに、そろそろルビア達も起きているでしょう。

少し、急ぎますか。

閑話休題

「ほら、起きてください。ルビア。」

「んむー…イーナさん…？」

ふぅ…ようやく起きてくれました。

この時間、ルビア達はいつもお昼寝しているんですよね。

まあ、そのことについてとやかく言うつもりはありませんが。

「ええ、イーナですよ。目は覚めましたか？」

「ふぁ…はい…あれ、リリウムちゃんは…」

そうです。

いつもなら、リリウムも一緒に寝ているはずなんですが…

図書館に帰ってきて、ベッドに眠っているのはルビアだけ、館内を探してもどこにもいなかったのでルビアを起こしたんですが…

「どこにもいないんですよ。なにか聞いていませんか？」

「いえ、私は寝ていたので何も…」

「そうですか…」

さっき探し回ったとき、リリウムに作ってあげたカバンもありませんでした。

それで館内にいないとなると…

「外ですかね？」

「外ですか？リリウムちゃんが一人で…」

ルビアが顔を青くしていますね。

「いえ、大丈夫ですよ。探してくるので、ルビアは待っていてください。」

「わ、私も一緒に行きます！」

「リリウムが戻ってきて、誰もいなかったら寂しがるでしょう？それに…」

セルナ達も、と続けようとして言葉を止めました。

「イーナさん？それに、どうしたんです？」

「いえ、セルナが戻ってきたら、きちんと話を聞いてあげてくださいね。」

「？」

もしもルビアがいないと、リリウムが戻ってきたときに寂しがってしまいます。

かと言ってルビアがいると、セルナ達が戻ってきたときに…

「それでは、行ってきます。リリウムが戻ってきても、あまり責めないでくださいね。」

「は、はい。リリウムちゃんをお願いします。」

「ええ、もちろんです。では…」

そう言って、図書館を後にします。

さて、リリウムが行きそうな場所といえば…

「果物ですかね。」

果物と言えば市場ですね。

とりあえず、市場に向けて歩みを進めました。

閑話休題

「やはり、ここは賑わっていますね。」

一人で来るのは、最初にこの街に来て以来ですか。
いつもリリウムとルビアとセルナと、誰かと一緒に来ていましたから。

「一人も、久しぶりですか…」

私の事より、今はリリウムですね。
辺りを見渡すと、様々な露店が並んでいます。
その中で果物を売っている店は…

「すみません。ちょっと探しているんですが。」

「はいはい。何がお探し…げぇっ！あ、あんたは！」

おや？
何か怯えてしまっていますね。

「き、今日は何がお探しで？き、今日は何も値切らせねえからな！」

ああ、あの時の。

「あれは値切ったわけではありませんよ？ただ品物の良し悪しを言っただけですよ。安くてもいいと言ったのは、そちらですよ？」

「うぐっ…ま、まあ百歩譲って、あの時は、偶々、質の悪い果物が

混ざってたがな。あれ以来そんなことがないように、質のいい果物を仕入れてんだよ。ま、おかげで、お客さんの反応は上々だ。」

偶々を態々強調させて言いました。

本当に偶々なんですかね？

「で、何がお探しだい？あの時みたいに、アルモかい？」

「おや、覚えているんですね。」

「当たり前だろ。アルモなんてそうそう買っていく奴なんていないし。ああ、そういえば女の子がアルモを探してたな。」

女の子がアルモを…

「もしかして、白い髪で私くらいの背の女の子でしたか？」

「確かにそうだが…ああ、あんたがあの子の姉さんかい？」

「姉さん…まあ、似たようなものですね。」

「そうか。ここにアルモは無いから、ほら、見えるだろ？青い屋根の。あそこにならあるかもしれないから教えたんだよ。」

そうですか…

「それで、妹さんを探してるのか？」

「ええ、戻っていなくて。いそうな場所を探しているんですよ。」

次は青い屋根の建物ですか。

「それにしても、随分と妹さんに慕われてるんだな。」

慕われている、ですか…

「傍からは、そう見えるんですか…」

「ん？なにか言ったか？」

おっと、声に出ていましたか。

「いえ、なにも言っていませんよ。それでは。」

「おお。今度はなんか買ってけよ？」

「ええ、リリウムも連れて買い物に来ますよ。」

さて、次は青い屋根の建物ですか。

少し距離がありますが、リリウムも心配ですし急ぎま――

「おっと、危ないですね。」

かなりの速さで走ってきた馬車が、スレスレを掠めていきました。

「まったく、危険運転はどこにでもあるんですね。」

人でも轢いたら大変なことです。

それにしても…

「ゴーレムの馬車ですか。かなりの高級品ですね。」

あんなものを購入できるのは、貴族か王族か、はたまた…

ま、関係ないでしょう。

さて、急ぎましょうか。

閑話休題

青い屋根の建物に到着しました。

扉を開けると、澄んだ鈴の音が鳴り響きました。

建物の中には、ラガリアやカニス、ニベアにアルモが置いてあり、他にも様々な果物や野菜が置いてあります。

「やはり、いませんね。」

まあ、分かってはいましたけど。

「はい、いらっしゃい。何を探してんだ?」

そう言って声をかけたのは、まだあどけなさが残る少年でした。

「えらいですね。まだ子どもなのに店番ですか。」

「うるせ。母ちゃんに言われたんだよ。」

「まあ、その辺りはどうでもいいです。ちょっと人を探していまして。」

「人探し？そんなの知らねえよ。」

「この店に来ているはずなんですよ。白い髪で、私くらいの背なんですが…」

「ん？知り合いか？さっき出てったけど…」

出て行った…

「そうですか。どうも、ありがとうございます。」

そう言って店を出ようとすると…

「あ！ちょっと待ってくれよ！」

「どうかしましたか？あの子になにか？」

「知ってるんなら、謝っといてくれねえか？なんか怒らせちまって…」

リリウムが怒った？

「なにを言ったんですか?あの子が怒るなんて珍しいですけど。」

「あー…アルモを食べる姉ちゃんがいるって言うから、変だって言ったら、怒っちまったんだよ。」

アルモを食べる、姉ちゃん…

「まあ、言うだけ言っておきますよ。それでは。」

それだけ言って、店を後にしました。

それにしても…

「リリウムが怒った、ですか…」

それも、私がバカにされたからと言って。

「喜んでも、いいんですかね?」

果たして、私にそんな価値はあるものか…

「…考えても、仕方ありませんね。」

今は、リリウムです。

閑話休題

青い屋根の建物から歩いて五分程度のところに、広場がありました。
そこには…

「これは、リリウムの…」

リリウムに渡した筈の、カバンが落ちていました。
それに、手が付けられていないアルモも落ちています。
そして、地面には幅の広い轍がついています。

「なるほど…」

このアルモはまだ食べられますね。
ついている土を落として、齧ります。

「ふむ、やはりいいにおいですね。」

そして頭の中で繋がるのは…

「あの、馬車ですか…」

リリウムを攫った、かもしれない。
けど、その推測だけでも十分です。

「す…」

【霊力浮遊】で浮かび上がります。

周りの建物が眼下に聳え、街を囲っている壁よりも高く浮かび上がります。

「殺す…」

【霊力突進】を起動し、あの馬車を追跡します。

誰に手を出したのか、思い知れ。

閑話休題

【霊力突進】を起動し、およそ一分程度であの馬車が見えてきました。

このままでは追い越してしまいますね。

【霊力突進】を中断し、慣性で馬車の前に回り込みます。

とりあえずゴーレムを破壊します。

グレネードを取り出し、発射。

一撃で破壊できましたね。

グレネードをしまい着地すると、馬車の中からは数人の【人間】が驚いたように飛び出してきました。

「クズ共が…」

レールガンを取り出し、出てきた【人間】を撃ち抜きます。

【魔力障壁】が有ろうと無かろうと、この武器の前では関係ない。

【人間】が一人【魔法】を使ってきました。

なるほど、この威力は上級魔法【ストームアロー】ですか。

上級魔法が扱えるからには、かなりの腕前なんでしょうね。

「そんな程度で盾突くつもりですか。」

【霊力急進】で一気に接近し、射突型ブレードで腹を貫きます。

「急所は外しました。凄絶に苦しんで苦しみ抜いて、死ね。」

誰がリーダーとか首謀者とか、関係ない。

ただ目の前にいたから、殺す。

最後に残ったのは、醜く肥え太った【人間】

自分の欲の為に人を買い、金のために人を売った【人間】

「汚らしい…」

射突型ブレードをしまい、ハンドガンを出します。

馬車の進む方角には、たしか【アンヴィーラ】がありましたね。

「数日中に【アンヴィーラ】で催し事もありますし、それに合わせて奴隷を運んでいたんでしょう？」

【緑竜】討伐の出発前に、ギルドで面白いチラシを見つけました。

数日後に【アンヴィーラ】で【Ｎｏ．】を決める大会があるらしいです。

それに加えて、上位入賞者には特典があるとのこと。

元々行くつもりでしたし、ちょうどいいですね。

ハンドガンを額に当てると【人間】は失禁しながら頷いています。

どうやら、これがなにか予測は出来ているらしいですね。

「では、さようなら。」

辺りに乾いた音が響き渡りました。

引き金は、とても軽かったです。

ゴーレムが壊れ、止まっている馬車を覗き込みました。

中は狭く【人間】や【亜人】の子どもが集まっていました。

さて、リリウムは…

見渡してみると、不自然に誰もいないスペースがあります。

近づいてみると…

「…眠っているんですか？」

リリウムが眠っていました。

まあ、これで目的も終わりですね。

リリウムを背負い、馬車を出ようとすると…

「あ、あの…」

一人の【亜人】の女の子が声をかけてきました。

頭には動物の耳がついていますね。

犬…ですかね？

子ども達の中でも、ちょっと年上といった風ですね。

「そ、その…私たちを助けに来てくれたんじゃないんですか？」

助けに来た？

「いえ、私はこの子を探していただけですよ？ああ、あの男たちならもういませんから、逃げたければ逃げてもいいんじゃないんですか。」

「そうなんですか…！で、でも…この首輪が…」

首輪…？

【亜人】の女の子の首を見ると、黒い皮で出来た首輪が嵌められていました。

リリウムの首にも、同じようなものが嵌められています。

「これがある限り、この馬車から出られないんですよ…無理に出ようとすると、体が痺れて…」

眼鏡を通して視ると【魔法陣】が確認できます。

なるほど、着用者の【魔力】を使用して起動するタイプですか…

恐らく、設定された場所から出ようとすると【魔法陣】が起動して体が痺れるんでしょうね。

それに、一度嵌めると外すことができないようですね。

まあ、これが【魔法】で構成されている限り無駄ですけど。

レーザーブレードを取り出し、リリウムの首輪だけを切断します。

眼鏡を通して視ると【魔法陣】が光る粒子になって消滅しました。

これでいいですね。

さすがに素手で首輪は千切れませんので、図書館に戻ったら切りましょう。

再びリリウムを背負い、馬車を出ようとすると…

「ま、待ってください！」

【亜人】の女の子が声を荒げながら声をかけてきました。

「わ、私の首輪も外してもらえませんか！？」

「ええ、構いませんよ？あなたのおかげで、この子に痛い思いをさせずに済みました。」

レーザーブレードで【亜人】の女の子の首輪を切断します。

【魔法陣】が光る粒子となって消滅しました。

「これであなたは自由ですよ。それでは…」

「あ、あなたのお名前は！？」

「…イーナですよ。ただの、イーナです。」

閑話休題

「ん…お姉ちゃん…？」

リリウムを背負い、街へ向け歩いていると、リリウムの声がしました。

「目が覚めましたか？リリウム。」

「あれ…ここ…どこ…？」

ここは…まだ森の中ですね。

「もうすぐ街に着きますからね。眠かったら、眠っててもいいんですよ？」

「ううん…眠く…ない…」

リリウムがそう言うと首に回っている手に力が込められました。

「こら、苦しいですよ。」

でも、とても嬉しくて…

「ごめんなさい…」

「ふふ、いいですよ。落ちないように、しっかり掴まっていてくださいね。」

「うん…」

こんなにも暖かで、こんなにも優しくて、こんなにも幸せで…

自然と、歩みが遅くなりました。

## 第三十九話・銃声その後に剣（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

今回の主人公はブチキレていましたね。

本当にキレていると、怖いものなんて無いんでしょうかね？

それと【白竜】を迎えに行く裏でこんなことが…

ちなみに、時間的には【亜人】がギルドでもめている間から、緊急の依頼を受ける前辺りですね。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第四十話・笑顔の裏には何があるんですかね（前書き）

はい、第四十話投稿いたしました。

本日はハロウィンでございます。

Ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　Ｔｒｅａｔですね。

カボチャの煮物食べたいなぁ…

え？

カボチャを食べるのは冬至だって？

いいんですよ、おいしいんだから。

よっこらせ、第四十話始まり始まり…

# 第四十話・笑顔の裏には何があるんですかね

おう、セルナ・マーグナーだ。

イーナ達からは、セルナとかお兄ちゃんとか呼ばれてるけどな。

れっきとした女だからな？

勘違いするんじゃねえぞ。

まあ、そんなことはいいとして…

「はぁ…」

「なに溜息ついてんのよ？いっぱいお金も貰えたんだし、万々歳じゃない。」

袋を背負った【緑竜】が、隣を歩きながら言った。

「いや、金の事じゃねえんだよ。なんつーか、今から行く場所がな…」

この街の拠点のあの図書館に、この【緑竜】を連れ帰ったら…

「はぁ…ルビアに殺されそうだ…」

「またルビア！？あんたは…！」

【緑竜】が拳を振り上げた。

「ちょ、ちょ待て！だから！お前と同じ竜だよ！」

「は…？」

【緑竜】がポカンとした表情を浮かべ、拳は俺の眼前で止まっていた。

「あぶな！【赤竜】だよ！【赤竜】のルビアだ！お前も見たことあんだろ！？」

海で俺とリリウムを守ってもらってたしな。

まあ、今は擬態してっから…わかるのか？

竜同士だし、分かるはず…だよな？

「な…」

「あ？どうした。」

【緑竜】の拳がプルプル震えている。

なにか変なこと言ったか？

「なによそれー！」

頭を突き抜けるような衝撃が襲った。

顎を殴られ、薄れゆく意識の中…

結局…殴られるのか…

そんな諦観に似た気持ちが、俺の中にあった。

閑話休題

「ただいまーっと。」

顎を打ち抜かれ、少し気絶しちまった。

まあ【緑竜】はずっと傍にいたみたいだけどな。

そしてようやく図書館に着いた次第だ。

「へぇ…ここがあんたの住んでる場所なのね。言っちゃ悪いけど、ボロいわね。」

「まあ…確かにな。でもそれ、イーナの前で言わない方がいいぞ。なんだかんだで、ここ気に入ってるみたいだからな。」

「…そうね。あれはもうコリゴリだわ。」

ルビアはルビアでこええけど、イーナもイーナで危険で恐ろしいんだよな。

「で、あんたの言ってた【赤竜】はどこに――――」

「お兄ちゃん…？おかえりなさい…」

この声は…

「リリウムか。おう、ただいま。」

リリウムの頭に手を乗せ、ポンポン叩くと気持ちよさそうに目を細めた。

「ところで、イーナはどこだ？姿が見えねえけど…」

「お姉ちゃん…？お姉ちゃんは…お母さんとお話…してるよ…」

「そか、二階だよな？それと、これおみやげだ。」

袋から出したのは、途中の市場で買ってきたニベアって言ったか？甘くて美味しいって勧められた買ってみたが、実際に美味かったからな。

「うん…ありがと…」

「そんじゃ、ついてこい…よ…？」

【緑竜】が俯いて黙っている。

「おいどうした？」

さっきまでは饒舌に喋ってたのに。

「な…」

「な？」

「な、なななによこの子！すっごく…すっごく可愛いじゃないのよー！」

【緑竜】がリリウムを抱きしめた。

リリウムは目を白黒させている。

「ハァハァ…り、リリウムちゃんっていうのね。ハァハァ…あたしとイイことしない？一緒に――」

「むぅ…苦しいよ…おばさん…」

「お、おばさ――――！？…でも許しちゃうわ！ハァハァ…だってこんなに可愛い――――」

「お前は変態か！おら、さっさと行くぞ！」

【緑竜】の襟首をつかみ、引きずっていく。

「ああ…なにすんのよ！せっかく触れ合ってたのに！」

「リリウムも驚いてただろが！お前のは一方的すぎだ！少しは自重しろ！」

「イヤよ！あんな可愛らしい【人間】の子どもは初めて見たわ！あたしのこの熱い想いは誰にも止められないわ！」

「暑苦しいしうぜぇよ！…ん？」

今こいつ、リリウムのことを【人間】って言ったよな？

「ああー…あのな、リリウムも竜だぞ。」

「…は？」

「リリウムも竜だ。それも【白竜】で、ずいぶん前だったな。いきなり【人間】に擬態して、それ以来【白竜】に戻れねえんだよ。」

あの出来事はハッキリと覚えている。

ルビアの水を溢したような表情と、俺の【魔法】が効かなかった時の無力感。

そして、リリウムに救われた時の安心感。

「で、でも擬態って永く生きないとできないのよ！？あの子、かなり若いわよね！？」

「リリウムの年齢なんて知らねえよ。本人に聞いたらどうだ？」

「も、もしかしてあの【人間】も竜なの！？」

「ああ、あいつは…」

【人間】だ。と続けようとして、言葉に詰まった。

いや【人間】…だよな？

そういや、あいつと初めて会った時にはリリウムもルビアもいたし。

もしかして、本当は竜だったり、実は【エルフ】だったり、大穴で【亜人】とか…

「…【人間】だぞ。…多分。」

「その間はなによ！あと多分って言ったわよね！？」

「ええい、うるさいうるさい！さっさとイーナんとこ行くぞ！」

「ちょっと！引きずるのは止めなさいよ！ちょ、階段は――――いたたたた！」

とにかく、早いとこイーナに袋を渡して、ルビアになんとか説明をしねえと。

閑話休題

イーナとルビアがいると思われる部屋の前で、思わず怖気づいてしまった。

「どうしたのよ？入らないの？」

「い、いや。入ろうと思うんだが…」

なんと言うか、嫌な予感がヒシヒシと…

こう、言葉では言い表せない、背筋が凍る感じだ。

「面倒ね。さっさと入るわよ。こら【人間】！さっさと話しを――」

「あ。ちょま――――」

【緑竜】がドアを開け、さっさと入ってしまった。

と思ったら出てきた。

勢いよく壁を壊しながら…

そして、ルビアが壊れた壁からヌッと身を出してきた。

「セルナ…」

「な、なんだルビア。」

「正座です。正座をしなさい。正座を。」

「拒否権は…？」

「あるとでも？」

…あるわけないよな。

閑話休題

「まったく、誰が【人間】ではない、ですか。失礼ですね。」

ルビアに正座をさせられて、およそ十分。

ルビアの説教はすぐに終わり、イーナによる説教が続いた。

ちなみに【緑竜】は目が覚めないまま、ルビアに連れて行かれた。

…死ぬなよ。

「私は、正真正銘、嘘偽りのない、真っ当な人間ですよ。」

イーナは胸を張って堂々と宣言した。

「で、でもな。どうしてもお前が【人間】とは思えねえんだよ。竜は従えてるし、いろんな【魔具】は持ってるし、あと無駄に強いし…」

「別に、リリウムとルビアを従えてるわけでもないですし、あれは【魔具】ではありませんし、少し頑丈なだけなんですが…【人間】だと証明しろ、と言われても…ああ、そういえば…」

イーナが一枚の紙を渡してきた。

「ん…？ああ【アンヴィーラ】の大会か。これがどうかしたか？」

そういえば、そろそろそんな時期か。

一回だけ母さんに連れてってもらったが、ありゃ凄かったな。

「無条件で本戦に進めるのは【Ｎｏ．】持ちだけですが、一般参加でも予戦を勝ち進めば本戦に進むことができます。ほら、ここを見てください。」

そこには小さい文字で『一般参加枠も有』と書かれていた。

「まあ、予戦とでも言いましょうか？参加人数はわかりませんが、まあ、そこまで多くはないでしょう。」

「で…もしかして、これに出るつもりか？」

「ええ、ルビアもギルドに登録したいと言っていましたし、こういった催しも珍しいじゃないですか。それに、ここを見てください。」

イーナが指差した場所には…

「…なあ、これ本気か？」

そこには大きく『上位入賞者には賞金有』と書かれていた。

「ええ、本気も本気の大真面目です。ただ勝ち進んでいくだけで、

上位には賞金が出るんですよ。出ないわけにはいかないでしょう？」

「でもな、今日の依頼で結構稼いだぞ？もう十分じゃねえか？」

「いえ、お金はいくらあっても困ることはありません。むしろ、あればあるだけ都合がいいです。」

「あ、でも登録期限あるぞ。…って明後日じゃねーか！これ、無理じゃねーの？」

【グラブス】から【アンヴィーラ】で、確か馬車で一日位だったよな？

「いえ、数時間もあれば着きますよ。明日の早朝には発ちますので、準備をお願いしますね。」

「準備ったって…」

「この図書館の蔵書を、全部この袋に入れてください。長い間空けては、本が盗まれてしまいますから。あの防犯装置は壊れてしまいましたし。」

「まあ、それは構わねえが…本当にそんなに速く着くのか？」

「ええ、勿論です。心配しなくても大丈夫ですよ。」

「ま、お前が言うんなら本当なんだろうな。」

イーナは今まで有言実行してきたしな。

「そうだ。今日お前、馬車を襲撃しただろ？」

「ええ、確かにそうですが…ああ、ギルドの依頼ですね。間違いありませんよ。私が奴隷商人の馬車を襲って、リリウムを連れ帰りました。」

「リリウムを連れて帰ったのは分かる。でもな、別に商人を殺さなくてもよかったんじゃねえか？」

商人を殺さなくても、イーナなら無力化できたはずだ。

あの【魔具】を使えば…

「何を言っているんですか。当たり前ですよ。」

イーナは口元に笑みを浮かべながら言った。

「私の【家族】に手を出したんですから。死ねばいいんですよ。それに、そういう【人間】をいくら殺そうが、私はなにも思いませんよ。」

「そうか…」

そういう奴だよな、お前は。

【家族】に手を出されたら殺して、それ以外はどうでもいい。

【人間】を殺しても、なんとも思わない。

なんというか…

「歪んでるよ…」

「ええ、否定はしませんよ。私は私の心の向くままに進んでいます。その結果、誰からどう思われようと、これだけは変わりません。」

絶対に、と続けた。

## 閑話休題（次の日）

「それでは出発しましょうか。」

日が昇って、まだ数時間。

リリウムはルビアの背中で寝てるし【緑竜】はまだ寝ぼけ眼だ。

「んー…なんでこんなに早く起きるのよ…」

「あのな、俺が起こさなきゃ置いてかれてたぞ？」

【緑竜】はルビアに連れて行かれ、戻った後も気を失ったままだった。

ってか完全に寝てたな。

「さて、全員袋に入ってください。水も食料もありますし、たった

数時間ですから大丈夫ですよ。」

袋に入る？

「袋に生き物って入れたっけか？」

「リリウムもルビアも入ったことがありますよ？セルナが袋を盗んだ時にも、ルビアが入っていましたし。流通している袋には入れないんですか？」

「んー…俺も詳しく知らねえよ。でも作ってる【エルフ】は森に引きこもってるから流通量は少ねえし。もし出回ってもかなり高価だからな。確かめようがねえか。」

「…面倒くさいわね。とっとと入りなさいよ。あたしはさっさと寝たいのよ。」

「ちょ、押すな。わかったから。」

袋に腕を入れ、次に頭を入れると…

「いってぇ！」

落ちた。

「いってぇ…ここが、袋の中かよ。しっかし、広いな…」

周りには、上下左右に本や果物や金が無造作に浮かんでいて、見渡す限り白い景色が広がっている。

てか、立ってるってことはここが地面のはずだよな？
それなのに、足元にも本やら何やらが浮かんでるって…
「あいたぁ！」
「ふん、風を操る【緑竜】が無様に落ちますか。滑稽です。」
「おお、ルビアに【緑竜】か。リリウムは…寝てるか。」
【緑竜】は体勢を崩して落ちてきたが、ルビアは慣れているのか優雅に着地した。
【緑竜】がベチャでルビアはトンって感じの音だ。
「私が入ったら出発すると言っていたので、もう【グラブス】を出ていると思います。」
「つっても、外の様子なんて分からねえよな？【アンヴィーラ】に到着したらどうすんだ？」
「ああ、それは…ちょっと待ってください。」
ルビアがリリウムを地面に寝かせ、浮かんでいた毛布をかけた。
「えっと、こうやって…」
ルビアが自分の頭の上に手を翳したかと思うと、頭が消えた。
「は…？」

「ふう…こんな感じです。頭の上に手を翳せば穴が開きますから、後は簡単に出られます。あと、到着したら知らせてくれるそうです。」

「へぇ…」

ためしにやってみようとすると…

「セルナ、危ないですから顔を出さない方がいいです。」

「は？なんでだ？お前は顔出してたじゃねえか。」

「いえ、すっごく速かったので、セルナが出たら飛ばされますよ？」

「…そんなにか？」

「はい、もうビュンビュンと。私でもあんなに速く飛べません。元々飛ぶのは苦手なんですけど…」

へぇ…竜にも得意不得意があるんだな。

「そうだ【緑竜】は飛ぶのが――」

得意だよな？と聞こうとしたら…

「ん？なによ…あんた達は寝ないの？」

【緑竜】がリリウムの毛布に入って、一緒に寝ようとしていた。

「【緑竜】が…誰に断わって――」

「黙れ【赤竜】この子が起きちゃうでしょうが。」

「うぐ…」

おお【緑竜】がルビアを黙らせた。

「それで、あんた達は寝ないの？朝早かったんだし…」

もう出発したみたいだし、本を読んでてもいいんだが…

「それもそうだな。」

なんか毛布もたくさん浮かんでるし、ちょうどいいな。

「そんじゃ、あんた達もとっとと寝たほうがいいわよ。おやすみ…ハァハァ…」

「ちょっと待て！やっぱお前と一緒だとリリウムがあぶねえ！」

なんというか、言葉には出来ないけど！

「うるさいわね。じゃあ…あ、あんたも一緒に寝なさいよ。」

「はあ？なんで俺が――」

「い、いいから！早く入んなさいよ…」

そう言って【緑竜】がスペースを空けた。

「わ、私もリリウムちゃんと寝ます！」

ルビアはリリウムの隣に入った。

ま、偶にはいいか。

四人で一つの毛布に入り、少し経ち…

「ふふー…暖かいわ…ね…？」

「ん…？どした…？」

もう眠くなってきたんだが…

「ね、ねえ。なんかあんたの胸に膨らみがあるんだけど…」

「そりゃ…俺、女だし…」

あー…もうだめだ。

「じゃ…お休み…」

「ちょ、あんたどういう――」

「いいから…寝ろ…」

「――ッ！」

【緑竜】の頭を胸に埋めると、途端に静かになった。

そういや【緑竜】って呼びにくいよな。

なんかいい名前でも…

## 第四十話・笑顔の裏には何があるんですかね（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

サブタイトルは以上のとおり。

サブサブタイトルは【緑竜】衝撃の事実を知る、でした。

それにしても、主人公は歪んでいますね。

どんな生物も生きるために他の生物を殺し、食しています。

では、主人公は？

…不思議なのは、同種族間での共食いはあまり聞かないんですよね。

人間同士共食いをしませんし、肉食動物同士の共食いと言うのも、あまり聞きません。

まあ、超えてはいけない一線というものがあるんでしょうね。

ちなみに、自分はカニバリズムとかは否定も肯定もしません。

人間というのは、危機的状況に陥ればどんな行動をするのか、予測すらできませんからね。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## 第四十一話・寝起きは機嫌が悪いものです（前書き）

はい、第四十一話投稿いたしました。

早いもので、今年もあと二か月を切りました。

この小説の完結はいつ頃になるのかなぁ…

まあ、趣味全開、無手勝流、ですから。

いつになることやら…

一周年頃には完結させたいなぁ、と。

そんな事を考える今日この頃だったり…

ふわぁ、第四十一話始まり始まり…

# 第四十一話・寝起きは機嫌が悪いものです

どうも、イーナこと伊那楓です。

グラブスを出発してから数時間。

ようやく【アンヴィーラ】に到着しました。

さすがに【霊力突進】を数時間も続けると、精神的に疲労しますね。

【霊力障壁】もあまり安定していませんね。

まあ【魔法】を数発受けて破れるほど、やわではありませんがね。

「さて、受け付けは確か…」

袋からチラシを出し、大会要綱を確認すると…

「ギルドですか。確か…まあ、歩いていれば見つかるでしょう。」

決して、決して忘れたわけではありませんよ。

「その前に、宿を探しますかね。」

まだ日は高いですが、もしも見つからなくて野宿になったらたまりませんし。

それに、リリウム達も袋から出たいでしょうしね。

閑話休題

とりあえず、宿を確保することは出来ました。

一泊が４００Ｓで、朝夕の食事は無しです。

あの大会は一か月に渡って開催されるようでしたので、とりあえず１２０００Ｓを先に払っておきました。

よく分かりませんが、相場よりは高いですね。

探し回ってみたんですが、どこもかしこも満員でした。

狭いですが仕方ありませんね。

まあ、ベッドが二つあるだけ幸運ですか。

とりあえず袋に手を入れ、リリウム達をイメージしながら引き出します。

取り出す時に、いつもやっていることですね。

しかし、いきなり出てこられてしまうと、このただでさえ狭い部屋が更に狭くなってしまいます。

なので、私が袋に入って、一人ずつ出てもらおうと思います。

そして、袋に入ったわけですが…

「寝ていますね…」

ルビアの隣にリリウムが、セルナの隣に【緑竜】がすやすやと眠っています。

今朝は早かったですし、無理もありませんね。

しかし、明日からは大会なので、リリウムとルビアのギルド登録を今日の内に済ませなければいけません。

リリウムはともかく、ルビアは大会に参加するかもしれませんし。

「ほらみんな、起きてください。」

ちょうど浮かんでいた、フライパンと鍋を――

…こんなの入れましたっけ？

まあ、そんなことは置いておき、互いを力の限り叩きつけます。

「――ッ！なんだなんだ！」

「ああ、起きましたか？」

セルナが飛び起き、リリウムとルビアと【緑竜】はスヤスヤと寝入っています。

ふむ…リリウムは分かっていましたが、ルビアと【緑竜】も起きないとは思いませんでした。

「な、なんだよ！でけぇ音出すなよ！」

「おはようございます。セルナ、そこに果物もありますよ。昼食はそれですね。ああ、宿のベッドが二つしかないんでした。セルナと【緑竜】で一つのベッドですね。寝起きで喉も渇いたでしょう？お茶もありますよ。」

「あ、ああ分かった。別に、そんな早口で喋んなくても…」

「ん…果物…」

「イーナさん！一緒に寝ましょう！」

「お茶！？お茶があるのね！」

リリウムもルビアも【緑竜】も起きましたね。

よかったです。

「お前ら単純だな！」

セルナも目が覚めたようですね。

閑話休題

「イーナさん！早く行きましょう！」

ルビアがはしゃぎながら私の手を引きます。

「ルビア、ギルドは逃げませんからゆっくり行きましょう。」

「お母さん…早いよ…」

私が真ん中でルビアとリリウムが手を繋ぎ、少し後ろではセルナと【緑竜】手を繋いでなにか話しています。

まあ、周りの喧騒でよく聞こえませんがね。

大会が近いせいか、往来には馬車が行き来し【亜人】もちらほらと見受けられます。

まあ、大半は【人間】ですけどね。

「イーナさん！ギルドってどんな事をするんですか！」

「ふむ…私の時は、ただ書類を記入してカードを貰っただけですからね。依頼も、数回しか受けていませんから。」

「そうなんですか…」

「ギルドの事はセルナに聞いた方がいいと思います。セルナの方がギルドの登録期間も長いでしょうし。」

「そうですか…セルナ、ギルドってどんなことを――」

ルビアが後ろを向いた途端に、言葉を失いました。

それに続き、私も後ろを向きました。

すると…

「おやおや、こんな人通りの多い場所で…どちらも大胆ですね。」

「お兄ちゃん…大胆なの…？」

「ええ、あれは…好きな人同士で行うんですよ。まあ、あの二人がどうかは知りませんが。」

「そう…なんだ…」

しかし、本当に大胆ですね。

よりにもよって、女性同士でですか。

まあ、別に気にはしませんが。

そんなことを考えていると、唇に柔らかい感触がしました。

目の前には、白い髪と綺麗な赤い眼が見えます。

「こらこら、ダメですよ。好きな人同士で行うと言ったでしょう？」

「リリウム…お姉ちゃんのこと…好き…だよ…お姉ちゃんは…？」

「もちろん、私もリリウムの事が好きですよ。でも、それは多分…【家族】としてなんですよ。リリウムはどうですか？」

「わかんない…」

「今は分からなくてもいいんですよ。たくさん悩んで、少しずつ分かって行けば…」

愛情と恋情の違いを、親愛と恋愛の違いを、親慕と恋慕の違いを…

「せ、せせせセルナ！？なにをしてるんですか！リリウムちゃんも見てるんですよ！」

「――――！――――！」

セルナも離れようとしていますが、頭を【緑竜】に固定されているので身動きが取れていませんね。

まあ、地力の差もあるんでしょうが。

「【緑竜】もいい加減にしてください。それに長いですよ。セルナが窒息してしまいますよ。」

そろそろセルナも限界でしょうし。

「――――！ぷはっ！…あっ！おい！」

セルナから離れたかと思うと【緑竜】が走って人混みに消えてしまいました。

「あー…どうすりゃいいんだ？」

「知りません！あんな【緑竜】なんてどこかに行っちゃえばいいんです！」

ルビアはそう言いましたが…

「追いかけなさい。そして、ちゃんと話し合いなさい。」

「イーナさん！？」

「私達はギルドに行くので、事が済んだら宿に戻っていてくださいね。」

「…悪いな。」

「いえ、そんな事を言う暇があったらさっさと追いかけてください。」

そう言うと、セルナは【緑竜】の後を追いかけました。

「イーナさん。どうしてですか？」

「なにがですか？」

ルビアの質問の意味が分かりませんが…

「イーナさんは、あの【緑竜】が嫌いだったみたいですけど、どうして助けるようなことを？」

「いえ、嫌いでも苦手でもありませんよ。ただ興味がないだけです。あの【緑竜】がどうなろうと、知ったことではありません。」

「なら…」

確かに【緑竜】の心配をする必要はありませんし、ともすればセルナを追わせる必要もありませんでした。

しかし…

「あの【緑竜】のせいで、セルナに自責の念を負わせるのは許せません。」

あのまま【緑竜】がいなくなってしまえば、きっとセルナは自分を責めるでしょうね。

セルナは優しいですから。

例え、私やリリウムやルビアが気にするなと言っても、意味を為さずに。

自分を責めて責めて、潰れるほどに責め抜いて。

精神（こころ）が擦り切れて、肉体（からだ）が摩り潰れて。

どうなるんでしょうね。

「まあ、セルナと【緑竜】がちゃんと話し合えば、悪くなることはないでしょう。」

「…はい。セルナ、戻ってきますかね？」

「戻ってきますよ。きっと。」

きっと…

私は信じます。

「あ、そうだ、イーナさん。」

「どうしましたか？ルビ――――」

唇に、いえ…

「――――はふ…」

「――――ぷは…」

「…イーナさん。私も、イーナさんの事が好きですから。」

「…それは、どんな意味でですか？」

「もちろん、それは――――」

「お母さん…」

ルビアが言葉を続けようとしたときに、リリウムがルビアの腰に抱き着きました。

「リリウムちゃん？…いえ、そうですね。」

ルビアは、なにか納得したような声を出しました。

「もちろん【家族】として、イーナさんのことが好きです。」

「私も、ルビアのことが好きですよ。もちろん【家族】として。」

「はい…イーナさん。」

ルビアの顔に悲しげな、寂しげな表情が浮かびました。

「早く行きましょうか。そんなに時間があるわけでもありません。」

「…はい。」

リリウムと手を繋ぎ、ルビアが後ろを歩きます。

…すみませんね。

私に、そんな価値はないんですよ。

## 第四十一話・寝起きは機嫌が悪いものです（後書き）

はい、どうだったでしょうか？

今回の更新分は、少し内容がボケていますね。

こういうのって、問題はないんですかね？

A．大丈夫だ。問題ない。

…わけありませんね。

まあ、不愉快に感じてしまったらすみません。

それよりも、主人公はだんだんと異常になっていきますね。

精神的にも、能力的にも…

まあ、本性が露になってきたんでしょうね。

感想、意見、その他諸々、お待ちしております。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1161t/

私が行く・異世界冒険譚

2011年11月7日13時10分発行